岐阜県文化財保護センター調査報告書　第14集

# 仲迫間遺跡（なかはざまいせき）

一般国道２４８号公共道路改良工事に伴う

埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

１９９３

岐　　阜　　県

財団法人　岐阜県文化財保護センター

# 序

木曽川の河岸段丘に形成された美濃加茂市は、古くから主要街道の宿場町として栄えてきました。古くは、東山道と飛騨支道、近世では中山道と飛騨街道などの交通の要所でありました。また、この美濃加茂盆地は地形的にも恵まれ、旧石器時代から現代に至るまでの多くの遺跡の所在が知られているところでもあります。

今回、国道248号バイパス道の建設に伴って発掘調査されました仲迫間遺跡は、縄文時代から現代までの多くの遺物が出土し、この遺跡の周辺に人々が生活していた痕跡が認められました。特に、「美濃国」刻印須恵器が出土したことは、近くに東山道の駅家か郡家など何らかの政治的重要地点の存在が考えられ、今後、この周辺地域の調査の必要性が増大してきました。

また、本遺跡の河岸段丘から検出された泥炭層は、全国的にも珍しいことで、国の天然記念物に指定されていますヒトツバタゴ(ナンジャモンジャ)の植物遺体の検出や、県下で初めて小規模ながら地震痕が検出されましたことと共に、単に人文科学の分野だけでなく、自然科学の分野にも多大な貢献を与える成果であったと思います。

最後になりましたが、この報告書の刊行にあたり、発掘調査及び出土品の整理・報告書の作成にご指導・ご協力を賜りました関係諸機関ならびに関係者各位、そして、発掘調査・整理作業に携わってくださいました多くの方々に深く感謝を申し上げます。

平成6年3月

財団法人　岐阜県文化財保護センター
理事長　　吉田　豊

# 例　言

1．本書は、岐阜県美濃加茂市田島町４丁目字仲迫間1721～1725番地他に所在する「仲迫間遺跡」の発掘調査報告書である。

2．本調査は、一般国道248号公共道路改良工事に伴うもので、岐阜県から委託を受け、財団法人岐阜県文化財保護センターが実施した。

3．発掘調査は、平成５年度に実施し、大参義一愛知学院大学教授の指導のもとに、宇野治幸が担当した。

4．本書に記載した遺物の実測は次の者が行った。
宇野治幸・藤田英博・小野木学・佐野康雄・各務光洋・佐藤まさみ・加納恭子

5．実測図等のトレースは次の者が行った。
宇野治幸・藤田英博・小野木学・高寫桂子・竹内恒子・傘木文恵・進藤有美子

6．遺物の写真撮影は、宇野治幸が行った。

7．本書の執筆は愛知学院大学教授大参義一氏・岐阜大学教授梶田澄雄氏・岐阜県立加茂高校教諭鹿野勘次氏の指導のもと、第３章第３節第１～３項は藤田英博、第３章第３節第６項および第５章第２節は小野木学、第３章第４節第１項は佐野康雄が担当し、他は宇野治幸が執筆した。なお、目次および本文中に執筆者名を明記した。本書の編集は宇野治幸が行った。

8．遺跡の水準測量・地形測量・航空写真・写真測量は、株式会社イビソクに委託して行った。

9．第２地点の自然科学分析（花粉分析、プラント・オパール分析、珪藻分析、年代測定、樹種同定等）は、株式会社パレオ・ラボに委託して行った。なお、分析結果については、第４章第２節に掲載した。

10．発掘調査および報告書の作成にあたって、次の方がたや諸機関からご助言・ご指導・ご協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略・順不同）
内堀信雄・大江伸・大熊厚志・大参義一・梶田澄雄・川上紳一・可児光生・鹿野勘次・篠原英政
柴田博・竹内靖長・長瀬治義・西村勝広
国立奈良文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部・飯田市教育委員会・奈良県月ヶ瀬村教育委員会・
財団法人大阪府埋蔵文化財協会
可茂土木事務所・美濃加茂市・美濃加茂市教育委員会
可茂県事務所・可茂教育事務所

11．発掘調査ならびに調査記録および出土品の整理等には、次の方がたの参加・協力を得た。
（敬称略・順不同）
市原茂夫・大竹勇・加木屋澄子・兼松多門・兼松美津子・酒向一美・高井昌子・永谷健三
早川暸・福田隆・安江健・渡辺美年子・井戸義勝・加藤治・若井国光・所理妙・織部勝美

兼松なミ江・村瀬義明・篠田数雄・浅野紀美代・伊藤節子・江間香代子・傘木文恵・加納恭子
酒向邦子・佐藤まさみ・進藤有美子・高嶌桂子・竹内恒子・豊田圭子・服部みどり・松岡美代子
米津光枝・山岡頼美・後藤けい子・小田富士子・直井江里子・北島直子・近藤千世子

12．調査記録および出土品は、財団法人岐阜県文化財保護センターで保管している。

# 凡　例

1．遺構略号は、下記の略号を用いた。
ＳＤ：溝状遺構　　ＳＫ：土坑　　Ｐ：柱穴など

2．挿図中のＮは、すべて国家座標第Ⅶ系（平面直角座標第Ⅶ系：北緯36°，東経137° 10′）による座標北を表している。

3．土層の色調名は、「新版　標準土色帖」（農林水産省農林水産技術会議事務局監修　1993年版）を用い、目測で比定した。

4．本書に掲載した遺構実測図および遺物実測図には、各々にスケールを付した。

# 目　次

序
例　言
第1章　遺跡の立地と歴史的環境…… 1
　第1節　遺跡の立地…… 1
　第2節　歴史的環境…… 5
第2章　発掘調査の経過…… 11
　第1節　発掘調査の方法…… 11
　第2節　発掘調査の経過…… 12
第3章　遺構と遺物…… 19
　第1節　基本的層序と遺構…… 19
　第2節　土器・陶磁器類…… 31
　　1．縄文土器　2．弥生土器　3．土師器（藤田　英博）…… 31
　　4．須恵器　5．灰釉陶器…… 35
　　6．中近世陶磁器……（小野木　学）…… 46
　　7．土製品…… 58
　第3節　石器類とその他の遺物…… 59
　　1．石器類……（佐野　康雄）…… 59
　　2．石製品…… 61
　　3．その他の遺物…… 61
第4章　自然科学的分析…… 62
　第1節　地震痕…… 62
　第2節　仲迫間遺跡の立地環境と周辺植生…… 67
　　藤根　久・菱田　量・新山雅広・鈴木　茂（パレオ・ラボ）
第5章　考　察…… 112
　第1節　「美濃国」刻印須恵器…… 112
　第2節　中近世陶磁器類の一考察……（小野木　学）…… 117
図　版

# 挿図目次


第１図　遺跡位置図…… 1
第２図　美濃加茂市域の段丘［鹿野(1990)に一部加筆・修正］…… 2
第３図　美濃加茂市域の段丘区分図［梶田教授の教示による］…… 3
第４図　仲迫間遺跡と周辺の遺跡分布図…… 6
第６図　第１地点Ｃ列南壁土層断面図…… 20
第７―１図　第２地点―Ａトレンチ西壁・Ｂトレンチ東壁土層断面図…… 21
第７―２図　第２地点―Ｃトレンチ西壁・Ｄトレンチ東壁土層断面図
Ｅトレンチ西壁・Ｆトレンチ土層断面図…… 22
第８―１図　第３地点Ｇ～Ｉ区土層断面図…… 24
第８―２図　Ｊ～Ｍ区土層断面図…… 25
第11図　縄文土器、弥生土器、土師器…… 32
第12図　第１地点出土須恵器…… 36
第13図　第２地点出土須恵器(1)…… 38
第14図　第２地点出土須恵器(2)…… 39
第15図　第３地点出土須恵器…… 42
第16図　灰釉陶器…… 44
第17図　形式分類図…… 47
第18図　山茶碗(1)…… 50
第19図　山茶碗(2)…… 51
第20図　土師皿…… 52
第21図　青磁・古瀬戸・瀬戸美濃・その他(1)…… 54
第22図　青磁・古瀬戸・瀬戸美濃・その他(2)…… 55
第23図　土製品…… 58
第24図　石器類、その他…… 60
第25図　古銭拓影…… 61
第26図　第２地点Ｂトレンチ西壁土層模式図…… 62
第27図　第２地点Ｂトレンチ東壁土層模式図…… 63
第28図　第２地点Ｂトレンチ砂脈図…… 64
第29図　第３地点Ｉトレンチ東壁土層模式図…… 65
第30図　仲迫間遺跡の位置とその周辺地域…… 67
第31図　主要トレンチの地質柱状図およびその層序…… 68

第32図　Aトレンチ西壁の珪藻化石分布図…… 77
第33図　Bトレンチ北壁の珪藻化石分布図…… 79
第34図　Cトレンチ西壁の珪藻化石分布図…… 80
第35図　Aトレンチ西壁の花粉化石分布図…… 86
第36図　Bトレンチ北壁の花粉化石分布図…… 87
第37図　Cトレンチ西壁の花粉化石分布図…… 89
第38図　材組織とその名称…… 93
第39図　Aトレンチ西壁のプラント・オパール分布図…… 106
第40図　Bトレンチ北壁のプラント・オパール分布図…… 106
第41図　時期別個体数…… 120
第42図　時期別産地別構成比…… 121
第43図　時期別用途別構成比…… 121

## 折り込み図

第５図　遺跡周辺地形図及びグリッド・トレンチ設定図…… 13
第９図　遺構平面図（第１・２地点）…… 27
第10図　遺構平面図（第３地点）…… 29

## 付表目次

第１表　周辺地域の遺跡一覧(1)…… 7
第２表　周辺地域の遺跡一覧(2)…… 8
第３表　古銭一覧…… 61
第４表　仲迫間遺跡の珪藻化石産出表（その１）…… 74
第５表　仲迫間遺跡の珪藻化石産出表（その２）…… 75
第６表　仲迫間遺跡の珪藻化石産出表（その３）…… 76
第７表　Aトレンチ西壁から産出した花粉化石一覧表…… 83
第８表　Bトレンチ北壁から産出した花粉化石一覧表…… 84
第９表　Cトレンチ西壁から産出した花粉化石一覧表…… 85
第10表　仲迫間遺跡出土材の樹種（その１）…… 98
第11表　仲迫間遺跡出土材の樹種（その２）…… 99
第12表　仲迫間遺跡出土材の樹種（その３）…… 100
第13表　仲迫間遺跡出土材の樹種（その４）…… 101

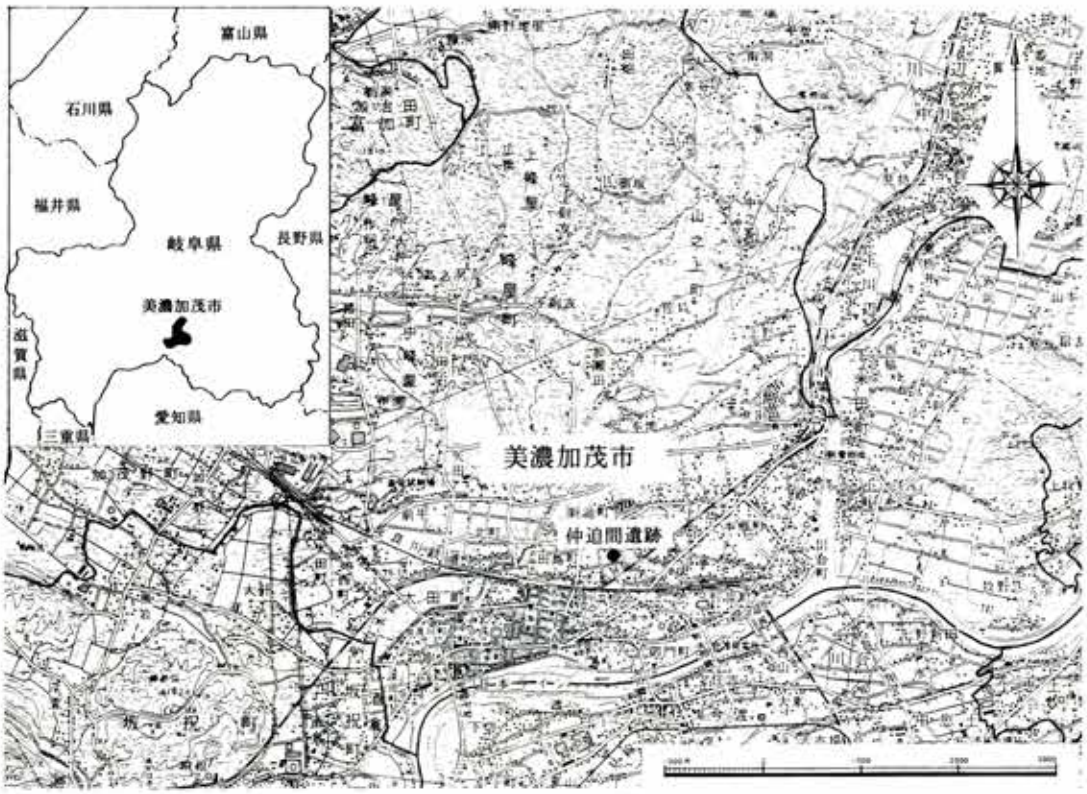
第14表　仲迫間遺跡出土材の樹種（その５）…… 102
第15表　各トレンチの層位別出土材の樹種…… 103
第16表　試料１ｇ当りのプラント・オパール個数…… 106
第17表　「美濃国」刻印須恵器出土地一覧(県内)…… 113
第18表　「美濃国」刻印須恵器出土地一覧(県外)…… 114
第19表　遺物集計表…… 118
第20表　年代対応表…… 120

# 図版目次

図版１　仲迫間遺跡調査地点全景(1)
図版２　仲迫間遺跡調査地点全景(2)
図版３　第１地点調査状況
図版４　第２・３地点調査状況
図版５　第２地点トレンチ状況
図版６　出土遺物（縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器）
図版７　出土遺物（須恵器、灰釉陶器）
図版８　出土遺物（中近世陶磁器類）
図版９　出土遺物（石器類、土製品、銅製品）
図版10　第２地点Ｂトレンチ地震痕状況
図版11　第２地点Ｂトレンチ地震痕状況
図版12　第２地点Ｂトレンチおよび第３地点Ｉトレンチ地震痕状況
図版13　仲迫間遺跡の珪藻化石顕微鏡写真
図版14　仲迫間遺跡から産出した花粉化石(1)
図版15　仲迫間遺跡から産出した花粉化石(2)
図版16　仲迫間遺跡から産出した花粉化石(3)
図版17　仲迫間遺跡出土材の樹種顕微鏡写真(1)
図版18　仲迫間遺跡出土材の樹種顕微鏡写真(2)
図版19　仲迫間遺跡出土材の樹種顕微鏡写真(3)
図版20　仲迫間遺跡出土材の樹種顕微鏡写真(4)
図版21　仲迫間遺跡出土材の樹種顕微鏡写真(5)
図版22　仲迫間遺跡出土材の樹種顕微鏡写真(6)
図版23　仲迫間遺跡のプラント・オパール(1)
図版24　仲迫間遺跡のプラント・オパール(2)

# 第１章　遺跡の立地と歴史的環境

## 第１節　遺跡の立地



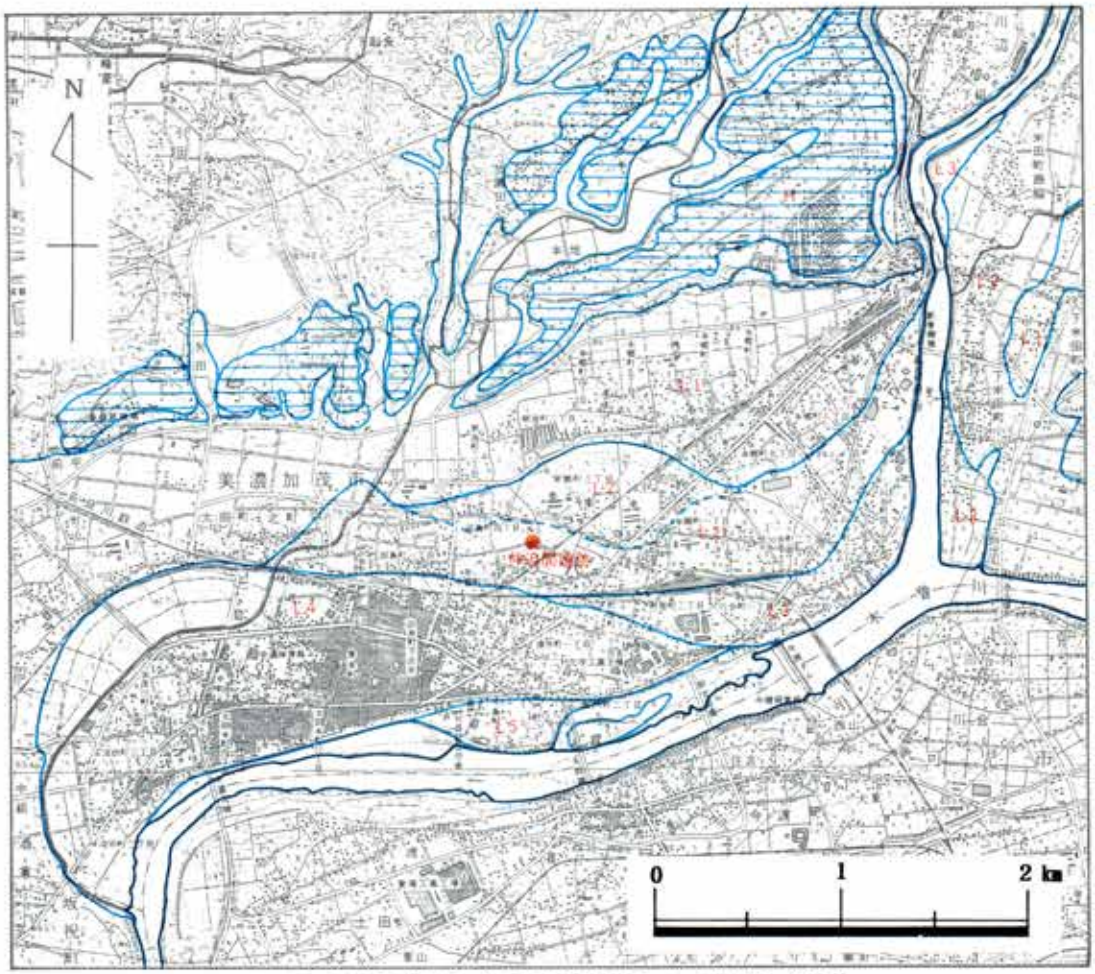

第１図　遺跡位置図

### １．地形・地質

仲洞間遺跡は、美濃加茂市田島町４丁目字仲洞間に所在する。本遺跡が所在する美濃加茂市域の地形・地質を概観すると、水谷(1980)によれば、大きく３地域に分けられる。北部の三和・伊深地区と中部の蜂屋・山之上地区、南部の美濃加茂盆地と呼ばれる太田・古井・加茂野・下米田地区である。

北部の三和・伊深地区は、中生層からなる険しい山地で、全体的に標高300～500ｍを示す。地層を構成する岩石はチャート・砂岩・泥岩・石灰岩である。川浦川・廿屋川・大洞川の浸食を受け、幅が狭く深く刻まれている。

中部の蜂屋・山之上地区は、標高140～240ｍのなだらかな蜂屋丘陵地と呼ばれている地形である。地質は、凝灰角礫岩を主体として、火山角礫岩・凝灰質砂岩・泥岩・溶結凝灰岩などから構成されている。



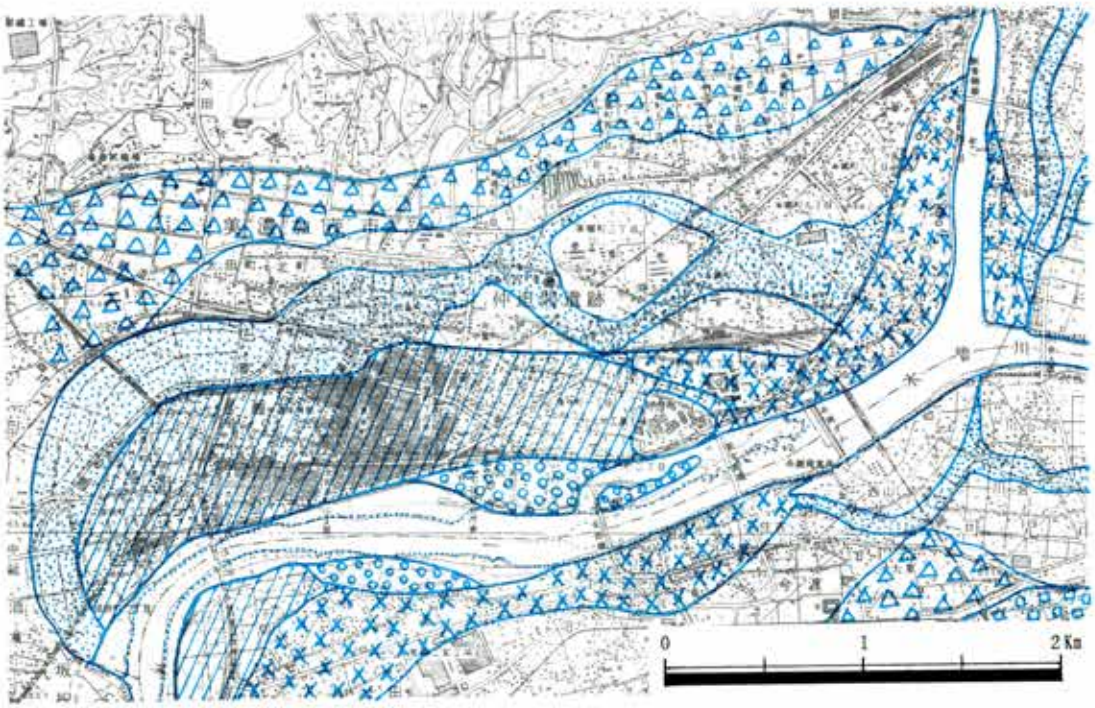

第2図　美濃加茂市域の段丘［鹿野（1990）に一部加筆・修正］

南部の美濃加茂盆地と呼ばれている太田・古井・加茂野・下米田地区は、木曽川・飛騨川によって形成された河岸段丘群からなる低地である。河岸段丘群は、大きく高位・中位・低位段丘の3段に分けられる。

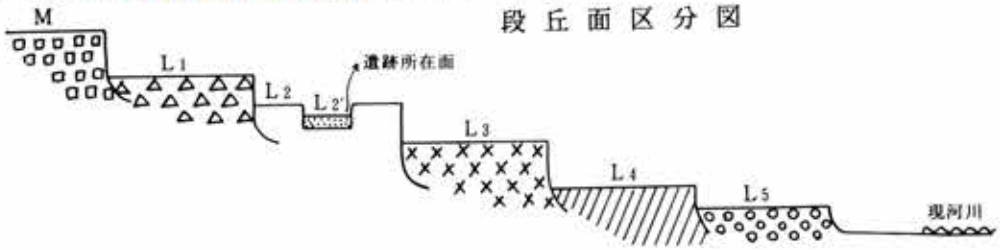
高位段丘は、上野台地と呼ばれているところで、木曽川・飛騨川によって形成された古い扇状地の一部が残ったものと考えられている。鹿野(1990)は、高位段丘を最高位段丘(O面)と高位段丘(H面)に分けている。最高位段丘は、八百津礫層が形成する地形面に相当し、標高180m位で定高性をもつ。この段丘を構成する地層は円礫層で、礫径は10～25cmである。礫種は濃飛流紋岩を主体として、砂岩・頁岩・花崗斑岩・安山岩などを含む。チャート以外はクサレ礫となっている。高位段丘は、山之上礫層に相当する。標高は200～100mで、下流ほど低くなる。この段丘は礫径10～30cmの円礫層で構成されている。礫種は濃飛流紋岩を主体として、チャート・砂岩・頁岩・安山岩・花崗斑岩などを含む。礫は半グサリ程度に風化している。

中位段丘は、標高70～100ｍの加茂野地区を中心とした平坦面である。関・木村(1969)は、Ｍ１面とＭ２面の２面に分けた。Ｍ１面は、加茂野面と野崎面で、加茂野層と野崎層から構成され、加茂野層は古期御嶽火山が噴出したＰｍ－３軽石群を多量に含む粗粒砂層からなる。Ｍ２面は、恵土面で、恵土礫層と凝灰角礫岩層［木曽川泥流堆積物:約4.9万年前：中村他(1992)］から構成される。恵土礫層は円礫層からなり、礫は巨礫から大礫で、濃飛流紋岩を主体にチャート・砂岩・頁岩・花崗岩・安山岩・花崗斑岩などを含む。凝灰角礫岩層は、礫径５～40㎝で、礫種は安山岩を主体にした亜角礫である。

低位段丘は、標高60～100ｍの円礫層で構成された段丘で、Ｌ１～Ｌ５面の５段に分けられている。段丘を構成する礫は、現河床礫とよく似ていて、礫径は10～30㎝、礫種は濃飛流紋岩を主体にチャート・砂岩・花崗岩・安山岩・花崗斑岩などである。Ｌ２面を構成する円礫層は上部に約１ｍの砂層を載せていることを特徴とする。段丘崖は３～５ｍであるが、10ｍに達する




段丘面区分図




第３図　美濃加茂市域の段丘区分図［梶田教授の教示による］

ところもあり、段丘崖から地下水が湧出している。鹿野(1990)

## 2．遺跡の立地

水谷(1980・1983)と鹿野(1990)によって美濃加茂市域の地形・地質を概観してきたが、水谷(1983)による段丘分類と鹿野(1990)の第四系地質図を比べてみると、低位段丘(Ｌ１～Ｌ５面)の分類、その中でもＬ２・Ｌ３面の捉え方に若干差異がある。巨視的に見れば大した違いではないかもしれないが、伸迫間遺跡の場合は両者のはざまで微妙な位置にある。本稿では、鹿野(1990)の分類に準拠し、水谷(1983)のＬ２面をＬ２面、Ｌ３面をＬ２'面として考えることにする。そこで、本遺跡は、低位段丘第２'段(Ｌ２'面)に位置するものと考える。

本遺跡は、第５図のように、微高地状の畑地部(第１地点)と、一段低くなった(約50cm)水田部(第２地点)、第１地点から西方に約70ｍ程離れた水田に利用されている第３地点からなっている。第１地点と第２地点の水田部を挟んで約45ｍ北側には、低位段丘第２段(Ｌ２面)の段丘崖が迫っている。水田の地権者の話では、かって段丘崖からの地下水の湧出がひどく、水田に絶えず水がついている状態の沼田だったということである。現在では地下水の湧出は少なくなったが、ひとたび雨が降ると雨水が周りから浸透してきて、湿田状態を呈し、なかなか水が引かない。また、第３地点は、第１地点と標高はほぼ同じであるが、上位段丘(Ｌ２面)[1]からゆるやかに下がってきていることから、上位段丘に属する地点と考えられる。

1）Ｌ２面とＬ２'面とは異なる段丘ではなく同じ第２段の低位段丘でる。岐阜大学教育学部の梶田教授の教示によれば(第３図)、遺跡所在地は、Ｌ２面を流れ、Ｌ３面によって削られた旧河床上にある。この旧河床堆積物をＬ２'面とする。この種の堆積物は礫は少なく、砂質のことが多いので、地震噴砂を起こす原因となる。従って、旧河床でＬ２面が削られて低くなったのがＬ２'面であるため、ここでは便宜上Ｌ２面をＬ２'面の上位段丘としておく。

### [引用・参考文献]


・鹿野勘次　1990「美濃加茂周辺地域の第四系」『岐阜県地学教育』Vol.26
・関　道明・木村一朗　1969「美濃加茂盆地の段丘、とくに中位段丘とその堆積物」『名古屋地学』No.25
・水谷　敬　1980「第１節　美濃加茂市の自然」『美濃加茂市史』美濃加茂市
・水谷　敬・原　賢仁　1983「美濃加茂盆地の段丘巡検コース」『岐阜地理』第22号
・中村俊夫・藤井富美夫・鹿野勘次他　1992「岐阜県八百津町の木曽川泥流堆積物から採取された埋没樹林の加速器$^{14}$Ｃ年代」『第四紀研究』Vol.31　No.1

## 第2節　歴史的環境

仲迫間遺跡が所在する美濃加茂市域及び対岸の可児市域を含む一帯、いわゆる美濃加茂盆地（以下「盆地」と呼ぶ。）[1]は、前述の自然環境で見てきたように、木曽川・飛騨川の合流点であり、両河川に形成された河岸段丘が発達している。また、この地域は、岐阜県下でも遺跡の密集度が高い地域の一つである。そこで、この地域を第4図の範囲に限定し、飛騨川・木曽川右岸の美濃加茂市域（A地域）、木曽川・飛騨川に挟まれた美濃加茂市下米田地区（B地域）、木曽川左岸の可児市域（C地域：但し木曽川沿岸部の地域に限定する）の3地域に分けて、『美濃加茂市史』や『可児町史』等を参考にし、遺跡や遺物から各時代を、概観することにする。

1）水谷他（1983）によれば、美濃加茂盆地は、木曽川・飛騨川の合流点から、加茂郡坂祝町で先行性河川となるまで、東西約17km、南北約10kmの広がりを持つ地域である。通称太田盆地、可児盆地と呼ばれている。盆地の大半は主に木曽川が形成した河岸段丘からなる。

### 1．旧石器時代

この時代の遺跡は、この盆地内では今のところ見つかっていない。富加町恵日山遺跡、美濃加茂市市橋の北野遺跡・同加茂野町鷹之巣の駅西遺跡でナイフ形石器をはじめ各種の石器が採集されている。また、八百津町の越水遺跡、多治見市の西坂遺跡などが知られているが、いずれもこの盆地の周辺地域である。

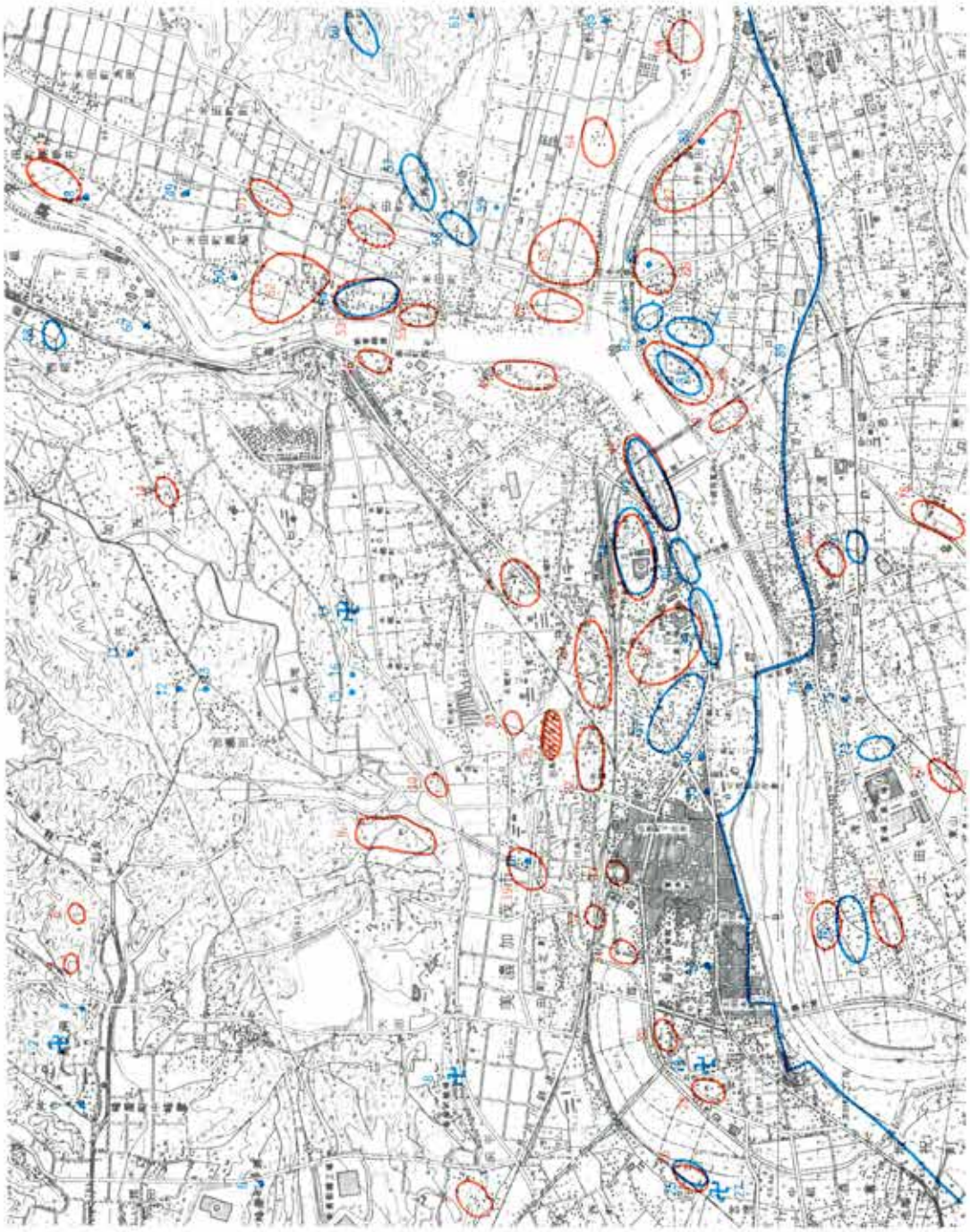
### 2．縄文時代

この盆地内に遺跡が登場するのは縄文時代になってからである。しかし、縄文時代草創期では、伊藤（1980）による稲辺遺跡（加茂野町）や平成4年度に当センターが調査した諸洞遺跡（蜂屋町中蜂屋）で有舌尖頭器が出土している程度であり、盆地の周辺部にあたる。

早・前期になると、A地域では二ツ塚遺跡、B地域では牧野小山遺跡、C地域では川合遺跡などで押型文土器が出土しているが、いずれも小規模である。また、前期後半の土器が則光遺跡（B地域、下米田地区）で出土している。これらの遺跡は川岸近くの段丘上に散在している。

この盆地の段丘上に遺跡が増大するのは中期になってからである。中期前半の土器が出土している遺跡は、B地域の追上遺跡、牧野小山遺跡、C地域の宮之脇遺跡群などで、これらの遺跡から勝坂式土器や船元式土器が出土しているが、まだ遺跡数は少ない。しかし、中期後半からはA地域の中富遺跡、裏迫間遺跡、川合東・西遺跡群、B地域の深渡遺跡群、牧野小山遺跡、C地域の宮之脇遺跡群、川合遺跡などのような大規模な集落遺跡を拠点に、仲迫間遺跡のような小規模な遺跡が散在している。また、二ツ塚遺跡、牧野小山遺跡、神明遺跡などで土偶が出

土している。これらの遺跡が立地する段丘を見てみると、低位段丘第1～3段、特に第2・3段(L2・3面)に集中している。



第4図　仲迫間遺跡と周辺の遺跡分布図

第1表　周辺地域の遺跡一覧(1)

| | No. | 遺跡名 | 時代 縄文 | 弥生 | 古墳 | 古代 | 中世 | 近世 | 種別 | | 出典文献No. | 発掘調査史跡指定 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 美濃加茂市 | 1 | ネンガ洞古窯跡 | | | | ● | | | 古窯跡 | 奈良時代 | 1. 3. | |
| | 2 | 県神社西遺跡 | ● | ● | | ● | | | 散布地 | 一部滅失、弥生中・後期、奈良時代、市史の「境松遺跡」は本遺跡と近接する。(縄文：石冠・打製石斧) | 1.2.3. | |
| | 3 | 矢田廃寺跡 | | | | ● | | | 寺院跡 | 一部滅失、白鳳期：複弁六弁蓮華文軒丸瓦、丸瓦、鴟尾瓦等 | 1.2.3. | |
| | 4 | 尾崎遺跡 | | ● | ● | ● | ● | | 集落跡 | 弥生～中世にかけての大集落跡。磨製鏃、石庖丁、羊形硯「美濃国」刻印須恵器他 | 3. | H4ｾﾝﾀｰ H5市教委 |
| | 5 | 稲場古墳 | | | ● | | | | 古墳 | 滅失 | 1.2.3. | |
| | 6 | 木ノ下古墳 | | | ● | | | | 古墳 | 滅失 | 1. 3. | |
| | 7 | 小陣出遺跡 | ● | | | ● | | | 散布地 | 縄文、奈良時代 | 1. 3. | |
| | 8 | 光禅院寺跡 | | | | | | ● | 寺院跡 | | 1. 3. | |
| | 9 | 殿塚古墳 | | | ● | | | | 古墳 | 羨墳 | 1.2.3. | |
| | 10 | 火塚男塚古墳 | | | ● | | | | 古墳 | 滅失 | 1.2.3. | |
| | 11 | 一夜堀遺跡 | | ● | | | | | 散布地 | 弥生中・後期 | 2. | |
| | 12 | 王(大)塚古墳 | | | ● | | | | 古墳 | 滅失、径32m高3.6m、石室無し、漢鏡、鉄斧、鉄剣、鉄鏃他 | 1.2.3. | |
| | 13 | 大塚遺跡 | | ● | | | | | 散布地 | 弥生後期 | 1.2.3. | |
| | 14 | 石坂遺跡 | | ● | | | | | 散布地 | 一夜堀遺跡と同一か | 1. 3. | |
| | 15 | 仲追間遺跡 | ● | ● | ● | ● | ● | ● | 散布地 古墓 | 縄文中期住居跡1軒、近世土壙墓多数、「美濃国」刻印須恵器 打製石斧、石鏃、縄文～近世陶磁器類破片多数 | 3. | H4市教委 H5ｾﾝﾀｰ |
| | 16 | 井口遺跡 | | ● | | | | | 散布地 | 滅失(鉄道敷地)、弥生後期、石庖丁 | 1.2.3. | |
| | 17 | 中富遺跡 | ● | ● | | | | | 集落跡 | 縄文中期、市史の「霊泉寺遺跡(弥生後期)」も含まれる | 1.2.3. | |
| | 18 | 裏追間遺跡 | ● | ● | | | | | 散布地 | 縄文早期(押型文)・中期、弥生後期 | 1.2.3. | |
| | 19 | 本郷遺跡 | | ● | | | | | 散布地 | 弥生後期 | 2. | |
| | 20 | 森山遺跡 | | ● | | | | | 散布地 | 弥生後期 | 2. | |
| | 21 | 川合東遺跡群 | ● | ● | | | | | 集落跡 | 縄文中期、弥生中・後期 | 1.2.3. | |
| | 22 | 川合西古墳群 | | | ● | | | | 古墳 | 1・2号墳滅失 | 1.2.3. | |
| | 23 | 川合西遺跡群 | ● | ● | | | | | 散布地 | 弥生中・後期、川合川端遺跡(縄文：発) | 1.2.3. | H3市教委 |
| | 24 | 二ツ塚遺跡 | ● | ● | | | | | 散布地 | 縄文早期(押型文)・中期、土偶、弥生前～後期、石庖丁 | 2. | |
| | 25 | 二ツ塚古墳群 | | | ● | | | | 古墳 | 2基、川合西古墳群あるいは赤池古墳群と同一か | 2. | |
| | 26 | トドメキ古墳群 | | | ● | | | | 古墳 | 2基 | 1.2.3. | 市史跡 |
| | 27 | 神宮東遺跡 | | | | ● | | | 散布地 | 「美濃国」刻印須恵器、二重圏文の軒丸瓦 | 2. | |
| | 29 | 神稲葉遺跡 | | ● | | | | | 散布地 | 弥生後期 | 1.2.3. | |
| | 30 | 太田元泰師廃寺跡 | | | | ● | | | 寺院跡 | 白鳳期、単弁重弁蓮華文軒丸瓦、平瓦等、須恵器 | 1.2.3. | |
| | 31 | 八幡神社西遺跡 | | | | ● | | | 散布地 | 平安時代 | 1. 3. | |
| | 32 | 井ノ上遺跡 | ● | | | | | | 散布地 | | 1. 3. | |
| | 33 | 蔵の内古墳 | | | ● | | | | 古墳 | 滅失、7C後半、S12発掘、径13.5×12.6m高1.5m、川原石積石室、平瓶・高杯・坏身・坏蓋・鐙他 | 1.2.3. | |
| | 34 | 後田遺跡 | | ● | | | | | 集落跡 | 弥生前期、遠賀川式壺形土器、市史の「乞食市遺跡(縄文・石冠)」と同一か不明 | 1. 3. | |
| | 35 | 神明堂古墳 | | | ● | | | | 古墳 | 滅失、須恵器・土師器 | 1.2.3. | |
| | 36 | 塚弓古墳 | | | ● | | | | 古墳 | 滅失、径30m高さ1.8m、人骨数百 | 1.2.3. | |
| | 37 | 火塚古墳群 | | | ● | | | | 古墳 | 火塚他2基、滅失 | 2. | |
| | 38 | 亀淵遺跡 | | ● | | | | | 散布地 | パレススタイル壺形土器 | 1.2.3. | |
| | 39 | 亀淵古墳群 | | | ● | | | | 古墳 | 16基、市史では3基川合古墳群と重複の可能性有りとする | 2. | |
| | 40 | 赤池古墳群 | | | ● | | | | 古墳 | 3基、3号墳(径19m高2m)滅失、 | 1.2.3. | |
| | 41 | 稲荷塚古墳 | | | ● | | | | 古墳 | 径27m高4m、封土及びその下から弥生土器・土師器 | 1.2.3. | |
| | 42 | 中屋敷古墳 | | | ● | | | | 古墳 | 一部滅失 | 1.2.3. | |
| | 43 | 深渡遺跡群 | ● | ● | | | | | 集落跡 | A～D地点、縄文時代、弥生後期 | 1.2.3. | |
| | 44 | 前光遺跡 | ● | ● | | | | | 散布地 | 縄文前期後半～中期、弥生中期 | 1.2.3. | |
| | 45 | 長福遺跡 | | ● | | | | | 散布地 | 弥生後期 | 1.2.3. | |
| | 46 | 長福古墳群 | | | ● | | | | 古墳 | 長福古墳・長福北古墳(滅失) | 1.2.3. | |
| | 47 | 小山観音北遺跡 | | ● | | | | | 散布地 | 弥生後期、手あぶり形土器など | 1.2.3. | |
| | 48 | 今遺跡 | | ● | ● | ● | ● | | 集落跡 | 弥生～奈良時代の住居跡43軒、中世の溝など | 1.2.3. | S53市教委 |
| | 49 | 坂下古墳群 | | | ● | | | | 古墳 | 2基滅失 | 1.2.3. | |
| | 50 | 廻間古墳群 | | | ● | | | | 古墳 | 2基滅失 | 1.2.3. | |
| | 51 | 下牧野古墳 | | | ● | | | | 古墳 | 滅失 | 1. 3. | |
| | 52 | 鳥崎遺跡 | | ● | | | | | 散布地 | 弥生中・後期 | 2. | |
| | 53 | 牧野小山遺跡 | ● | ● | ● | ● | | | 集落跡 | 縄文早期～奈良時代の住居跡31軒、打製石庖丁・土偶 | 1.2.3. | S48市教委 |
| | 54 | 岐大農場遺跡 | ● | | | | | | 散布地 | 縄文中期、勝坂式土器・磨製石斧 | 1.2.3. | |
| | 55 | 旧中山道 | | | | | | ● | その他 | | | |

第2表　周辺地域の遺跡一覧(2)

| | No. | 遺跡名 | 時代 縄文 | 弥生 | 古墳 | 古代 | 中世 | 近世 | 種別 | | 出典文献No. | 発掘調査史跡指定 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 坂祝 | 28 | 雲埋(梅)庵寺跡 | | | | ● | | | 寺院跡 | 白鳳期、複弁蓮華文軒丸瓦、四重弧文軒平瓦、丸瓦、平瓦須恵器類 | 1.2. | |
| 可児市 | 55 | 旧中山道 | | | | | | ● | その他 | | 1. | |
| | 56 | 土田袖浦遺跡 | ● | | | | | | 散布地 | 土師器 | 1.4. | |
| | 57 | 八幡古墳群 | | | ● | | | | 古墳 | 八幡古墳(方墳)・1～8号墳、8号墳滅失、4号墳(発) | 1. | S55町教委 |
| | 58 | 土田定安遺跡 | | | ● | | | | 散布地 | | 1. | |
| | 59 | 土田東山古墳群 | | | ● | | | | 古墳 | 2基、土田東山古墳・2号墳、土田東山古墳(発) | 1. | S58市教委 |
| | 60 | 今渡渡船場の跡 | | | | | | ● | その他 | | 1. | 市史跡 |
| | 61 | 今渡下畑古墳 | | | ● | | | | 古墳 | | 1. | |
| | 62 | 今渡遺跡 | ● | ● | ● | ● | ● | ● | 散布地 | 縄文～近世の土器・陶磁器多数、銭貨、石器等、土壙墓火葬墓 | 1. 6. | S58県教委 |
| | 63 | 今渡金屋遺跡 | | | | | | ● | その他 | | 1. | S62市教委 |
| | 64 | 西野遺跡 | | | ● | | | | 散布地 | | 1. | |
| | 65 | 宮之脇遺跡群 | ● | ● | ● | ● | ● | | 集落跡 | A・B地点、縄文～奈良時代の住居跡多数、硬玉製大珠ﾂﾒ状耳飾り、石庖丁、勾玉、滑石製模造品、「美濃国」刻印須恵器(A地点)など | 1.4.5. | S34名大 S49町教委 H2市教委 |
| | 66 | 宮之脇古墳群 | | | ● | | | | 古墳 | 12基、1・12号墳(方墳)、7号墳現存、1～6号墳(発) 10～12号墳(発) | 1.4.5. | S49町教委 H2市教委 |
| | 67 | コダマ塚古墳 | | | ● | | | | 古墳 | | 1. 5. | |
| | 68 | 稲荷塚古墳群 | | | ● | | | | 古墳 | 3基 | 1. 5. | H2市教委 |
| | 69 | 次郎兵衛塚古墳群 | | | ● | | | | 古墳 | 8基、1・5号墳(方墳)、1号墳保存整備、8号墳現存、1～7号墳(発) | 1. 5. | H2市教委 |
| | 70 | 東畑古墳 | | | ● | | | | 古墳 | | 1. 5. | |
| | 71 | 川合遺跡 | ● | ● | ● | | | | 集落跡 | 縄文早期(押型文)・弥生～奈良時代、古墳時代住居跡8軒製塩土器など | 1.4.5. | S48町教委 H2市教委 |
| | 72 | 狐塚古墳 | | | ● | | | | 古墳 | 滅失、前方後円墳、全長63m、家形石棺 | 1. 5. | |
| | 73 | 東野遺跡 | ● | ● | ● | | | | 散布地 | 石斧、土師器 | 1.4.5. | |

出典文献番号：1：県遺跡地図(1990)
2：美濃加茂市史(1980)
3：「土の中からのメッセージ」美濃加茂市教委(1993)
4：可児町史(1980)
5：特別展「川合遺跡群」開催記念　成果報告会資料、解説資料(1994)、可児郷土歴史館
6：「今渡遺跡」岐阜県教育委員会(1984)

中期にあれほど多くの大規模な遺跡が形成されていたのが、後・晩期になると極端に遺跡数が減少し、規模も小さくなる傾向を示す。B地域の牧野小山遺跡、C地域の宮之脇遺跡群などで若干土器が出土しているだけである。また、乞食巾遺跡、境松遺跡などから石冠が出土している。

### 3．弥生時代

この時代、前期の遺跡は少なく、二ツ塚遺跡・後田遺跡などだけである。後田遺跡では遠賀川式の壺形土器が出土している。中・後期になると遺跡数が爆発的に増大する。採集・出土した土器から見ると、A地域では、県神社西遺跡、尾崎遺跡、一夜堀遺跡、大塚遺跡、石坂遺跡、仲迫間遺跡、井口遺跡、中富遺跡、裏迫間遺跡、本郷遺跡、森山遺跡、川合東・西遺跡群、二ツ塚遺跡、沖稲葉遺跡、亀淵遺跡など、B地域では、深渡遺跡群、則光遺跡、長福遺跡、小山観音北遺跡、今遺跡、島崎遺跡、牧野小山遺跡など、C地域では、今渡遺跡、宮之脇遺跡群、川合遺跡、東野遺跡などがある。これらの遺跡の中には、発掘調査の結果、大集落遺跡も含ま

れている。尾崎遺跡、今遺跡、牧野小山遺跡、宮之脇遺跡群などである。弥生時代特有の石器では、仲迫間遺跡で出土している磨製石鏃は、尾崎遺跡や南野遺跡(加茂野町南野)の他、吉田(1980)で市内出土として7点紹介しているだけである。また、磨製石庖丁は尾崎遺跡、井口遺跡、二ツ塚遺跡、宮之脇遺跡群の他、作り洞遺跡［蜂屋町：吉田(1980)］で出土している。牧野小山遺跡や南野遺跡では打製石庖丁が出土している。しかし、この頃の水田跡はまだ見つかっていない。なお、為岡遺跡(下米田町)では、県下でもあまり例のない方形周溝墓が出ている。

### 4．古墳時代

この時代は、前期と後期の2時期に分けられるが、美濃加茂市域(A・B地域)では前期の古墳は2基しか見つかっていない。鷹之巣大塚古墳(加茂野町)と太田大塚古墳(太田町)である。鷹之巣大塚古墳は、消滅していて詳細は不明であるが、漢鏡・槍・鏃・巴形銅器の出土から前期後半の古墳とされている。また、太田大塚古墳も消滅しているが、主体部の構築方法や出土遺物（漢鏡・鉄斧・鉄剣・鉄鏃・剣頭）から前期の古墳とされている。これらの古墳は木曽川からやや離れた内陸部に所在する。しかし、後期は、円墳の群集墳が主体で、木曽川沿岸部に集中しており、川から離れた地域では、古墳は点在している。一方、可児市域(C地域)では、前期の前方後方墳や前方後円墳などが木曽川沿岸部でなくやや内陸部にまとまって所在し、後期になると沿岸部に群集墳を形成する。しかし、可児市域では、円墳ばかりでなく次郎兵衛塚古墳のように方墳や狐塚古墳のような前方後円墳も造られている。

この時代の集落跡としては、A地域では尾崎遺跡、B地域では今遺跡や牧野小山遺跡、C地域では宮之脇遺跡群や川合遺跡などが知られているだけである。

### 5．古代以降

古代の遺跡も多くない。集落遺跡として、A・B地域では尾崎遺跡、今遺跡、牧野小山遺跡など、C地域では宮之脇遺跡群などが知られているだけである。しかし、白鳳期の寺院跡として矢田廃寺跡・太田元薬師廃寺跡、雲梅廃寺跡(坂祝町)が所在することや延喜式の式内社の存在などから、この地域に相当の力を持った豪族が存在したことが推定される。そこで、吉田(1980)や神保(1980)は、矢田廃寺跡から雲梅廃寺跡にかけての地域を加茂県主集団の本拠地と考えている。

また、トドメキ古墳群周辺の神宮東遺跡や尾崎遺跡、仲迫間遺跡、宮之脇遺跡群A地点から「美濃国」刻印須恵器が出土していることは、これらの遺跡の周辺に加茂郡・可児郡の何れかの郷に比定される集落の存在が考えられるかも知れない。さらに東山道がこの地を通っていることから、駅家や郡衙など官衙的性格のものの存在も考えられる。

中世以降になると遺跡は激減する。特に、近世は、中山道の宿場町として太田の宿があり、

現町並みとほぼ一致するため、遺跡が少なくなる。

**［引用・参考文献］**


・伊藤克司　1980「原始古代　第2章縄文時代」『美濃加茂市史　通史編』美濃加茂市
・大江　命他　1976『宮之脇遺跡発掘調査報告書』可児町教育委員会
・大江　命　1978『川合遺跡発掘調査報告書』可児町教育委員会
・可児町　1980『可児町史　通史編』
・齊藤基生他　1991『川合川端遺跡発掘調査報告書』美濃加茂市教育委員会
・佐野一彦　1980「古代中世　第1～3章」『美濃加茂市史　通史編』美濃加茂市
・神保朔郎　1980「原始古代　第5章第1節美濃加茂市域の遺跡」『美濃加茂市史　通史編』美濃加茂市
・波多野寿勝他　1984『今渡遺跡』岐阜県教育委員会
・増子康眞・紅村　弘他　1973『牧野小山遺跡』美濃加茂市教育委員会
・間宮瑞夫　1980「原始古代　第4章古墳時代」『美濃加茂市史　通史編』美濃加茂市
・吉田英敏　1980「原始古代　第1章、第3章、第5章第2節・第3節」『美濃加茂市史　通史編』美濃加茂市

# 第２章　発掘調査の経過

## 第１節　発掘調査の方法

### １．発掘調査の経緯

仲迫間遺跡が発見された経緯は、美濃加茂市の区画整理事業や国道248号のバイパス建設が計画されたためである。市教委は、付近に石坂遺跡の存在が知られていたことから、県教委文化課と愛知女子短大講師齊藤基生氏の指導のもとに、現地調査を実施し、須恵器や山茶碗の破片を多数採集した。このため、遺物包含層の状況や遺跡の広がりを確認するために、一部の試掘調査を実施し、この結果遺跡の存在が認められた。

そこで市教委は、市の区画整理事業に先立ち遺跡の発掘調査をすることになった。平成４年度から平成５年度６月上旬まで、第５図の微高地部分の発掘調査が行われた。報告書がまだ公表されていないので結果の詳細は不明であるが、縄文時代中期の住居跡１軒と多数の近世墓が検出されている。

可茂土木事務所の国道248号公共道路改良工事（バイパス建設工事）事業計画を受け、（財）岐阜県文化財保護センターは、平成５年４月１日付で岐阜県と委託契約を結び、発掘調査を実施することになった。従って、本遺跡の道路建設予定地部分を発掘調査することになったが、この部分はまだ買収が済んでいないため、地権者の同意が得られた地点だけ発掘調査を実施することになった。調査予定面積は、2,000㎡である。

### ２．発掘調査前の状況

仲迫間遺跡は、前述のように、木曽川・飛騨川によって形成された低位段丘第２段（Ｌ２'面）に位置する。本遺跡は、第５図のように、微高地状の畑地部と一段低い（約50～70cm程）水田部からなっている。畑地部と水田部を挟んで約45ｍ北側には、低位段丘第２段（Ｌ２面）の段丘崖が迫っている。

調査地点は、微高地状の畑地部（第１地点）、第１地点の北側の水田部の休耕田（第２地点）、第１地点から約70ｍ程西方の休耕田（第３地点）の３地点である。第１地点の畑地は、作物が栽培されていたり、桑畑や荒れ地のところなど小区画に分かれていた。また、第２・３地点の休耕田は、ここ数年耕作されず雑草が繁茂していた。特に、第２地点は、上位段丘や微高地からの地下水や雨水の浸透があり、沼田状を呈している。第３地点は、前述したように上位段丘に属する。また、字名も「柳原」となっているため、本来は本遺跡と分けて別の遺跡名を設定すべきであるが、便宜上同一遺跡として扱うことにした。

### 3．グリッド・トレンチの設定

第1地点は、畑地で全面調査が可能なため、国家座標に合わせて、第5図のようにグリッドの設定を行った。グリッドの単位は一辺4mとする。

グリッドは、基点(X＝−61,570、Y＝−12,166)から北方向にA～Eのアルファベットを、西方向に1～22の算用数字を付した。グリッドの呼び方は北東の交点を使用することにした。

第2地点は、休耕田であり、試掘程度との条件付で地権者から承諾書をもらっている関係から、田地全体を調査することができなかった。このため、トレンチを設定して調査することになった。トレンチは、第5図のように第1地点で設定したグリッドの延長線上に設定した。北東側からA～Fトレンチとする。

第3地点も休耕田で、試掘程度との条件付であったので、トレンチを設定して調査することとしたが、水田が互いに隣接しており、また第1・2地点の上位段丘であるので、遺構等の検出の可能性が考えられたため、何時でも拡張できるように、一応、国家座標に合わせて、一辺8mのグリッドを設定した。基点は(X＝−61,500、Y＝−12,386)とした。但し、土地の制約から8mで設定できないところは、4mで設定した。従って、第5図のように設定したグリッドの杭を利用してG～Pトレンチを設定した。

## 第2節　発掘調査の経過

当センターが行う国道248号公共道路改良工事に伴う仲迫間遺跡の発掘調査は、当初5月中旬から開始する予定で準備を進めていたが、市の区画整理事業に伴う市教委の発掘調査が遅延していたことや市教委の現場調査事務所の位置が、当センターの発掘調査予定地内にあることなどの諸般の事情から、発掘調査の開始を遅らせなければならなくなった。

市教委の発掘調査が6月上旬で終了したため、6月中旬から発掘調査の開始を予定していたが、上旬以降梅雨による雨がちの天気が続き、農道や現場調査事務所の設置個所がぬかるみ、トラックが入れずプレハブも設置できない状態であった。しかし、発掘作業員の募集などの事情からとりあえず6月28日に調査始め式を行うことになったが、7月9日まで2週間発掘作業を休止することとした。

このような事情で開始した仲迫間遺跡の発掘調査は、8月上旬までの梅雨や9月の台風などの長雨にたたられたが、10・11月は比較的好天に恵まれ、12月10日の調査納め式をもって現地での調査を終了した。本遺跡の発掘調査の経過は、次の通りである。

**第1・2週(6.28～7.9)**　梅雨で延び延びになっていた調査始め式を6月28日に実施したが、農道やプレハブ設置場所が雨でぬかるんでおり現場事務所がまだ建てられる状態でないため、7月9日まで発掘作業を休止した。

**第3週(7.12～7.16)**　週の前半3日間雨天続きで発掘作業が出来なかったが、ようやく7月15

第5図　遺跡周辺地形図及びグリッド・トレンチ設定図

日になって晴れたので、仲迫間遺跡の発掘作業を開始した。まず第１地点(畑地部分)の除草及び桑木の伐採を行う。また、砂質土の割に水はけが悪いので排水作業を行う。７月16日から本格的にグリッドの掘削作業を開始した。

**第４・５週(7.19～7.30)**　第４週の前半２日間は会議が続き発掘作業が出来なかった。第１地点の各グリッドの掘削作業は順調に進む。表土から30～40cm下から地山と思われる浅黄橙色砂質土が現れ始める。表土から地山までの各層から一様に陶磁器・山茶碗・須恵器の小破片が多数出土しているが、各層とも畑作による撹乱を受けており、安定した土層は認められない。

７月22日に始めて縄文時代の遺物として石鏃や打製石斧が検出された。第５週に入ると前半は台風５号、後半は６号の影響で雨がちの天気になり、発掘作業が進まなかった。

**第６～８週(8.2～8.20)**　台風６・７号や戻り梅雨によって、途中降雨や雨水の排水作業などで、まともに発掘作業が出来たのは１日だけである。また、一旦ぬかるむとなかなか水が引かないので排水作業におわれて、発掘作業はなかなか進まなかった。

８月12日～８月17日はお盆休み。

**第９・10週(8.23～9. 3)**　ようやく梅雨が明けたのか晴天が続き、急に暑くなったため作業員さん達はバテ気味である。しかし、グリッドの掘削は順調に進んだ。第９週の後半は、調査区域及び周辺の雑草の除去をグリッドの掘削と並行して行う。また、各グリッドの畦畔はずしやゴミ穴やイモ穴と思われる新しい土壙の検出及び掘り上げを行った。これらの土壙からはビニールヒモや陶磁器片など新しい遺物しか出土しなかった。畦畔はずしに伴いＣ列南壁のセクション図の作成を開始した。９月３日は台風の影響による雨で発掘作業を中止したが、大型台風との予報により、プレハブ・トイレなどの固定作業を行った。

**第11・12週(9.6～9.17)**　先週までの天気と異なり、雨がちの天気が続いたため発掘作業が出来たのは２日半だけである。雨天が続くと土壙内やグリッド内に溜まった水の除去が大変で、一度排水しても周りに降った雨水が調査区内に次々と滲み出してくる状況である。そのため発掘作業が遅々として進まない。新しい土壙の平板実測を始める。

**第13週(9.20～9.24)**　先週までの雨続きの天候に伴い、調査区内の排水作業が大変であるため、前半２日間作業を休止した。雨によって中断していた新しいピット・土壙の検出・掘り上げを再開した。また、地山と考えている浅黄橙色細砂層を掘り下げて、下層の土層観察のため、第１地点の17列に幅１ｍの立割トレンチを入れて、掘り下げ始めた。

第２地点にトレンチを設定する。

**第14週(9.27～10.1)**　調査区内の雑草が生い茂っているので、第２・３地点の草刈り作業を行った。また、第１地点のピット・土壙の平板実測を実施し、遺構図を作成した。９月29日より第２地点のトレンチの掘削を開始する。第２地点は、休耕田３枚しか承諾書がもらえなかったため、各田毎に幅４ｍのトレンチを設定し、北東側からＡ～Ｆトレンチとする。また、第２地点

は、第1地点より50cm程低い面にあり、しかもすぐ北側の上位段丘から滲みだした地下水が溜まりやすく、湿地状になっている。そのため、少しの雨でもすぐ水が溜まり、水引も悪いので、排水が問題となる。

**第15・16週(10.4～10.15)**　先週までと異なり天候は安定し、作業も順調に進んだ。雨で中止になったのは1日だけである。第2地点の各トレンチの掘削は順調に進み、第Ⅳ層まで掘削が進んだトレンチから土層観察用のサブトレンチを設定し、掘り下げることにした。

地山まで比較的浅いBトレンチの第Ⅴ層で地震痕(砂脈)を検出した。そのため、Bトレンチでは第Ⅴ層の面で一応止めて周囲を精査した結果、南壁に砂脈の断面が見つかり、第Ⅲ層まで砂が噴き上がっていることが確認できた。また、土層のズレも約2.5cm認められた。北壁でもかすかであるが砂脈が検出された。

Aトレンチでは、第Ⅷ層より下から茅や葦類の葉や木片(自然木)等の植物遺体が検出され、泥炭層の可能性が考えられた。そのため、パレオ・ラボに連絡をとり、分析を依頼した。また、Bトレンチの地震痕については、岐阜大学の梶田教授に連絡をとり、調査に来ていただくことになった。

第2地点の掘削が終了した(地山まで下げた)トレンチからセクションを取り始める。Aトレンチのサブトレンチは、第ⅩⅤ層で計30cm前後の河原石が出てきたので、その層までで掘削を終了した。その結果、木質泥炭層は第ⅩⅤ層まで続くことがわかった。また、第Ⅷ層～Ⅹ層までの黒色粘質土層では山茶碗や縄文土器片が出土するが、第ⅩⅠ層以下では土器の検出はできなかった。CトレンチでもAトレンチと同様の木質泥炭層が確認できた。

パレオ・ラボに、花粉・プラントオパール・珪藻分析、樹種同定、年代測定等を依頼し、第1次試料採取を行った。

Dトレンチでは、第Ⅲ層からの土壙(ＳＫ２－２)を検出した。市の調査で検出された近世墓の可能性が考えられたが、半割の結果遺物は陶器・山茶碗・須恵器の破片が数点出土しただけで、墓の可能性はなくなった。

**第17週(10.18～10.22)**　第2地点のＡＣトレンチのサブトレンチは、第ⅩⅠ層以下まで掘り下げると水が湧き出てくるため、掘削中ポンプを稼働させて排水しないと追いつかない程である。第3地点の地形測量を委託する。

Eトレンチ第Ⅲ層より磨製石鏃を検出。今までに第2地点の各トレンチから弥生土器と思しき小破片は出土していたが、明瞭に弥生時代のものとわかるものは出土していない。

週の後半2日間出張のため作業中止。

金沢大学鈴木三男助教授、農水省森林総合研究所能城修一氏ら、パレオ・ラボの藤根氏と共に来訪。第1次試料の中にヒトツバタゴの木片が含まれていたことが判明。

**第18週(10.25～10.29)**　第2地点のＢ・Ｄ・Ｆトレンチは、比較的浅いので地山まで掘り下げ

れたが、Ａ・Ｃ・Ｅトレンチでは深くて地下水が湧き出して掘削に手間取るため、第Ｘ層まで掘削することにした。

第２地点のＡ・Ｃ・Ｅトレンチの掘削と並行して第３地点のトレンチ掘削を開始した。

Ｂトレンチの地震痕の精査を行ったところ、砂脈は地山の浅黄橙色細砂層を突き破り、第Ｖ層との間にいったん噴砂が溜まり、その後第Ｖ・Ⅳ・Ⅲ層へと噴き上がっていること、第Ｖ層との間に溜まった噴砂はかなり広範囲に広がっていることが確認できた。地震痕の調査に、岐阜大学川上助教授・県博物館の遠藤自然係長の他３名来訪。

**第19週**(11.1～11.5)　先週末に降った雨水が、第２地点の各トレンチに溜まり、そのため各トレンチの壁が大きく抉り落ち込み、隣接の水田にまで被害を及ぼす程であった。このため排水と落ち込んだ土砂の除去作業が大変であった。毎日排水機を稼働。

第３地点のトレンチ掘削は順調に進む。各トレンチとも深さは50cm程で比較的浅い。各層から陶片、山茶碗・須恵器の小破片が多く出土している。弥生土器・土師器の小破片が出土し始める。

第２地点Ｃトレンチの第２次試料採取をパレオ・ラボが行った。地震等の調査のため、愛知学院大学大参義一教授・岐阜大学梶田澄雄教授が来訪される。

**第20週**(11.8～11.12)　雨天のため２日間作業中止。第２地点の掘削は一応終了し、土壙・ピットの検出を行った。続けて第２地点のセクション取りを継続している。

第３地点のトレンチ掘削は順調に進んでいる。第３地点Ｉトレンチからも地震痕(砂脈)を検出した。地震痕の調査に加茂高校の鹿野教諭が来訪。

**第21週**(11.15～11.19)　先週末の降雨により再び第２地点のトレンチ内が満水状態になり、壁面の崩落が激しい。第３地点のトレンチ内にも雨水が溜まり、排水作業を行う。

第３地点各トレンチに土層観察用のサブトレンチを入れるが、地山は浅黄橙色砂層で、遺物の出土はなかった。

次週の空撮の準備として、第１地点の清掃作業に取り掛かる。週末になり第２地点の各トレンチ内の雨水も減り始めたので、排水作業と伴に崩落部の除去と清掃作業を開始する。Ｄトレンチ清掃中崩落部の第Ⅷ層より須恵器の無台坏身が完形で出土した。

**第22週**(11.22～11.26)　週前半２日間会議のため作業中止。第２地点の排水作業、第１・２地点の空撮用の清掃作業と並行して第３地点の掘削を行う。Ｏトレンチで、地震痕（径５cm程の砂柱）を検出した。断面では捉えきれなかったため、どの高さまで噴き上がっていたか確認できなかったが、第Ⅲ層が砂粒を多量に含む土層であるため、そこまで噴き上がっていたと推測される。第１・２地点を対象とした第１次空撮及び測量を実施した。

**第23週**(11.29～12.3)　先々週位から比較的天候が安定し、週半ばに１日雨天中止にしただけである。第３地点のＯトレンチⅣ層で検出された溝状遺構を掘り上げたが、他の土層から出土す

る遺物とほとんど同じで、時期を特定できる遺物は出土しなかった。第3地点の掘削と並行して第2地点の埋め戻しを開始した。

第3地点を対象とした第2次空撮及び測量を実施する。

**第24週**(12.6～12.10)　冬型の気圧配置が強まり、一段と朝の冷え込みが厳しくなる。第3地点の掘削が終了したが、時期不明の溝状遺構を検出しただけで、他の遺構は検出できなかった。第2地点は、湿地状を呈しており重機を入れて埋め戻すことができないため、とりあえず人力で埋め戻すことにした。

週半ばから重機を入れて第1・3地点の埋め戻し作業を行った。可茂土木事務所道路建設課木村係長と市の区画整理課伊藤係長との立会のもとで、第1地点は畑地で、地権者が細かく分かれているため、測量会社に委託して民地の境界杭を打ち直すことになった。

12月10日に調査納め式を行い、現地での発掘調査を終了した。

当初、発掘調査面積は 2,000㎡を予定していたが、第3地点で遺構が検出できずトレンチ掘削で終了したため、最終の発掘調査面積は 1,440㎡になった。

**第25週**(12.13～12.16)　現場のプレハブ・トイレ等の撤収作業を行い完全に終了する。

12月16日以降は、出土遺物等の整理・報告書作成業務に取り掛かる。

# 第３章　遺構と遺物

## 第１節　基本的層序と遺構

本遺跡は、中州状の微高地を呈する第１地点(畑地)、第１地点と上位段丘(Ｌ２面)との間の第２地点(水田)、第１・２地点から約70ｍ程西方に離れた第３地点(水田)からなる。第３地点は、前章で述べたように、本遺跡と異なる立地条件を呈するが、一応本遺跡に含めて考えることにする。

従って、これら３地点は、土層の形成状況の違いから、過去からの土地利用が異なっている。そこで、ここでは地点ごとに分けて基本的な層序を述べることにする。

### １．第１地点の基本層序（第６図）

前述したように、第１地点は中州状の微高地上の北側に位置する。この南側の地点は、美濃加茂市の区画整理事業に伴って市教委が発掘調査された地点である。調査直前までは畑地や桑畑に耕作されていた。そのことは、土層にも明瞭にうかがい知ることができる。本地点の基本的な土層は、次の５層に分けられる。

第Ⅰ層：10ＹＲ４/２；灰黄褐色砂質土、表土。耕作土で細砂粒を多く含む。締まり、粘性はほとんどない。耕作などにより絶えず混ぜ返され撹乱された土層である。イモ穴やゴミ穴など多数検出されており、耕作が継続されていたことが分かる。

第Ⅱ層：10ＹＲ２/１～10ＹＲ３/１；黒色～黒褐色砂質土、細砂粒を多く含み、締まりはあるが、粘性はあまりない。この層より上位で陶磁器類、須恵器や山茶碗などの破片を検出。

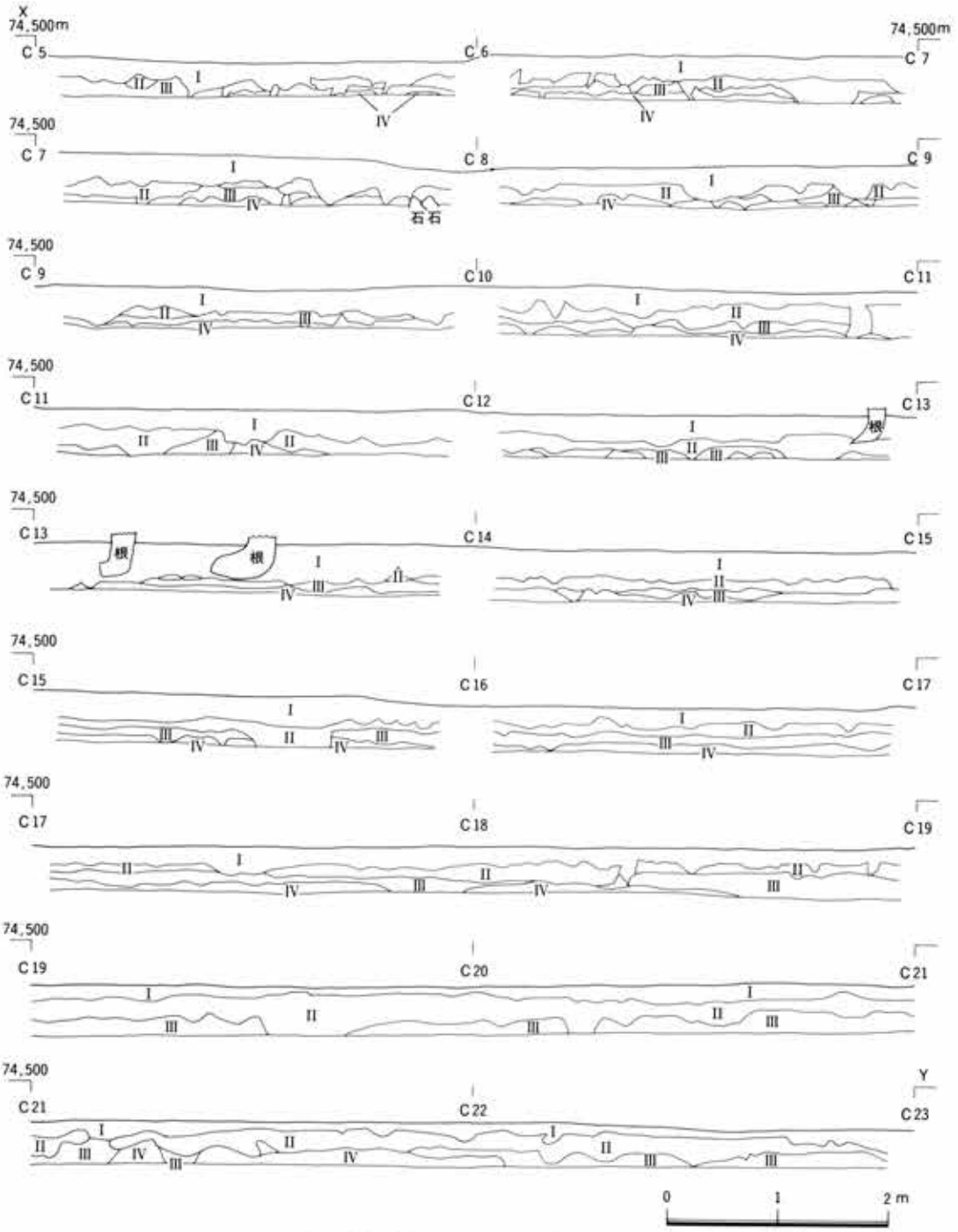
第Ⅲ層：10ＹＲ３/３～10ＹＲ４/４；暗褐色～褐色砂質土、細砂粒を多く含み、締まりや粘性はややある。この層は、比較的撹乱を受けておらず、安定した層に見えるが、ほとんど遺物を検出できなかった。

第Ⅳ層：10ＹＲ６/４；にぶい黄橙色砂質土、細砂粒多い。締まり・粘性ほとんどない。地山の漸移層。遺物の検出なし。

第Ⅴ層：10ＹＲ６/６～10ＹＲ８/４；明黄褐色細砂～浅黄橙色砂層、地山。木曽川等の堆積による。約２ｍ以上下まで続き、その下には7.5ＹＲ７/１；明緑灰色粗砂層が続く。

### ２．第２地点の基本層序（第７図）

本地点は、第１地点より約50～70cm程下がった水田である。休耕田の部分しか調査できなかっ




第6図　第1地点C列南壁土層断面図

たため、各休耕田毎にトレンチを入れて調査した。A～Fトレンチのうち C トレンチが地山(河原石と粗砂の層)まで最も深く土層もしっかりしているため、C トレンチの土層を基本として述べることにする。C トレンチは、第４章で述べるように自然科学的分析では大きく６層に分けているが、ここでは16層に分けて述べることにする。

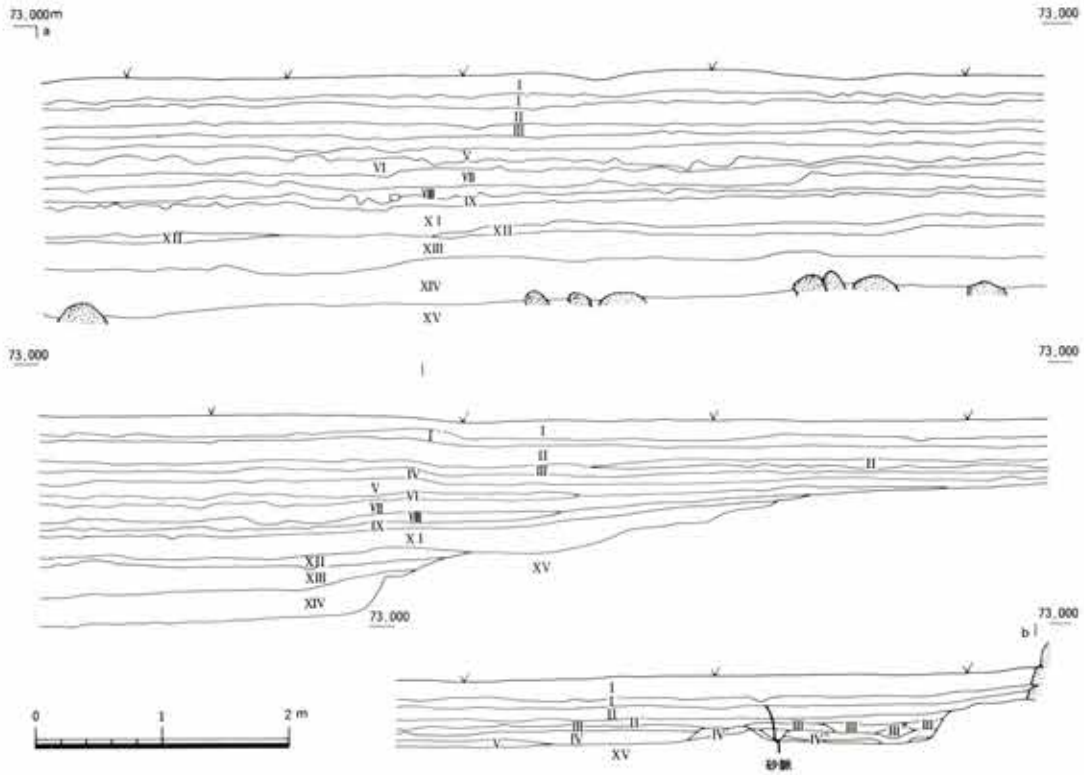
第Ⅰ層：10ＹＲ４/２；灰黄褐色土、表土。現水田面。耕作土で、締まり・粘性ともない。

第Ⅰ'層：10ＹＲ４/２；灰黄褐色土、現水田面の敷土層。締まりは第Ⅰ層よりあるが、粘性はない。現在まで数年間休耕しているため、本層は大分軟化しており、第Ⅰ層やⅡ層との境界が不明確になりつつある。第Ⅰ・Ⅰ'層は近現代の水田層と考えている。

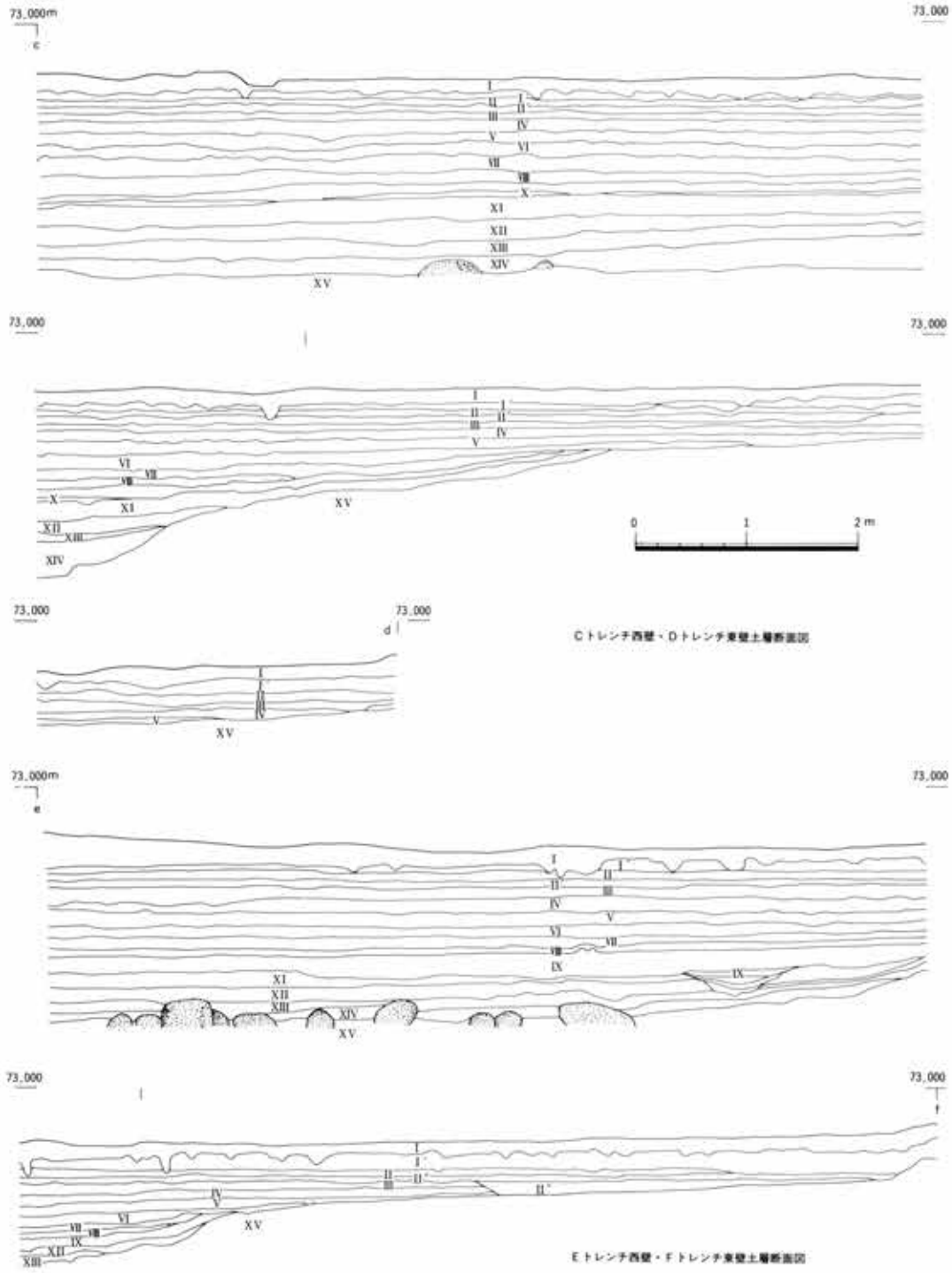
第Ⅱ層：10ＹＲ４/２；灰黄褐色土、現水田の床土層。締まりはややあるが粘性はない。第Ⅰ・Ⅰ'層より鉄分やマンガン分を多く含むため、やや赤っぽい土層を呈する。

第Ⅱ'層：10ＹＲ４/２；灰黄褐色土、締まりがややあり、粘性はわずかにある。第Ⅰ層における第Ⅰ'層のように、第Ⅱ層が水田面の時の敷土層と考える。

第Ⅲ層：10ＹＲ４/２；灰黄褐色土、締まりはあまりなく、粘性もない。第Ⅱ・Ⅱ'層よりやや明るい色調を呈す。第Ⅱ～Ⅲ層は、近世代の水田層と考えている。




第７－１図　第２地点－Ａトレンチ西壁Ｂトレンチ東壁土層断面図




第7－2図　第2地点Cトレンチ西壁・Dトレンチ東壁土層断面図
Eトレンチ西壁・Fトレンチ土層断面図

第IV層：10ＹＲ４/２：灰黄褐色土、締まりがややあり、粘性もわずかにある。第III層より黒っぽい色調である。

第Ｖ層：10ＹＲ４/２：灰黄褐色土、締まり、粘性ともややある。やや黒みが強く、炭化物が見られる。第IV・Ｖ層は、Ｂ・Ｄ・Ｆトレンチに見られる地山を削平した開田跡の上位層である。第Ｖ層と地山との境には山茶碗片が出土している。従って、開田期は室町期と考えている。

第VI層：10ＹＲ２/２：黒褐色土、締まりはあるが、粘性は少ない。

第VII層：10ＹＲ２/１：黒色土、締まりはかなりあり、粘性もある。第VI・VII層と第VIII層との境界は波状を呈し、下部へ下がるほど黒みが強くなる。第VI・VII層の微高地よりの地点から山茶碗片が検出され、第VIII層から須恵器の無台坏身が完形のまま検出されたことから、第VI・VII層は平安～鎌倉期の土層と考えている。

第VIII～Ｘ層：10ＹＲ２/１：黒色粘質土、いずれも締まり・粘性ともある。Ｘ層へ下がるほど粘性は強く、シルト質も強くなる。第VIII層で須恵器の無台坏身の完形を検出したことから、この層は、奈良期の土層と考えられる。第IX・Ｘ層では、草本類（カヤ類の葉や茎等）の植物遺体が多く見られるが、自然木のような木質の植物遺体はほとんど見られない。

第Ｘ層までは、縄文土器から山茶碗までの土器類を検出できたが、第ＸＩ層から下層では土器類などの遺物は何も検出できなかった。

第ＸＩ層：10ＹＲ３/１～10ＹＲ４/１：黒褐色粘質土と褐灰色砂質土、締まり・粘性ともある。全体がやや黒褐色を呈す粘質土層とやや灰色が強く粗砂を多く含む砂質土層が交互に入り込み、層相変化が見られる。

第ＸII層：10ＹＲ３/３：締まり・粘性がある暗褐色粘質土と褐灰色砂質土が交互に入り込む。

第ＸIII層：10ＹＲ５/１～３/３：褐灰色砂質土と締まり粘性のある暗褐色粘質土の層が交互に入り込む。第ＸII層より黒みは弱く、茶褐色の木質遺体を多く含む。

第XIV層：10ＹＲ３/３：締まり粘性のある暗褐色粘質土に褐灰色砂層が混じる。この層まで多くの木質遺体が多く含まれる。この層から検出されたヒトツバタゴの$^{14}$Ｃの年代測定では、6,970±110y.B.P(Gak-17521)が得られている。第ＸＩ～XIV層まで、木材遺体を多く含む木質泥炭層で、土器や石器などの遺物は全く検出されていない。

第ＸＶ層以下：10ＹＲ７/2,5/2,6/１：灰黄褐色～褐灰色粗砂層、地山。径40cm以上の円礫を含む砂礫層である。木曽川等による浸食堆積作用によって形成された低位段丘第２段（Ｌ２面）の基面である。この面は、鹿野氏によれば２万～ 1.5万年前に形成されたものといわれている。

### 3．第3地点の基本層序（第8図）

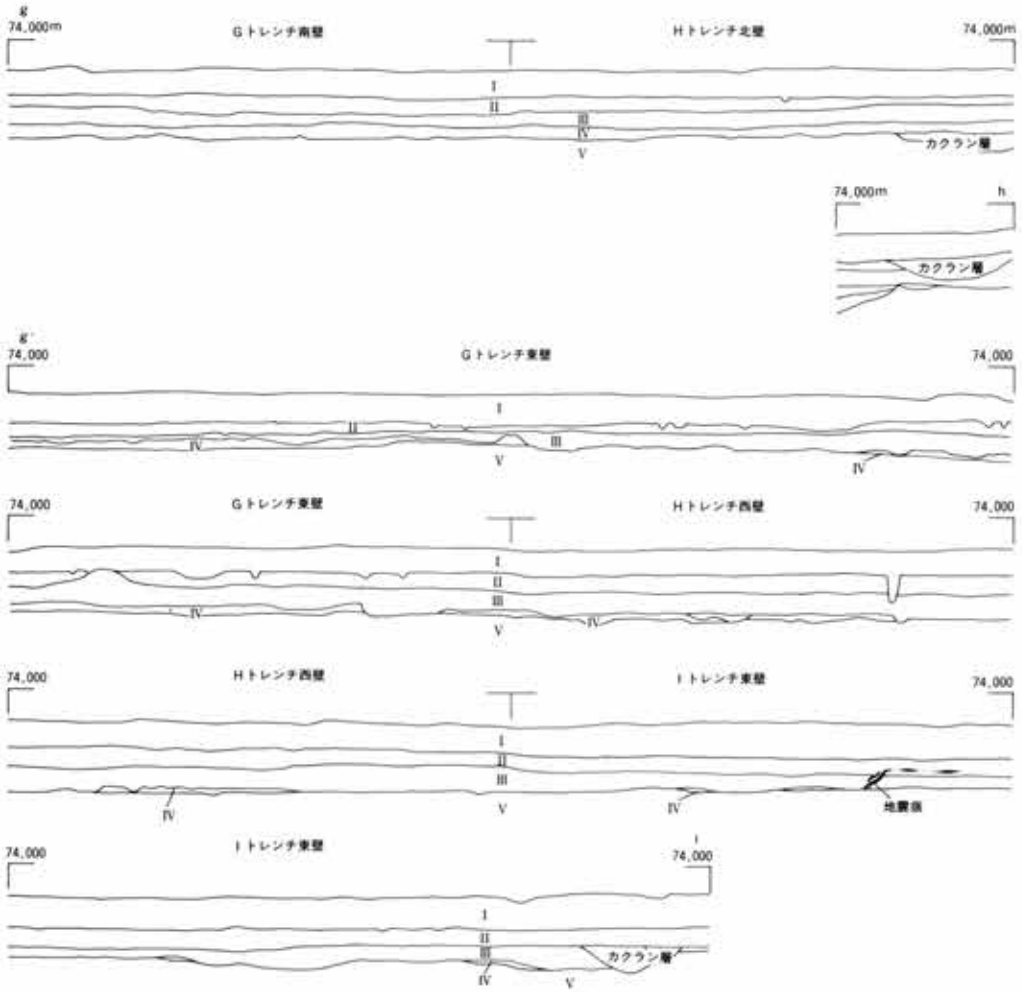
本地点は、現在3枚の水田(休耕田)からなっている。トレンチ名からG～I区、J～M区、N～P区に分けられる。G～I区とJ～M区・N～P区とはセクション図から見ると大きく形成に差が認められる。

G～I区の場合、地山直上より現地表面まで連続した水田利用が認められるが、J～M区やN～P区では、水田利用の土層は上部2層だけで、その下層は畑地利用のような攪乱された土層が地山まで続いている。

<G～I区>

第I層：10YR3/2；黒褐色土、耕作土。締まり、粘性なし。

第II層：10YR3/4；暗褐色土、現耕作土の敷土･床土。赤褐色の鉄分･マンガン分を含む。




第8－1図　第3地点G～I区土層断面図

前水田耕作土。締まり・粘性がややある。

第III層：10ＹＲ３/２：黒褐色土、締まりはややあるが、粘性は少し弱い。

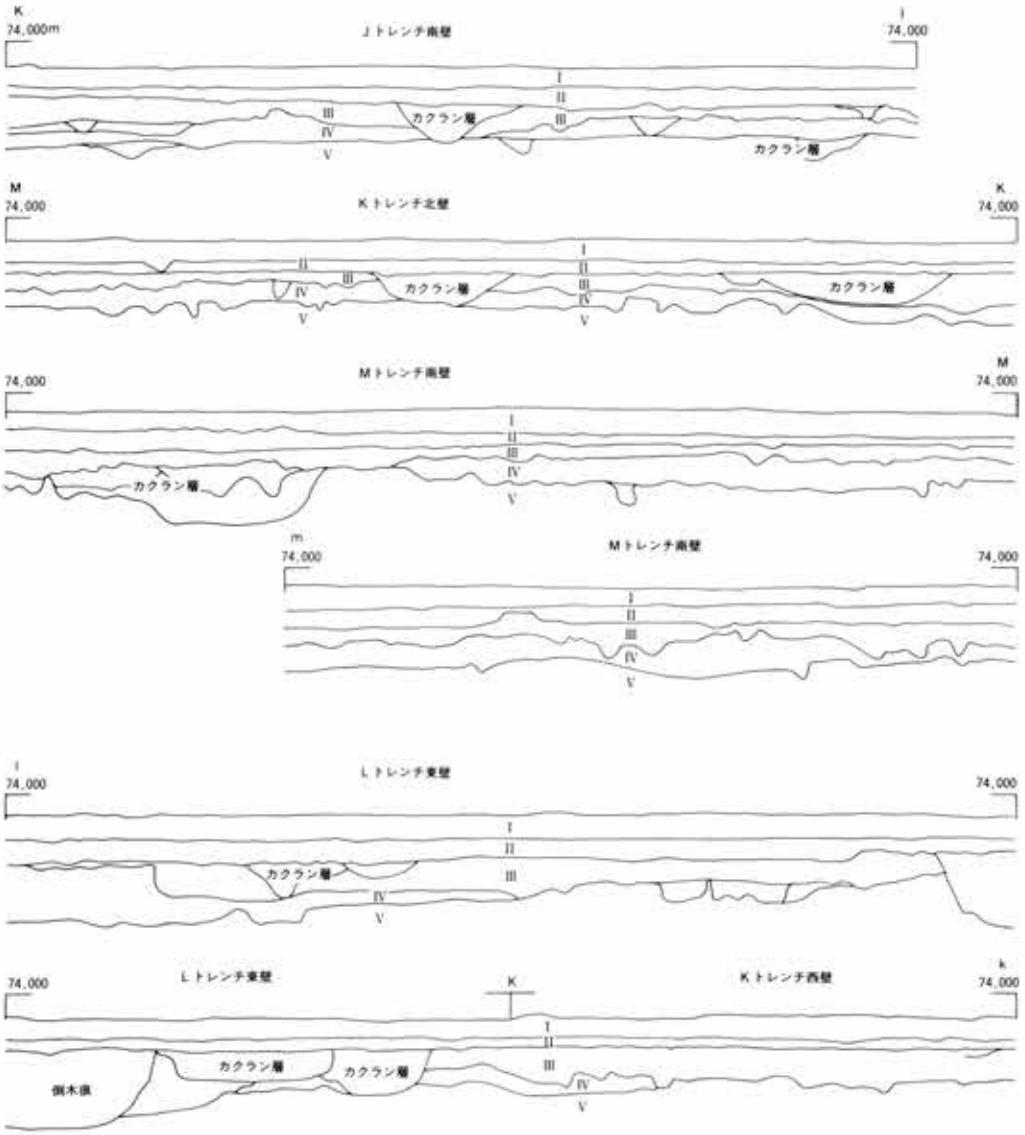
第IV層：10ＹＲ２/３：黒褐色土、第III層より黒っぽい。

第Ｖ層：10ＹＲ６/６：明黄褐色砂層、地山。

＜Ｊ～Ｍ区・Ｎ～Ｐ区＞

第Ｉ層：10ＹＲ３/２：黒褐色土、耕作土。締まり粘性ともなし。

第II層：10ＹＲ２/２：黒褐色土、第Ｉ層より黒っぽい。締まり粘性ともややある。第Ｉ・II層は、水田利用時の土層と考えられる。




第８－２図　Ｊ～Ｍ区土層断面図

第Ⅲ層：10ＹＲ２/１：黒色土、締まりはあるが、粘性は弱い。10ＹＲ３/３：暗褐色土の部分もある。畑地利用時の土層で、砂粒分を含む。

第Ⅳ層：10ＹＲ４/４～４/６：褐色砂質土、地山の黄褐色砂質土を多く含む。

第Ⅴ層：10ＹＲ５/４～５/６：鈍い黄褐色～黄褐色砂、地山。

**４．遺構**

本遺跡においては、明確に遺構と思われるものは少ない。各地点ごとに述べることにする。

＜第１地点＞

本地点では、第９・10図のように、いくつかの土壙やピットを検出したが、それぞれの土壙やピットの中からは遺物をほとんど検出することはできなかった。

ＳＫ１-１～ＳＫ１-35は、内部からビニール紐や空き缶・ゴミ類が検出され、現代のゴミ穴と思われる。特に、ＳＫ１-14は、土壙の内側に筵が張り付けられており、イモ穴の可能性が考えられる。

ＳＫ１-36は、ＳＫ１-13と切り合っているが、ＳＫ１-36の方が古い。ＳＫ１-36の内部には、砂の固まりが詰まっており、市教委が調査された近世墓の様相とよく似ていたため、当初近世墓の可能性を考えていたが、内部を掘り下げても遺物は何も検出できなかった。そのため、近世墓の可能性は残っているが、明確には分からない。

外形がバナナ状を呈する土壙については、内部はほぼ均一な黒色土～黒褐色土が充填されており、土壙と土壙の間には天地返しされた黄色砂層があり、倒木痕と考えている。その他の土壙やピットの性格は不明である。

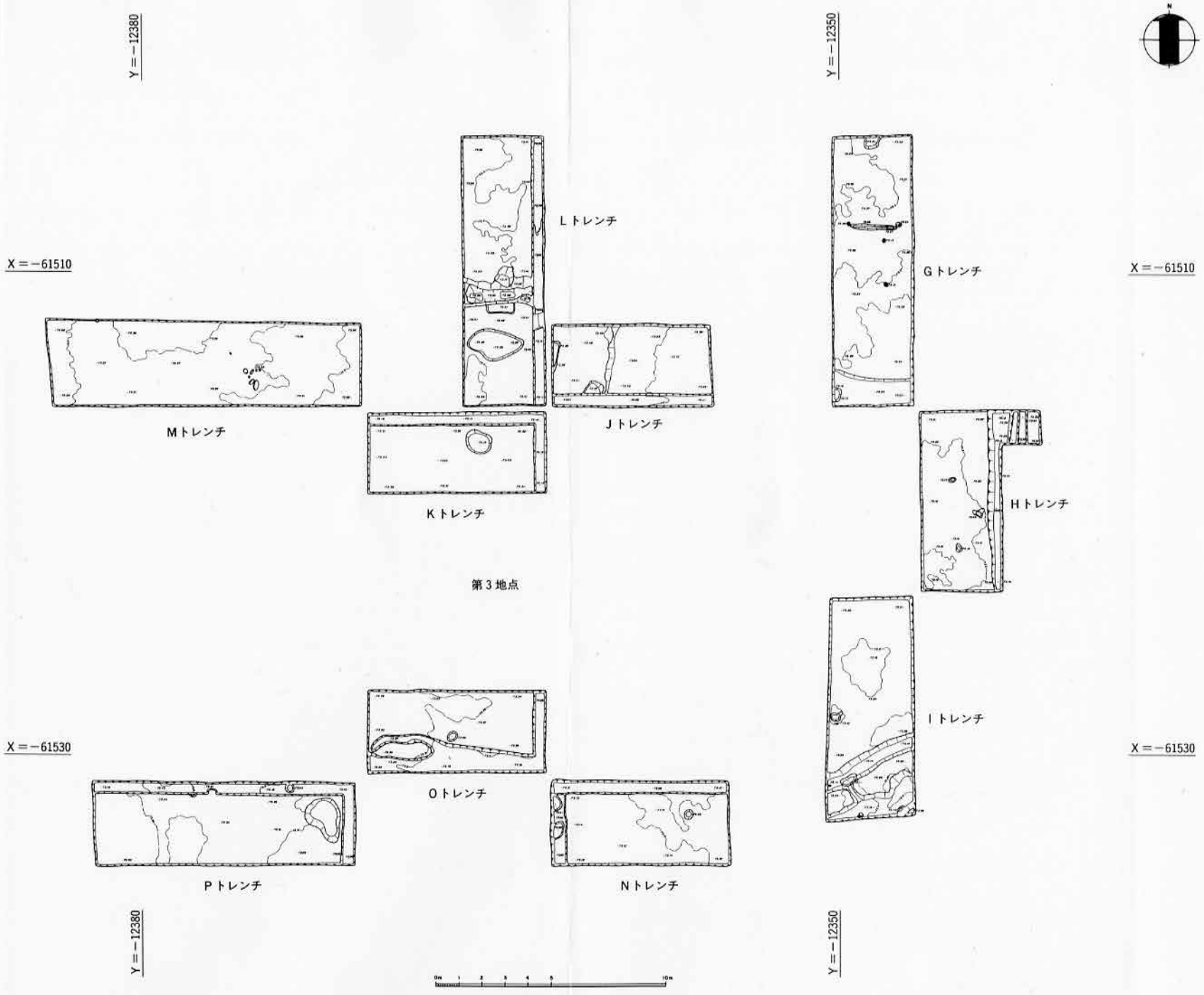
＜第２地点＞

本地点では、Ｂ・Ｄ・Ｆトレンチで土壙を６基及びＢトレンチで溝状遺構を検出した。ＳＫ２-３以外の土壙は、地山を掘り込んでおり、第Ⅴ層検出時に検出されたものである。ＳＫ２-１の内部からは均質手の山茶碗の小破片を検出したが、その他の土壙からは遺物は何も検出できなかった。そのため、時期を決定することはできないが、その土壙の検出状況から、鎌倉・室町期頃のものと考えられる。

ＳＫ２-３は、第Ⅳ層下からプランを検出した。底部は、地山の砂層を掘り下げている。内部からは、須恵器・山茶碗・陶磁器の小破片を検出し、近世代の土壙と考えているが、性格は不明である。

＜第３地点＞

第９図　遺構平面図（第１・２地点）




第10図　遺構平面図（第３地点）

本地点では、性格不明の溝状遺構を検出しただけで、他の遺構は検出できなかった。

H・I・Oトレンチで溝状遺構を検出したが、遺物からは時期を特定できなかった。しかし、セクション図から見ると、溝状遺構は第II層以下から検出されていることから、水田開田時＝近世代のものと考えている。

（宇野　治幸）

## 第２節　土器・陶磁器類

本遺跡は３地点に分かれており、第１地点は第Ⅰ層～第Ⅳ層までの間に総数765点、第２地点は第Ⅰ層～第Ⅹ層までの間に総数3,901点、第３地点は第Ⅰ層～第Ⅵ層までの間に総数1,942点に及ぶ土器・陶磁器が出土した。総計6,608点である。その時期は縄文時代～近・現代にいたるまでの土器・陶磁器片が認められる。しかし、そのほとんどが細片であり、図示できたものはほんのわずかである。これは、本遺跡が各時代の生活に直接関係したわけではないことを示しているのかもしれない。以下に各時代にしたがって、土器・陶磁器片を記述する。

### １．縄文土器（第11図　１～５）

５点を図示した。縄文時代中期後半以降のものが多く、大別すれば縄文時代中期後半期と晩期中葉～後葉期に属するものに分けられる。図示したものの多くは第２地点から出土した。本遺跡出土の土器では、最も量的には少ない。

(1)　第１地点の縄文土器（第11図　１）

器形は不明だが、縄文が施文されている破片として図示した。時期的には縄文時代中期のものと思われる。

(2)　第２地点の縄文土器（第11図　２～５）

２は、波状口縁の一部と思われる。端部直下に縄文が施文され、これを区画するかのように半截竹管による押し引きが加えられている。時期的には文様の特徴から縄文時代中期後半に属するものと考えられる。

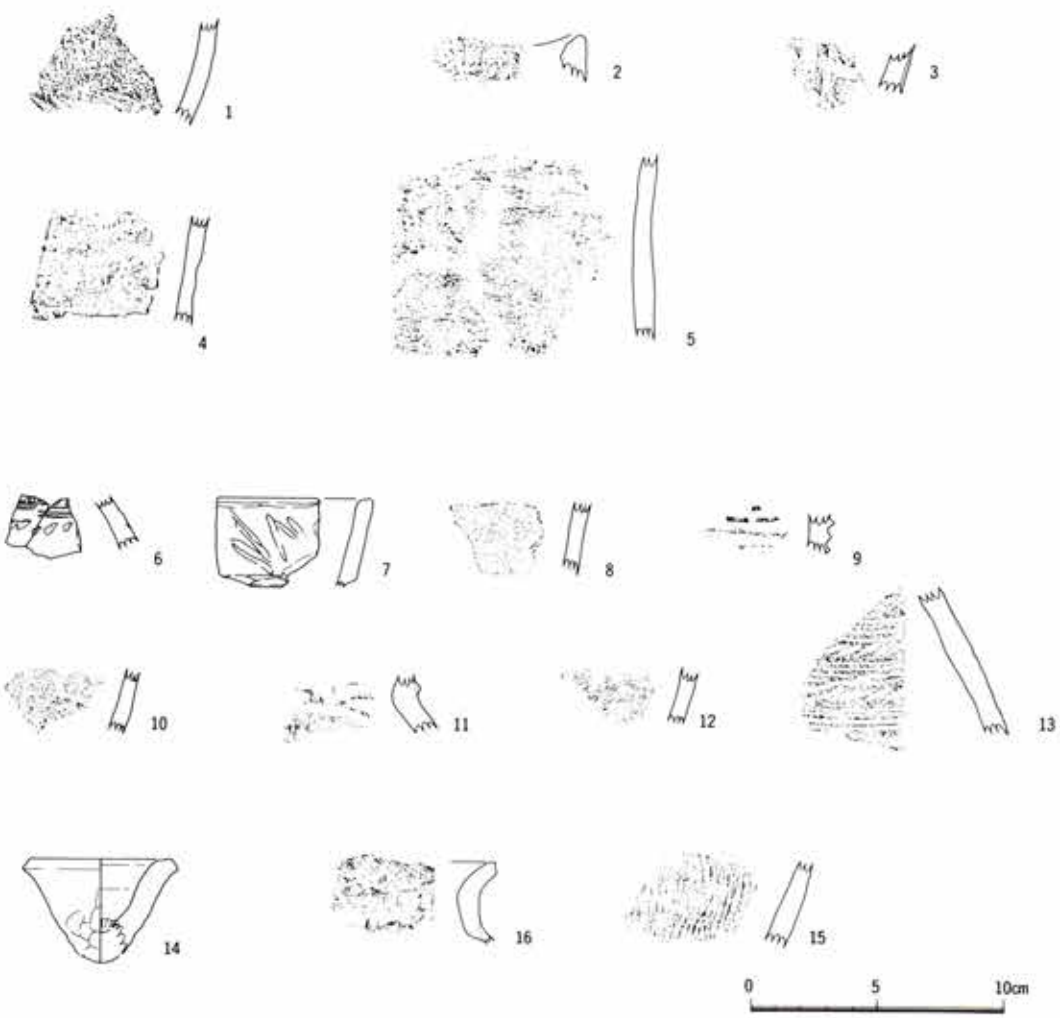
３は、深鉢の胴部片と思われ、縦走する貼付隆帯とその両側に綾杉文の一部とみられる文様が認められる。時期はこれらの特徴から縄文時代中期後半と考えられる。

４は、粗製土器の胴部片。外面には横位の粗いミガキ調整が観察できる。内面は外面と同様の調整痕を残すがその方向は一定していない。時期は無文のため判別は難しいが、おおよそ縄文時代晩期中葉～後葉に相当するものであろう。

5は4と同様、粗製土器の胴部片で他の土器片と比べるとその残存部位は大きいが、調整は磨滅のためにまったく観察できない。器形が内彎しているため、口縁部はやや外反気味となることが推定できる。時期的にはおそらく縄文時代晩期中葉～後葉と思われる。

## 2．弥生土器（第11図　6～13）

弥生時代の各時期に属する土器が認められるが、巨視的にみれば弥生時代前期後半～中期前半と弥生時代後期後半に分けられる。とくに後期後半に属するものは壺・甕・高坏などの各器種が存在する。しかし、実際には細片が圧倒的で図示できたものは少ない。




第11図　縄文土器（1～5）、弥生土器（6～13）、土師器（14～16）

(1)　第１地点の弥生土器（第11図　6・7）

6は、広口壺など加飾した器形の一部と考えられる。刺突文と櫛描の横線を交互に組み合わせて文様としている。時期は弥生時代後期後半と考えられるが、それより若干下がるかもしれない。

7は、小型の直口壺の口縁部片。精緻なミガキ調整が認められ、口縁端部はヨコナデ調整のためか内傾している。胴部片との接合部は凹部が認められ頸部調整がおこなわれている。時期は弥生時代後期後半～古墳時代初期と考えられる。

(2)　第２地点の弥生土器（第11図　8・9）

8は、甕の胴部片で外面には縦位の細かなハケ目が観察できる。胎土が赤褐色を呈し、いわゆる亜流の遠賀川系土器に類似する。

9は、外面に半截竹管による横位の条痕が認められる。条痕文系土器の壺形土器の頸部の一部ではないかと思われる。

(3)　第３地点の弥生土器（第11図　10～13）

10は、外面に縦位のハケ目を残す甕の胴部片。胎土などの特徴から8と同様、亜流遠賀川系土器に類似する。

11は、壺の頸部と思われ、一本の突帯がめぐっている。突帯の断面形状はやや丸味を帯び、後から貼付したものである。亜流の遠賀川系土器に類似する。

12は、細かなハケ目が認められ、小型の器形の胴部片と考えられる。時期的には小片のため不明と言わざるをえないが、胎土が他の弥生時代後期後半に属するものと近似することから、一応同様の時期としておきたい。

13は、倒木痕跡の黒色土中より出土したものである。赤彩が認められないことから加飾された広口壺の胴部片と考えられる。櫛描の横線と斜位の刺突文を交互に配置している。時期は弥生時代後期後半と考えられる。

### ３．土師器（第11図　14～16）

土師器はその量は多くはないが各時期にわたるものが認められる。細片が大半のために器種などの細別は不可能であった。大きくは古墳時代前期と古墳時代後期～奈良時代に相当するものが存在する。図示できたものはわずかに３点であるが、古墳時代前期に属するものにはＳ字甕またＳ字甕以外の甕の胴部片、古墳時代後期～奈良時代に属するものは甕の胴部片が大半を占める。

(1)　第2地点（第11図　14～16）

14は、小型の鉢状の器形を呈し、底部に強い指頭圧痕を残している。口縁部は強いヨコナデで整形され、このためか口縁端部は外傾し、平坦面を呈している。また、他の土器片と比べて胎土がよく精選され、内面には煤が付着している。胎土から土師器としたが、その形態は異質であり、詳細な時期は不明である。

15は、粗いハケ目が認められる甕の胴部片。

16は、甕の口縁部片。頸部は胴部から垂直に立ち上がり、口縁部で大きく外反する。口縁端部は尖り気味に面取りが施されている。頸部には外面では強いヨコナデ、内面ではハケ目が認められる。一部に残存する胴部の外面にもハケ目が認められる。時期は古墳時代後期～奈良時代と考えられる。

（藤田　英博）

## ４．須恵器

本遺跡から出土した遺物の中で須恵器は、比較的遺物量が多いが、ほとんど小破片ばかりで図示できたものは少ない。その中で第１地点～第３地点に分けて述べることとする。

また、本遺跡から出土した坏身類は、その形態から次のように３類に分けることができる。そこで、以下、坏身類はこの分類で述べることとする。

坏身Ａ類：蓋受け部を有するもの。

坏身Ｂ類：蓋受け部を持たないもので、高台を持たないもの。無台坏身。

坏身Ｃ類：蓋受け部を持たないもので、高台を有するもの。有台坏身。

次に、蓋類も同様にその形態から次の２類に分けることができる。以下、蓋類はこの分類で述べることとする。

蓋Ａ類：口縁部内面に返しを持たないもので、ツマミを持たないもの。

蓋Ｂ類：口縁部内面に返しを持たないもので、ツマミを有するもの。

### （１）第１地点の須恵器（第12図　１～12）

本地点出土の須恵器は、ほとんど第Ⅰ・Ⅱ層から出土したものであり、小破片ばかりで器形の分かるものは少ない。３地点の中で一番量的に少ない。

坏身Ａ類（１）

12Ｄグリッド第Ⅰ層出土。蓋受け部、立ち上がり部を有する坏身の口縁部の破片。径約13cmを計る。立ち上がり部は、蓋受け部よりやや内傾しながら12㎜程立ち上がる。口端部は細く丸く納める。胎土に径３㎜程の長石粒を含み、表面に黒色の噴出物が見られる。焼成良好、灰色を呈す。猿投窯産と思われる。

坏身Ｂ類（２）

９Ｃグリッド第Ⅰ層出土。無台坏身の底部の破片。底部はヘラ起こし後、ヘラ削り調整を施す。胎土にほとんど砂粒を含まず、焼成良好、灰白色を呈す。

坏身Ｃ類（３）

22Ｃグリッド第Ⅱ層出土。有台坏身の底部の破片。高台はやや外へ開く。腰部は比較的鋭く曲がりながら外へ開き気味に立ち上がる。胎土はほとんど砂粒を含まず緻密、焼成良好、灰白色を呈す。

蓋B類（4・5）

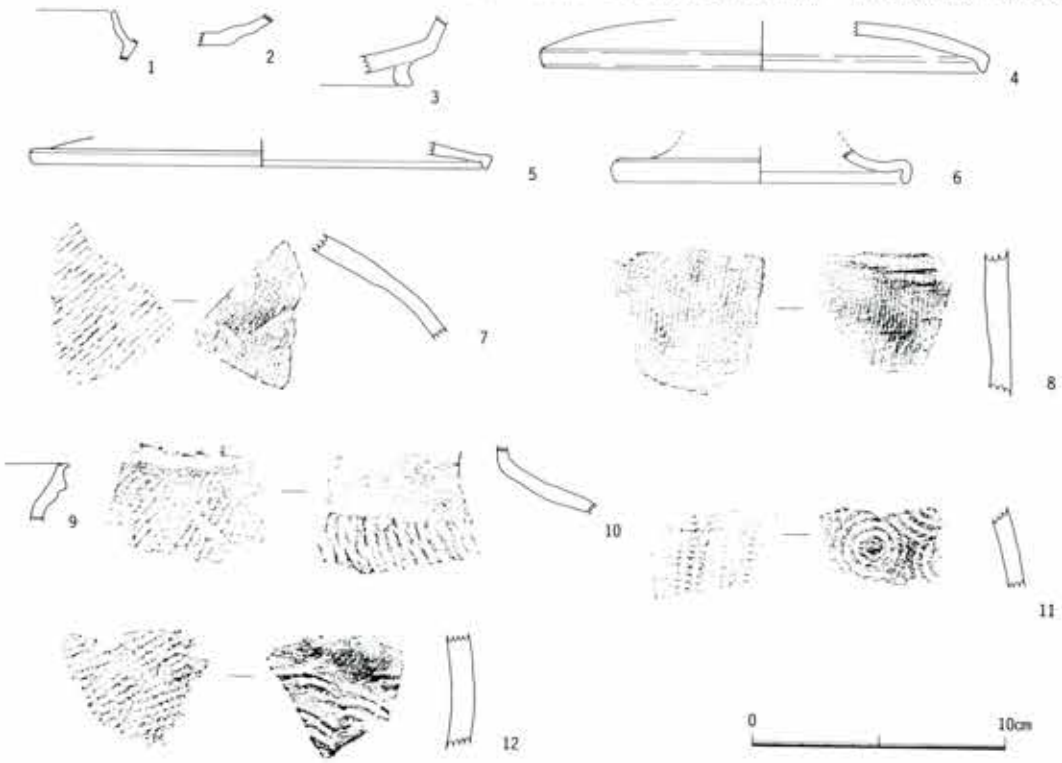
4は11Eグリッド第II層、5は20Eグリッド第I層出土。いずれも頂部を欠損しているが、返りを持たない擬宝珠様のツマミを有するものと思われる。扁平な器形のもので、径は18cm前後である。口縁部は、鋭角的に屈曲させ、シャープな作りである。4は胎土に0.5mm程の砂粒を含むが、いずれも緻密で焼成良好、灰白色を呈す。

高坏（6）

18Eグリッド第I層出土。高坏と分かるものはこれ1点だけである。高坏の脚部の破片。裾端部は、強く屈曲させ、丸く納めている。内外面とも丁寧な横ナデ調整が施されている。胎土は緻密、焼成良好、灰白色を呈す。

壺類（7～9）

7は14Dグリッド第I層出土。壺類の肩部の破片。外面に右傾の斜状のタタキ目文を、内面は横ナデ調整を施す。肩部にはヘラ状工具による沈線が1条施されている。8は7Cグリッド第I層出土。壺類の胴部の破片と思われるが、甕類の破片かもしれない。外面に格子目状のタタキ目文が、内面にはクシ目状沈線文や横位の幅広の当具痕が見られる。いずれも胎土は緻密、




第12図　第1地点出土須恵器

焼成良好。7は灰白色で、8は灰色を呈す。9は22Dグリッド第Ⅰ層出土。外面は丁寧な横ナデ調整が施され、火当たりして灰釉が黒光りしている。内面も横ナデ調整が施されているが、外面より丁寧な仕上がりでは無いため、台付きの瓶か壺類の脚部の一部の破片と思われる。径1㎜程度の砂粒を少し含む胎土、焼成良好、灰色を呈す。

甕類（10～12）

10は12Eグリッド第Ⅱ層出土。甕の肩部の破片。外面は板状工具による右傾のタタキ目文が、内面は通常の青海波文状の当具痕より間延びした当具痕を縦位に施す。胎土に0.5㎜程の砂粒を含み、焼成良好、灰白色を呈す。11は甕胴部の破片。5Bグリッド第Ⅰ層出土。外面は格子目状のタタキ目文が、内面には同心円状の当具痕を施す。当具の中心の円は、通常に見られるものより大きい。胎土に長石粒など砂粒を含むが、焼成良好、灰色を呈す。12は甕の胴部の破片。17Eグリッド第Ⅰ層出土。外面は斜格子目状のタタキ目文が、内面は青海波文状の当具痕を施す。胎土は緻密、焼成良好、灰色を呈す。断面内部は赤褐灰色を呈す。

（2）第2地点の須恵器（第13図　13～49）

本地点は、微高地状の第1地点の北側の低湿地状の水田部で、中世期に大規模な開田工事がなされているため、各層に須恵器の破片が点在しているが、この開田層の下部の第Ⅶ層以下は比較的安定した層と考えられる。3地点中では、トレンチ掘りのため面積の割に遺物量が多い。

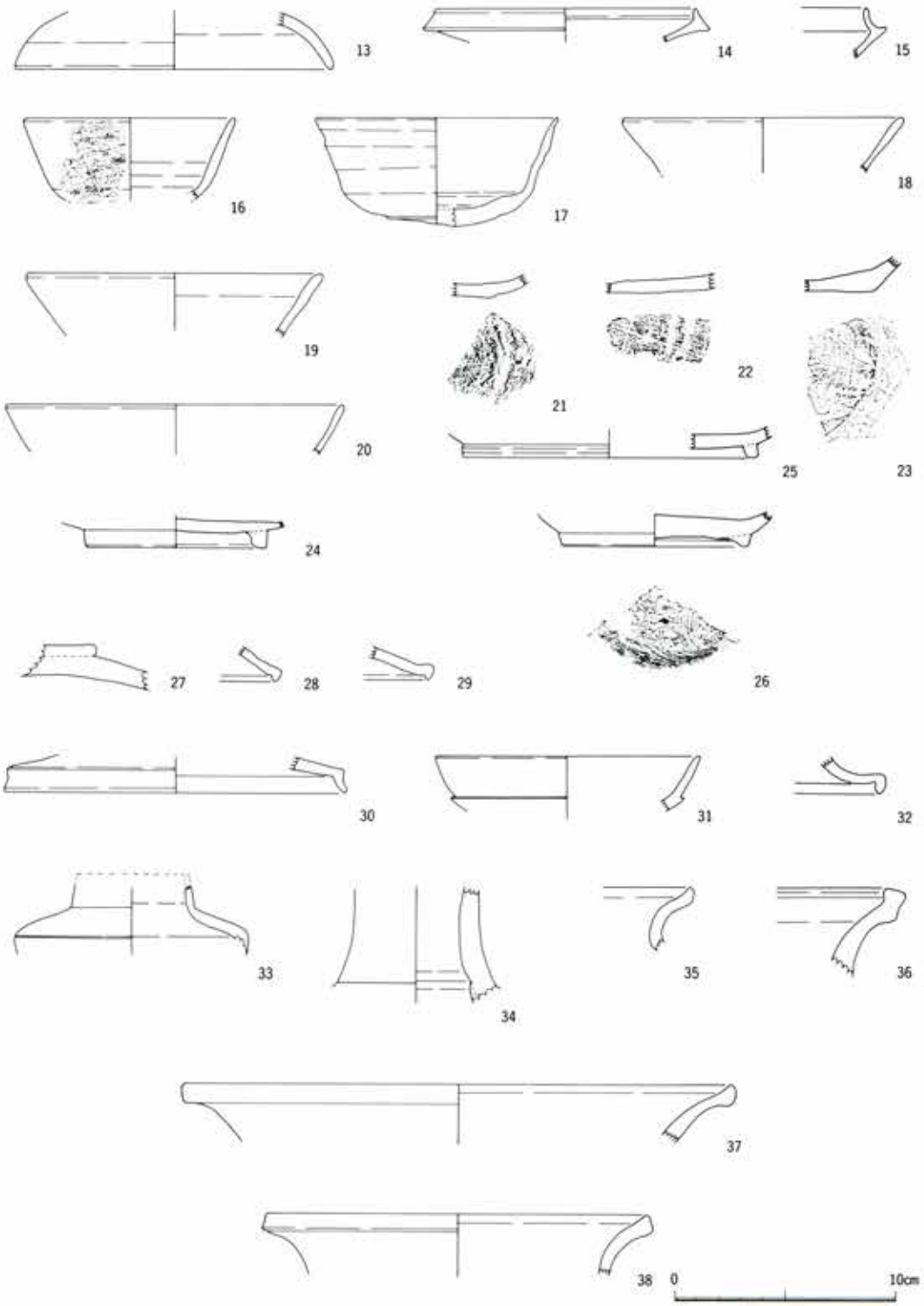
蓋A類（13）

13は坏蓋の口縁部の破片、Cトレ第Ⅲ・Ⅳ層出土。内外面とも横ナデ調整を施すが、内面より外面の方が丁寧に仕上げられており、口縁部内面に返しを持たないもので、頂部は欠損しているが、ツマミを持たないものと考える。胎土は緻密、焼成良好、灰色を呈す。

蓋B類（27～30）

いずれも口縁部内面に返しを持たないもので、頂部にツマミを有するものである。27は頂部に扁平なツマミを有するもので、口縁部は欠損するが坏蓋の破片である。Eトレ第Ⅴ～Ⅶ層出土。細砂粒を多く含む胎土、焼成良好、灰白色を呈す。28はCトレ第Ⅳ・Ⅴ層出土。29はEトレ第Ⅷ～Ⅹ層出土。いずれもツマミ部は欠損して不明であるが、口縁部は鋭角的に屈曲し、口端部を丸く納める坏蓋。いずれも細砂粒を多く含むが、焼成良好、灰白色を呈す。

30はFトレ第Ⅴ～Ⅶ層出土。ツマミ部を欠損する。口端部が鋭角的に屈曲するが、先端部で折れてやや外に開くもので、屈曲部と口端部との間が幅広いものである。形態から、高坏か壺類の蓋と考えられる。



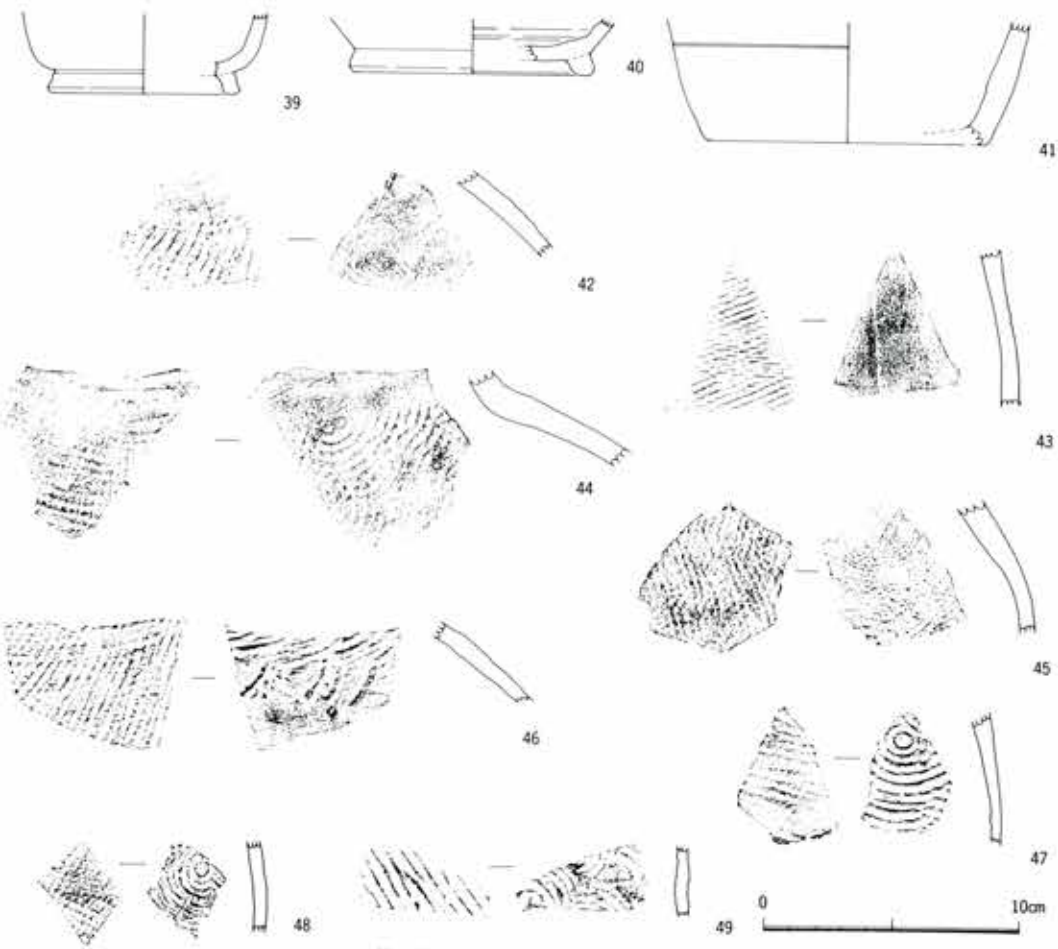

第13図　第2地点出土須恵器(1)

坏身A類（14・15）

蓋受け部、立ち上がり部を有する坏身の口縁部。14はAトレ第Ⅰ～Ⅳ層出土。蓋受け部が退化し、すぐ立ち上がり部になっているもので、蓋受け部を有する坏身類の最末期のものと考える。緻密な胎土、焼成良好、灰白色を呈す。15はEトレ第Ⅲ・Ⅳ層出土。蓋受け部から強く外彎しながら立ち上がる。6世紀代のものと考えられる。緻密な胎土、焼成良好、灰白色を呈す。いずれも美濃須衛窯産と思われる。

坏身B類（16～19、21～23）

16・18・19は高台を持たない無台坏身の口縁部の破片。17は本遺跡出土遺物中唯一の完形土器。21～23は底部の破片。16はDトレ第Ⅵ・Ⅶ層出土。底部から口縁部にかけてやや外傾しながら伸びる。内外面とも丁寧な横ナデ調整を施す。口端部は丸く納められている。口縁内面にススが付着し、外面にはヘラキズが見られる。胎土に1㎜以下の白色の長石粒が含まれ、焼成




第14図　第2地点出土須恵器(2)

良好、灰白色を呈す。口径約 9.6cm、現存高約 3.7cmである。17はDトレ第Ⅷ層出土。底部の一部を欠損するも唯一の完形土器である。底部にヘラ起こし痕が残り、底部から口縁部にかけてやや外傾しながら伸びる。口端部は細く丸く納められている。外面に成形時の凹凸が残る。径1～4㎜程の長石粒を含むが緻密、焼成良好、灰色を呈す。口径約11.2cm、器高約 4.9cm。16・17は口径の割に器高が高いタイプのもの。18・19は口径の割に器高が浅いタイプのもの。底部よりやや強く外傾する。口端部は丸く納められている。18はAトレ第Ⅴ・Ⅵ層出土。胎土にほとんど砂粒を含まず緻密で、焼成やや不良で、淡褐灰色を呈す。口径約12.9cm、現存高約3.5cm。19はEトレ第Ⅷ層出土。内面がよく磨滅しており、胎土に少し砂粒を含むが緻密、焼成良好、灰色を呈す。口径約13.6cm、現存高約 3.0cm。

21はAトレ第Ⅴ～Ⅷ層出土。胎土に1㎜前後の長石粒を含むが、焼成良好、青灰色を呈す。22はCトレ第Ⅰ層出土。緻密な胎土で焼成良好、灰白色を呈す。これらはヘラ起こし痕が残り、その周りをヘラ削り調整が施されている。22の底部に「十」字状のヘラ記号が施されている。23はBトレ第Ⅷ層出土。内面の磨滅が激しい。胎土に砂粒を含むが、焼成良好、灰色を呈す。

坏身C類（24～26）

高台を有する坏身の底部。いずれも口縁部を欠損。24はDトレ第Ⅰ～Ⅲ層出土。25はBトレ第Ⅴ～Ⅶ層出土。両者は底部にヘラ削り調整を施し、高台は断面四角形を呈するもので、灰白色を呈す。24は緻密な胎土で焼成やや良好である。25は砂粒を少し含むが焼成良好。26はBトレ第Ⅰ・Ⅱ層出土。高台は断面三角形を呈し、底部に糸切り痕を有するもので、灰釉陶器かも知れない。いずれも内面はよく磨滅している。

高坏（31・32）

31はFトレ第Ⅷ・Ⅹ層出土。口縁部中段に退化した蓋受け部の痕跡を有する高坏の坏部である。内面はよく磨滅している。比較的口径に対して浅いものである。胎土は細砂粒を含むが緻密で、焼成良好、灰色を呈す。32はCトレ第Ⅵ・Ⅶ層出土。高坏の裾部の破片。坏蓋類と口端部の作りはよく似ているが、強く外反気味に立ち上がる。内面の仕上がりが外面より悪い。緻密な胎土、焼成良好、灰白色を呈す。

壺類（33・35～38）

33はGトレ第Ⅳ層出土。口端部を欠損するが、頸部から真っ直ぐに立ち上がり、口端部を丸く納める直口壺と思われる。頸部と肩部は鋭く屈曲し、肩部と胴部も強く屈曲する。肩部と胴部の境に1条の沈線を施す。緻密な胎土、焼成良好、淡灰白色を呈す。35はAトレ第Ⅲ・Ⅳ層、36はDトレ第Ⅴ・Ⅵ層、37はBトレ第Ⅳ・Ⅴ層、38はFトレ第Ⅱ・Ⅲ層出土。いずれも小破片

で、壺類か鉢類・甕類の口縁部と思われるが、判断はつかない。一応、ここに入れておく。

瓶類（34・39～41）

34はＥトレ第IV～VI層出土。長頸瓶の頸部で、胴部とのつなぎ部が一部残る。外面はヘラ削り調整後横ナデ調整を施す。緻密な胎土、焼成良好、自然釉がかかる。灰白色を呈する。39はＣトレ第IV層、40はＣトレ第Ⅰ層、41はＤトレ第Ⅰ～Ⅲ層出土。瓶類の底部の破片。39と40は高台を有し、41は無台のものである。いずれもヘラ削り調整後横ナデ調整を施す。41の底部から４cmほど上部に一条の沈線をめぐらす。いずれも緻密な胎土、焼成良好、灰白色を呈する。

甕類（42～49）

42はＡトレ第Ⅰ～IV層出土。甕の肩部の破片。外面はヘラ削り調整を施した下部に、斜格子目状のタタキ目文を施すが、内面には当具痕が見られず、横ナデ調整を施す。緻密な胎土で焼成良好、灰白色を呈する。43はＦトレ第Ⅴ・VI層出土。甕の胴部の破片。外面は斜状のタタキ目文を施すが、内面は当具痕が無く、横ナデ調整を施す。緻密な胎土で焼成良好、灰白色を呈する。44はＣトレ第VI・VII層出土。甕の肩部の破片。42と同様に肩部中段から格子目状のタタキ目文を施し、内面に青海波文状の当具痕が残る。１mm以下の細砂粒を含む胎土であるが緻密で、焼成良好、灰色を呈する。45はＦトレ第Ⅴ・VI層出土。甕の肩部下部の破片。外面は斜状のタタキ目文を施し、内面には青海波文状の当具痕が残る。１mm以下の細砂粒を含むが緻密で、焼成良好、灰白色を呈する。46はＣトレ第III層出土。甕の肩部の破片。外面は横位のタタキ目文と斜位のタタキ目文を施し、内面に青海波文状の当具痕とこれと異なる当具痕を施す。その下部には当具痕が見られない。緻密な胎土、焼成良好、灰白色を呈する。47はＡトレ第III・IV層、48・49はＥトレ第IV層出土。甕の胴部の破片。いずれも緻密な胎土で焼成良好。47・48は灰白色を、49は灰色を呈する。47の外面は斜位のタタキ目文を施し、内面は同心円状の当具痕が残る。48の外面は斜格子目状のタタキ目文を施し、内面は同心円の中心に十字状に長く伸びた凸線が残る特殊な当具痕が見られる。49も外面は幅広の斜位のタタキ目文を施すが、内面は同心円の中心に48より短い十字状の凸線を施した当具痕が見られる。これらのような特殊な当具痕は、本遺跡出土遺物中、この２点だけである。

このような当具痕を持つものは、他の遺跡からあまり検出されていないが、『各務原市史　考古・民俗編　考古』［大江(1983)　各務原市］で紹介されている当具の中に同様なものがある。美濃須衛窯産のものと思われる。

（３）第３地点の須恵器（第15図　50～62）

第３地点のＧ～Ｐトレンチからも、第２地点ほどではないが、須恵器片が多く出土したが、

小破片のため図示に耐えうるものは、以下に述べる13点しかない。

蓋B類（56）

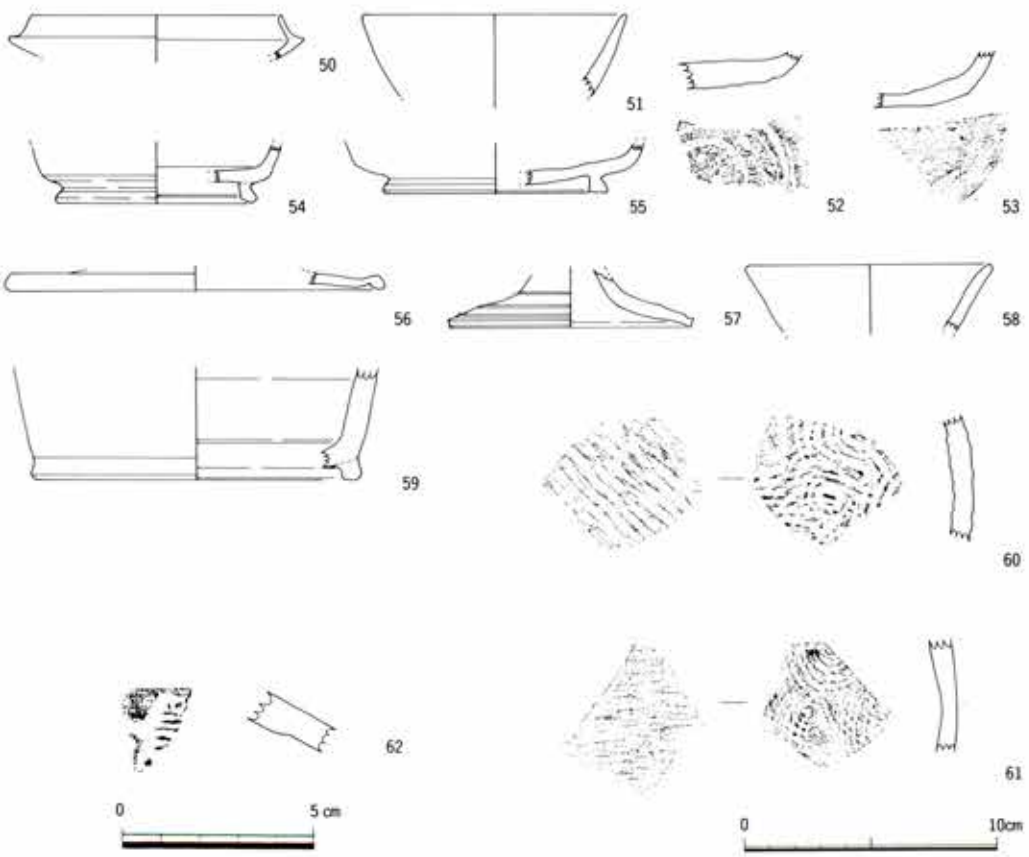
Nトレ第II層出土。口縁部内面に返しを持たないもので、ツマミを有する坏蓋の口縁部の破片である。ツマミ部を欠損。やや扁平な器形で、口端部は屈曲し丸く納められる。細砂粒を含む胎土、焼成良好、灰色を呈す。

坏身A類（50）

Hトレ第IV・V層出土。蓋受け部と立ち上がり部を有するもので、蓋受け部は、ほとんど抉られておらず、立ち上がり部も内傾気味に立ち上がる。緻密な胎土、焼成良好、灰白色を呈す。

坏身B類（51～53）

蓋受け部を持たず、高台を持たない無台坏身。51はHトレ第IV・V層出土。口縁部の破片で、




第15図　第3地点出土須恵器

底部を欠損しているが、その形態からこの類に属するものと考えられる。第2地点出土の16と同様な口径の割に器高が高い形態のものと思われる。胎土は細砂粒を含むが緻密で、焼成良好、灰白色を呈す。

52はHトレ第IV・V層、53はIトレ第IV・V層出土。いずれも口縁部を欠損。高台を持たない無台坏身の底部の破片。52はヘラ起こし痕が残り、腰部から上部は横ナデ調整を施す。53はヘラ起こし痕は残らず、底部から腰部にかけてヘラ削り調整が施されている。52の内面はよく磨滅している。1㎜以下の細砂粒を多く含むが、焼成良好、灰白色を呈す。53は1～2㎜以下の細砂粒を含み、焼成良好、灰色を呈す。

坏身C類（54･55）

いずれも口縁部を欠損しており、全体の器形は不明であるが、蓋受け部を持たず、高台を有するものである。54はIトレ第IV層出土。高台付根付近からすぐ立ち上がるもので、腰部で強く屈曲する。内面の磨滅は少ない。1㎜以下の細砂粒を多く含む胎土、焼成良好、灰白色を呈す。55はLトレ第IV・V層出土。高台付根から横へ少し張り出して、腰部に丸味を持って立ち上がる。54の底部はほぼ水平に保っているが、55は底部中央に向かって下がる。細砂粒を含むが、焼成良好、灰白色を呈す。

高坏（57）

Mトレ第II層出土。高坏の脚部の破片。裾端部が屈曲しない器形で、裾部に3条の段を有す。透かしの有無は不明である。胎土は緻密であるが、黒い噴出物が見られる。焼成良好、灰色を呈す。猿投窯産のものか。

瓶類（58･59）

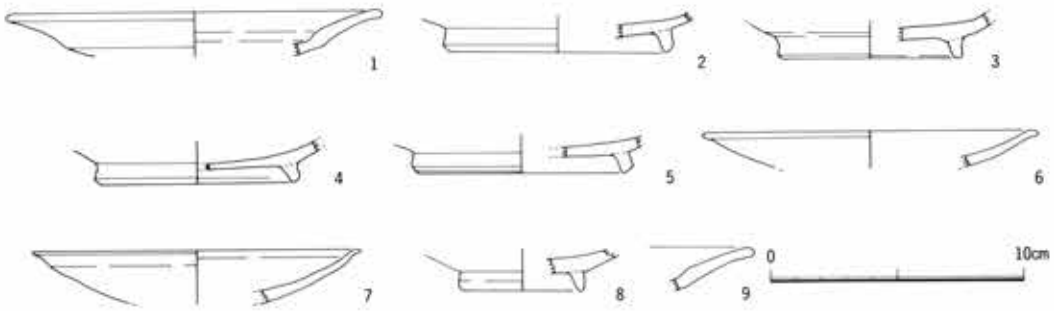
58はIトレ第IV層出土。長頸瓶の口縁部の破片と思われる。直線状に外反し、口端部を丸く納めている。1㎜以下の細砂粒を少し含むが緻密、焼成良好、灰白色を呈す。59はJトレ第IV･V層出土。瓶類の底部の破片。高台は太く、踏ん張るようにやや外に開くように付けられている。外面はヘラ削り調整が施されている。1㎜前後の砂粒を含む胎土、焼成良好、灰色を呈す。

甕類（60･61）

60はJトレ第V・VI層、61はNトレ第V層出土。いずれも甕胴部の破片。外面に左上がりの斜位のタタキ目文を施し、内面は同心円状の当具痕が見られる。いずれも60の方が幅広である。60の胎土は緻密で焼成良好、灰色を呈す。61は1㎜前後の砂粒を含むもので、焼成良好、灰色を呈す。

「美濃国」刻印須恵器（62）

Mトレ第Ⅳ層出土。坏蓋の頂部付近の破片と考えられる。その内面に「美濃国」の「美」の一部が陽刻されている。胎土は緻密で、焼成良好、灰白色を呈す。




第16図　灰釉陶器（第1地点～第3地点）

## ５．灰釉陶器（第16図　１～９）

本遺跡出土遺物中、灰釉陶器の遺物量は、前時代の須恵器、後時代の山茶碗（白瓷系陶器）の出土量から比べると極端に少ない。ここに図示したもの以外には12点しか出土していない。また、器種を見ても碗・皿類以外のものは見られない。

### （１）第１地点の灰釉陶器

ここに図示した１点以外、２点ほどしかない。

段皿（１）

１は22ＤＥグリッド第Ⅲ層出土。口端部より 1.4cm程下がったところで屈曲する。この屈曲部より強く湾曲しながら外反し、口端部を丸く納める。刷毛塗りか漬け掛けか不明であるが、外面は薄く全面に灰釉を施し、内面は厚くべったりと灰釉を施す。緻密な胎土、焼成良好、淡灰白色を呈す。口径は約14.9cmを計る。

### （２）第２地点の灰釉陶器

第２地点出土の灰釉陶器は、他の地点よりも多いが、図示したもの以外には８点ほどである。

碗類（２～５）

２はＥトレ第Ⅰ・Ⅱ層出土。口縁部を欠損した碗類の底部の破片。現存部には灰釉が施されていないが、高台のつくりや胎土等から灰釉陶器と考える。全体に丁寧な横ナデ調整を施し、高台の端部もヘラ削り調整後、横ナデ調整を施す。内面に使用による磨滅痕が残る。３はＢトレ第Ⅲ・Ⅳ層、４はＢトレ第Ⅴ・Ⅵ層、５はＡトレ第Ⅲ・Ⅳ層出土。いずれも底部の高台の付根付近まで灰釉が施されている。刷毛塗りと思われる。いずれも胎土は緻密、焼成良好、淡灰白色を呈す。

皿類（６・７）

６はＡトレ第Ⅲ・Ⅳ層出土。口端部は軽く外反し、丸く納める。７はＣトレ第Ⅲ層出土。口縁部で少し内反気味に屈曲し、口端部で軽く外反し、薄く丸く納める。いずれも灰釉は刷毛塗りと思われる。胎土は緻密、焼成良好、淡灰白色を呈す。口径は６が約12.8cm、７が約12.9cm。

### （３）第３地点の灰釉陶器

本地点から出土したものは、第１地点同様非常に少なく、図示以外のものは２点程である。

碗類（８）

8はOトレ第II層出土。現存部には灰釉は見られないが、高台の形態などにより、灰釉陶器の碗類の底部と考える。高台は断面三角形を呈すもので、全体に丁寧な横ナデ調整を施す。内面に使用による磨滅痕が認められる。1㎜程の白色の長石粒を含む胎土、焼成良好、淡灰白色を呈す。

段皿（9）

9はHトレ第II・III層出土。口縁部から約1.5cm程下がったところで屈曲し、段をなす段皿。屈曲部から少し湾曲しながら外反し、口端部は丸く納める。灰釉は外面が全体に薄く、内面は厚く施す。刷毛塗りと思われる。胎土は緻密、焼成良好、淡灰白色を呈す。

（宇野　治幸）

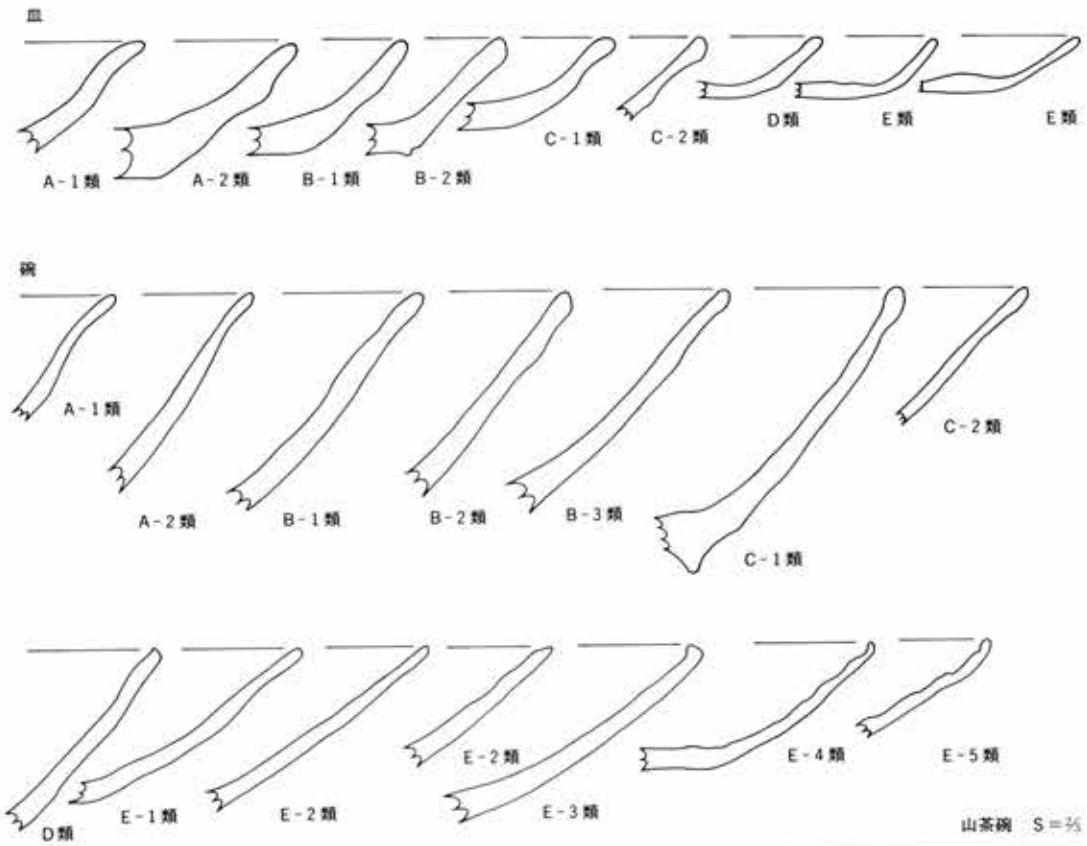
## 6．中近世陶磁器

中近世の遺物として、ここでは山茶碗[1]、古瀬戸陶器、土師皿[2]、瀬戸・美濃陶器（大窯期、連房期）、常滑、中国製陶磁器（青磁）をとりあげる。土師皿を除くそれぞれの陶磁器は編年的研究が進んでいるため、その編年に従い、時期を設定した[3]。また、出土遺物を計測する際、とりわけ出土量が多い北部系山茶碗と土師皿について、北部系山茶碗は口縁部分類を、土師皿は形態分類を行なったため、以下に記す（第17図）。

北部系山茶碗の口縁部分類

皿

A類　外反するもの
　A－1類　強く外反する
　A－2類　外反気味
B類　厚手で口縁直下を弱く指ナデするもの
　B－1類　端部を丸く仕上げる
　B－2類　端部を外傾して面取り
C類　厚手で口縁直下を強く指ナデするもの
　C－1類　端部を丸く仕上げる
　C－2類　端部が肥厚化する
D類　やや薄手で端部が丸いもの、あるいは面取り気味のもの
E類　薄手で端部が丸いもの、あるいは面取り気味のもの


皿
A-1類
A-2類
B-1類
B-2類
C-1類
C-2類
D類
E類
E類
碗
A-1類
A-2類
B-1類
B-2類
B-3類
C-1類
C-2類
D類
E-1類
E-2類
E-2類
E-3類
E-4類
E-5類
山茶碗　S=⅓
1類
(形状分類)
A類
B類
(調整分類)
2類
a類
b類
c類
d類
e類
(形状分類)
A類
B類
C類
D類
E類
(調整分類)
a類
b類
c類
d類
e類
調整分類
①横ナデ
②指おさえ
③一方向のナデ
④平滑
土師皿　S=⅓

第17図　形式分類図

碗

A類　外反するもの

A－1類　強く外反する

A－2類　外反気味

B類　厚手で端部が肥厚化しないもの

B－1類　端部を丸く仕上げる

B－2類　端部を外傾して面取り

B－3類　端部が面取り気味で口縁直下を強く指ナデ

C類　端部が肥厚化するもの

C－1類　厚手

C－2類　やや薄手

D類　やや薄手で端部が肥厚化せず、口縁直下を弱く指ナデするもの

E類　薄手のもの

E－1類　端部を丸く仕上げる

E－2類　端部を水平、あるいは外傾して面取り

E－3類　端部を内側に折り返す

E－4類　体部内面に渦巻文がみられる

E－5類　E－4類のうち口径が11cm以下

土師皿の形態分類

本報告では法量を小型品（1類）と中･大型品（2類）の2つに分類し[4]、それぞれに伴う形状、調整を細分類する。

1類

形状分類

A類　体部の立ち上がりが強く、端部が丸い。

B類　体部の立ち上がりが弱く、端部がとがり気味である。

調整分類

a類　内面および体部外面上半横ナデ、体部外面下半指おさえ。

b類　内面および口縁部外面横ナデ、体部外面指おさえ。

c類　体部内面横ナデ、口縁部内外面および体部外面一方向のナデ。

d類　内外面一方向のナデ、口縁部内面平滑。

e類　内面一方向のナデ、外面指おさえ。

2類

形状分類

A類　体部の立ち上がりが強く、直線的に伸びる。

B類　体部の立ち上がりが強く、直線的に伸びる。また、体部外面に強い横ナデによる凹みがみられる。

C類　体部が開き気味に短く立ち上がる。

D類　体部が開き気味に立ち上がる。口縁端部が丸いものが多い。

E類　口縁部が外反気味である。

調整分類

a類　内面および体部外面上半横ナデ、体部外面下半指おさえ。

b類　内面および口縁部外面横ナデ、体部外面指おさえ。

c類　体部内面下半横ナデ、体部内面上半および口縁部内外面平滑、外面指おさえ。

d類　内面および口縁部内外面平滑、外面指おさえ。

e類　内面平滑、口縁部内外面および外面指おさえ。

**山茶碗**（第18・19図1～46）

第1地点から4.77個体(91破片)（個体数は口縁部計測法により算出した数値を表す。破片数は口縁部が残存する破片の合計を表す。以下同様である。)、第2地点から44.10個体(614破片)、第3地点から3.76個体(55破片)出土した。第2地点からの出土量が極めて多いが、それ以外は地点別による大きな差異はみられない。全体的に北部系山茶碗II－2段階（丸石3号窯期）に対応する段階から遺物量が増加し、北部系山茶碗III－2段階（明和1号窯期）においてピークに達する。そして、北部系山茶碗IV－3段階（生田2号窯期）まで一定量確認できる。（第41図参照）

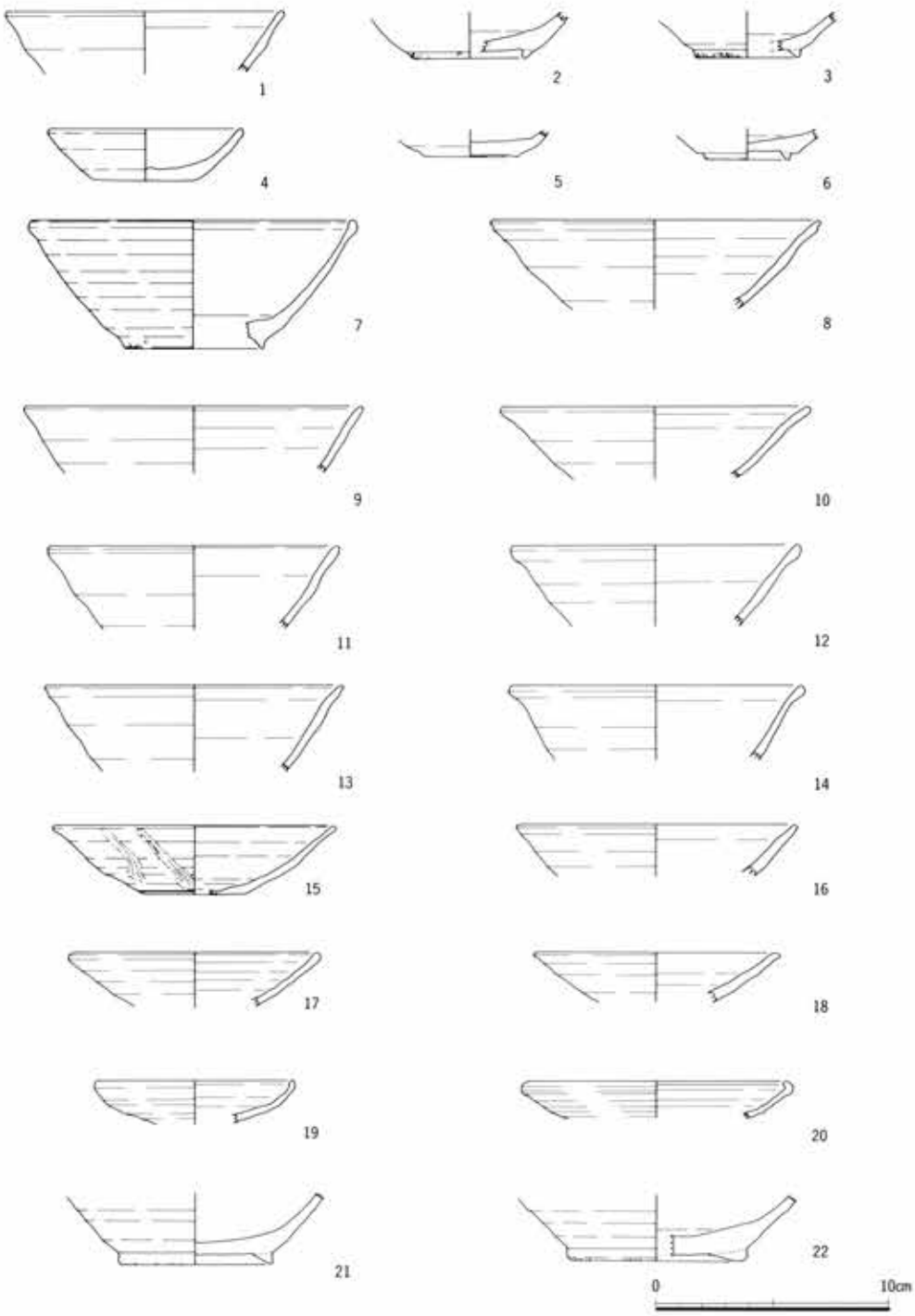
胎土を観察すると均質手の山茶碗が荒肌手の山茶碗よりも圧倒的に多く、その比率は約18：1となる。そして、北部系山茶碗が12世紀前半から15世紀後半までみられるのに対し、荒肌手の山茶碗は12世紀前半から14世紀前半（南部系山茶碗第8段階に対応する時期）までしかみられない。

15は底部糸切りの際に生じたと考えられる痕跡が体部外面にみられる。

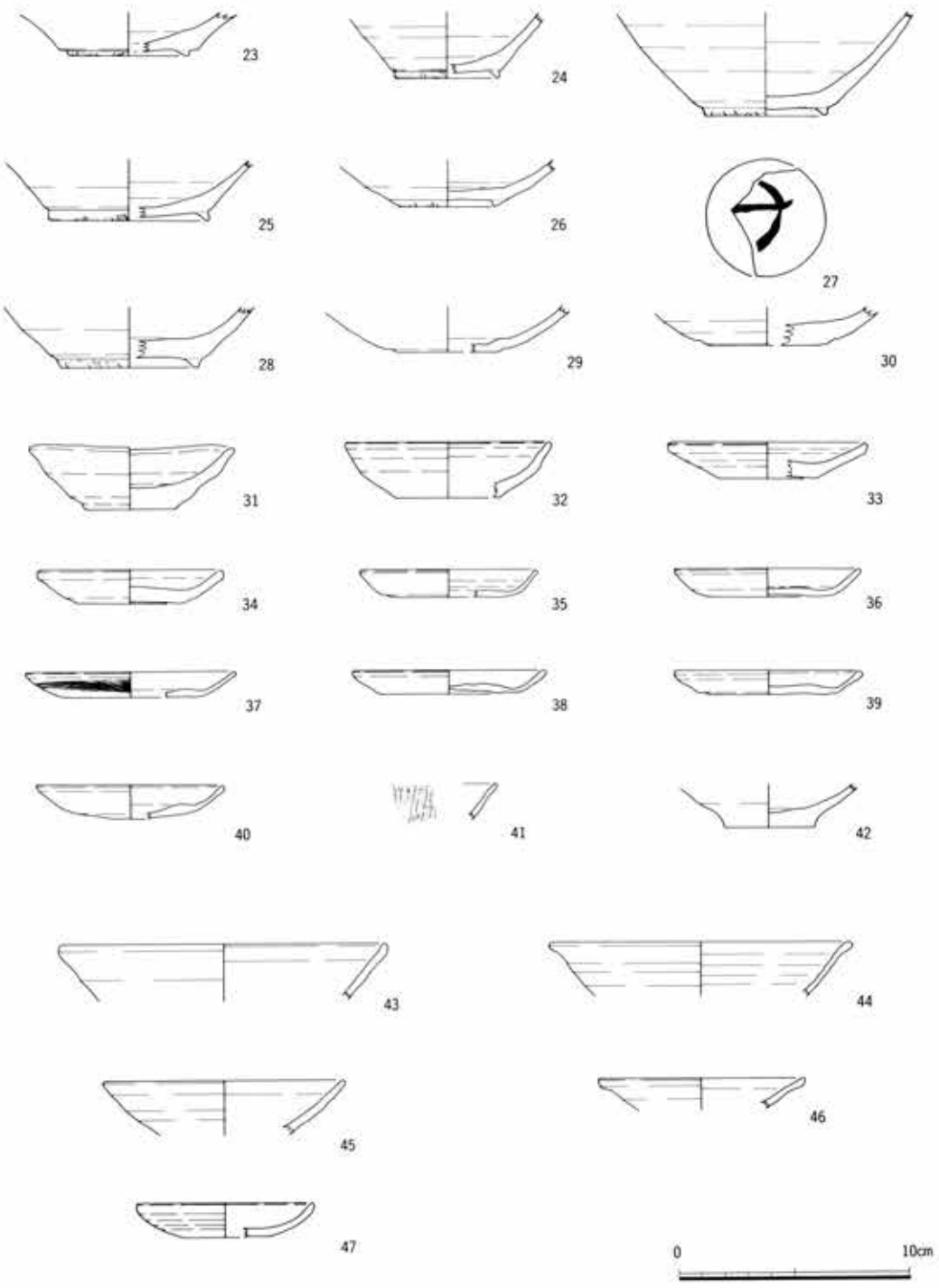
22・32は荒肌手の山茶碗である。

27は底部外面に墨書され、その内容は文字や数字以外の記号と考えられる。体部外面下半から底部外面にかけてすすが付着する。

31は唯一の完形資料である。平底の底部はやや突出し、底部外面には回転糸切り痕が明瞭に




第18図　山茶碗(1)


23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
0
10cm

第19図　山茶碗(2)

残る。体部外面は指ナデによる凹凸が認められ、口縁部はやや外反する。内面には自然降灰による釉が付着する。法量は口径8.9cm、底径4.0cm、器高3.0cmを測る。浅間窯下１号窯期に比定される。

41は内面にヘラ状工具により斜格子状の卸し目が認められる。

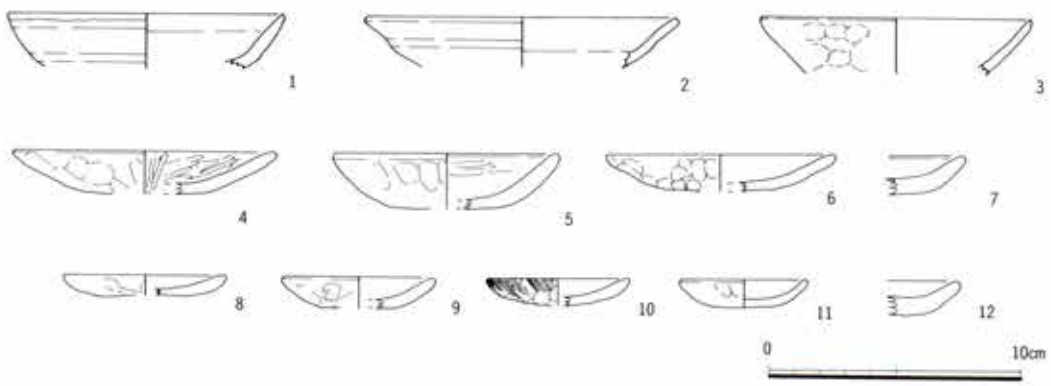
42は平底の底部が突出している。

**土師皿**（第20図１～12）

第２地点から9.00個体(93破片)、第３地点から0.10個体(１破片)出土した。第１地点では出土していない。すべて非ロクロ成形によるものである。先述した分類の他に大きく２分類が可能である。１つは淡黄白色、または橙白色を呈し、微細な砂粒子を含むもの。１つは暗黄褐色を呈し、前者に比べ胎土が荒く径１～２㎜の粒子(白色粒が多い)を含むものである。
前者は8.99個体(90破片)、後者は0.52個体(７破片)確認された。

１・７・12は胎土が荒い土師皿である。１は２Ａａ類（２類の調整分類Ａ類、形状分類ａ類を示す。以下同様に記述する。)に属する。口縁部外面に一枚の粘土帯を重ね、接合した跡を残す。７・８はそれぞれ１Ａａ類に属する。

２～６、８～11は淡黄白色、または橙白色を呈する土師皿である。２は体部外面が強い指ナデにより屈曲している。内面における底部と体部の境は明瞭である。また、口縁部外面に一枚の粘土帯を重ね、接合した跡を残す。２Ｂａ類に属する。４・５はいずれも厚手のもので２Ｄｃ類に属する。４は開き気味で直線的に立ち上がるのに対し、５はやや丸みをもつ。10は口縁部外面に上方向のナデが顕著に認められ、今回出土した遺物のなかでは珍しいものである。




第20図　土師皿

**青磁、古瀬戸、瀬戸美濃、その他**（第21～22図　1～39）

天目茶碗（1・2・8～10・34）

1は腰部外面を除き、全面に鉄釉を施す。体部は直線的に開き、口唇部はほぼ直立し、端部は外反する。34は底部外面から高台脇にかけて露体である。高台は削り出し輪高台であるが、断面は内側が外傾、外側が直立した逆台形を呈する。また、高台、高台脇の削り幅は広い。1・2は大窯最終段階から連房初期、8・10は古瀬戸後Ⅳ（新）、9・34は大窯第２段階から第３段階に比定される。

平碗（3・6）

いずれも体部外面下半を除き、全面に灰釉が施される。体部外面はロクロ目が顕著であり、口縁端部はとがり気味である。古瀬戸後期に比定される。

染付丸碗（4）

断面方形に近い形状の高台から腰部が丸みをもって立ち上がり、体部が直線的に開く。呉須による模様は口縁部下方内外面、体部下方内外面および高台外面に横線が引かれ、体部外面には草花と推定される模様、口縁部内面には縁描きされた模様がみられる。全面に透明釉が施されるが、高台接地面の釉は拭い取られる。19世紀前半に比定される。

尾呂茶碗（5）

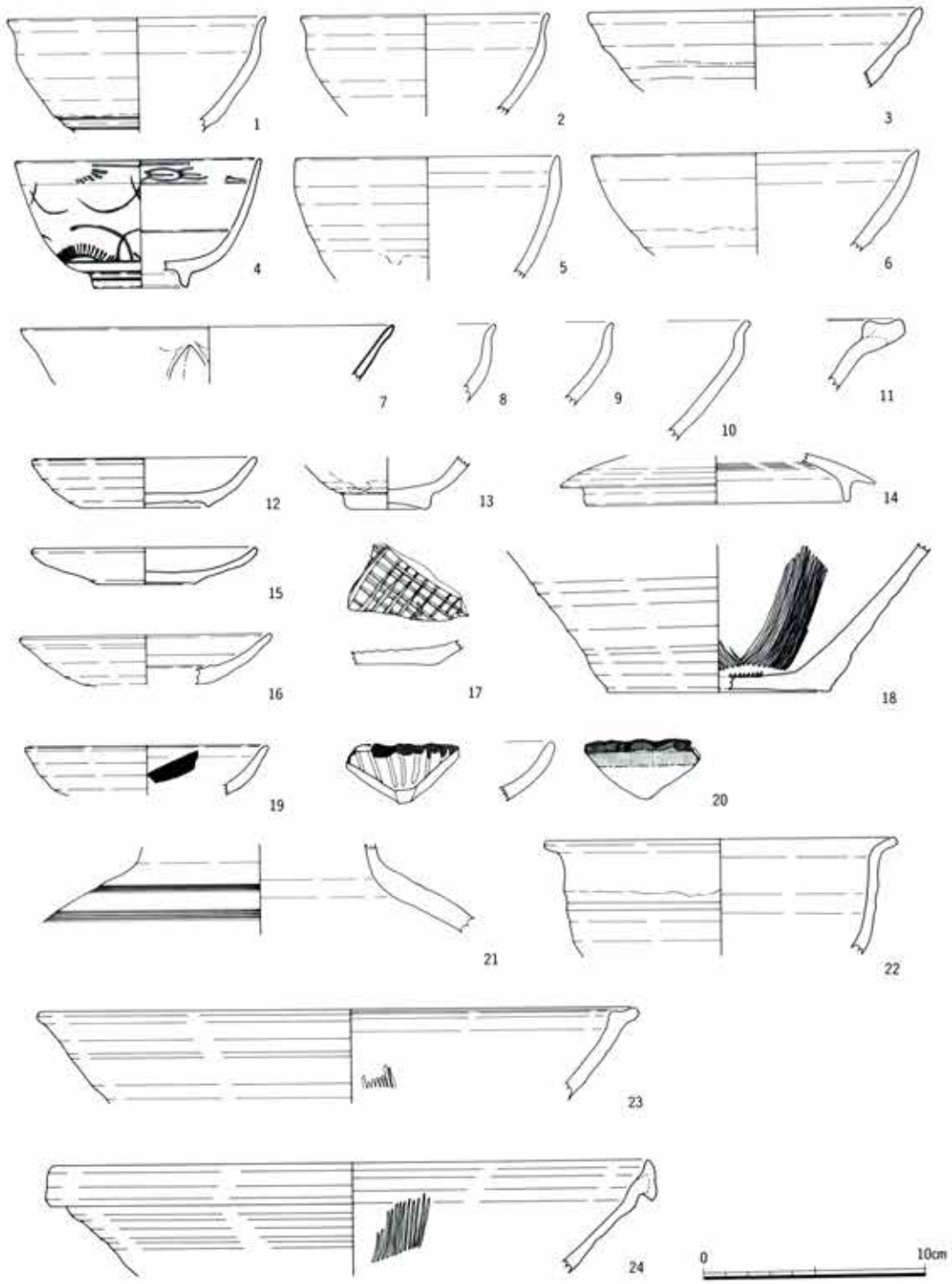
体部は丸みを帯び、口縁部で垂直気味に立ち上がる。体部外面下方を除き、うのふ釉が施される。17世紀末～18世紀初頭に比定される。

碗（7）

青磁の碗である。体部外面に鎬蓮弁文が施される。釉は青味を帯びた緑色を呈し、厚めに施されている。14世紀前半に比定される。

擂鉢（11・18・23・24・31）

11は口縁部を大きく外反させ、端部を面取りする。内面には突起を有する。18は内面が非常に平滑であり、内底面には擂目が「－」または「＋」字状に施されたと推定できる。また、擂目は８～９条で原体幅は1.8～2.0cmである。23は口縁部がやや外反し、さらに内側に折り返され小突起状になる。擂目は８条で、原体幅は 1.6cmである。24は全体的に薄手であり、ほぼ垂直方向に上下に縁体を形成する。擂目は12条で、原体幅は 2.1cmである。31は口縁端部を内側




第21図　青磁・古瀬戸・瀬戸美濃・その他(1)

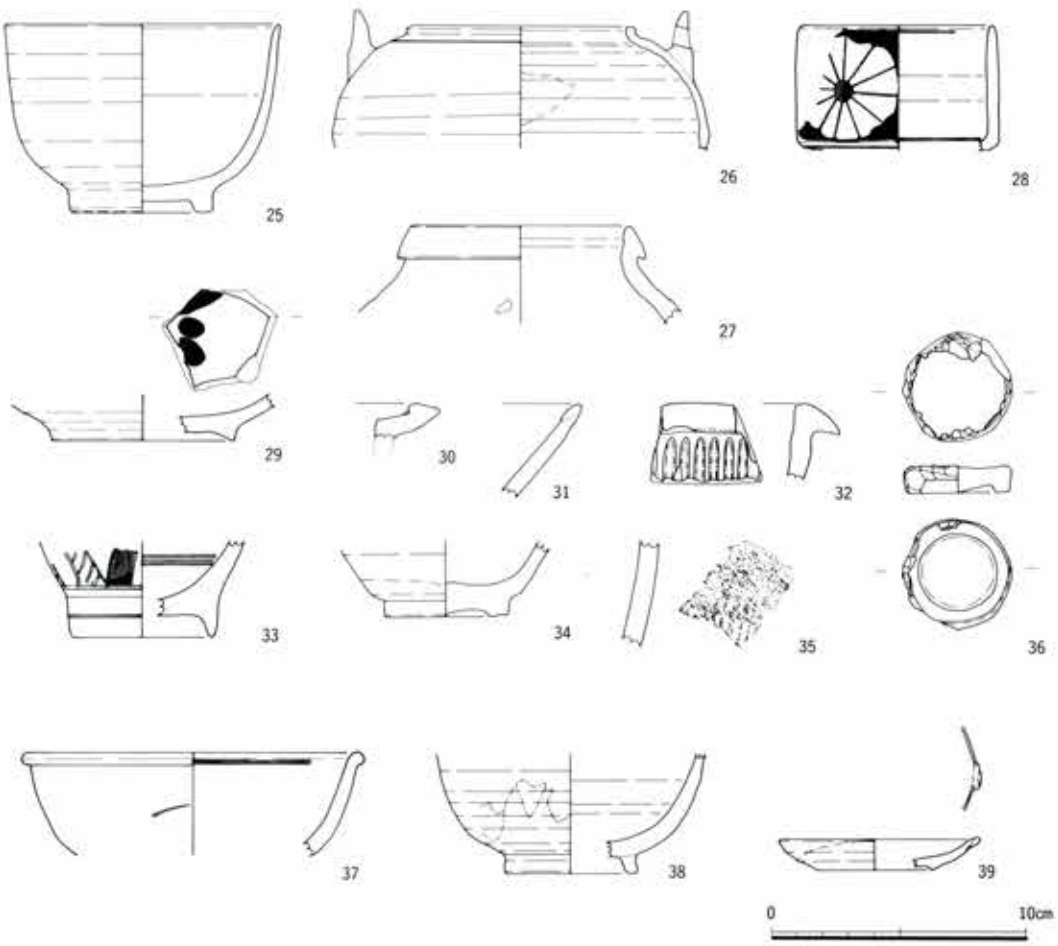
に折り返している。18・24は体部外面のロクロ目は顕著である。また、いずれも全面に錆釉が施されるが、11の面取りされた部分は釉が拭い取られている。11は大窯第4段階、18は大窯前期、23は古瀬戸後IV期（古）、24は大窯第2段階、31は18世紀初頭に比定される。

丸皿（12）

削り込み高台を有する外底面は回転ヘラ削り調整が行われる。内底面には重ね焼痕が残り、全面に鉄釉が施される。16世紀前半に比定される。

蓋（14）

糸目土瓶の蓋と思われる。扁平な笠部と直立したかえりを有する。つまみの有無は判断でき




第22図　青磁・古瀬戸・瀬戸美濃・その他(2)

ない。笠部上面には柿釉が施される。19世紀前半に比定される。

灯明皿（16、39）

16は内面にはコテの押圧による小突起が同心円状に2条施される。口縁部内外面は露体であり、それ以外は錆釉が施される。また、内面には煤と油煙が、外面には油煙が付着する。39は削り込み高台で、口縁部とつまみは密着する。体部外面はヘラ削り調整が行われる。口縁部周辺と内面に飴釉が施され、若干、うのふ釉が流し掛けられる。16は16世紀中頃、39は18世紀前半に比定される。

卸皿（17）

底部外面に回転糸切り痕が残る。内底面には卸目が施されるがさほど磨滅していない。古瀬戸後期に比定される。

灰釉織部流し菊皿（20）

内面に連続する浅い沈線が施され、花弁を作り出している。内面と体部外面上方に灰釉が施され、口縁部内外面に銅緑釉が流し掛けられている。18世紀前半に比定される。

有耳壺（21）

撫で肩で、頸部は若干内傾する。肩部に3本から5本の平行沈線が施され、横耳の一部が残存している。また、全面に灰釉が施される。古瀬戸後期に比定される。

灰釉丸碗（25）

体部下方は丸みを帯び、上方はほぼ直線的に立ち上がる。断面方形の付高台を有し、高台周辺はヘラ削り調整が行われる。また、高台周辺を除き灰釉が施される。18世紀前半に比定される。

壺（27）

かなりの撫で肩で、頸部は短く口縁部は外側に折り返される。肩部には粘土紐の耳の一部が残存している。施釉の痕跡らしきものは認められるが定かではない。時期不詳である。

染付箱型湯飲（28）

体部下方は屈折し、上方はほぼ直立する。呉須による模様は体部外面に菊花と斜格子、口縁部内面と体部下方内外面に横線が描かれる。19世紀前半に比定される。

蘭竹文皿（29）

断面逆三角形の高台を有し、外面はヘラ削り調整が行われる。内底面には鉄絵による蘭竹文が描かれ、灰釉が施される。17世紀に比定される。

折縁深皿（30）

口縁部は鋭く外折し、端部が内側に折り返され玉縁状になる。また、全面に灰釉が施される。古瀬戸中期末から後期前半に比定される。

火鉢（32）

頸部はやや外傾し、口縁部は強く外折する。口縁部には敲打痕が認められる。頸部外面には丸ノミ状工具による刻文（ソギ）が施される。また、全面に呂宋釉（緑釉）が施される。19世紀前半に比定される。

広東茶碗（33）

高台は外面が高く、ほぼ直立する。呉須による模様は体部外面に2種類の木葉文、体部下方内外面および高台外面には横線が施される。19世紀初頭に比定される。

甕（壺）（35）

常滑産の甕（壺）の胴部破片である。外面には短冊状の押印文が施され、内面はヘラ削り調整が行われる。

加工円盤（36）

古瀬戸後Ⅳ期から大窯初期にかけての天目茶碗の高台周辺を打ち欠いて形成される。上面および下面に鉄釉が施される。

**［註及び引用・参考文献］**

1）山茶椀、白瓷系陶器とも呼ばれるが、本報告では山茶碗と呼称する。また、いわゆる均質手の山茶碗を北部系山茶碗、荒肌手の山茶碗を南部系山茶碗と称する。なお、美濃須衛産と推定される山茶碗は今報告では北部系山茶碗とした。

2）かわらけとも呼ばれるが、本報告では土師皿と呼称する。

3）陶磁器の編年については下記の文献に従った。

［北部系山茶碗］

・田口昭二「山茶椀」『考古学ライブラリー17　美濃焼』ニュー・サイエンス社　1983

［南部系山茶碗］

・藤澤良祐「瀬戸古窯址群」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅰ』1982

[古瀬戸陶器]
・藤澤良祐「瀬戸古窯址群II」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要X』1991
[瀬戸・美濃陶器（大窯期、連房期）]
・藤澤良祐「瀬戸大窯の編年的研究」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要V』1986
・藤澤良祐「本業焼の変遷（1）」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要VI』1987
・藤澤良祐「本業焼の変遷（2）（3）」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要VII』1987
・藤澤良祐「本業焼の変遷（4）」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要VIII』1988
[中国製陶磁器（青磁）]
・横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入陶磁器について一型式分類と編年を中心にして一」
『九州歴史資料館研究論集4』1978
・上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究No.2』1982

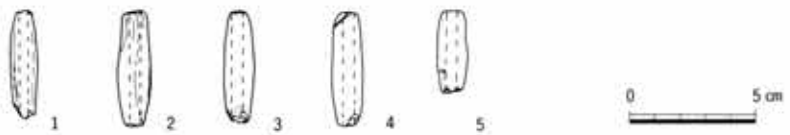
4）本遺跡出土の土師皿は大部分が破片であるため、法量をおおまかにしか捉らえられなかった。また、1類と2類の法量は1類が口径約9cm以下、2類が9cm以上とした。

（小野木　学）

## 7．土製品（第23図　1～5）

土製品としては、土錘の他、土鈴が4個体分の破片、犬形の土人形の破片などが出土したが、いずれも型作りのもので、ほとんど第I層出土のものであるため、時期も不明である。したがって、図示しなかった。ここでは土錘について述べることとする。

本遺跡からは、図示した5点出土した。1～4は第2地点、1はAトレ第IX・X層、2はCトレ第III・IV層、3はCトレ第I層、4はDトレ第V～VII層出土。5は第3地点、Lトレ第II層出土。1～3は、胴中央部が膨らんでいるもので、4・5は胴がほぼ平行になっているものである。いずれも時期は不明である。




第23図　土製品

## 第3節　石器類とその他の遺物

### 1．石器類（第24図　1～9）

本遺跡では総数429点に及ぶ石器が出土している。その時期は包含層より出土している土器から大局的には縄文時代より弥生時代に属するものと考えられる。主要な石器に用いられている石材は下呂石・チャートであり、当地域において特徴的に用いられている前者が優勢を占める。拳大程度の転石を打ち割り石核として剥片剥離作業を行っていた痕跡が伺われ、中には両極剥離によって破損したかのような石核・剥片も存在する。

図示し得たのは石鏃5点、磨製石鏃1点、石錐1点、打製石斧2点、計9点である。

石鏃（1～5）

7点出土している。1～4は凹基鏃である。1はやや分厚な剥片を素材とし、調整剥離でその厚さを取りきれず表裏に素材剥片の剥離面を残している。2も表面に大きく素材剥片の剥離面を大きく残し、周辺部のみ調整が入る。3は右脚部を欠損する。両側縁が鋸歯縁状となり、尖頭部分がやや突出している。また、脚部のみ細かい調整が入る。4は、基部に深いえぐりが入るものである。やや分厚ぎみである。

5は大型の有茎石鏃である。素材剥片の反りがそのまま残存している。おそらく弥生時代に属するものであろう。裏面に一部磨面が認められる。3～5は下呂石製、他はチャート製である。

磨製石鏃（6）

1点のみ出土している。基部に両側よりの穿孔部を持ち、当地域に特有に見られるものであり、弥生時代に属するものと考えられる。粘板岩製である。

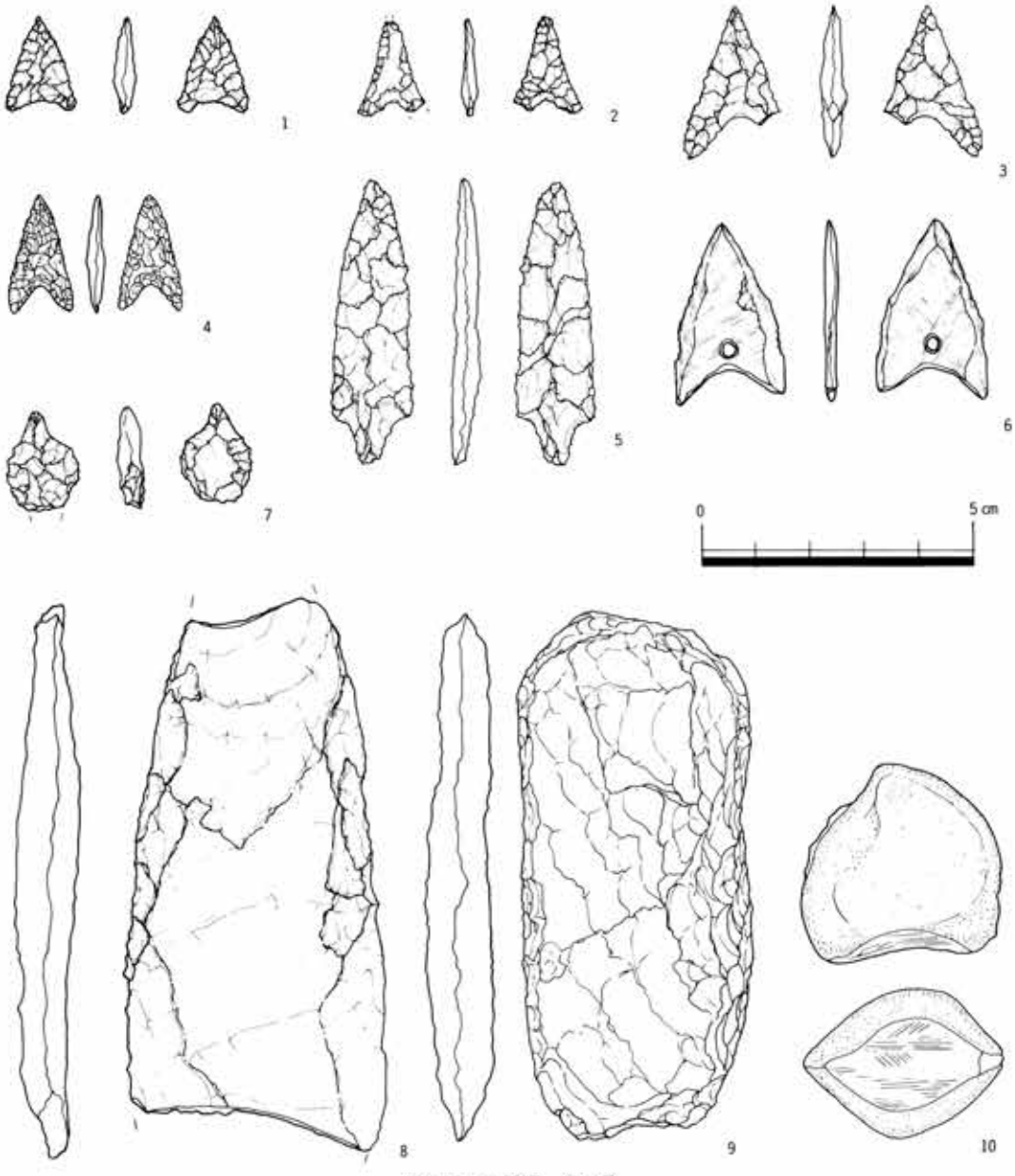
石錐（7）

1点のみ出土している。裏面に残る剥離面より貝殻状剥片を素材としたものと考えられる。尖頭部の磨耗が著しい。基部を欠損している。チャート製である。

打製石斧（8・9）

7点出土している。2点のみ図示した。8は先端部と基部を欠損する。かなり磨耗が激しい。9は、いわゆる短冊形を呈する。先端部を欠損する。2点とも片岩製である。

（佐野　康雄）




第24図　石器類、その他

## ２．石製品（第24図　10）

10は二枚貝の化石を加工したもので、一部が磨り削られている。何時の時代に、何に用いられたかは不明である。

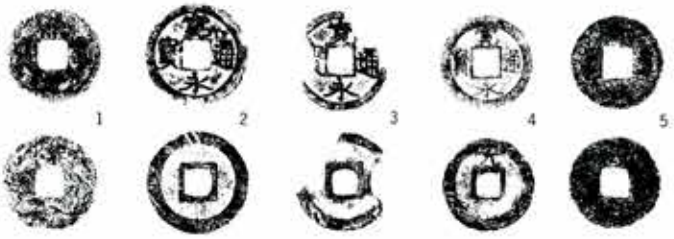
この二枚貝の化石は、名古屋大学大学院　柴田　博教授の鑑定によれば、大きさ、形態、前背縁部の放射肋の存在から見て、Cyclina japonica Kamada であり、この種と似た現生種のオキシジミ［Cyclina sinensis (Gmelin)］は、湾奥部の海水（多少淡水がまじってもよい）の潮間帯に生息している。Cyclina japonicaは、第三紀中新世に限って産出し、美濃加茂市付近では、瑞浪、岩村、山岡で産する。この化石は、瑞浪産のものに最もよく似ているように見える。

## ３．その他の遺物（第25図　１～５）

本遺跡からは、前述した遺物の他に、銅製品として銭貨や煙管の雁首・吸い口、木製品として箸などの断片、その他珪化木や植物遺体が出土している。ここでは、銭貨について述べることとする。

本遺跡から出土した銭貨は、いずれも第２地点から出土したもので、宋銭［□寧元寶］１枚と、寛永通寶（古寛永２枚・新寛永１枚）３枚と、磨滅と錆により判読不明のもの１枚の計５枚である。宋銭は、磨滅しているが「熙(熙)寧元寶」と思われる。また、新寛永は裏面に「元」という文字が見られることから（細字背元）と呼ばれるものである。

（宇野　治幸）




第25図　古銭拓影

第３表　古銭一覧

| No. | | 層 | No. | 銭貨名 | 読順 | 裏 | 径(mm) | 孔径(mm) | 厚mm | 重g | 材質 | 備　　考（初鋳年代等） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | A ﾄﾚ | Ⅳ | 01 | □寧元寶 | 正順 | | 22.9×23.2 | 6.8×7.2 | 1.1 | 1.8 | 銅 | 熙(熙)寧元寶？　北宋　熙寧元年　１０６８年 |
| 2 | C ﾄﾚ | Ⅲ | 01 | 寛永通寶 | 対角 | | 24.7×24.6 | 6.6×6.7 | 1.1 | 2.3 | 銅 | 古寛永　太字　岡山銭　寛永１４年　１６３７年 |
| 3 | E ﾄﾚ | Ⅲ | 01 | 寛永通寶 | 対角 | | 23.9× | 6.2×6.1 | 1.1 | 1.4 | 銅 | 古寛永　太字　鳥越銭　明暦２年　１６５６年 |
| 4 | C ﾄﾚ | Ⅲ | 02 | 寛永通寶 | 対角 | 元 | 22.5×22.5 | 6.2×6.1 | 1.0 | 1.7 | 銅 | 新寛永　細字　細字背元　大阪　寛保元年　１７４１年 |
| 5 | C ﾄﾚ | Ⅲ | 01 | 不　　明 | 不明 | | 22.5×22.5 | 6.9×7.1 | 0.9 | 1.6 | 銅 | |

# 第4章　自然科学的分析

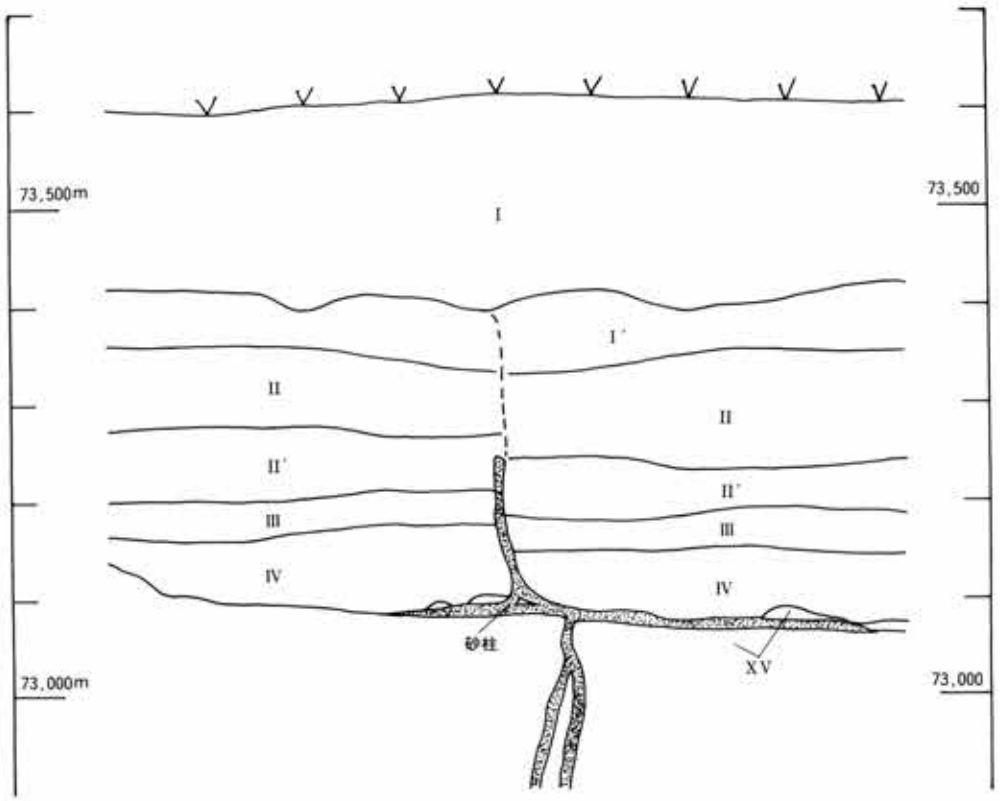
## 第1節　地震痕

最近、全国の発掘現場から過去の地震の痕跡が発見され報告されている。東海地方では、愛知県尾張平野部の遺跡調査により数例報告されている。本遺跡の地震痕は、小規模なものであるが、発掘調査による例としては、県内初のことである。

本遺跡で検出された地震痕は、第2地点Bトレンチと第3地点Ⅰ・O・Pトレンチの4箇所だけであるが、このうち明瞭に検出できたものは第2地点Bトレンチのものだけである。

### 1．第2地点Bトレンチの地震痕

本遺跡は、第1章で述べたように、木曽川・飛騨川によって形成された5段の低位段丘の第2段(L2面)に形成された旧河床上(L2'面)に所在し、この段丘の基盤層は砂礫層である。そして、この段丘の特徴として数mの厚さの砂層が形成されていることである。

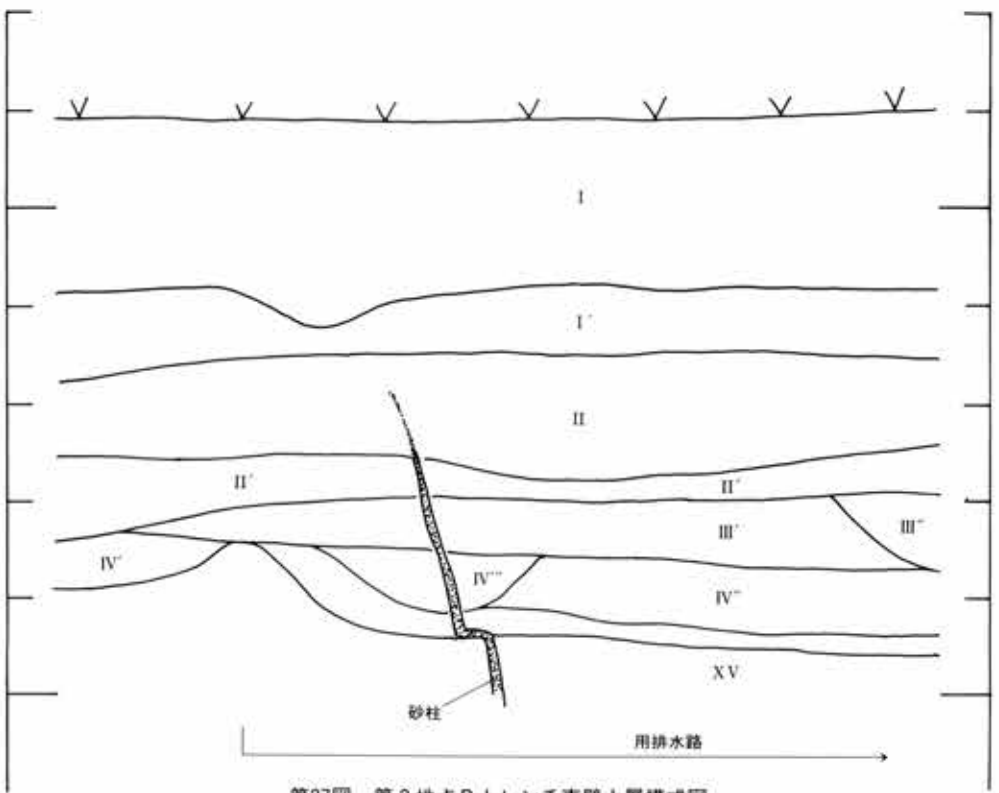



第26図　第2地点Bトレンチ西壁土層模式図

Ｂトレンチが所在する第２地点は、上位段丘（Ｌ２面）の段丘崖と微高地とに挟まれた低湿地状の地点で、現在は土地改良工事や用水路の整備によってほぼ乾田状態の水田であるが、以前は、絶えず段丘崖から地下水が湧き出していて、湿田状態であったといわれている。現在でも、平成５年のように降水量の多い場合、ぬかるんで歩くことも困難な状態が長く続く。調査中の地下水位の状況は、乾燥した晴れた日が続く場合は、地表下約１～1.5ｍであるが、雨天後の場合は地表下0.3～0.5ｍであり、大雨の直後の場合は地表上0.2ｍ程湛水する。絶えず地下水が湧き出しているため、基盤層が砂礫層の割に水引が極端に悪い。このため河岸段丘上での泥炭層が形成されたのであり、砂層の液状化現象が起こり地震痕が残ったのである。

段丘崖までトレンチを入れてないが、基盤層の砂礫層は、微高地側より徐々に段丘側に向かって下がっているものと考えられる。現在、第２地点は、第１地点より50～60cm程下がり、境に石垣が組まれている。これは、中世期における開田に伴って削平されたからである。したがって、Ｂトレンチでは、地山の砂礫層はＡトレンチ側に向かって約14ｍ程ほぼ平らに削平され、そこから急激に下がっている。

Ｂトレンチで検出された地震痕は、砂脈と噴砂痕・砂道・断層である。砂脈は、西壁で砂道

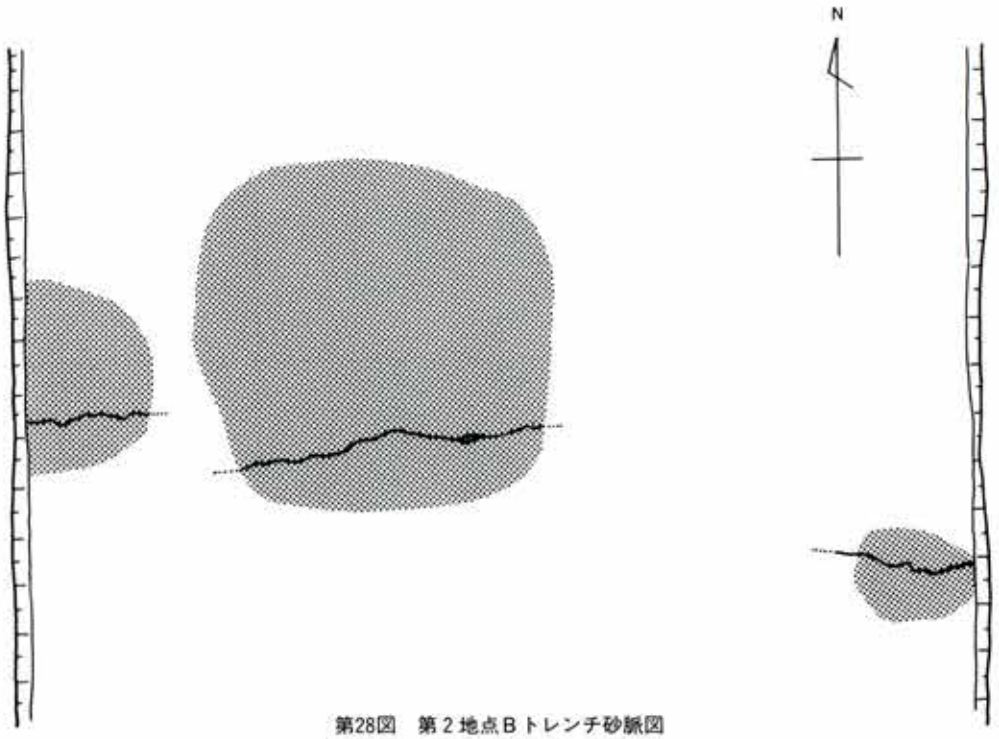



第27図　第２地点Ｂトレンチ東壁土層模式図

を検出したものでは、第Ⅴ層上で幅約1cm、長さ約1m程で、明瞭に検出できた。東壁で砂道を検出したものでは、第Ⅴ層上で同じく幅約1cmで、長さは約50cm程である。いずれも砂脈の方向は、ほぼ東西に走っている。長さは全て検出しなかったため不明である。第26図のように地山下層では2列に分かれていた砂脈が、地山表面近くで1列に合流している。また、地山と第Ⅴ層との間に一旦噴砂が溜まっているのが検出できた。噴砂は、地山の浅黄橙色細砂より粒子の粗い明緑灰色粗砂である。

一旦溜まった噴砂は、第Ⅴ・Ⅳ層を突き抜けて第Ⅲ層まで噴き上がっている。土層を見ると、水田の敷土である第Ⅰ'層には、他の層より多くの砂粒が含まれていることから、元々噴砂は、第Ⅰ'層上部まで噴き上がっていて、耕作などによって拡散されてこの層に多くの砂粒が含まれるようになったと考えられる。現在、西壁や東壁に認められる砂脈の断面である砂道の上部には亀裂が第Ⅰ'層まで伸びているが、砂粒は詰まっていない。

次に、断層であるが、西壁の土層断面において、砂道を挟んで南北の土層に約2.5cm程の土層のズレが検出された。特に、第Ⅲ層から第Ⅴ層では明瞭に確認できたが、第Ⅰ層から第Ⅱ層ではこのズレは確認できなかった。第Ⅱ層の下部ではズレが認められるが、上部では明瞭ではない。耕作等によるものと思われる。また、噴砂と断層のズレの時間関係について言えば、第Ⅳ層の地山の状態から見ると、ズレた地山の上部に噴砂が溜まっていることからはどちらが先か同時かは不明である。しかし、断層線に沿って噴砂が上がり、砂道や砂脈が形成されているこ




第28図　第2地点Bトレンチ砂脈図

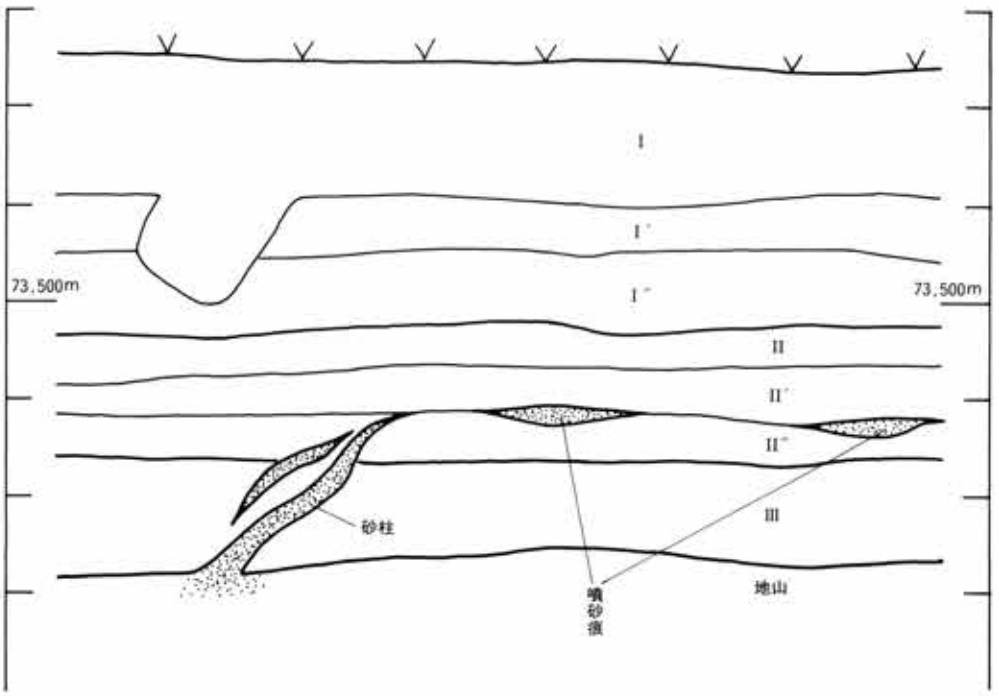
とは事実である。

この地震痕が形成された時期は、砂脈が第Ⅰ'層まで伸びていたと思われるため近現代の地震によるものと考えられる。美濃加茂市史によれば、江戸時代末期以降の断層を生じさせる程の大規模な地震の記録は、1854年(安政元)の6月と11月の2回の大地震と1891年(明治24)10月の濃尾大震災、1944年(昭和19)の12月の東南海地震が記録されている。これらの記録の中で、この地震痕に関係すると思われるものは、1854年の2回の安政の地震と1891年の濃尾大震災である。安政の地震がどれほどのもので、どれぐらいの被害をこの美濃加茂にもたらしたかの記録が記載されていないため、断定はできない。しかし、土層の状況や被害状況の記録等から見て、1891年の根尾を震源とする濃尾大震災が最も有力と考えられる。

2．その他の地震痕

第3地点のⅠ・O・Pトレンチでも地震痕を検出している。このうち、O・Pトレンチでは径1cm程の砂道を各トレンチで5箇所程検出したが、断面では検出できなかったため、明瞭に地震痕とは言えないが、検出層から地山まで砂道が続いていたことから地震痕と考える。

Ⅰトレンチでは東壁の断面に明瞭に検出できた。第3地点は、前述したように、本トレンチ




第29図　第3地点Ⅰトレンチ東壁土層模式図

が所在するG～I区とJ～M区、N～P区の3地区に分けられるが、G～I区と他の地区とでは開田された時期が大きく異なっている。G～I区では少なくとも近世頃に開田されていたと考えられるが、他地区では近代以降の開田と考えられる。

Iトレンチの噴砂の砂は、明黄褐色細砂であり、地山の第V層のものと見た目ではほとんど変わらず、明黄褐色細砂である。この砂道が、第III層を突き抜けて第II層の中段第II3'層にまで伸びて、第II2'層との間に横に広がっている。

このIトレンチの土層は、第3章で述べたように、地山直上から土層がほぼ並行に薄い層で走っていることから、近世以前から開田されていたと考えられる。従って、第II3'層まで噴き上がって第II3'層との間に薄い砂の層が挟まっていると言うことは、第II3'層が地表であった時の地震痕と考えられる。つまり、Bトレンチの地震痕の時期とは明らかに異なる時期のものであり、近現代に近い近世後半代の地震痕と考えられる。安政の2回の地震のどちらかではないかと考える。

（宇野　治幸）

**［引用・参考文献］**

鹿野勘次　・1990　「美濃加茂周辺地域の第四系」『岐阜県地学教育』Vol.26
寒川　旭　・1993　「遺跡の地震跡を用いた古地震研究」『第四紀研究』Vol.32　No.5
日本第四紀学会
服部俊之　・1993　「濃尾平野における歴史時代の地震痕」『年報　平成4年度』
(財)愛知県埋蔵文化財センター

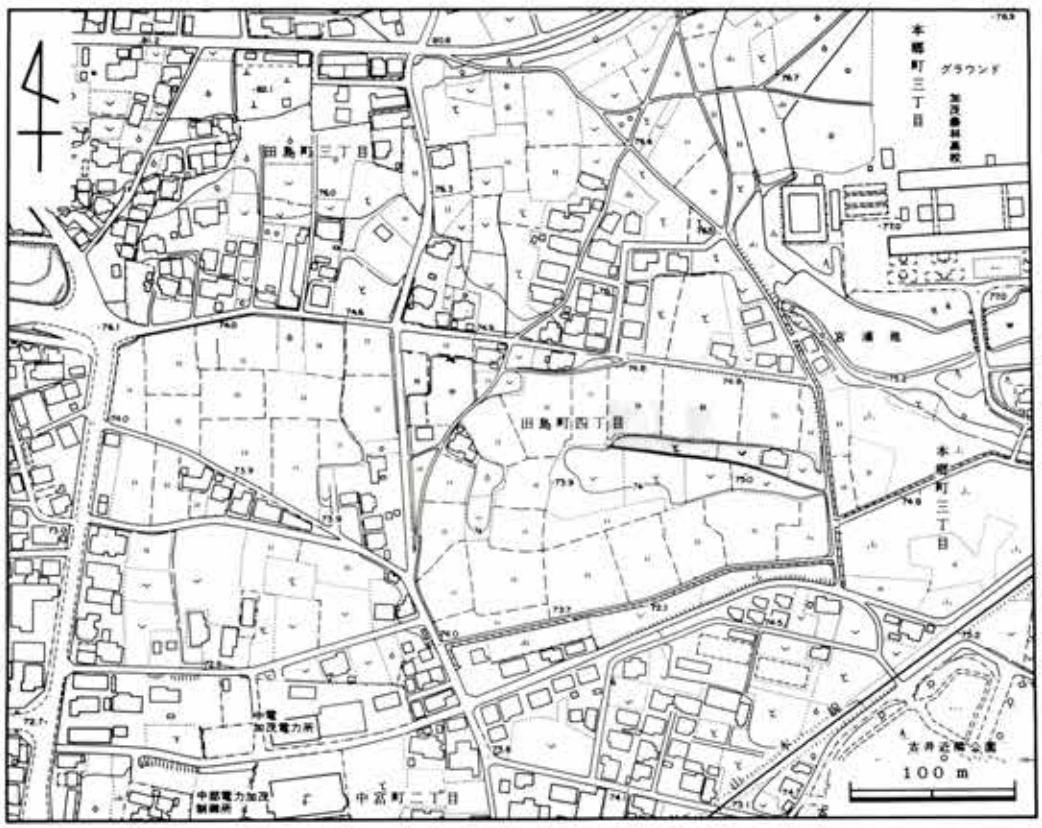
# 第２節　仲迫間遺跡の立地環境と周辺植生

藤根　久・菱田　量・新山雅広・鈴木　茂（パレオ・ラボ）

## Ⅰ．遺跡の概要および層序

### １．遺跡の概要

仲迫間遺跡は、美濃加茂市田島町四丁目地内に所在する。遺跡は、木曽川の北側段丘面上の標高約74ｍに位置する。この周辺地域の地形面は、高位段丘２面、中位段丘２面、低位段丘５面に分類されるが、遺跡が成立する段丘面は低位段丘面のＬ２'面に相当する（鹿野、1990）。遺跡周辺の地形は、遺跡の約50ｍ北側において比高差約１ｍ前後で１段高い段丘面（Ｌ２面）と接している。また、標高約75ｍ前後の微高地が北側あるいは東側から虫喰状迫り出し、一部では孤立した部分も見られる（第30図）。現在、こうした微高地やその周辺の低地（微高地と比べ約

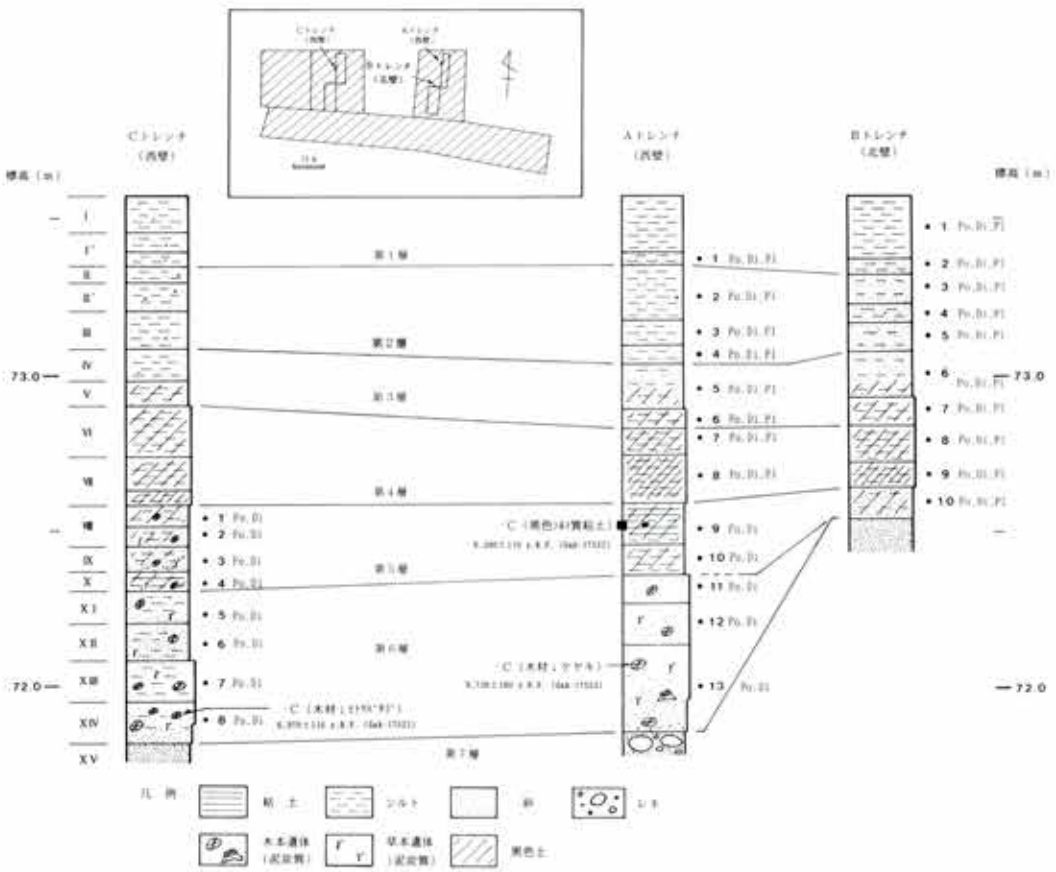



第30図　仲迫間遺跡の位置（斜線部）とその周辺地域
（「美濃加茂市都市計画図」1/2.500、（1992年修正）32･39より作成）

1m前後低い場所）では、水田を中心とした耕作が行われている。なお、後述するように発掘調査において、こうした微高地は砂層の高まりと調和的であることが確認されている。

発掘調査では、現水田耕作土の下位に、近世の遺物を包含する耕作土、山茶碗を包含する層、多量の木材遺体を含む泥炭質砂層あるいは各トレンチの最下層となる巨礫を含む砂レキ層あるいは砂層などが検出されている。調査では、縄文時代中期中頃の住居址や須恵器杯など遺構・遺物が検出されている。また、段丘上の遺跡としては例のない泥炭質堆積物が検出され、遺跡の環境変遷史を考える上で極めて重要な遺跡と位置づけられる。

こうした環境変遷史を考える上で重要な遺跡であるという観点に立ち、遺跡層序を検討し、古環境復元を試みた。ここでは、遺跡を構成する堆積物の記載および層序について述べ、各分析項目の目的などその概要について説明する。なお、発掘による考古学的成果の詳細については、本文を参照されたい。




第31図　主要トレンチの地質柱状図およびその層序
（Po；花粉、Di；珪藻、Pl；プラント・オパール各分析、$^{14}C$；放射性炭素年代）

## ２．堆積物の記載と層序

ここでは、Ａトレンチ西壁、Ｂトレンチ北壁、Ｃトレンチ西壁における堆積物の記載と層序について述べる。なお、Ａトレンチ西壁とＢトレンチ北壁は南北に約10ｍ前後、Ａトレンチ西壁とＣトレンチ西壁は東西に約35ｍ前後それぞれ離れている。また、Ｂトレンチ北壁は南側の微高地上がり際に位置し、Ａトレンチ西壁とＣトレンチ西壁は微高地北側低地部に位置する。

堆積物は、層相として大きく７層に区分される(第31図)。ここでは便宜的に第１～第７層とする。各層の特徴および記載を以下に述べる。

第１層（Ⅰ、Ⅰ'層）

Ⅰ層は、黒褐色の砂質シルトで現生植物根を多く含む。Ⅰ'層は、上部層Ⅰ層と比較して砂質で、礫を多少含む灰褐色の砂質シルトである。これらの層は、いずれも各トレンチにおいて確認され、Ⅰ層とⅠ'層が１組として連続して分布する現水田耕作土である。

第２層（Ⅱ層、Ⅱ'層、Ⅲ層）

Ⅱ層は、根状の褐鉄鉱が見られる淡黒褐色の砂質シルトで、砂がレンズ状に入る。またⅡ'層は、上部層のⅡ層と比較して根状の褐鉄鉱が多く全体として赤味が強く、砂質である。また、φ５～７㎜前後の礫が点在する。Ⅲ層は、上位層のⅡ'層と比較してやや明るい黒褐色の砂質シルトである。この３層からは、近世・近代の遺物が検出される。なお、いずれの層もＢトレンチ北壁においてシルト質砂に層相変化する。

第３層（Ⅳ層、Ⅴ層）

Ⅳ層は、黒褐色の砂質シルトで、礫がまばらに入る。Ａトレンチ西壁およびＢトレンチ北壁では、このⅣ層下部はやや黒味が強く、炭化材などの炭化物が確認される。なお、Ｂトレンチ北壁においては、シルト質砂に層相変化する。なお、この層位は、鎌倉・室町時代の開田期とされている。

第４層（Ⅵ層、Ⅶ層）

Ⅵ層は、黒色～黒褐色の砂質シルトで、φ50㎜の礫を含む。Ⅶ層は、さらに黒味の強い黒色の粘性のある砂質シルトで、下部は上部より黒味が強い。また、下位層との境界は波状に接する。これらの層は黒味が強く、１組をなして連続するが、微高地側に向かって薄くなる。なお、微高地寄りで山茶碗が検出されている。

第5層（Ⅷ層、Ⅸ層、Ⅹ層）

この第5層は、黒味のある褐色のシルト質砂～砂質シルト～砂混じりシルト質粘土からなり、層相変化が著しい。Aトレンチ西壁では、粘性の高い砂混じりのシルト質粘土であるが、Cトレンチ西壁では、植物遺体を比較的多く含む砂質シルトで、黄白色の粗粒砂がレンズ状に入る。この第5層からは、遺物は検出されていない。なお、Aトレンチ西壁のⅧ層の中部3cm厚のシルト質粘土の放射性炭素年代測定を行ったところ、6,390±110y.B.P.(Gak-17522)の年代が得られている。なお、Aトレンチ西壁やCトレンチ西壁では、鉛直方向にハンノキ節の根材が下位層に向かって多量に入るが、上位第4層によって切られている。

第6層（ⅩⅠ層、ⅩⅡ層、ⅩⅢ層、ⅩⅣ層）

この第6層は、木材遺体を多く含む茶褐色の泥炭質砂層である。その分布は微高地の立ち上がり部分まで分布する。Cトレンチ西壁では、上部のⅩⅠ層およびⅩⅡ層では砂が多くなる。全体的に鉛直方向に延びる根材が多くみられ、その先端は下位の第7層中まで及ぶ。なお、Aトレンチ西壁のⅩⅢ層中の木材遺体（ケヤキ幹材）とCトレンチ西壁のⅩⅣ層中の木材遺体（ヒトツバタゴ）について放射性炭素年代測定を行い、それぞれ9,730±160y.B.P.(Gak-17523)、6,970±110y.B.P.(Gak-17521)が得られている。

第7層（ⅩⅤ層：最下層）

各トレンチの最下層として分布する層で、Aトレンチ西壁では40cmを超える偏平な円礫を含む砂レキ層、Bトレンチ北壁では淘汰の良い粗粒砂層、Cトレンチ西壁では砂レキ層からなる。微高地では、この砂レキ層あるいは砂層のレベルが上がっている。

### 3．泥炭質砂層の年代について

ここで検出された木材遺体を含む泥炭質砂層は、考古遺物を包含していない。第5層および第6層の放射性炭素年代測定の結果は、第5層中部の有機質・シルト質粘土が6,390±110y.B.P.、Aトレンチ西壁の第6層中の木材遺体（ケヤキ幹材）が9,730±160y.B.P.、Cトレンチ西壁の第6層中の木材遺体（ヒトツバタゴ幹材）が6,970±110y.B.P.である。東海地方においては、ここで検出されたような木材遺体を包含する泥炭質砂層の記述は見あたらないが、愛知県春日井市勝川遺跡では、縄文時代中・後期の遺物を含む未分解の厚い泥炭層が検出されている（森・永草、1992）。一方、関東地方では、木本質泥炭ではあるが、記載は比較的多い。例えば、東京都北区中里遺跡では縄文時代中・後期の木本質泥炭層（東北新幹線中里遺跡調査会、1987）、埼玉県川口市赤山陣屋跡遺跡における縄文時代中・後期の木本質泥炭層（川口市遺跡調査会、1987）

がそれぞれ検出・記載されている。ここで検出された木材遺体を含む泥炭質砂層は、放射性炭素年代測定により縄文時代早期あるいは草創期に対応する年代が得られているが、木本質泥炭形成の同時性が成立するならば、縄文時代中・後期に形成された可能性が高い。この点については今後の調査事例を待つこととする。この意味において、ここで得られた年代値は重要であり、この木材遺体を含む泥炭質砂の第6層あるいは上位層の第5層を含め縄文時代層として扱う。

## 4．自然科学的検討の目的とその方法

概要のところで述べたように、段丘面上の遺跡において、泥炭質の堆積物が報告された例は少なく、県内においては初めての例となる。仲迫間遺跡においてこうした水成堆積物が検出される背景としては、遺跡の北東約80mに位置する長さ約200m、最大幅約35mの宮浦池に見られるように、地下水が豊富であり湧水があることが関係する。遺跡の低地部は、1m前後低い崖下に位置することから、この泥炭質砂が堆積した当時においては、豊富な湧水があったものと予想される。いずれにせよ、第7層の泥炭質砂層の形成以後、比較的豊富な水に恵まれていたと思われる。

こうした堆積物の状況から、これらの堆積物がいかなる環境で堆積したか、またその周辺の植生が如何なるものであったなど、検討することが可能である。

そこで、1）堆積環境の復元、2）周辺植生の復元、3）稲作の推定という3つのテーマについて自然科学的に検討する。各分析項目は、1）が珪藻化石群集、2）が主に花粉化石群集、木材遺体群集、3）がプラント・オパール化石である（第31図）。以下に、各化石群集について述べる。

## II．珪藻化石群集

### 1．概　要

仲迫間遺跡は、遺跡の概要および層序のところで述べたように、縄文時代の泥炭質砂層が堆積するような水成環境が存在し、それ以後現在に至るまで湧水による豊富な水に恵まれた環境が成立していたことが予想された。こうした水域が具体的にどのような環境であったか、またどのような環境変化が存在したか、遺跡の立地環境を考える上で重要であり、非常に興味ある事である。

珪藻は、10～500$\mu$mほどの珪酸質殻を持つ単細胞藻類で、殻の形やこれに刻まれた模様などから多くの珪藻種が調べられている。また、現生の生態から特定環境を指標する珪藻種群も設定されている(小杉、1988；安藤、1990)。一般的に、珪藻の生育域は海水域から淡水域までと広範囲に及び、中には河川や沼地あるいは池などの水成環境以外の陸地においてもわずかな水分が供給される環境、例えばコケの表面や湿った岩石の表面などで生育する珪藻種も知られている(小杉、1986)。こうした珪藻種あるいは珪藻群集の性質から、過去の堆積物中の珪藻化石を解析することによって、遺跡を埋積する堆積環境について知ることが可能である。

ここでは、こうした珪藻の特性を利用して、仲迫間遺跡において検出された第6層の木材遺体を含む泥炭質砂層や第5層のシルト質砂層あるいは第4層の黒色砂質シルトなど、それら堆積時の環境およびその変遷について検討する。

### 2．試料と処理方法

試料は、Aトレンチ西壁を中心に、微高地寄りのBトレンチ北壁および西側のCトレンチ西壁の試料である(第31図)。これらの試料は、以下に述べる方法で処理し、珪藻用プレパラートを作成した。

(1).試料から湿潤重量約1g程度を取り出し、計量した後ビーカーに移し、30%過酸化水素を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行う。

(2).反応終了後水を加え、1時間程してから上澄み液を除去し、コロイド分を捨てる。この作業を上澄み液が透明になるまで繰り返す（7回程度)。

(3).ビーカーに残った残渣は、遠心管に細粒分のみ回収する。

(4).マイクロピペットを用いて遠心管から適量を取り、カバーガラスに滴下し乾燥させる。乾燥後は、マウントメディア（封入剤）で封入し、プレパラートを作成する。

作成したプレパラートは光学顕微鏡下1,000倍で珪藻種を同定し、珪藻殻約200個体前後を計数した。

### 3．珪藻化石群集と堆積環境

3箇所のトレンチで検出された珪藻化石は、113分類群25属95種2亜種である（第4表～第6表）。各トレンチごとに、これら珪藻化石種あるいは珪藻化石群集の特徴から、珪藻分帯を設定した。Aトレンチ西壁およびCトレンチ西壁は各6帯に、またBトレンチ北壁は3帯にそれぞれ設定した（第32図～第34図）。以下では、各トレンチ別に珪藻化石種あるいは珪藻化石群集の特徴を述べ、その堆積環境について概観する。

［Aトレンチ西壁］

I帯は、木材遺体を含む泥炭質砂層の第6層中・下部に相当する。ここでは、浮遊生種の占める割合が非常に高く、Melosira italica や安藤（1990）の設定した湖沼沼沢湿地指標種群の標徴種とされる Melosira ambigua が優占し、他に Melosira ambigua と同一種群の Melosira distans が随伴する。ここでは、湖沼あるいは沼沢湿地環境のいずれかが推定されるが、他の珪藻化石に底生種が少ないことから、湖沼的要素が強く、池的な環境が推定される。

II帯は、木材遺体を含む泥炭質砂層の第6層上部に相当する。ここではI帯で見られた珪藻化石種のうち、前述の Melosira ambigua が約90%近く優占し、湖沼的要素が一段と強くなっている。

III帯は、ほぼ第5層に相当する。I帯などに比べ構成種には大きな変化は見られないものの、Melosira ambigua と同一の標徴種の Melosira distans が高い出現率を示し、池的環境としては変わらない。ただし、従来から Melosira distans は酸性種として知られていることから、水質は貧栄養環境に変化したと思われる。

IV帯は、ほぼ第4層に相当する。下位の珪藻帯に比べると、全体的に浮遊生種の割合はかなり低い。また、少ないながら底生種の種数が増加し、Melosira ambigua が上部に向かって著しい増加傾向を示している。堆積物が炭化物を多く含む黒色砂質シルトであることから、Melosira ambigua が指標する沼沢湿地的環境に変化しつつある段階と推定される。

V帯は、ほぼ第3層および第2層に相当する。このV帯は、Melosira ambigua の出現率が上部でやや減少するもののほぼ同率で出現している。ただし、底生種の種類あるいはその出現率は下位帯と比べ高くなる。こうしたことから、下位のIV帯が移行期にあるのに対し、このV帯は沼沢湿地環境が継続したものと推定される。

VI帯は、第1層の下部に相当する現水田床土である。Melosira 属は極端に減少し、代わって

第4表　仲迫間遺跡の珪藻化石産出表（その1）

| 分類群 | 適応性 | | | | Aトレンチ西壁 | | | | | | | | | | | | | Bトレンチ北壁 | | | | | | | | | | Cトレンチ西壁 | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 塩分 | pH | 流水 | 生活 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 |
| *Achnanthes lanceolata* | F-ind | Alka | Rhe | B | 1 | 1 | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *A. minutissima* | F-ind | ind | ind | B | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *A. spp.* | F-? | ? | ? | B | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - |
| *Actinella brasiliensis* | F-ind | Acid | ind | B | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - |
| *Amphora ovalis* | F-ind | Alka | Lim | P | - | 2 | 1 | 2 | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | 4 | - | 1 | 2 | - | 2 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *A. ovalis var. libyca* | F-ind | Alka | ind | P | 6 | 10 | - | 3 | 2 | 3 | 2 | 4 | 1 | 1 | - | 1 | - | 7 | 7 | 7 | 6 | 8 | 6 | 11 | - | - | 3 | 2 | 3 | - | 1 | - | 9 | 1 | 2 |
| *Anomoeoneis serians* | F-pho | Acid | ind | B | - | 1 | 4 | - | 1 | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *A. sphaerophora* | F-ind | Alka | ind | B | 4 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *Bacillaria paradoxa* | F-phi | ind | ind | B | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *Caloneis bacillum* | F-ind | Alka | Rhe | B | 4 | 1 | 2 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *C. silicula* | F-ind | Alka | ind | B | 1 | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 4 | - | - | 1 | 2 | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *C. spp.* | F-? | ? | ? | B | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 3 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *Cyclotella costa* | F-ind | Alka | Lim | P | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *C. meneghiniana* | F-phi | Alka | ind | P | - | - | - | - | - | 2 | 2 | 1 | 1 | 1 | 1 | - | 2 | - | - | - | - | - | - | - | 2 | 1 | 1 | - | - | - | - | - | - | - | 1 |
| *C. stelligera* | F-ind | Alka | Lim | P | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *Cymbella aspera* | F-ind | Alka | ind | B | - | - | - | 2 | - | 1 | 1 | 6 | - | 1 | 1 | 5 | - | - | 1 | - | - | 1 | 1 | 4 | 4 | 6 | 1 | 2 | 5 | - | - | 1 | 4 | 2 | 1 |
| *C. cesatii* | F-? | ? | ? | B | 1 | 1 | - | 3 | 2 | 3 | 1 | 1 | - | - | - | - | - | - | 3 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *C. cuspidata* | F-ind | ind | ind | B | 4 | 3 | - | 6 | - | 3 | 2 | 1 | 1 | - | - | - | - | 6 | 2 | 1 | 5 | 4 | 4 | 6 | 4 | 4 | 1 | 2 | 5 | 3 | 3 | 6 | - | 1 | - |
| *C. gracilis* | F-ind | ind | Lim | B | - | 1 | 1 | - | 2 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 2 | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *C. minuta* | F-ind | ind | ind | B | 8 | - | 6 | 1 | 1 | 1 | - | - | - | - | - | - | - | 10 | 7 | 3 | 5 | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - |
| *C. naviculiformis* | F-ind | ind | ind | B | 1 | 1 | - | 1 | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | 4 | 1 | 3 | 3 | 2 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 |
| *C. turgidula* | F-ind | Alka | ind | B | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *C. spp.* | F-? | ? | ? | B | - | - | 1 | - | 1 | - | 2 | - | - | - | - | 2 | - | 1 | - | 3 | - | - | 1 | 2 | 3 | 2 | 3 | - | 1 | - | - | - | 1 | - | - |
| *Diploneis finnica* | F-ind | Acid | Lim | B | - | - | - | - | - | - | - | 4 | 7 | - | 1 | 1 | 3 | - | - | - | - | - | - | - | - | 2 | 55 | 1 | 22 | 9 | 1 | 3 | 3 | 2 | 10 |
| *D. ovalis* | F-ind | ind | ind | B | 2 | - | - | - | 1 | 3 | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | 1 | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *D. yatukaensis* | F-ind | ? | Lim | B | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *D. spp.* | F-? | ? | ? | B | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *Eunotia arcus* | F-pho | Acid | ind | B | - | 3 | 3 | - | 3 | 5 | 2 | - | - | - | - | - | - | - | 1 | 2 | - | - | 1 | 1 | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *E. biarmofera* | F-pho | Acid | Lim | B | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | 4 | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *E. flexuosa* | F-pho | Acid | ind | B | - | - | - | - | - | 1 | - | 1 | - | 3 | - | 2 | 1 | - | - | 1 | - | - | 1 | 1 | 1 | - | - | 1 | - | 1 | - | - | - | 1 | - |
| *E. formica* | F-ind | ind | ? | B | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *E. latitaenia* | F-pho | Acid | Lim | B | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *E. lunaris* | F-pho | Acid | Lim | B | 1 | - | 1 | 1 | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *E. monodon* | F-pho | Acid | Lim | B | - | - | - | - | - | 1 | 3 | 3 | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | 1 | - | 1 | 6 | 11 | - | 2 | - | - | 1 | - | 2 | - | - |
| *E. naegelii* | F-pho | Acid | ? | B | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *E. nipponica* | F-pho | Acid | Lim | B | 1 | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *E. pectinalis* | F-pho | Acid | ind | B | 3 | - | - | - | - | 1 | 2 | - | - | - | 2 | - | 1 | - | 1 | 2 | 2 | 1 | 1 | 2 | 1 | - | 1 | 3 | - | 2 | - | - | - | 1 | - |
| *E. pectinalis var. minor* | F-pho | Acid | ind | B | 3 | - | - | - | - | 3 | - | - | - | - | - | - | - | 2 | - | - | - | 1 | - | 1 | - | - | 1 | - | - | - | - | 1 | - | - | - |
| *E. praerupta* | F-pho | Acid | ind | T | - | - | - | - | - | 2 | - | 1 | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | 1 | 1 | 3 | 1 | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *E. serra* | F-pho | Acid | Lim | B | - | - | - | - | - | - | 1 | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | 1 | - | - | - | 2 | 1 | 1 | - | 1 | - | - | - |
| *E. spp.* | F-? | ? | ? | B | 1 | - | - | - | - | 1 | 1 | 2 | - | - | - | - | - | 2 | 1 | 1 | 1 | - | - | 7 | 1 | 4 | 3 | 2 | - | - | 2 | - | - | - | - |
| *Fragilaria brevistriata* | F-ind | Alka | ind | P/B | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 2 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *F. construens* | F-ind | Alka | ind | P/B | - | - | - | - | 6 | - | - | - | - | - | 1 | - | 1 | 5 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *F. interstincta* | F-ind | Alka | ind | P/B | 1 | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *F. pinnata* | F-ind | Alka | ind | P/B | 8 | 3 | 12 | 6 | 17 | 3 | 5 | 3 | 1 | - | - | - | - | - | 1 | - | - | 1 | 2 | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | 1 | - |
| *F. virescens* | F-ind | ind | ind | P/B | - | 6 | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *F. spp.* | F-? | ? | ? | P/B | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *Frustulia rhomboides* | F-pho | Acid | Lim | B | - | 7 | 3 | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 3 | 3 | 13 | 7 | 2 | 2 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |

第５表　仲迫間遺跡の珪藻化石産出表（その２）

| 分類群 | 適応性 | | | | Aトレンチ西壁 | | | | | | | | | | | | | Bトレンチ北壁 | | | | | | | | | | Cトレンチ西壁 | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 塩分 | pH | 流水 | 生活 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 |
| *Frustulia spp.* | F-? | ? | ? | B | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *Gomphonema acuminatum* | F-ind | Alka | Lim | B | 1 | - | - | - | - | - | - | 2 | - | - | - | 4 | 3 | - | - | - | - | 1 | - | 1 | - | - | 5 | - | 5 | 2 | 1 | 9 | 4 | 7 | 5 |
| *G. augur* | F-ind | Alka | ind | B | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | 1 | - | 1 | - | - | - | 2 | - | - |
| *G. constrictum* | F-ind | Alka | Lim | B | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | 1 | 2 |
| *G. gracile* | F-ind | ind | Lim | B | 3 | - | 2 | - | - | - | 2 | 3 | 1 | - | - | - | - | 1 | 1 | - | - | - | 1 | 1 | - | 1 | - | - | - | - | 1 | 1 | 1 | - | - |
| *G. parvulum* | F-ind | ind | ind | B | 4 | 1 | 1 | - | 2 | 2 | 1 | 3 | - | - | - | - | - | 1 | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *G. sphaerophorum* | F-ind | Alka | Lim | B | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *G. spp.* | F-? | ? | ? | B | 3 | - | 2 | - | 2 | 2 | 2 | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | 2 | - | - | - | - | 1 | - | - | 1 | - | 1 | - | - | - |
| *Hantzschia amphioxys* | F-ind | Alka | ind | T | 2 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 2 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *Melosira ambigua* | F-ind | Alka | Lim | P | 10 | 52 | 117 | 116 | 107 | 135 | 83 | 45 | 36 | 58 | 182 | 50 | 49 | 17 | 47 | 37 | 49 | 69 | 70 | 77 | 53 | 20 | 61 | 50 | 46 | 46 | 30 | 80 | 48 | 64 | 55 |
| *M. distans* | F-pho | Acid | ind | P | - | 4 | 10 | 2 | 14 | 12 | 7 | 25 | 100 | 102 | 6 | 4 | 32 | 1 | 1 | 9 | 4 | 3 | 6 | 2 | 9 | 5 | 22 | 45 | 31 | 77 | 99 | 19 | 1 | - | 1 |
| *M. italica* | F-ind | Alka | ind | P | - | 1 | 2 | 1 | - | 6 | 36 | 46 | 65 | 51 | 5 | 121 | 105 | - | 52 | 1 | 8 | - | 1 | 16 | 58 | 31 | 11 | 82 | 65 | 53 | 58 | 63 | 100 | 94 | 129 |
| *M. pensacolae* | F-? | Acid | Lim | P | - | - | - | 1 | - | 4 | 14 | 18 | 2 | - | - | 5 | - | - | - | - | - | 1 | 4 | 13 | 39 | 2 | 2 | 2 | 7 | 1 | 1 | 1 | - | - | - |
| *M. varians* | F-ind | Alka | ind | P | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *M. spp.* | F-? | ? | ? | P | - | - | - | 1 | - | 1 | 1 | 2 | - | 3 | 1 | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 4 | 1 | 1 | - | - | - | - | - | - |
| *Meridion circulae* | F-ind | Alka | Rhe | B | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *Navicula americana* | F-ind | ind | Lim | B | 2 | - | - | - | 1 | - | - | 4 | 3 | 1 | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | 6 | 1 | 7 | 5 | 2 | 14 | 9 | 3 | 5 |
| *N. bacillum* | F-ind | Alka | ind | B | 12 | 5 | 1 | 1 | 1 | 4 | - | - | - | - | - | - | - | 5 | 1 | 2 | 1 | 2 | 2 | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *N. clementioides* | F-ind | Alka | ind | B | 2 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *N. coconeiformis* | F-pho | Acid | Rhe | B | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *N. cryptocephala* | F-ind | Alka | ind | B | 4 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 2 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *N. cuspidata* | F-ind | Alka | ind | B | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *N. elginensis* | F-ind | Alka | Rhe | B | 6 | - | - | 2 | 2 | - | - | 1 | - | - | - | - | - | 6 | - | - | - | - | - | 1 | - | 1 | 2 | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *N. exigua* | F-ind | Alka | ind | B | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *N. halophila* | F-ind | Alka | Lim | B | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *N. mutica* | F-ind | ind | ind | T | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *N. notha* | F-? | ? | ? | B | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 3 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *N. pupula* | F-ind | ind | ind | B | 2 | - | - | - | - | 2 | 1 | - | 1 | - | - | - | - | - | 2 | - | 1 | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *N. viridula* | F-ind | Alka | Rhe | B | 7 | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *N. spp.* | F-? | ? | ? | B | - | - | 2 | - | 5 | - | - | - | - | - | - | - | 1 | 1 | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *Neidium affine* | F-ind | ind | Lim | B | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 4 | - | 2 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *N. iridis* | F-pho | ind | Lim | B | 8 | 16 | 3 | 13 | 5 | 5 | 6 | 2 | 1 | - | - | - | - | 6 | 8 | 19 | 22 | 19 | 11 | 5 | 3 | 3 | 1 | 3 | - | 1 | - | 3 | 2 | - | - |
| *N. spp.* | F-? | ? | ? | B | - | 1 | - | - | 1 | 1 | - | 1 | 1 | - | 2 | - | - | 2 | - | - | 1 | - | 1 | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *Nitzschia amphibia* | F-ind | Alka | ind | B | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *N. parvula* | F-ind | ind | ind | B | 4 | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *N. spp.* | F-? | ? | ? | P/B | 1 | 2 | - | 1 | 2 | 1 | 1 | - | - | 1 | - | - | - | 1 | 1 | - | - | 2 | 3 | 1 | 1 | 2 | - | - | - | - | 1 | 1 | 1 | - | - |
| *Pinnularia acrosphaeria* | F-ind | ind | Lim | B | - | - | - | 2 | - | 1 | 1 | - | - | - | - | - | - | 1 | 3 | - | 1 | 2 | 3 | 4 | - | - | - | - | - | 2 | - | - | - | - | - |
| *P. bicepsoides* | F-? | ? | ? | B | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *P. braunii* | F-pho | Acid | Lim | B | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 2 | - | - | 1 | - | 3 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *P. cardinaliculus* | F-? | ? | ? | B | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | 5 | - | - | - | - | - | - | 2 | - | - |
| *P. divergentissima* | F-ind | Acid | ind | B | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *P. gibba* | F-ind | Acid | ind | B | 7 | 11 | 7 | 13 | 3 | 5 | 1 | - | - | - | - | - | - | 2 | 9 | 9 | 13 | 12 | 12 | 7 | 2 | 1 | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - |
| *P. hemiptera* | F-pho | ind | Lim | B | 2 | - | - | - | - | - | 6 | 3 | - | 1 | - | - | - | 1 | 1 | - | 1 | 2 | - | 4 | - | 2 | - | 1 | - | - | - | 1 | - | - | - |
| *P. interrupta* | F-? | Acid | ? | B | - | 2 | 1 | - | 2 | - | - | - | - | - | - | - | - | 3 | - | 1 | 4 | 2 | 2 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *P. maior* | F-ind | Acid | Lim | B | - | - | - | - | - | - | - | 1 | 2 | 2 | - | - | - | - | 1 | 1 | - | - | - | - | - | - | 1 | - | 3 | - | 1 | - | - | - | - |
| *P. microstauron* | F-ind | Acid | ind | B | 21 | 2 | 6 | 5 | 7 | 7 | 7 | 2 | - | - | - | 1 | - | 19 | 7 | 22 | 14 | 12 | 9 | 3 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *P. nodosa* | F-ind | Acid | ind | B | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *P. subrostrata* | F-? | ? | ? | B | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |

第6表　仲迫間遺跡の珪藻化石産出表（その3）

| 分類群 | 適応性 | | | | Aトレンチ西壁 | | | | | | | | | | | | | Bトレンチ北壁 | | | | | | | | | | Cトレンチ西壁 | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 塩分 | pH | 流水 | 生活 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 |
| *Pinnularia sudetica* | F-? | Acid | ? | B | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *P.　viridis* | F-ind | ind | ind | B | 9 | 21 | 7 | 8 | 8 | 6 | 2 | 9 | 2 | - | - | 2 | 2 | 19 | 9 | 15 | 14 | 18 | 11 | 9 | 6 | 5 | 1 | 4 | 3 | 4 | - | 2 | 4 | 5 | 1 |
| *P.　spp.* | F-? | ? | ? | B | 12 | 12 | 6 | 4 | 9 | 2 | 6 | 1 | 4 | 1 | - | 3 | 3 | 15 | 3 | 15 | 11 | 10 | 7 | 14 | 8 | 17 | 10 | 1 | 1 | 1 | 4 | - | 1 | 3 | 1 |
| *Rhopalodia gibberula* | F-phi | Alka | ind | B | 2 | 6 | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 10 | 8 | 1 | 6 | 2 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *Staurroneis acuta* | F-ind | Alka | ind | B | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | 1 | 2 | - |
| *S.　phoenicenteron* | F-ind | ind | ind | B | 24 | 24 | 5 | 8 | 2 | 2 | 2 | 3 | 1 | - | - | - | 2 | 23 | 14 | 20 | 17 | 12 | 17 | 3 | 3 | 4 | 5 | 3 | 3 | 2 | 2 | 4 | 7 | 10 | 5 |
| *S.　smithii* | F-ind | ind | Rhe | B | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *S.　spp.* | F-? | ? | ? | B | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | 1 | 1 | 1 | 2 | 5 | 1 | - | 2 | 1 | 1 | 1 | - | - | 2 | - | - | - | - | 1 | 3 | 1 | - |
| *Surirella angusta* | F-ind | Alka | Rhe | B | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | 1 | 1 | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *S.　linearis* | F-ind | ind | ind | B | 1 | 1 | 1 | 1 | - | 1 | 1 | 1 | - | - | - | - | - | 1 | - | - | 1 | - | 1 | - | - | - | - | 1 | 1 | 4 | 1 | - | - | - | - |
| *S.　tenera* | F-ind | Alka | Lim | P | - | - | 1 | 1 | 1 | 3 | - | - | - | - | - | - | - | 2 | 2 | 3 | - | 1 | - | - | - | - | - | 1 | 1 | 2 | - | - | - | - | - |
| *S.　spp.* | F-? | ? | ? | P/B | 1 | - | 3 | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | 1 | 2 | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *Synedra rumpens* | F-ind | ind | ind | P | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *S.　ulna* | F-ind | Alka | ind | P | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *S.　spp.* | F-? | ? | ? | P | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - |
| *Tabellaria fenestrata* | F-pho | Acid | Lim | P | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | 1 | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| *T.　flocculosa* | F-pho | Acid | Lim | P | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| 海水種 | | | | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 海－汽水種 | | | | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 汽水種 | | | | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 淡水種 | | | | | 206 | 209 | 213 | 208 | 216 | 239 | 212 | 202 | 231 | 225 | 207 | 204 | 210 | 205 | 210 | 211 | 205 | 209 | 201 | 211 | 210 | 139 | 207 | 213 | 214 | 217 | 210 | 212 | 205 | 200 | 219 |
| 計数した殻数 | | | | | 206 | 209 | 213 | 208 | 216 | 239 | 212 | 202 | 231 | 225 | 207 | 204 | 210 | 205 | 210 | 211 | 205 | 209 | 201 | 211 | 210 | 139 | 207 | 213 | 214 | 217 | 210 | 212 | 205 | 200 | 219 |

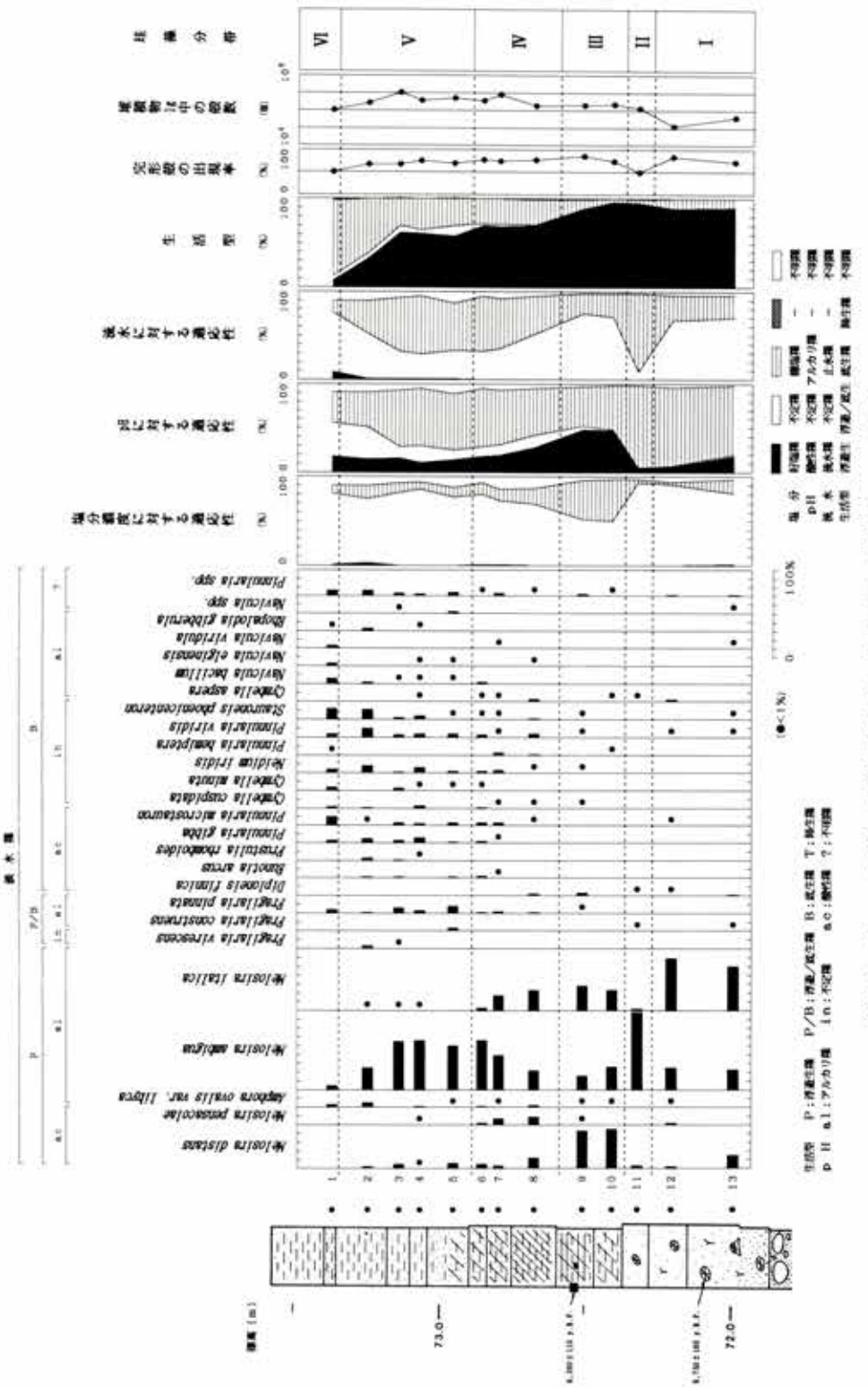
凡例　（適応性）

塩分濃度
- M　：海水種
- M-B　：海－汽水種
- B　：汽水種
- F-phi：淡水－好塩種
- F-ind：淡水－不定種
- F-pho：淡水－嫌塩種
- F-?　：淡水－不明種

pH
- Acid　：酸性種
- ind　：不定種
- Alka　：アルカリ種
- ?　：不明種

流水
- Lim　：止水種
- ind　：不定種
- Rhe　：流水種
- ?　：不明種

生活型
- P　：浮遊生種
- B　：底生種
- P/B　：浮遊生／底生種
- T　：陸生種
- ?　：不明種




第32図　Aトレンチ西壁の珪藻化石分布図（2%以上の珪藻種について表示）

底生種で安藤(前出)の設定した沼沢湿地付着生種群の Pinnularia viridis や Pinnularia gibba あるいは Stauroneis phoenicenteron などが出現している。このことから、水深のない沼沢地的環境が成立したものと考える。

［Bトレンチ北壁］

I帯は、第5層に相当する。底生種の Diploneis finnica がやや高い出現率を示すが、浮遊生種の Melosira 属が全体として高い出現率を示す。ただし、Aトレンチ西壁のIII帯あるいはCトレンチ西壁のII帯とはやや異なった環境を示していると思われる。

II帯は、第4層下部に相当し、I帯で出現した Diploneis finnica は激減し、代わって Melosira italica や沼沢湿地付着生種群の Pinnularia viridisやEunotia monodon などが比較的高い出現率を示す。

III帯は、第4層中部に相当し、浮遊生種の占める割合が高い。II帯において出現した底生種はやや減少し、代わって浮遊生種の Melosira pensacolae が高率で出現する。

IV帯は、第3層および第2層に相当する。ここでは、Melosira ambigu が比較的高い割合を示すものの、上部に向かって減少し、代わって底生種の Pinnularia viridis や Pinnularia gibba などが増加傾向を示している。

V帯は、第1層下部に相当し、現水田床土である。これは、底生種組成はほぼIV帯と同様であるが、浮遊生種の Melosira italica が高率で出現する点で異なる。Aトレンチ西壁のVI帯と比べやや水深があるなどの違いが考えられる。

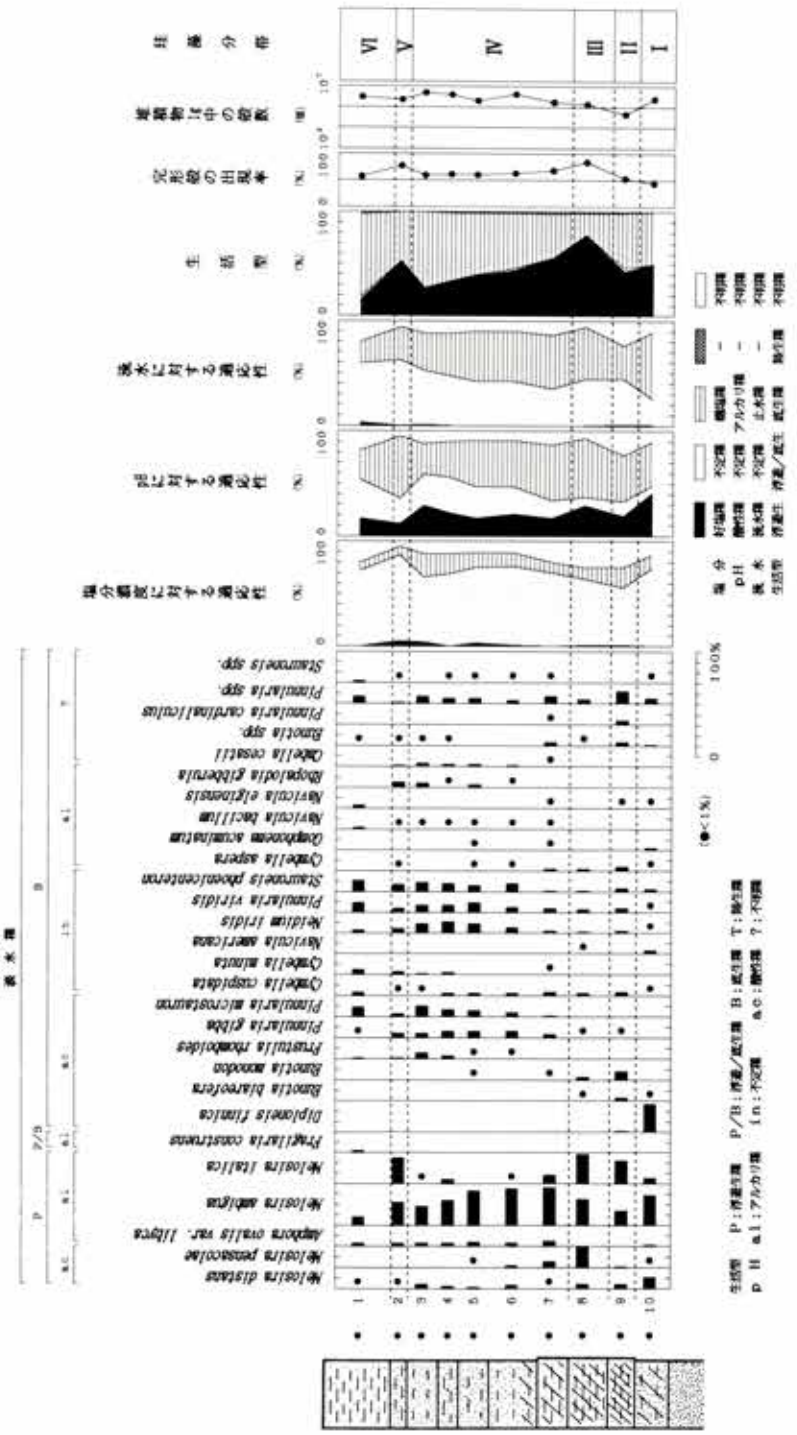
VI帯は、第1層上部の現水田耕作土である。ここでは、Aトレンチ西壁のVI帯とほぼ同様の珪藻化石群集が見られることから、水深のない沼沢的環境が推定される。

［Cトレンチ西壁］

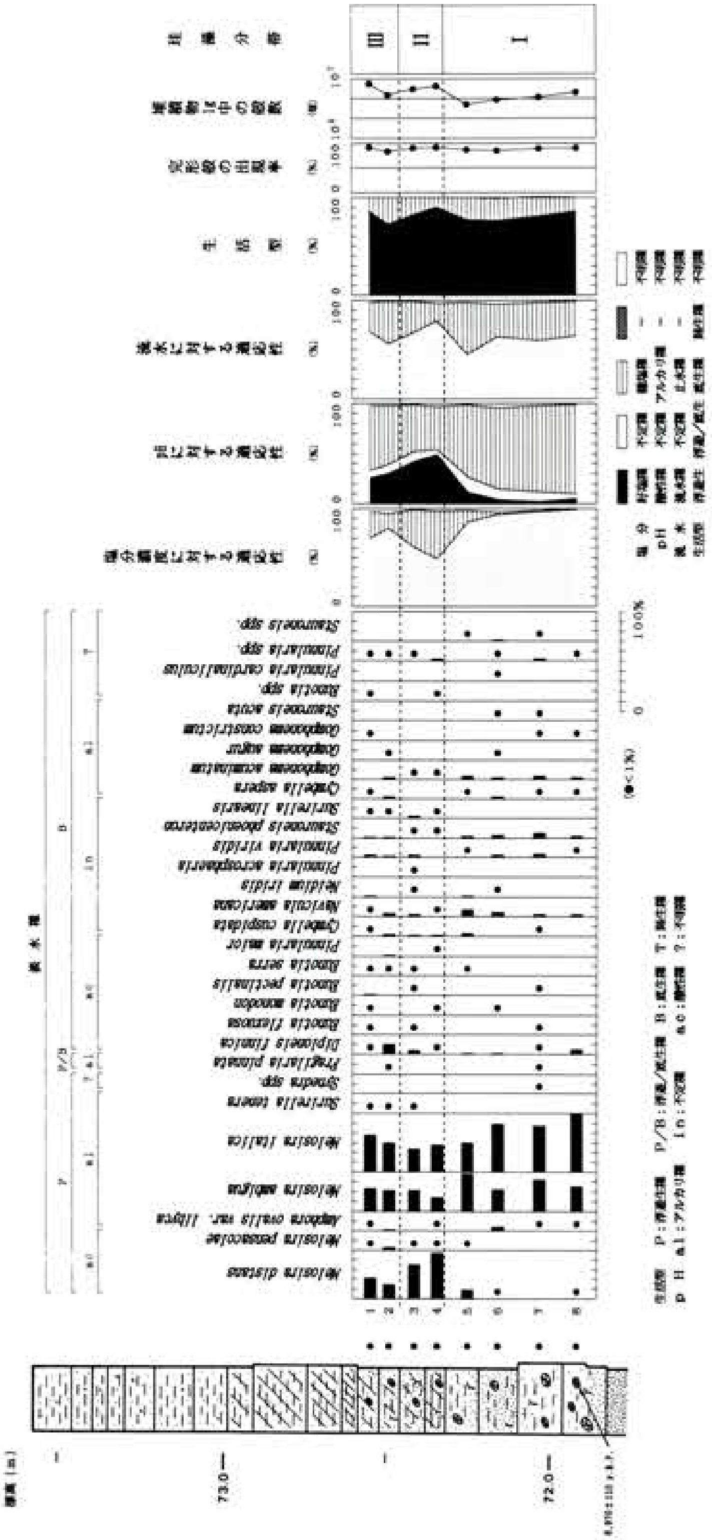
I帯は、木材遺体を含む泥炭質砂層の第6層全体に相当する。Aトレンチ西壁では珪藻帯は下部と上部に分帯されたが、このI帯はAトレンチ西壁の下部とほぼ同様の珪藻化石群集組成を示している。

II帯は、第5層の下部に相当する。湖沼沼沢湿地指標種群の Melosira distans の占める割合が高くなる。これは、Aトレンチ西壁のIII帯とほぼ同様の珪藻化石群集組成を示している。

III帯は、第5層上部に相当する。II帯に比べ、先の Melosira distans が僅かながら減少し、代わって Melosira italica や底生種の占める割合が高くなる。




第33図　Bトレンチ北壁の珪藻化石分布図（2%以上の珪藻種について表示）




第34図　Cトレンチ西壁の珪藻化石分布図（0.5%以上の珪藻種について表示）

## 4．堆積環境の変遷

珪藻化石群集から見た堆積環境は、Aトレンチ西壁あるいはCトレンチ西壁を中心に、概ね4期の環境変化が認められる。

第1期は、縄文時代における泥炭質砂の形成期に相当し、湖沼沼沢湿地指標種群のMelosira ambiguaなどで指標される池的環境である。これは、湧水による豊富な水量に満たされ、かつ泥質分を流し去る程度の運搬営力のある、淀みのない環境が想定される。特に、上部ではMelosira ambiguaが優占し、その傾向が一段と明確に示されている。これは、花粉化石において池などに生育するジュンサイ属などの花粉化石が検出されていることとからも支持される。

第2期は、縄文時代の後半に相当する第5層に相当し、第1期と同程度の水深のある環境と思われるが、浮遊生種でかつ酸性種のMelosira distansが多く出現するなど珪藻化石種に変化が見られることと、堆積物がシルト質であることから、運搬営力が低下した貧栄養環境が存在したと考える。

第3期は、下位において一旦は減少した湖沼的要素を持ったMelosira ambiguaが、沼沢湿地的要素で再度出現率を高める沼沢地的環境が継続した。

第4期は、Melosira ambiguaによって指標される沼沢湿地環境は大きく衰退し、底生種のPinnularia viridisなどが指標する水深の浅い沼沢湿地的環境が成立する現水田環境である。

このように、仲迫間遺跡の堆積環境は、水深のある環境という点では、近世・近代まで継続していたものと推定され、湧水による豊富な水資源の存在が示される。

## Ⅲ．花粉化石群集

### 1．概要および試料と方法

縄文時代から現在に至るまでの伸迫間遺跡周辺における植生変遷史を解明する目的で、花粉化石の検討を行った。

試料は、Aトレンチ西壁、Cトレンチ西壁、Bトレンチ北壁より採取した。花粉化石群集の検討は、Aトレンチ西壁においては13試料、Cトレンチ西壁においては8試料、Bトレンチ北壁においては10試料の計31試料について行った。

花粉化石の抽出は、試料2～3gを10%水酸化カリウム処理(湯煎約15分)による粒子分離、フッ化水素酸処理(約30分)による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトリシス処理(氷酢酸による脱水、濃硫酸1に対して無水酢酸9の混液で湯煎約5分)の順に化学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、全ての試料において重液分離(臭化亜鉛を比重2.15に調整)による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分撹拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入した。検鏡は、プレパラート全面を走査し、その間に出現した全ての種類について同定・計数した。その計数結果をもとに、樹木花粉は樹木花粉総数を基数とし、草本花粉およびシダ植物胞子は花粉・胞子総数を基数として、各分類群の出現率を百分率で算出した。ただし、クワ科、バラ科、マメ科は樹木と草本のいずれをも含む分類群であるが、区別が困難なため、ここでは便宜的に草本花粉に含めた。なお、複数の分類群をハイフンで結んだものは、分類群間の区別が困難なものである。

### 2．花粉化石群集の記載

各地点の花粉化石群集

［Aトレンチ西壁の花粉化石群集帯］

Aトレンチ西壁で同定された分類群数は樹木花粉38、草本花粉32、形態分類で示したシダ植物胞子2である。Aトレンチ西壁の花粉化石群集は、その種構成や各分類群の出現率よって下位より3つの花粉化石群集帯を設定することができる。但し、試料の中で樹木花粉総数が100未満のものは花粉化石分布図としては示さなかったが、それらも考慮して花粉化石群集帯を設定した。なお、樹木花粉総数が100未満の試料は、炭化物片が非常に多いために花粉の濃集の度合いが弱くなってしまったもの、あるいは花粉の保存状態から考えて、花粉・胞子の多くが分解

されてしまったものである。

I帯(試料9～13)：樹木花粉の占める割合は、おおむね80%以上と高率である。その中でコ

第7表　Aトレンチ西壁から産出した花粉化石一覧表

| 和名 | 学名 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 樹木 | | | | | | | | | | | | | | |
| モミ属 | *Abies* | - | - | - | - | - | - | 1 | - | 3 | 8 | 3 | - | 1 |
| ツガ属 | *Tsuga* | - | - | 1 | - | - | 1 | - | 1 | 1 | - | - | - | - |
| マツ属複維管束亜属 | *Pinus* subgen. *Diploxylon* | 13 | 25 | - | - | - | 1 | 7 | - | 10 | 38 | 12 | 1 | 14 |
| マツ属(不明) | *Pinus* (Unknown) | - | 2 | 1 | - | - | - | 1 | 1 | 1 | 5 | - | - | 1 |
| コウヤマキ属 | *Sciadopitys* | - | - | 1 | 1 | 2 | 7 | 11 | - | 8 | 23 | 3 | 1 | 6 |
| スギ属 | *Cryptomeria* | 45 | 9 | - | 3 | 4 | 3 | 19 | - | 3 | 6 | 1 | 1 | 1 |
| イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科 | T.- C. | 24 | 3 | 2 | 2 | 6 | 15 | 48 | - | 23 | 173 | 22 | 20 | 82 |
| ヤナギ属 | *Salix* | 1 | - | - | - | - | - | 1 | - | - | 5 | - | - | 1 |
| サワグルミ属 | *Pterocarya* | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | 1 |
| クルミ属 | *Juglans* | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | 5 | 1 | 1 | 3 |
| クマシデ属－アサダ属 | *Carpinus* - *Ostrya* | - | 1 | - | 3 | - | - | 5 | 1 | 11 | 52 | 12 | 10 | 99 |
| ハシバミ属 | *Corylus* | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - |
| カバノキ属 | *Betula* | - | - | - | - | 1 | 1 | - | - | - | 3 | - | 1 | 6 |
| ハンノキ属 | *Alnus* | 3 | 2 | - | 4 | 3 | 5 | 27 | 6 | 30 | 248 | 52 | 58 | 433 |
| ブナ属 | *Fagus* | 2 | - | - | 1 | 2 | 1 | 3 | - | 3 | 50 | 10 | 3 | 43 |
| コナラ属コナラ亜属 | *Quercus* subgen. *Lepidobalanus* | 28 | 5 | 4 | 7 | 4 | 10 | 94 | 18 | 112 | 726 | 175 | 100 | 637 |
| コナラ属アカガシ亜属 | *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* | - | - | - | 10 | 3 | 12 | 37 | 15 | 3 | 24 | 5 | 1 | 6 |
| クリ属 | *Castanea* | 9 | 4 | - | 6 | - | 2 | 18 | - | 3 | 12 | 2 | - | 17 |
| シイノキ属 | *Castanopsis* | - | - | - | 6 | 1 | 1 | 15 | - | 1 | 2 | - | - | - |
| ニレ属－ケヤキ属 | *Ulmus* - *Zelkova* | - | - | - | - | - | - | 1 | 2 | 6 | 31 | 8 | 4 | 28 |
| エノキ属－ムクノキ属 | *Celtis-Aphananthe* | - | - | - | - | 1 | - | - | 2 | 7 | 31 | 9 | 4 | 40 |
| ヤドリギ属 | *Viscum* | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 2 |
| フサザクラ属 | *Euptelea* | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 |
| カツラ属 | *Cercidiphyllum* | - | - | - | - | - | 1 | - | 1 | - | - | - | - | 1 |
| モクレン属 | *Magnolia* | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - |
| サンショウ属 | *Zanthoxylum* | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 3 |
| コクサギ属 | *Orixa* | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 |
| キハダ属 | *Phellodendron* | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 |
| アカメガシワ属 | *Mallotus* | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | 1 |
| ウルシ属 | *Rhus* | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - |
| モチノキ属 | *Ilex* | 1 | - | - | - | - | - | 1 | - | 1 | 10 | - | - | 3 |
| カエデ属 | *Acer* | - | - | - | - | - | 1 | - | - | 1 | 5 | 3 | - | 6 |
| トチノキ属 | *Aesculus* | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 3 | - | - | 2 |
| クロウメモドキ科 | Rhamnaceae | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 |
| ヒサカキ属近似種 | cf. *Eurya* | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 5 | 1 | - | 42 |
| ウコギ科 | Araliaceae | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | 1 | - | 3 | 1 |
| エゴノキ属 | *Styrax* | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | 3 | 1 | 5 |
| トネリコ属 | *Fraxinus* | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 11 | - | - | 1 |
| ガマズミ属 | *Viburnum* | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | 1 | - | 7 |
| 草本 | | | | | | | | | | | | | | |
| ガマ属 | *Typha* | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | 6 |
| ヒルムシロ属 | *Potamogeton* | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 2 |
| オモダカ属 | *Sagittaria* | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 2 | - | - | - |
| クロモ | *Hydrilla verticillata* Royle. | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | 6 | - | - | 1 |
| ミズオオバコ属 | *Ottelia* | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 2 | - | - | - |
| イネ科 | Gramineae | 38 | 15 | 7 | 19 | 12 | 14 | 20 | 8 | 23 | 189 | 19 | 6 | 38 |
| カヤツリグサ科 | Cyperaceae | 6 | 1 | - | 2 | 1 | 6 | 8 | 14 | 22 | 136 | 7 | 2 | 24 |
| イボクサ属 | *Aneilema* | - | - | - | - | - | - | - | 2 | - | 12 | - | - | 4 |
| アヤメ科 | Iridaceae | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | 1 | - | - | - |
| クワ科 | Moraceae | 1 | - | - | 1 | 1 | 1 | - | - | 2 | 16 | 10 | - | 13 |
| ギシギシ属 | *Rumex* | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 |
| サナエタデ節－ウナギツカミ節 | *Polygonum* sect. Persicaria-Echinocaulon | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - |
| ソバ属 | *Fagopyrum* | 1 | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| ジュンサイ属 | *Brasenia* | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 23 | 9 | - | - |
| コウホネ属 | *Nuphar* | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 2 | 1 | - | - |
| ヒツジグサ属 | *Nymphaea* | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 3 | - | - | - |
| カラマツソウ属 | *Thalictrum* | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 3 | 2 | - | - |
| アブラナ科 | Cruciferae | 9 | 1 | - | 1 | 1 | 2 | 3 | - | - | - | - | - | - |
| キジムシロ属近似種 | cf. *Potentilla* | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 |
| ワレモコウ属 | *Sanguisorba* | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - |
| 他のバラ科 | other Rosaceae | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | 1 |
| マメ科 | Leguminosae | - | - | - | 1 | - | - | 4 | - | 1 | 7 | 2 | 2 | 16 |
| ミソハギ属 | *Lythrum* | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - |
| キカシグサ属 | *Rotala* | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| アリノトウグサ属 | *Haloragis* | - | - | 2 | 4 | 2 | - | - | - | - | - | - | - | 2 |
| フサモ属 | *Myriophyllum* | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - |
| セリ科 | Umbelliferae | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | 2 | - | - | - |
| イヌコウジュ属 | *Mosla* | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 |
| ホタルブクロ属－ツリガネニンジン属 | *Campanula* - *Adenophora* | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - |
| ヨモギ属 | *Artemisia* | 1 | - | 1 | 1 | - | 1 | 4 | 2 | 3 | 12 | 6 | 2 | 35 |
| 他のキク亜科 | other Tubuliflorae | - | - | - | - | - | - | - | 1 | 1 | 2 | - | - | - |
| タンポポ亜科 | Liguliflorae | - | - | - | 1 | - | 1 | 1 | - | - | 1 | 1 | - | - |
| シダ植物 | | | | | | | | | | | | | | |
| 単条型胞子 | Monolete spore | - | 1 | - | 1 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 3 | 1 | 1 | 12 |
| 三条型胞子 | Trilete spore | - | - | - | - | - | 1 | 2 | 1 | 2 | 5 | - | - | 1 |
| 樹木花粉 | Arboreal pollen | 126 | 51 | 9 | 43 | 27 | 61 | 290 | 47 | 228 | 1482 | 324 | 209 | 1497 |
| 草本花粉 | Nonarboreal pollen | 58 | 18 | 10 | 30 | 17 | 26 | 42 | 27 | 57 | 420 | 57 | 13 | 145 |
| シダ植物胞子 | Spores | 0 | 1 | 0 | 1 | 2 | 3 | 4 | 3 | 4 | 8 | 1 | 1 | 13 |
| 花粉・胞子総数 | Total Pollen & Spores | 184 | 70 | 19 | 74 | 46 | 90 | 336 | 77 | 289 | 1910 | 382 | 223 | 1655 |
| 不明花粉 | Unknown pollen | 22 | 9 | 4 | 34 | 14 | 33 | 44 | 12 | 38 | 157 | 19 | 13 | 153 |

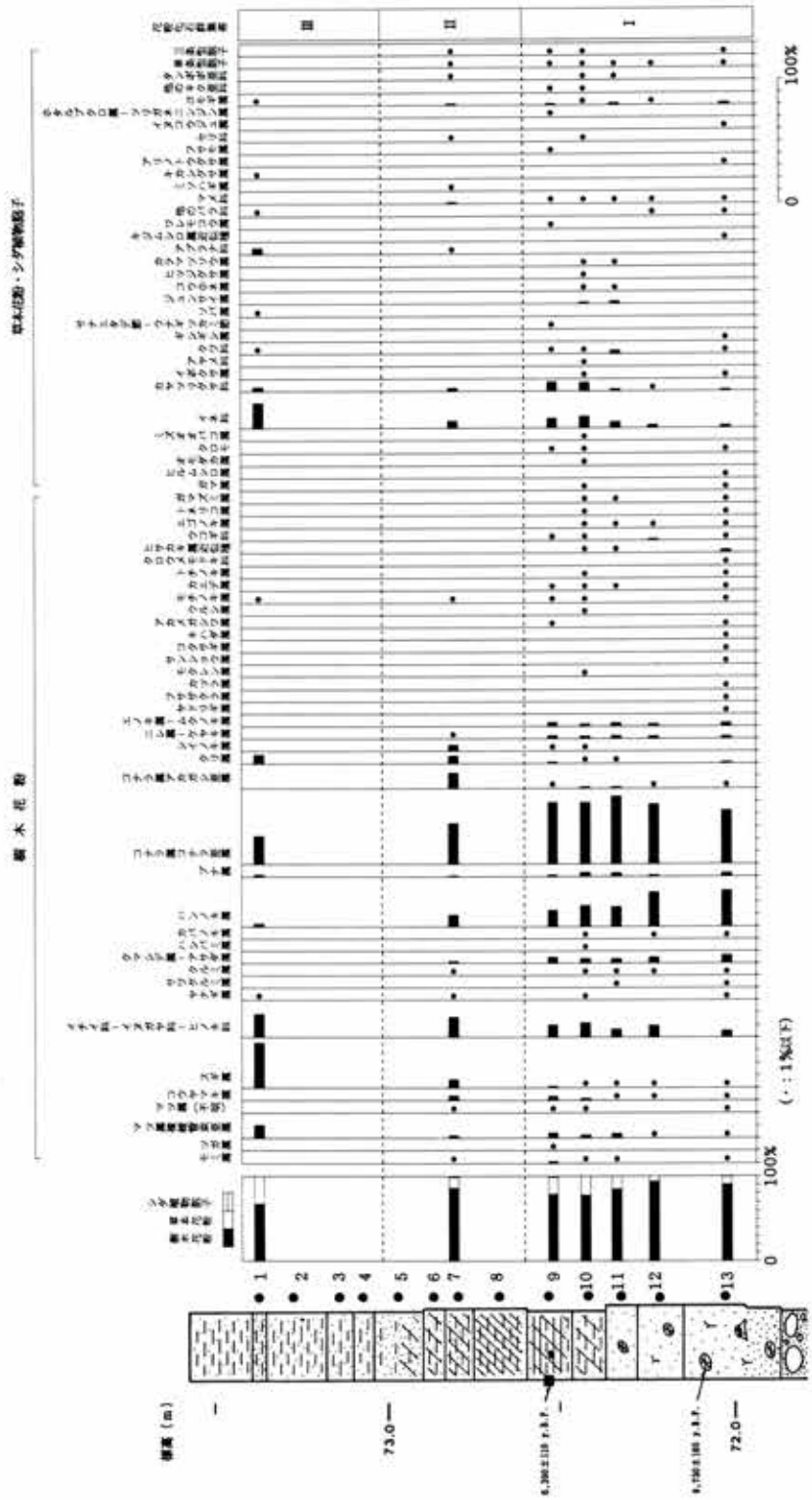
ナラ属コナラ亜属が50%前後で優占し、ハンノキ属、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科が、これに次ぐ。他に、マツ属複維管束亜属、コウヤマキ属、スギ属、クマシデ属—アサダ属、ブナ属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属—ケヤキ属、エノキ属—ムクノキ属が低率ながら連続して

第8表　Bトレンチ北壁から産出した花粉化石一覧表

| 和名 | 学名 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 樹木 | | | | | | | | | | | |
| モミ属 | *Abies* | - | - | - | 1 | - | - | 1 | 1 | - | 1 |
| ツガ属 | *Tsuga* | - | 1 | - | 1 | 1 | 1 | - | - | - | - |
| マツ属複維管束亜属 | *Pinus* subgen. *Diploxylon* | 20 | 74 | 94 | 32 | 7 | 2 | 3 | 3 | - | 2 |
| マツ属（不明） | *Pinus* (Unknown) | 5 | 19 | 8 | 7 | 1 | 4 | - | 2 | - | 3 |
| コウヤマキ属 | *Sciadopitys* | - | - | 2 | 11 | 1 | 10 | 5 | 4 | 4 | 4 |
| スギ属 | *Cryptomeria* | 32 | 190 | 25 | 10 | 2 | 9 | - | 8 | - | 8 |
| イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科 | T.- C. | 5 | 63 | 1 | 11 | 1 | 32 | 6 | 87 | 39 | 143 |
| ヤナギ属 | *Salix* | - | 1 | 1 | 1 | - | 1 | - | 2 | 3 | - |
| クルミ属 | *Juglans* | - | 1 | - | - | - | 1 | 1 | - | - | 1 |
| クマシデ属－アサダ属 | *Carpinus* - *Ostrya* | 2 | 5 | 1 | 8 | 2 | 12 | 3 | 4 | 4 | 42 |
| ハシバミ属 | *Corylus* | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | 1 |
| カバノキ属 | *Betula* | - | 7 | - | 3 | - | - | - | 1 | 1 | 3 |
| ハンノキ属 | *Alnus* | 1 | 26 | - | 6 | 5 | 29 | 15 | 74 | 38 | 246 |
| ブナ属 | *Fagus* | - | 12 | 1 | 2 | 1 | - | - | 2 | 4 | 43 |
| コナラ属コナラ亜属 | *Quercus* subgen. *Lepidobalanus* | 8 | 190 | 15 | 104 | 17 | 101 | 37 | 157 | 141 | 755 |
| コナラ属アカガシ亜属 | *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* | 1 | 16 | - | 11 | 3 | 27 | 9 | 31 | 16 | 30 |
| クリ属 | *Castanea* | 2 | 37 | 1 | 20 | 9 | 17 | 6 | 17 | 49 | 16 |
| シイノキ属 | *Castanopsis* | 1 | 4 | - | 3 | 5 | 5 | 2 | 11 | 3 | 3 |
| ニレ属－ケヤキ属 | *Ulmus* - *Zelkova* | - | 3 | - | - | - | - | - | - | 2 | 24 |
| エノキ属－ムクノキ属 | *Celtis-Aphananthe* | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 | 7 |
| サクラ属近似種 | cf. *Prunus* | - | 2 | - | - | - | - | - | - | - | - |
| サンショウ属 | *Zanthoxylum* | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - |
| ウルシ属 | *Rhus* | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - | 1 |
| モチノキ属 | *Ilex* | - | - | - | - | 1 | 2 | 1 | - | 1 | 6 |
| カエデ属 | *Acer* | - | 3 | - | - | - | - | - | - | 3 | 9 |
| トチノキ属 | *Aesculus* | - | 1 | - | 1 | 2 | 2 | - | 1 | - | - |
| ブドウ属 | *Vitis* | - | - | - | - | 1 | 1 | - | - | - | - |
| ウコギ科 | Araliaceae | - | - | - | - | - | - | - | 1 | 1 | 2 |
| ミズキ属 | *Cornus* | - | - | - | - | - | - | - | - | - | 1 |
| ガマズミ属 | *Viburnum* | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - |
| 草本 | | | | | | | | | | | |
| ガマ属 | *Typha* | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - |
| オモダカ属 | *Sagittaria* | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | - |
| イネ科 | Gramineae | 34 | 209 | 47 | 130 | 34 | 64 | 9 | 16 | 9 | 90 |
| カヤツリグサ科 | Cyperaceae | 1 | 11 | 6 | 4 | 4 | 25 | 14 | 26 | 25 | 16 |
| イボクサ属 | *Aneilema* | - | - | - | - | - | - | - | - | 3 | 5 |
| クワ科 | Moraceae | - | 4 | - | 8 | - | 2 | 1 | 2 | - | 3 |
| ソバ属 | *Fagopyrum* | - | 2 | - | 1 | 2 | - | - | - | - | - |
| アカザ科 | Chenopodiaceae | - | - | - | - | - | 1 | - | - | - | - |
| ナデシコ科 | Caryophyllaceae | - | 1 | - | - | 1 | - | - | - | - | - |
| ジュンサイ属 | *Brasenia* | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - | 1 |
| カラマツソウ属 | *Thalictrum* | - | 1 | 1 | 1 | - | - | - | - | - | - |
| 他のキンポウゲ科 | other Ranunculaceae | - | - | - | 1 | - | - | - | - | 1 | - |
| タケニグサ属 | *Macleaya* | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - | - |
| アブラナ科 | Cruciferae | 4 | 25 | 2 | 8 | 2 | 32 | - | - | - | - |
| キジムシロ属近似種 | cf. *Potentilla* | - | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - |
| ワレモコウ属 | *Sanguisorba* | - | - | - | 1 | 1 | - | - | - | - | - |
| 他のバラ科 | other Rosaceae | - | 4 | - | 2 | - | - | - | - | - | - |
| マメ科 | Leguminosae | 3 | 71 | - | - | - | - | - | - | - | - |
| トウダイグサ属近似種 | cf. *Euphorbia* | - | 2 | - | - | - | - | - | - | - | - |
| ツリフネソウ属 | *Impatiens* | - | - | - | - | - | 1 | - | 2 | - | - |
| キカシグサ属 | *Rotala* | 1 | 1 | - | - | - | - | - | - | - | - |
| アリノトウグサ属 | *Haloragis* | - | 50 | 4 | 34 | 6 | 4 | - | - | - | - |
| フサモ属 | *Myriophyllum* | - | - | - | 1 | - | - | - | - | - | 1 |
| セリ科 | Umbelliferae | - | - | - | - | 1 | 2 | - | 1 | - | 2 |
| シソ科 | Labiatae | - | - | - | - | - | - | - | 1 | - | - |
| ヨモギ属 | *Artemisia* | 1 | 13 | 1 | 9 | 5 | 14 | 2 | 5 | 1 | 20 |
| 他のキク亜科 | other Tubuliflorae | - | 10 | 1 | 4 | - | 1 | - | - | 1 | 1 |
| タンポポ亜科 | Liguliflorae | - | 35 | 1 | 9 | - | 2 | - | - | - | - |
| シダ植物 | | | | | | | | | | | |
| 単条型胞子 | Monolete spore | - | 1 | - | 1 | 3 | 4 | 2 | 4 | 1 | 1 |
| 三条型胞子 | Trilete spore | 1 | - | - | - | 1 | 2 | - | 5 | 1 | 2 |
| 樹木花粉 | Arboreal pollen | 77 | 655 | 149 | 232 | 61 | 258 | 89 | 406 | 310 | 1351 |
| 草本花粉 | Nonarboreal pollen | 45 | 440 | 63 | 214 | 56 | 148 | 27 | 54 | 40 | 139 |
| シダ植物胞子 | Spores | 1 | 1 | 0 | 1 | 4 | 6 | 2 | 9 | 2 | 3 |
| 花粉・胞子総数 | Total Pollen & Spores | 123 | 1096 | 212 | 447 | 121 | 412 | 118 | 469 | 352 | 1493 |
| 不明花粉 | Unknown pollen | 10 | 99 | 12 | 44 | 25 | 50 | 19 | 34 | 52 | 181 |

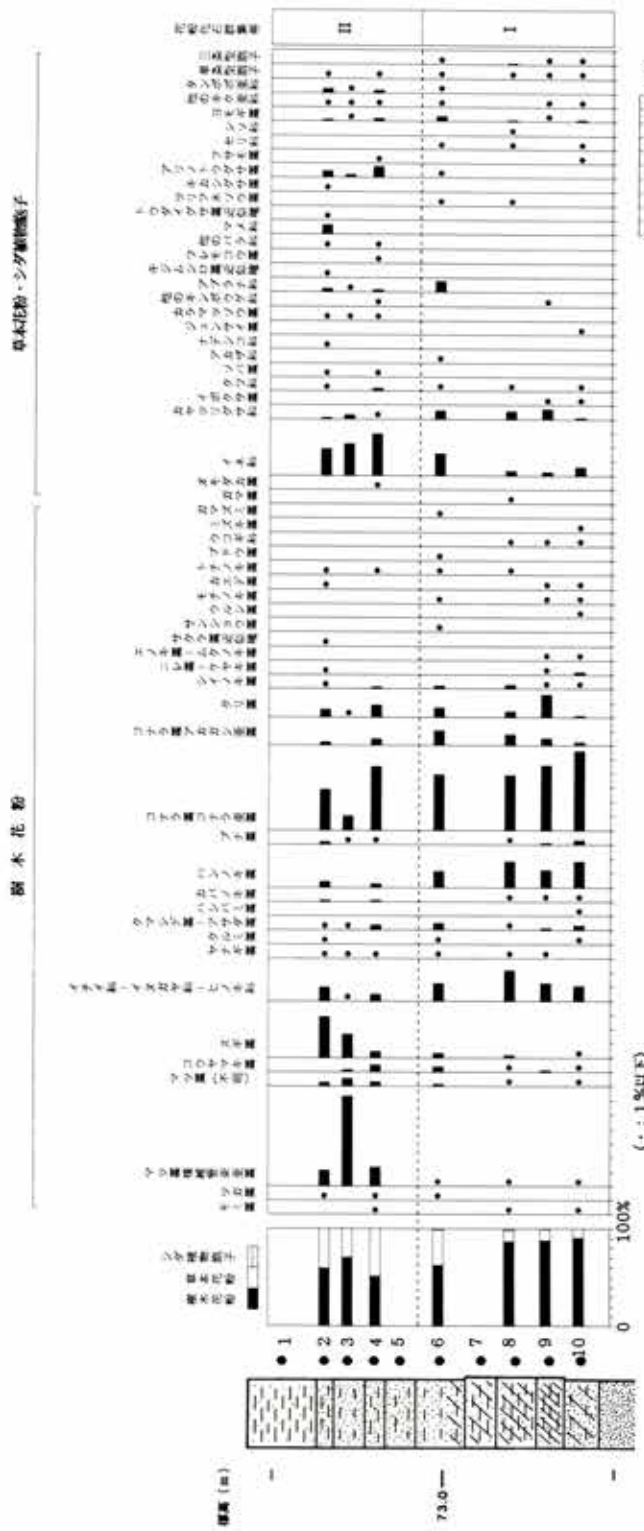
## 第9表　Cトレンチ西壁から産出した花粉化石一覧表

| 和名 | 学名 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 樹木 | | | | | | | | | |
| モミ属 | *Abies* | 21 | 4 | - | 4 | - | 2 | - | - |
| ツガ属 | *Tsuga* | - | 1 | - | 2 | - | - | - | - |
| マツ属単維管束亜属 | *Pinus* subgen. *Haploxylon* | - | - | - | - | - | - | - | 1 |
| マツ属複維管束亜属 | *Pinus* subgen. *Diploxylon* | 86 | 34 | 8 | 27 | 2 | 4 | 6 | 2 |
| マツ属（不明） | *Pinus* (Unknown) | 4 | 3 | 2 | 1 | 1 | - | - | - |
| コウヤマキ属 | *Sciadopitys* | 60 | 25 | 6 | 15 | 1 | - | 2 | - |
| スギ属 | *Cryptomeria* | 13 | 4 | 3 | 7 | 1 | 4 | 3 | 3 |
| イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科 | T.- C. | 172 | 148 | 18 | 122 | 37 | 19 | 27 | 2 |
| ヤナギ属 | *Salix* | 1 | - | - | 1 | - | - | - | - |
| サワグルミ属 | *Pterocarya* | - | - | - | 1 | - | 1 | - | - |
| クルミ属 | *Juglans* | 1 | 1 | 1 | 2 | 1 | 1 | - | - |
| クマシデ属－アサダ属 | *Carpinus* - *Ostrya* | 35 | 22 | 4 | 33 | 15 | 10 | 8 | 2 |
| ハシバミ属 | *Corylus* | - | - | 2 | - | - | - | - | - |
| カバノキ属 | *Betula* | 6 | - | - | 3 | 2 | 1 | 2 | - |
| ハンノキ属 | *Alnus* | 73 | 109 | 30 | 166 | 48 | 55 | 43 | 45 |
| ブナ属 | *Fagus* | 20 | 30 | 2 | 32 | 14 | 6 | 7 | 7 |
| コナラ属コナラ亜属 | *Quercus* subgen. *Lepidobalanus* | 514 | 394 | 111 | 462 | 367 | 244 | 213 | 176 |
| コナラ属アカガシ亜属 | *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* | 54 | 14 | 3 | 6 | 6 | - | 2 | 1 |
| クリ属 | *Castanea* | 7 | 5 | 3 | 1 | 8 | 9 | 7 | 16 |
| シイノキ属 | *Castanopsis* | 5 | 2 | - | - | - | 4 | - | 1 |
| ニレ属－ケヤキ属 | *Ulmus* - *Zelkova* | 12 | 16 | 2 | 18 | 5 | 2 | 2 | 1 |
| エノキ属－ムクノキ属 | *Celtis-Aphananthe* | 10 | 18 | 5 | 16 | 9 | 2 | 5 | 2 |
| ヤドリギ属 | *Viscum* | - | 2 | - | - | - | 1 | - | - |
| カツラ属 | *Cercidiphyllum* | - | - | - | 1 | - | - | - | - |
| モクレン属 | *Magnolia* | 1 | 3 | 2 | - | - | - | - | - |
| サンショウ属 | *Zanthoxylum* | 1 | - | - | 1 | - | - | - | - |
| コクサギ属 | *Orixa* | - | - | - | - | - | 1 | - | - |
| キハダ属 | *Phellodendron* | - | - | - | - | - | - | - | 1 |
| アカメガシワ属 | *Mallotus* | 1 | 1 | - | - | - | - | - | 2 |
| ウルシ属 | *Rhus* | - | 1 | - | - | - | - | - | - |
| モチノキ属 | *Ilex* | 2 | 4 | 1 | 7 | 2 | 1 | - | 1 |
| カエデ属 | *Acer* | 2 | 1 | 1 | 1 | 5 | - | 6 | - |
| トチノキ属 | *Aesculus* | 1 | - | 1 | 1 | 3 | 5 | - | 8 |
| ムクロジ属近似種 | cf. *Sapindus* | - | 1 | - | 1 | - | - | - | - |
| ブドウ属 | *Vitis* | - | - | - | - | - | - | - | 2 |
| ヒサカキ属近似種 | cf. *Eurya* | 1 | 1 | - | 1 | 2 | 3 | 3 | 18 |
| ウコギ科 | Araliaceae | - | - | - | 1 | - | 1 | - | 3 |
| ミズキ属 | *Cornus* | - | 1 | - | - | - | - | - | 1 |
| ツツジ科 | Ericaceae | - | 1 | - | - | - | - | - | - |
| エゴノキ属 | *Styrax* | - | 2 | - | 1 | 5 | 2 | 7 | 2 |
| トネリコ属 | *Fraxinus* | 1 | - | - | 8 | 3 | - | - | - |
| ガマズミ属 | *Viburnum* | - | - | - | 1 | 3 | 1 | 1 | - |
| 草本 | | | | | | | | | |
| ガマ属 | *Typha* | - | - | - | 3 | - | - | 1 | 1 |
| ヒルムシロ属 | *Potamogeton* | - | 2 | 1 | 2 | - | 1 | - | - |
| サジオモダカ属 | *Alisma* | - | - | 1 | - | - | - | - | - |
| オモダカ属 | *Sagittaria* | 1 | 5 | - | 6 | - | - | - | 1 |
| クロモ | *Hydrilla verticillata* Royle. | 2 | 2 | 2 | 2 | 1 | - | - | 2 |
| イネ科 | Gramineae | 78 | 107 | 17 | 120 | 10 | 6 | 3 | 1 |
| カヤツリグサ科 | Cyperaceae | 279 | 86 | 10 | 81 | 7 | 9 | 8 | 5 |
| イボクサ属 | *Aneilema* | 10 | 1 | - | 10 | - | 1 | 1 | 2 |
| ミズアオイ属 | *Monochoria* | - | - | - | 5 | - | - | - | - |
| アヤメ科 | Iridaceae | 1 | - | - | - | - | - | - | - |
| クワ科 | Moraceae | 10 | 11 | 1 | 26 | 2 | 4 | 8 | 3 |
| ギシギシ属 | *Rumex* | - | - | - | 2 | - | - | - | - |
| サナエタデ節－ウナギツカミ節 | *Polygonum* sect. Persicaria-Echinocaulon | - | - | - | 1 | - | - | - | - |
| ジュンサイ属 | *Brasenia* | - | 6 | - | 7 | 10 | - | - | - |
| コウホネ属 | *Nuphar* | 1 | 2 | - | 2 | 1 | 1 | - | - |
| ヒツジグサ属 | *Nymphaea* | - | - | 1 | - | 2 | - | - | - |
| ハス属 | *Nelumbo* | - | - | - | 3 | - | - | 1 | - |
| カラマツソウ属 | *Thalictrum* | - | 2 | - | 3 | 3 | - | - | - |
| 他のキンポウゲ科 | other Ranunculaceae | 2 | - | - | - | - | - | 1 | 1 |
| キジムシロ属近似種 | cf. *Potentilla* | - | - | - | - | - | - | - | 1 |
| 他のバラ科 | other Rosaceae | 1 | - | - | 1 | - | - | - | - |
| マメ科 | Leguminosae | 5 | 2 | 4 | 4 | 5 | 5 | 5 | 1 |
| ヒシ属 | *Trapa* | - | - | - | - | - | - | 1 | - |
| アリノトウグサ属 | *Haloragis* | - | - | - | 1 | - | - | - | - |
| フサモ属 | *Myriophyllum* | - | - | - | - | - | - | 1 | 1 |
| セリ科 | Umbelliferae | 3 | 3 | - | 2 | - | - | 1 | 1 |
| アサザ属 | *Nymphoides* | - | - | - | - | - | - | 1 | - |
| オミナエシ属 | *Patrinia* | - | 2 | - | - | - | - | - | - |
| キキョウ属 | *Platycodon* | - | - | - | - | - | - | 1 | - |
| ホタルブクロ属－ツリガネニンジン属 | *Campanula* - *Adenophora* | - | - | - | - | 2 | - | - | 1 |
| ヨモギ属 | *Artemisia* | 7 | 14 | 2 | 7 | 16 | 7 | 8 | 4 |
| 他のキク亜科 | other Tubuliflorae | 3 | 1 | - | 2 | - | - | - | - |
| タンポポ亜科 | Liguliflorae | 2 | - | - | - | - | - | 1 | - |
| シダ植物 | | | | | | | | | |
| 単条型胞子 | Monolete spore | - | 1 | - | - | 1 | - | - | - |
| 三条型胞子 | Trilete spore | 1 | 1 | - | - | 2 | - | - | - |
| 樹木花粉 | Arboreal pollen | 1104 | 848 | 205 | 943 | 540 | 379 | 344 | 297 |
| 草本花粉 | Nonarboreal pollen | 405 | 246 | 39 | 290 | 59 | 34 | 42 | 25 |
| シダ植物胞子 | Spores | 1 | 2 | 0 | 0 | 3 | 0 | 0 | 0 |
| 花粉・胞子総数 | Total Pollen & Spores | 1510 | 1096 | 244 | 1233 | 602 | 413 | 386 | 322 |
| 不明花粉 | Unknown pollen | 104 | 81 | 27 | 91 | 77 | 61 | 59 | 43 |




（樹木花粉は樹木花粉総数，草本花粉・胞子は総花粉・胞子数を基数として百分率で算出した）

第35図　Aトレンチ西壁の花粉化石分布図



第36図　Bトレンチ北壁の花粉化石分布図

（樹木花粉は樹木花粉総数，草本花粉・胞子は総花粉・胞子数を基数として百分率で算出した）

出現する。また、カエデ属、ヒサカキ属近似種、ウコギ科、エゴノキ属などが、ほぼ連続して特徴的に随伴する。草本花粉では、イネ科、カヤツリグサ科、マメ科、ヨモギ属が低率ながら連続して出現する。他に、ガマ属、クロモ、イボクサ属、ジュンサイ属、コウホネ属などの水生植物も特徴的に随伴する。

II帯(試料5～8)：試料7以外は樹木花粉の検出数が少ないため分布図として示せなかったが本帯の特徴は、コナラ属コナラ亜属がI帯に引き続き優占するものの出現率を下げ、逆にコナラ属アカガシ亜属が増加することである。他にイチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科は若干増加し、ハンノキ属は若干減少する。また、本帯においてスギ属が漸増を開始する。草本花粉ではイネ科が漸増し、カヤツリグサ科、クワ科、アブラナ科、ヨモギ属、タンポポ亜科が低率ながら連続した出現傾向を示す。アブラナ科は本帯において出現を開始する。

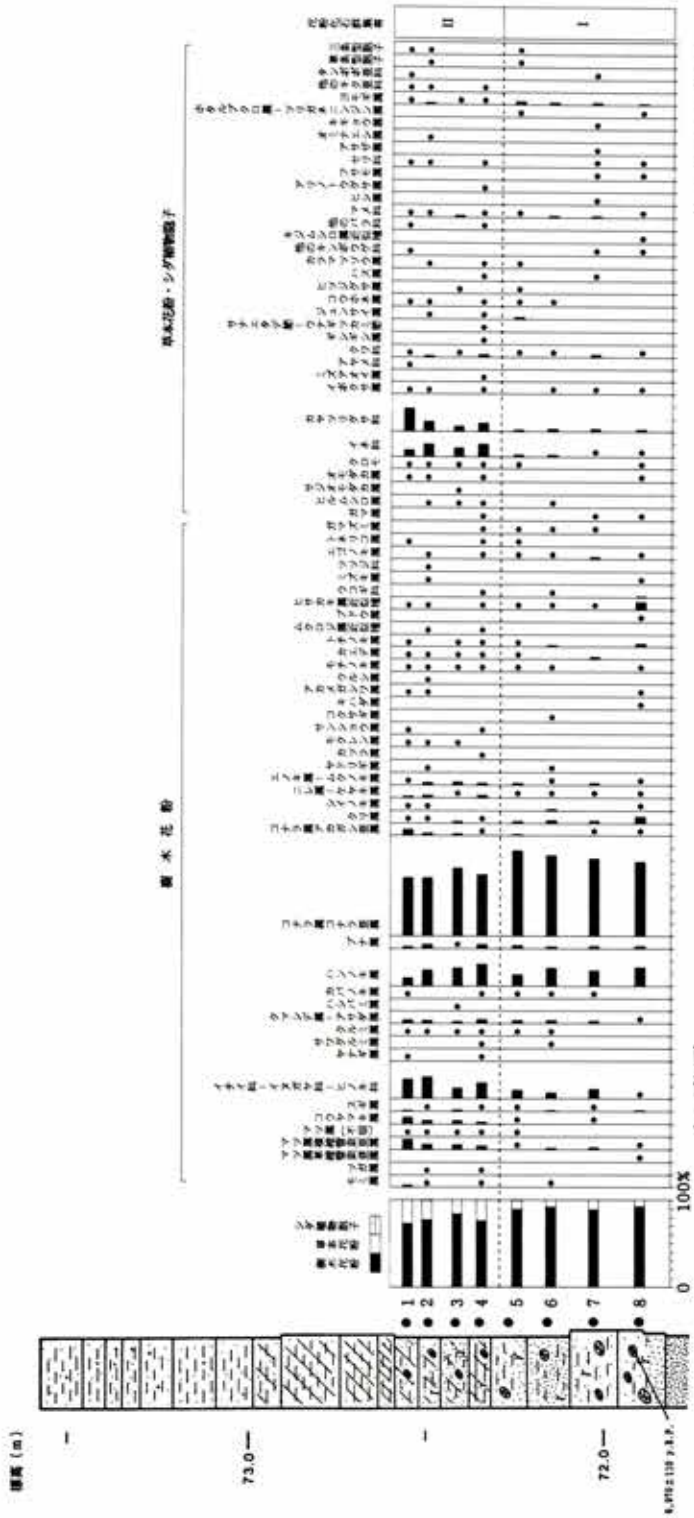
III帯(試料1～4)：試料1以外は樹木花粉の検出数が少ないため分布図として示せなかった。本帯の特徴は、これまで優占してきたコナラ属コナラ亜属に変わってマツ属複維管束亜属、スギ属が急増することである。また、II帯で比較的目立った出現をしていたコナラ属アカガシ亜属が本帯において全く見られらくなる。草本花粉では、イネ科がおおむね20%と安定して出現する。カヤツリグサ科も低率ながら連続して出現する。他に、ソバ属が出現を開始し、アブラナ科もII帯より引き続いて出現する。

[Bトレンチ北壁の花粉化石群集帯]

Bトレンチ北壁で同定された分類群数は樹木花粉29、草本花粉28、形態分類で示したシダ植物胞子2である。Bトレンチ北壁の花粉化石群集は、その種構成や各分類群の出現率によって下位より2つの花粉化石群集帯を設定することができる。なお、試料の中で樹木花粉総数が100未満のものは花粉化石分布図としては示さなかったが、それらも考慮して花粉化石群集帯を設定した。なお、樹木花粉総数が100未満の試料は、炭化物片が非常に多いために花粉の濃集の度合いが弱くなってしまったもの、あるいは花粉の保存状態から考えて、花粉・胞子の多くが分解されてしまったものである。

I帯(試料6～10)：樹木花粉の占める割合は上部に向い徐々に減少するが、下部ではおおむね90%と高率である。その中で、コナラ属コナラ亜属が38%～56%と優占し、ハンノキ属、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科が10%～20%程度でそれに次ぐ。他に、マツ属複維管束亜属、コウヤマキ属、クマシデ属—アサダ属、コナラ属アカガシ亜属、クリ属、シイノキ属が低率ながら連続して出現する。草本花粉では、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属が低率ながら連続して出現する。他に、試料6でアブラナ科が約8%と比較的目立った出現をする。

II帯(試料1～5)：樹木花粉の占める割合は50%～70%程度と若干小さくなる。その中でマツ属複維管束亜属、スギ属の増加が目立つ。本帯下部ではI帯に引き続きコナラ属コナラ亜属



第37図　Cトレンチ西壁の花粉化石分布図

が優占するが、上部では変わってマツ属複維管束亜属、スギ属が優占する。特に、試料3ではマツ属複維管束亜属が63%と突出する。イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、ハンノキ属は連続した出現傾向を示すものの、Ⅰ帯に比べ出現率を下げる。他に、クマシデ属—アサダ属、ブナ属、クリ属、シイノキ属、トチノキ属などが連続した出現傾向を示す。草本花粉では、イネ科が20%～30%と、安定して出現する。他に、カヤツリグサ科、アブラナ科、ヨモギ属が低率ながら連続して出現する。また、ソバ属、アリノトウグサ属なども特徴的に随伴する。

［Cトレンチ西壁の花粉化石群集帯］

Cトレンチ西壁で同定された分類群数は樹木花粉41、草本花粉33、形態分類で示したシダ植物胞子2である。Cトレンチ西壁の花粉化石群集は、その種構成や各分類群の出現率によって2つの花粉化石群集帯を設定することができる。

Ⅰ帯(試料5～8)：樹木花粉の占める割合は、おおむね90%と高率である。その中でも、コナラ属コナラ亜属が60～70%と卓越し、ハンノキ属がこれに次ぐ。他に、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、クマシデ属—アサダ属、ブナ属、クリ属、ヒサカキ属近似種、エゴノキ属などが低率ながら連続して出現する。また、コクサギ属、アカメガシワ属、ウコギ科、ミズキ属などの稀産な分類群も随伴する。草本花粉では、イネ科、カヤツリグサ科、イボクサ属、クワ科、マメ科、ヨモギ属が低率ながら連続して出現する。他に、試料5において、ジュンサイ属が比較的目立った出現をする。

Ⅱ帯(試料1～4)：樹木花粉の占める割合は、Ⅰ帯に比べやや減少するものの、80%前後と高率である。その中で、コナラ属コナラ亜属がⅠ帯に引き続き卓越するが、50%前後に出現率を下げる。イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、ハンノキ属がそれに次ぐが、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科は漸増傾向を示すのに対し、ハンノキ属は減少傾向を示す。マツ属複維管束亜属、コウヤマキ属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属—ケヤキ属といった分類群は、低率ながら漸増傾向及び連続した出現傾向を示す。逆に、クリ属は減少傾向を示す。低率ではあるが、連続した出現傾向を示すものとしてクルミ属、クマシデ属—アサダ属、ブナ属、エノキ属—ムクノキ属、モクレン属、モチノキ属、カエデ属、トチノキ属、ヒサカキ属近似種などの分類群がある。その他に、モミ属やツガ属といった針葉樹類やカツラ属、アカメガシワ属、ウコギ科、ミズキ属などの稀産な分類群も随伴する。草本花粉では、イネ科、カヤツリグサ科が卓越する。イネ科は出現率の高い層準ではおおむね10%に達し、カヤツリグサ科は漸増傾向を示し、試料1で最大18%程度に及ぶ。他に、ヒルムシロ属、オモダカ属、クロモ、イボクサ属、コウホネ属などの水生植物やクワ科、マメ科、ヨモギ属、他のキク亜科といった分類群が低率ながら連続した出現傾向を示す。

## 3．考察

3箇所のトレンチで検出した花粉化石群集から、各時代における遺跡周辺の古植生とその変遷について述べる。

［縄文時代の古植生］

Cトレンチ西壁Ⅰ、Ⅱ帯とAトレンチ西壁Ⅰ帯は縄文時代の古植生を示しているものと考えられる。層位的には、第5層および第6層に相当する。この時期には、コナラ属コナラ亜属、ハンノキ属、イチイ科―イヌガヤ科―ヒノキ科が多産することから、これらを主とする植生であったといえる。中でもコナラ属コナラ亜属が特に多産することから、コナラ属コナラ亜属を中心とした落葉広葉樹林が形成されていた。樹木花粉の占める割合の高さから考えて、それはかなり広い林分を形成していたものと考えられる。他に、斜面から台地上にかけてクマシデ属―アサダ属、クリ属、ニレ属―ケヤキ属、エノキ属―ムクノキ属、トチノキ属などの落葉広葉樹やコナラ属アカガシ亜属、シイノキ属などの常緑樹、モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属などの針葉樹もコナラ属コナラ亜属と共に落葉広葉樹林を構成していたであろう。一方、主として冷温帯に分布するブナ属が低率ながら連続した出現傾向を示すが、これは山地からの飛来花粉が評価された結果であろう。また、多種の水生植物が出現し、中でも池や沼に生育するヒルムシロ属、クロモ、ジュンサイ属、コウホネ属、ヒツジグサ属などが比較的安定した出現傾向を示すことから、それらが生育するような池あるいは沼といった環境があり、ヒルムシロ属、クロモ、コウホネ属などは流水中にも生育することから、若干流れを伴うようなものであったのだろう。その周囲にはハンノキ属などからなる低湿地林もあったであろう。

［平安～室町時代の古植生］

Aトレンチ西壁Ⅱ帯とBトレンチ北壁Ⅰ帯は鎌倉・室町時代以降の古植生を示しているものと考えられる。層位的には、第3層および第4層に相当する。縄文時代以降の古植生に引き続いてコナラ属コナラ亜属、ハンノキ属、イチイ科―イヌガヤ科―ヒノキ科が多産するが、コナラ属コナラ亜属、ハンノキ属は若干出現率が低下することから、幾分分布域を狭めたものと考えられる。逆に常緑樹のコナラ属アカガシ亜属は出現率が増加するので、分布拡大をしたものと考えられる。しかし、基本的にはコナラ属コナラ亜属を中心としてイチイ科―イヌガヤ科―ヒノキ科、クマシデ属―アサダ属、クリ属などを混じえた落葉広葉樹林が斜面から台地上に形成されており、そこにコナラ属アカガシ亜属が幾分分布拡大をしたものと考えられる。また、Cトレンチ西壁Ⅰ、Ⅱ帯、Aトレンチ西壁Ⅰ帯でみられた多種の水生植物がこの時期には殆ど出現しなくなる。これは堆積域周辺の池あるいは沼といった環境が湿地的環境へと変化したこと

を意味するものと考えられる。

［近世から現在にかけての植生］

Aトレンチ西壁Ⅰ帯およびBトレンチ北壁Ⅰ帯がこの時期に相当するものと考えられる。層位的には、第2層および第3層にほぼ相当する。この頃になると、これまで斜面から台地上にかけて優占してきたコナラ属コナラ亜属に変わってマツ属複維管束亜属、スギ属といった針葉樹が急増し、分布拡大する。一方、ハンノキ属や常緑樹のコナラ属アカガシ亜属、シイノキ属は殆どみられなくなる。樹木花粉の占める割合が低いことや出現分類群数が少ないことから周辺植生は貧弱なものへと変化したと考えられる。また、イネ科が比較的高率で安定して出現することやキカシグサ属といったいわゆる水田雑草の出現がみられるようになること、更にイネのプラント・オパールが多量に検出されることから、この頃には既に水田稲作が行われていた。ソバ属やアブラナ科といった人と係りの深い植物が出現し始めるのもこのころからである。

## Ⅳ．伸迫間遺跡出土木材の樹種

### １．はじめに

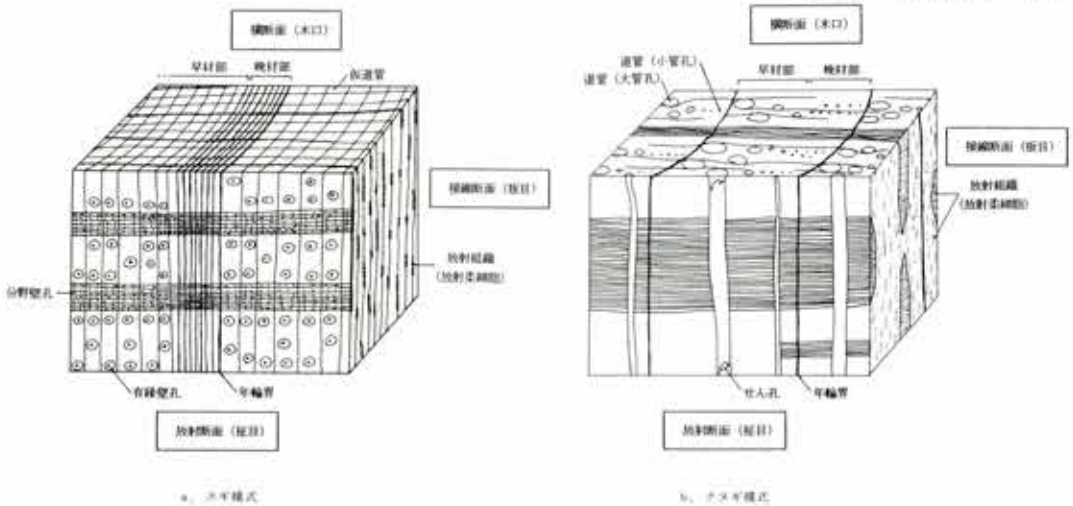
伸迫間遺跡は、美濃加茂市田島町四丁目地内に所在する段丘上の遺跡である。遺跡からは、中世あるいは近世の遺物と共に木製品の一部が出土している。また、これら中世や近世の包含層の下位には、縄文時代に形成された木材遺体を比較的多く含む泥炭質砂層が検出されている。これら木材遺体は、かつて豊富な湧水によって形成された池的環境に埋没・保存されたものと思われる。こうした環境は、現在遺跡の北東約80ｍに見られる宮浦池にその姿を見ることができ、遺跡周辺あるいは美濃加茂盆地を形成する段丘上における特徴的な環境と思われる。

ここでは、泥炭質砂層中の木材遺体あるいはその上位層から出土する木製品の破片を対象に、その樹種を検討する。泥炭質砂層中の木材遺体は自然木と位置づけられるが、花粉化石の検討と合わせ遺跡の周辺植生復元に関して重要な試料となる。なお、ヒトツバタゴおよびカエデ属根材の同定については、農林水産省森林総合研究所木材利用部組織研究室の能城修一博士にご指導して頂いた。ここに感謝致します。

### ２．標本の記載と結果

木製品類および自然木の樹種を検討した試料は、４箇所のトレンチから出土した 211点である。

木材試料は、Ａトレンチ・Ｂトレンチ・Ｃトレンチ・Ｄトレンチの４箇所から層位別に取り




第38図　材組織とその名称

上げた木材遺体である。なお、これら木材遺体には、層位を越えて鉛直方向に延びる根状の木材は含まれていない。

木材試料は、片刃カミソリを用いて木材の横断面(木口と同義)、接線断面(板目と同義)、放射断面(柾目と同義)の3断面に作り、ガムクロラール(Gum　Chloral)で封入する。これらの標本は、生物顕微鏡下 40倍～400倍で材組織を観察し、現生木材標本との比較によりその樹種を同定する。以下に各標本の記載および同定の根拠を述べる。標本の記載中の材組織およびその名称については第38図に示す。なお、ここで検討した各木材の標本(プレパラート)は、(財)岐阜県文化財保護センターに保管してある。

アカマツ　Pinus densiflora Sieb.et Zucc.　マツ科　図版17　1a～1c.

放射仮道管、垂直および水平樹脂道、これを取り囲むエピセリウム細胞からなる針葉樹材で、早材部から晩材部への移行は急である(横断面)。放射組織のうち、柔細胞の分野壁孔は窓状であり、放射仮道管の内壁は内側に向かって鋸歯状に著しく突出している(放射断面)。放射組織は、エピセリウム細胞以外は、放射仮道管も含め単列で2～10細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、マツ科マツ属のアカマツの材と同定される。アカマツは、暖帯および温帯下部に分布する樹高30～35m、幹径60～80cmに達する常緑針葉樹である。

スギ　Cryptomeria japonica (Linn. fil.)D.Don　スギ科　図版17　2a～2c.

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞からなる針葉樹材で、早材部から晩材部への移行は緩やかである(横断面)。分野壁孔は、水平方向に長軸をもった典型的なスギ型で、1分野に2個見られる(放射断面)。放射組織は、柔細胞からなり、単列で2～12細胞高からなる(接線断面)。

以上の形質から、スギ科スギ属のスギの材と同定される。スギは東北から九州にかけて温帯から暖帯にかけて分布する常緑針葉樹である。

ヒノキ属　Chamaecyparis　ヒノキ科　図版22　18a～18c.

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞からなる針葉樹で、早材部から晩材部への移行は緩やかである(横断面)。分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に1～2個見られる(放射断面)。放射組織は、柔細胞からなり、2～9細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、ヒノキ科のヒノキ属の材と同定される。ヒノキ属の樹木には、ヒノキ(C. Obtusa)とサワラ(C.pisifera)があり、ヒノキは本州、四国、九州の温帯に分布する樹高40m、幹径2mに達する常緑針葉樹で、サワラは、本州、九州の温帯に分布する樹高30m、幹径1mに達する常緑針葉樹である。

ハンノキ節　Alnus sect. Gymnothyrsus　カバノキ科　図版17・18　3a～3c（幹材）、4a～4c（根材）。

［幹材］：中型の管孔が放射方向または塊状に２～４個複合して散在する散孔材である（横断面）。道管のせん孔は、20本程度の横棒からなる階段状である（放射断面）。放射組織は同性で、単列もしくは２細胞幅、３～28細胞高で、集合放射組織も見られる（接線断面）。

［根材］：中型の角張った管孔が単独あるいは数個複合して散在し、木部繊維は幹材に比べ大型である（横断面）。これ以外の形質は幹とほぼ同様である（放射・接線断面）。

以上の形質から、カバノキ科ハンノキ属のハンノキ節の材と同定される。ハンノキ節の材には、平野部の水湿地に生育するハンノキ（A.japonica）、平野部から山地の斜面にかけて生育するヤマハンノキ（A.hirsuta）、そして山地に生育するヤシャブシ（A.firma）などがある。ハンノキ節の樹木は、いずれも樹高20ｍ、幹径50㎝に達する落葉広葉樹である。

コナラ節　Quercus sect. Prinus ブナ科　図版18　5a～5c.

年輪のはじめに大型の管孔が１列に並び、そこから径を減じた小管孔がやや火炎状に配列する環孔材である（横断面）。大管孔の内腔には、チロースがあり著しい。また、木部柔組織は短接線状に配列する。道管のせん孔は単一である（放射断面）。放射組織は、単列同性のものと集合放射組織からなる（接線断面）。

以上の形質から、ブナ科コナラ属のコナラ節の材と同定される。コナラ節の樹木にはコナラ（Q. serrata）やミズナラ（Q.mongolica var.grossesrrata）、カシワ（Q. dentata）、ナラガシワ（Q. aliena）などがあるが、現在のところこれらを識別するには至っていない。いずれの樹木も温帯から暖帯にかけて広く分布する樹高20ｍ、幹径１ｍに達する落葉広葉樹である。

クヌギ節　Quercus sect. Aegilops　ブナ科　図版18　6a～6c.

年輪のはじめに大型の管孔が１～２列並び、そこからやや急に径を減じたやや厚壁の丸い小管孔が放射方向に配列する環孔材である（横断面）。道管のせん孔は単一で、時としてチロースが見られる（放射断面）。放射組織は、単列同性のものと集合放射組織のものとがある（接線断面）。

以上の形質から、ブナ科コナラ属のクヌギ節の材と同定される。クヌギ節の樹木には関東地方に普通に見られるクヌギ（Q.acutissima）と、東海・北陸以西に主として分布するアベマキ（Q. variabilis）がある。いずれの樹木も樹高15ｍ、幹径60㎝に達する落葉広葉樹である。

ケヤキ　Zelkova serrata（Thunb.）Makino　ニレ科　図版19　7a～7c.

年輪のはじめに大型の管孔が単独ないし２列に並び、早材部では小管孔が２～８程度集合して接線方向ないしはやや斜めに配列する環孔材である（横断面）。道管のせん孔は単一で、小管

孔の内壁にはらせん肥厚が明瞭に認められる(放射断面)。放射組織は、異性1～7細胞幅、2～70細胞高からなる(接線断面)。

以上の形質から、ニレ科ケヤキ属のケヤキの材と同定される。ケヤキは暖帯から温帯にかけて分布する樹高35m、幹径2mに達する落葉広葉樹である。

ヒサカキ　Eurya japonica Thunb.　ツバキ科　図版19　8a～8c.

小型の管孔が単独ないし2～4個放射方向に複合して散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は多数の横棒からなる階段状である(放射断面)。放射組織は、異性1～3細胞幅、1～42細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、ツバキ科ヒサカキ属のヒサカキの材と同定される。ヒサカキは、本州以南の暖帯から温帯にかけて分布する樹高10mに達する常緑広葉樹である。

ノリウツギ　Hydrangea paniculata Sieb. et Zucc.　ユキノシタ科　図版19　9a～9c.

小型で角張った管孔が単独あるいは2～3個接線方向に複合し散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は、71本程度の横棒からなる階段状である(放射断面)。放射組織は、異性1～3細胞幅、4～30細胞高からなる(接線断面)。

以上の形質から、ユキノシタ科アジサイ属のノリウツギの材と同定される。ノリウツギは、温帯林の先駆樹種で、伐採地にまず最初に出現する一種である。ノリウツギは、北海道・本州・四国・九州・屋久島に生える樹高5m、幹径15cm程度の落葉広葉樹である。

フジ　Wisteria floribunda (Willd.)DC.　マメ科　図版20　10a～10c.

年輪のはじめに大型の管孔が1列並び、晩材部で小型の管孔が塊状に集合する。また木部柔組織は周囲状で(横断面)、木部柔組織は、接線断面において層階状を呈する。道管のせん孔は単一で、内壁にはらせん肥厚がある(放射断面)。放射組織は、異性1～4細胞幅、3～28細胞高で、不完全な周囲状を示す。

以上の形質から、マメ科フジ属のフジの材と同定される。フジは、本州以南の暖帯から温帯にかけての林縁などの明るい所に生育する落葉の蔓植物である。

キハダ　Phellodendron amurense Rupr.　ミカン科　図版20　11a～11c.

年輪のはじめに大型の管孔が並び、そこから径を減じた管孔が数個複合して斜め接線方向に連続して散在する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一で、内壁にはらせん肥厚が認められる(放射断面)。放射組織は、同性1～3細胞幅、4～25細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、ミカン科キハダ属のキハダの材と同定される。キハダは、温帯に分布する

樹高20m、幹径1mに達する落葉広葉樹である。

カエデ属　Acer カエデ科　図版20・21　12a～12c（幹材）、13a～13c（根材）.

［幹材］：中型の管孔が単独あるいは放射方向に2～5複合して散在する散孔材で、木部柔細胞は帯状または雲紋状を呈する（横断面）。道管のせん孔は単一で、内壁にはらせん肥厚が認められる（放射断面）。放射組織は、同性1～6細胞幅、1～37細胞高である（接線断面）。

［根材］：幹材に比べ管孔は薄壁で、木部繊維は大きく、幹材に見られる柔細胞の雲紋状文様は明瞭ではない（横断面）。これ以外の形質はほぼ幹材と同様である。

以上の形質から、カエデ科のカエデ属の材と同定される。カエデ属の樹木は、全国の暖帯から亜寒帯まで広く、その種類も20種以上と多い。

ケンポナシ属　Hovenia クロウメモドキ科　図版21　14a～14c.

年輪のはじめに大型の管孔が1列程度並び、晩材部では小型の管孔が塊状あるいは放射方向に複合して散在する環孔材である（横断面）。道管のせん孔は、単一である（放射断面）。放射組織は、異性1～3細胞幅、3～56細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、クロウメモドキ科のケンポナシ属の材と同定される。ケンポナシ属の樹木には、ケンポナシ（H.dulcis）やケケンポナシ（H.tomentella）があり、いずれも樹高25m、幹径1mに達する落葉広葉樹で、ケンポナシが全国の温帯に、ケケンポナシが本州西部や四国などに分布する。

エゴノキ属　Styrax　エゴノキ科　図版21　15a～15c.

小型の管孔が放射方向に2～5個複合し、早材部ではやや径を減じて放射方向に2～5個複合して散在する散孔材である（横断面）。道管のせん孔は10本程度の太い横棒からなる階段状である（放射断面）。放射組織は、異性1～3細胞幅、2～40細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、エゴノキ科のエゴノキ属の材と同定される。エゴノキ属の樹木は、本州以南の温帯から暖帯に分布するエゴノキ（S.japonica）や全国の温帯に分布するハクウンボク（S. obassia）あるいは関東以西の温帯に分布するコハクウンボク（S. shirasawana）などがある。

ヒトツバタゴ　Chionanthus retusus Lindl. et Pax.　モクセイ科　図版22　16a～16c、17a～17c.

年輪の始めに大型の管孔が一列に並び、晩材部では薄壁の小管孔が2～4幅程度に集合して火炎状に配列する環孔材である（横断面）。道管のせん孔は単一で（放射断面）、小管孔の内壁にはらせん肥厚が見られる。放射組織は、同性1～4細胞幅、2～16細胞高である。

第10表　仲道間遺跡出土材の樹種（その1）

| No. | 位　置 | 出土層位 | 樹　種 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | Cトレンチ | Ⅱ'層 | アカマツ | |
| 2 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 3 | Bトレンチ | Ⅲ～Ⅴ層 | ヒノキ属 | 半炭化材 |
| 4 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 5 | 〃 | 〃 | アカマツ | 炭化材 |
| 6 | 〃 | 〃 | ― | 半炭化材 |
| 7 | 〃 | 〃 | アカマツ | 〃 |
| 8 | 〃 | 〃 | 〃 | 焦げ跡有 |
| 9 | Cトレンチ | 〃 | キハダ | |
| 10 | Dトレンチ | 〃 | ヒノキ属 | |
| 11 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 12 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 13 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 14 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 15 | 〃 | 〃 | ― | 炭化材 |
| 16 | 〃 | Ⅴ層 | ― | 〃 |
| 17 | 〃 | 〃 | ヒノキ属 | |
| 18 | Aトレンチ | Ⅴ・Ⅵ層 | カエデ属根材 | |
| 19 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 20 | 〃 | 〃 | コナラ節 | |
| 21 | 〃 | 〃 | ヒノキ属 | |
| 22 | Bトレンチ | Ⅵ層 | 〃 | |
| 23 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 24 | Cトレンチ | 〃 | 〃 | |
| 25 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 26 | 〃 | Ⅵ・Ⅶ層 | ハンノキ節根材 | |
| 27 | 〃 | 〃 | ヒノキ属 | |
| 28 | 〃 | 〃 | コナラ節 | |
| 29 | 〃 | 〃 | ― | 炭化材 |
| 30 | 〃 | 〃 | ヒノキ属 | |
| 31 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 32 | 〃 | 〃 | クヌギ節 | |
| 33 | 〃 | 〃 | ノリウツギ | |
| 34 | Aトレンチ | Ⅶ・Ⅷ層 | ハンノキ節根材 | |
| 35 | 〃 | 〃 | アカマツ | |
| 36 | 〃 | 〃 | ハンノキ節根材 | |
| 37 | 〃 | 〃 | ノリウツギ | |
| 38 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 39 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 40 | 〃 | 〃 | カエデ属根材 | |
| 41 | 〃 | 〃 | ノリウツギ | |
| 42 | 〃 | 〃 | カエデ属根材 | |
| 43 | 〃 | Ⅷ層 | 〃 | |
| 44 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 45 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 46 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 47 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 48 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 49 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 50 | 〃 | 〃 | 〃 | |

第11表　仲迫間遺跡出土材の樹種（その2）

| No. | 位　置 | 出土層位 | 樹　種 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|
| 51 | Aトレンチ | Ⅷ層 | カエデ属根材 | |
| 52 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 53 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 54 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 55 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 56 | 〃 | 〃 | ハンノキ節根材 | |
| 57 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 58 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 59 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 60 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 61 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 62 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 63 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 64 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 65 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 66 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 67 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 68 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 69 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 70 | 〃 | Ⅸ・ⅩⅠ層 | ヒトツバタゴ | |
| 71 | 〃 | 〃 | ハンノキ節 | |
| 72 | 〃 | 〃 | ヒトツバタゴ | |
| 73 | 〃 | 〃 | ハンノキ節根材 | |
| 74 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 75 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 76 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 77 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 78 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 79 | 〃 | ⅩⅢ層 | コナラ節 | |
| 80 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 81 | 〃 | 〃 | クヌギ節 | |
| 82 | 〃 | 〃 | コナラ節 | |
| 83 | 〃 | 〃 | ハンノキ節根材 | |
| 84 | 〃 | 〃 | クヌギ節 | |
| 85 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 86 | 〃 | 〃 | ハンノキ節根材 | |
| 87 | 〃 | 〃 | コナラ節 | |
| 88 | 〃 | 〃 | ヒトツバタゴ | |
| 89 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 90 | 〃 | 〃 | コナラ節 | |
| 91 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 92 | 〃 | 〃 | ハンノキ節根材 | |
| 93 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 94 | 〃 | 〃 | コナラ節 | |
| 95 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 96 | 〃 | 〃 | クヌギ節 | |
| 97 | 〃 | 〃 | コナラ節 | |
| 98 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 99 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 100 | 〃 | 〃 | エゴノキ属 | |

第12表　仲道間遺跡出土材の樹種（その3）

| No. | 位　置 | 出土層位 | 樹　種 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|
| 101 | Aトレンチ | XIII層 | ヒトツバタゴ | |
| 102 | 〃 | 〃 | コナラ節 | |
| 103 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 104 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 105 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 106 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 107 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 108 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 109 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 110 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 111 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 112 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 113 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 114 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 115 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 116 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 117 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 118 | 〃 | 〃 | ハンノキ節根材 | |
| 119 | 〃 | 〃 | コナラ節 | |
| 120 | 〃 | 〃 | ハンノキ節根材 | |
| 121 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 122 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 123 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 124 | 〃 | 〃 | カエデ属 | |
| 125 | 〃 | 〃 | エゴノキ属 | |
| 126 | 〃 | 〃 | コナラ節 | |
| 127 | 〃 | 〃 | ハンノキ節 | |
| 128 | 〃 | 〃 | ヒトツバタゴ | |
| 129 | 〃 | 〃 | コナラ節 | |
| 130 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 131 | 〃 | 〃 | ハンノキ節根材 | |
| 132 | 〃 | 〃 | コナラ節 | |
| 133 | 〃 | 〃 | ヒトツバタゴ | |
| 134 | 〃 | 〃 | コナラ節 | |
| 135 | 〃 | 〃 | ケヤキ | 9,730±160 y.B.P. |
| 136 | Cトレンチ | 〃 | フ　ジ | |
| 137 | 〃 | 〃 | ヒトツバタゴ | |
| 138 | 〃 | 〃 | ケンポナシ属 | |
| 139 | 〃 | 〃 | コナラ節 | |
| 140 | 〃 | 〃 | フ　ジ | |
| 141 | 〃 | 〃 | ヒトツバタゴ | |
| 142 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 143 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 144 | 〃 | 〃 | コナラ節 | |
| 145 | 〃 | 〃 | ヒトツバタゴ | |
| 146 | 〃 | 〃 | エゴノキ属 | |
| 147 | 〃 | 〃 | ハンノキ節 | |
| 148 | 〃 | 〃 | ヒトツバタゴ | |
| 149 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 150 | 〃 | 〃 | 樹　皮 | |

第13表　伸迫間遺跡出土材の樹種（その4）

| No. | 位　置 | 出土層位 | 樹　種 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|
| 151 | Cトレンチ | XIII層 | ヒトツバタゴ | |
| 152 | 〃 | 〃 | 〃 | 6,970±110 y.B.P. |
| 153 | 〃 | XIV層 | ハンノキ節 | |
| 154 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 155 | 〃 | 〃 | ハンノキ節根材 | |
| 156 | 〃 | 〃 | ハンノキ節 | |
| 157 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 158 | 〃 | 〃 | ケヤキ | |
| 159 | 〃 | 〃 | ヒトツバタゴ | |
| 160 | 〃 | XI～最下層 | スギ | 44x5x3.5cm |
| 161 | 〃 | 〃 | 〃 | 31x4x2cm |
| 162 | 〃 | 〃 | ハンノキ節 | |
| 163 | 〃 | 〃 | ハンノキ節根材 | |
| 164 | 〃 | 〃 | ハンノキ節 | |
| 165 | 〃 | 〃 | ハンノキ節根材 | |
| 166 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 167 | 〃 | XII～最下層 | ヒトツバタゴ | |
| 168 | 〃 | 〃 | ハンノキ節 | |
| 169 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 170 | 〃 | 〃 | ハンノキ節根材 | |
| 171 | 〃 | 〃 | ヒトツバタゴ | |
| 172 | 〃 | 〃 | ハンノキ節 | |
| 173 | 〃 | 〃 | ハンノキ節根材 | |
| 174 | 〃 | 〃 | ヒトツバタゴ | |
| 175 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 176 | 〃 | 〃 | ハンノキ節 | |
| 177 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 178 | 〃 | 〃 | ヒトツバタゴ | |

第14表　仲迫間遺跡出土材の樹種（その5）

| No. | 位　置 | 出土層位 | 樹　種 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | Dトレンチ | Ⅲ層 | ヒサカキ | |
| 2 | 〃 | 〃 | アカマツ | |
| 3 | 〃 | 〃 | ヒノキ属 | |
| 4 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 5 | 〃 | 〃 | 〃 | 板材（20x5x0.5cm） |
| 6 | 〃 | 〃 | 〃 | 板材（15x3x0.7cm） |
| 7 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 8 | Cトレンチ | Ⅱ'層 | 〃 | |
| 9 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 10 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 11 | Bトレンチ | Ⅲ～Ⅴ層 | 〃 | |
| 12 | 〃 | 〃 | アカマツ | |
| 13 | 〃 | 〃 | ヒノキ属 | |
| 14 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 15 | Cトレンチ | 〃 | 〃 | |
| 16 | 〃 | Ⅴ層 | 〃 | |
| 17 | Bトレンチ | Ⅵ・Ⅶ層 | 〃 | 角材（15.5x1.6x1.1cm） |
| 18 | Cトレンチ | 〃 | 〃 | 箸（φ7mmx17.5cm） |
| 19 | Dトレンチ | 〃 | 〃 | |
| 20 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 21 | Bトレンチ | Ⅵ層 | 〃 | |
| 22 | 〃 | 〃 | アカマツ | |
| 23 | 〃 | 〃 | ヒノキ属 | |
| 24 | Cトレンチ | 〃 | アカマツ | |
| 25 | 〃 | 〃 | ヒノキ属 | |
| 26 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 27 | 〃 | 〃 | アカマツ | |
| 28 | 〃 | 〃 | ヒノキ属 | |
| 29 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 30 | Aトレンチ | Ⅶ・Ⅷ層 | 〃 | |
| 31 | 〃 | 〃 | 〃 | |
| 32 | 〃 | 〃 | アカマツ | |

**第15表　各トレンチの層位別出土木材の樹種**

| Aトレンチ | Ⅱ | Ⅱ' | Ⅲ～Ⅴ | Ⅴ | Ⅴ・Ⅵ | Ⅵ | Ⅵ・Ⅶ | Ⅶ・Ⅷ | Ⅷ | Ⅸ・ⅩⅠ | ⅩⅢ | | | | | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| アカマツ | | | | | | | | 2 | | | | | | | | 2 |
| スギ | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| ヒノキ属 | | | | | 1 | | | 3 | | | | | | | | 4 |
| ハンノキ節幹材 | | | | | | | | | | 1 | 1 | | | | | 2 |
| ハンノキ節根材 | | | | | | | | 2 | 14 | 6 | 10 | | | | | 32 |
| コナラ節 | | | | | 1 | | | | | | 33 | | | | | 34 |
| クヌギ節 | | | | | | | | | | | 4 | | | | | 4 |
| ケヤキ | | | | | | | | | | | 1 | | | | | 1 |
| ヒサカキ | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| ノリウツギ | | | | | | | | 4 | | | | | | | | 4 |
| フジ | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| キハダ | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| カエデ属幹材 | | | | | | | | | | | 1 | | | | | 1 |
| カエデ属根材 | | | | | 2 | | | 2 | 13 | | | | | | | 17 |
| ケンポナシ属 | | | | | | | | | | | 2 | | | | | 2 |
| エゴノキ属 | | | | | | | | | | 2 | 5 | | | | | 7 |
| ヒトツバタゴ | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| 樹皮 | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| 炭化材 | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| 合計 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 | 0 | 0 | 13 | 27 | 9 | 57 | 0 | 0 | 0 | 0 | 110 |

| Bトレンチ | Ⅱ | Ⅱ' | Ⅲ～Ⅴ | Ⅴ | Ⅴ・Ⅵ | Ⅵ | Ⅵ・Ⅶ | Ⅶ・Ⅷ | Ⅷ | | | | | | | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| アカマツ | | | 4 | | | 1 | | | | | | | | | | 5 |
| スギ | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| ヒノキ属 | | | 5 | | | 4 | 1 | | | | | | | | | 10 |
| ハンノキ節幹材 | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| ハンノキ節根材 | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| コナラ節 | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| クヌギ節 | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| ケヤキ | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| ヒサカキ | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| ノリウツギ | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| フジ | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| キハダ | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| カエデ属幹材 | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| カエデ属根材 | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| ケンポナシ属 | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| エゴノキ属 | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| ヒトツバタゴ | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| 樹皮 | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| 炭化材 | | | 1 | | | | | | | | | | | | | 1 |
| 合計 | 0 | 0 | 10 | 0 | 0 | 5 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 16 |

| Cトレンチ | Ⅱ | Ⅱ' | Ⅲ～Ⅴ | Ⅴ | Ⅴ・Ⅵ | Ⅵ | Ⅵ・Ⅶ | Ⅶ・Ⅷ | Ⅷ | Ⅸ・Ⅹ | ⅩⅡ | ⅩⅢ | ⅩⅣ | ⅩⅠ・下 | ⅩⅡ・下 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| アカマツ | | 2 | | | | 2 | | | | | | | | | | 4 |
| スギ | | | | | | | | | | | | | | 2 | | 2 |
| ヒノキ属 | | 3 | 1 | 1 | | 6 | 6 | | | | | | | | | 17 |
| ハンノキ節幹材 | | | | | | | | | | | | 1 | 4 | 2 | 5 | 12 |
| ハンノキ節根材 | | | | | | | 1 | | | | | | 1 | 3 | 2 | 7 |
| コナラ節 | | | | | | | 1 | | | | | 2 | | | | 3 |
| クヌギ節 | | | | | | | 1 | | | | | | | | | 1 |
| ケヤキ | | | | | | | | | | | | | 1 | | | 1 |
| ヒサカキ | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| ノリウツギ | | | | | | | 1 | | | | | | | | | 1 |
| フジ | | | | | | | | | | | | 2 | | | | 2 |
| キハダ | | | 1 | | | | | | | | | | | | | 1 |
| カエデ属幹材 | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| カエデ属根材 | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| ケンポナシ属 | | | | | | | | | | | | 1 | | | | 1 |
| エゴノキ属 | | | | | | | | | | | | 1 | | | | 1 |
| ヒトツバタゴ | | | | | | | | | | | | 9 | 1 | | 5 | 15 |
| 樹皮 | | | | | | | | | | | | 1 | | | | 1 |
| 炭化材 | | | | | | | 1 | | | | | | | | | 1 |
| 合計 | 0 | 5 | 2 | 1 | 0 | 8 | 11 | 0 | 0 | 0 | 0 | 17 | 7 | 7 | 12 | 70 |

| Dトレンチ | Ⅲ | Ⅳ | Ⅲ～Ⅴ | Ⅶ | | | | | | | | | | | | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| アカマツ | 1 | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| スギ | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| ヒノキ属 | 5 | | 5 | 1 | | | | | | | | | | | | 11 |
| ハンノキ節幹材 | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| ハンノキ節根材 | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| コナラ節 | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| クヌギ節 | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| ケヤキ | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| ヒサカキ | 1 | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| ノリウツギ | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| フジ | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| キハダ | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| カエデ属幹材 | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| カエデ属根材 | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| ケンポナシ属 | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| エゴノキ属 | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| ヒトツバタゴ | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| 樹皮 | | | | | | | | | | | | | | | | 0 |
| 炭化材 | | | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | 2 |
| 合計 | 7 | 0 | 6 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 15 |

以上の形質から、モクセイ科ヒトツバタゴ属のヒトツバタゴの材と同定される。ヒトツバタゴは、ナンジャモンジャとよばれることがある珍しい木で、岐阜県・長野県・愛知県の一部に遺存し、対馬、朝鮮・台湾・中国大陸の一部に隔離分布する。樹高30ｍ、幹径70cmに達する落葉広葉樹である。

## ３．結果

木材試料は、Ａトレンチからの木材が最も多く110点、ついでＣトレンチが70点、Ｂトレンチが16点そしてＤトレンチが15点である。縄文時代の第５・６層から出土した木材のうち大型のものは、やや摩耗しているものが多い。

検出される樹木は15分類群である。各分類群の出現率は、アカマツ12点、スギ２点、ヒノキ属42点、ハンノキ節幹材14点、同根材39点、コナラ節37点、クヌギ節５点、ケヤキ２点、ヒサカキ１点、ノリウツギ５点、フジ２点、キハダ１点、カエデ属幹材１点、同根材17点、ケンポナシ属１点、エゴノキ属３点、ヒトツバタゴ22点、不明樹皮１点、炭化材４点である（第10表～第14表）。

一方、各トレンチで検出された樹木について層位的に見ると、近世・近代に相当する第２層では、ＣトレンチおよびＤトレンチにおいてはアカマツ３点、ヒノキ属８点、ヒサカキ１点が検出されている。平安～室町時代の第３・４層では４箇所のトレンチでいずれも検出され、ヒノキ属34点、アカマツ９点、ノリウツギ５点、コナラ節２点、クヌギ節１点、キハダ１点、カエデ属根材４点、ハンノキ節根材３点である。これら第２層あるいは第３層において出土するアカマツやヒノキ属の木材は、多くが炭化している部分を伴っており、箸や板材など明かな木製品も僅かではあるが出土している。なお、伐採地に最初に出現するノリウツギが検出されていることから、遺跡周辺での樹木伐採が行われたことが予想される。

縄文時代に相当する第５層および第６層では、ＡトレンチおよびＣトレンチにおいて検出され、スギ２点、ハンノキ節幹材14点、ハンノキ節根材36点、コナラ節35点、クヌギ節４点、ケヤキ２点、フジ２点、カエデ属幹材１点、カエデ属根材13点、ケンポナシ属１点、エゴノキ属３点、ヒトツバタゴ22点である。このうちコナラ節の木材は、比較的大型の材で根株状のものも見られる。この５・６層において、カエデ属根材は５層上部において多く、またハンノキ節幹材やコナラ節あるいはヒトツバタゴは６層下部に多いという特徴が見られる（第15表）。 22点検出されるヒトツバタゴは、この遺跡における大きな特徴として位置づけられる。現在その分布域は愛知県や長野県あるいは岐阜県の東濃地方を中心として一部地域にのみ分布しているが、縄文時代のこの地域には比較的普通に生育していた可能性が高い。これまで遺跡発掘におけるヒトツバタゴの検出例は少なく（例えば、鈴木・能城、1987）、このヒトツバタゴは植生史的な意味において貴重な資料となる。

# Ⅴ．仲迫間遺跡のプラント・オパール

## 1．概要

一般に根から吸収された珪酸分は植物体内の各細胞に運ばれ、蒸散作用によりその細胞内に沈積される(植物珪酸体)。イネ科植物は別名珪酸植物とも呼ばれ珪酸を多量に吸収することが知られており(藤原　1976)、葉に形成された機動細胞珪酸体(プラント・オパール)についてはイネを中心とした形態分類の研究が進んでいる(藤原　1978など)。こうしたことから仲迫間遺跡の主に鎌倉・室町時代以降の堆積物についてプラント・オパール分析からイネの存在、稲作の検討を試みた。また、その他のイネ科植物の植生変遷についても検討を試みた。

## 2．試料と分析方法

プラント・オパール分析に供した試料は、Aトレンチ西壁が8点、Bトレンチ北壁が10点の計18点である。各地点の地質柱状図や堆積物(試料)の詳しい記載についてはⅠの遺跡の概要および層序を参照して頂き、ここでは各試料の簡単な記載にとどめる。Aトレンチ西壁（試料1～8）について、おおむね黒～黒灰色のやや粘土質の砂質シルトで、多少砂のはいりかたに違いが認められる。また試料1、2にはヒゲ根様のものが少しみられる。Bトレンチ北壁（試料1～10）は、試料1、2が黒灰色の砂質粘土～シルトでヒゲ根様のものが多く認められる。試料3～9は黒灰～黒色の砂質シルトで、試料9はやや粘土質、試料3～5にはヒゲ根様のものがみられる。試料10は黒灰色の砂質シルト～シルト質砂である。

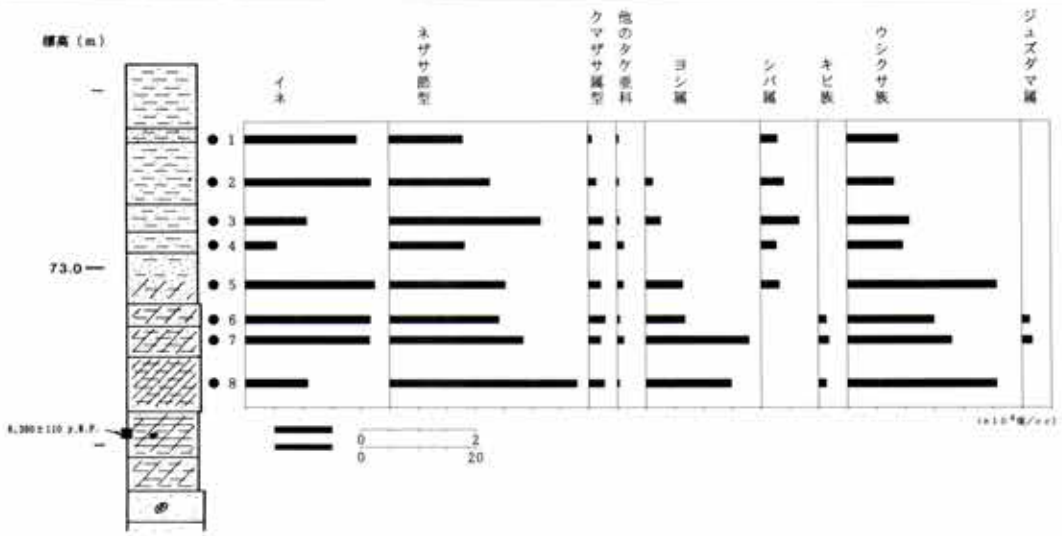
なお出土遺物・遺構から時代観が示されている。それによると、Bトレンチ北壁試料10が奈良時代以前(第5層)、Aトレンチ西壁の試料7・8およびBトレンチ北壁試料8・9が平安・鎌倉時代(第4層)、Aトレンチ西壁試料5・6およびBトレンチ北壁試料6・7が鎌倉・室町時代の開田期(第3層)、Aトレンチ西壁試料2～4およびBトレンチ北壁試料3～5が近世・近代(第2層)、Aトレンチ西壁試料1およびBトレンチ北壁試料1・2が現水田耕作土（第1層）である。

これら18試料について次のような手順にしたがってプラント・オパール分析を行った。

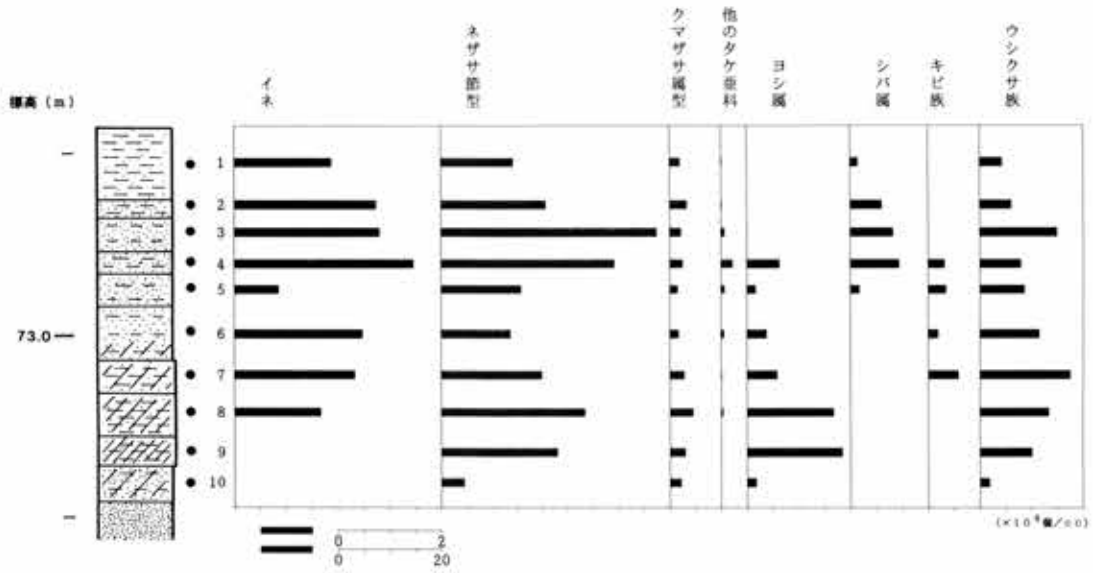
体積を測定した試料を乾燥後秤量する(仮比重測定)。別に試料約1g(秤量)をトールビーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ(直径約40μm)を加える。これに30%の過酸化水素水を20～30cc加え、脱有機物処理を行う。これに水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により20μm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパ

**第16表　試料1g当りのプラント・オパール個数**

| 試　料 | | イネ | ネザサ節型 | クマザサ属型 | 他のタケ亜科 | ヨシ属 | シバ属 | キビ族 | ウシクサ族 | ジュズダマ属 | 不明 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| Aトレンチ西壁 | 1 | 17,900 | 120,100 | 6,900 | 4,100 | 0 | 2,800 | 0 | 8,300 | 0 | 20,700 |
| | 2 | 21,400 | 174,300 | 14,700 | 4,000 | 1,300 | 4,000 | 0 | 8,000 | 0 | 22,800 |
| | 3 | 10,400 | 259,200 | 26,100 | 5,200 | 2,600 | 6,500 | 0 | 10,400 | 0 | 48,200 |
| | 4 | 4,900 | 117,800 | 19,600 | 11,000 | 0 | 2,500 | 0 | 8,600 | 0 | 25,800 |
| | 5 | 19,300 | 175,500 | 19,300 | 9,700 | 5,500 | 2,800 | 0 | 22,100 | 0 | 45,600 |
| | 6 | 22,300 | 197,700 | 30,600 | 5,600 | 7,000 | 0 | 1,400 | 15,300 | 1,400 | 43,200 |
| | 7 | 20,300 | 221,900 | 20,300 | 11,900 | 16,900 | 0 | 1,700 | 16,900 | 1,700 | 66,100 |
| | 8 | 13,700 | 417,300 | 35,900 | 5,100 | 18,800 | 0 | 1,700 | 32,500 | 0 | 63,300 |
| Bトレンチ北壁 | 1 | 17,600 | 133,900 | 18,900 | 1,400 | 0 | 1,400 | 0 | 4,100 | 0 | 51,400 |
| | 2 | 22,200 | 168,000 | 27,200 | 1,200 | 0 | 4,900 | 0 | 4,900 | 0 | 32,100 |
| | 3 | 22,900 | 345,800 | 17,500 | 5,400 | 0 | 6,700 | 0 | 12,100 | 0 | 44,400 |
| | 4 | 27,600 | 272,300 | 20,100 | 17,600 | 5,000 | 7,500 | 2,500 | 6,300 | 0 | 35,100 |
| | 5 | 6,200 | 113,800 | 11,100 | 4,900 | 1,200 | 1,200 | 2,500 | 6,200 | 0 | 23,500 |
| | 6 | 18,000 | 99,400 | 12,400 | 4,100 | 2,800 | 0 | 1,400 | 8,300 | 0 | 24,900 |
| | 7 | 23,400 | 200,500 | 27,800 | 1,500 | 5,900 | 0 | 5,900 | 17,600 | 0 | 45,400 |
| | 8 | 15,400 | 261,100 | 41,500 | 3,100 | 15,400 | 0 | 0 | 12,300 | 0 | 36,900 |
| | 9 | 0 | 195,200 | 25,600 | 0 | 15,700 | 0 | 0 | 8,500 | 0 | 32,800 |
| | 10 | 0 | 30,400 | 14,600 | 0 | 1,200 | 0 | 0 | 1,200 | 0 | 6,100 |




第39図　Aトレンチ西壁のプラント・オパール分布図




第40図　Bトレンチ北壁のプラント・オパール分布図

ラートを作成し、検鏡した。同定および計数は機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパールについてガラスビーズが 300個に達するまで行った。

### 3．分析結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料1 g当りの各プラント・オパール個数を求めた(第16表)。またこのプラント・オパール個数と試料の仮比重から試料1 cc当りの各プラント・オパール個数を算出し、それらの分布を第39図および第40図に示した。なお以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は試料1 g当りの検出個数である。

分析の結果、Aトレンチ西壁では分析を行った全試料よりイネのプラント・オパールが検出された。最も多いのは試料6の22,300個で、他に試料2、7において20,000個を越えている。また最も少ない試料4で 4,900個得られている。イネ以外では、ネザサ節型が非常に多く検出されており、試料8では 400,000個を越え、他も約120,000個～約260,000個得られている。クマザサ属型も試料1(約 7,000個)を除き20,000前後と比較的得られており、ウシクサ族は下部5試料では20,000個前後と多いが、上部4試料では10,000個前後と半減している。ヨシ属は下部で多く得られ、上部に向かい急減し、この上部においてシバ属が連続して得られている。

Bトレンチ北壁において、イネは下部の2試料を除く8試料(試料1～8)から産出しており、最も多いのは試料4の27,600個、最も少ないのは試料5の 6,200個、他は20,000個前後である。イネ以外について見ると、やはりネザサ節型が非常に多く、下部(試料8の約 260,000個)と上部(試料3の約 350,000個)においてピークが認められる。同様の傾向がクマザサ属型やヨシ属、ウシクサ族にもみられる。そのうち、ヨシ属は試料8、9(約15,000個)と試料4( 5,000個)で多く得られ、ウシクサ族は試料7(約18,000個)と試料3(約12,000個)で多く、他は 6,000個前後である。その他ではシバ属が試料5より上位で得られ、試料3では 6,500個に達している。

### 4．水田稲作について

以上のように、Bトレンチ北壁の試料9、10を除く他の16試料よりイネのプラント・オパールが検出されている。稲作の検証として、イネのプラント・オパールが試料1 g当り 5,000個以上検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性は高いと判断されている(古環境研究所、1989)。この基準に従えば、イネが検出された各試料層準において稲作が行われていた可能性は高いと判断される。時代としては概ね第4層の平安・鎌倉時代以降である。

## 5．遺跡周辺のイネ科植物

両地点の下部試料においてはヨシ属が多く検出されており、遺跡周辺ではヨシなどが生育する湿地が広がっていた。その後、遅くとも平安・鎌倉時代以降に遺跡周辺では稲作が始まり、稲作の拡大とともにヨシ属は急激にその生育地を狭めていった。またネザサ節型のプラント・オパールが非常に多く検出されており、遺跡周辺微高地にネザサ節などが多く生育していたのであろう。このネザサ節は人類が道を開き、少しでも日の射す地面を縫って森林内に進入して宅地や耕地の周辺に広がるといった、いわば人類が出現してからその分布圏が非常に拡ったと考えられている(室井　1960)。分布図をみるとイネの増減と呼応するようにネザサ節型も増減しており、遺跡周辺における稲作すなわち人間の動向によりネザサ節などの分布域が左右されているかのようにみうけられる。またススキなどのウシクサ族も同様の傾向を示しており、ネザサ節などとともにススキなどが生育する草地の広がりが考えられる。このように平安・鎌倉時代以降と思われるが、遺跡周辺低地では稲作が始まり、この稲作地の拡大とともにその周辺にネザサなどのネザサ節やススキなどのウシクサ族が生育地を広げ、微高地における住居周辺にもこれらが侵入し、遺跡周辺ではこれらが普通にみられる景観となっていたであろう。

Aトレンチ西壁試料4とBトレンチ北壁試料5においてイネの検出個数が急減しているが、他の分類群においても大きな変化が見られる。Aトレンチ西壁のネザサ節型やウシクサ族などは急減し、これと対照的にシバ属は急増あるいは増加傾向が見られる。こうしたことからこの第2層下部において何らかの事件が起きた可能性がある。この事件については今後の課題としたいが、これにより稲作は一時的に中断あるいは縮小された可能性が考えられ、これ以後遺跡周辺では比較的乾いた環境が広がり、シバ属の侵入・分布拡大があり、ヨシ属は稲作の拡大とともにさらにその分布域を狭めていった。時代としてはおおよそ近世以降である。

## 6．まとめ

仲迫間遺跡周辺低地部では、ヨシ属が生育する湿地が広がっていたが、平安・鎌倉時代以降における稲作の開始とその後の拡大で分布域を急激に狭めていった。またこの稲作地や微高地周辺では、ネザサ節やウシクサ族などが生育する草地的景観となった。

その後、稲作の一時的中断あるいは縮小が考えられるが、おおよそ近世以降においては稲作が行われ、それとともにネザサ節やウシクサ族なども分布域を広げていった。またシバ属が生育する比較的乾いた環境もこの頃より遺跡周辺では見られるようになった。

## VI. ま と め

伸迫間遺跡における立地環境と周辺植生を復元するために、自然科学的な検討を行った。自然科学的検討は、1．堆積環境の復元として珪藻化石群集、2．周辺植生の復元として花粉化石群集や木材遺体群集およびプラント・オパール化石、3．稲作の推定としてプラント・オパール化石の各分析である。ここでは、各テーマごとにその概略を述べる。なお、周辺植生の復元と稲作の推定はまとめて述べる。

### 1．堆積環境の復元

遺跡周辺は、地理的環境あるいは層序学的検討により、概ね湧水による豊富な水に恵まれた環境が理解された。各トレンチにおける珪藻化石群集の検討から、概ね4期の環境変化が認められた。

第1期は、層位的には第6層の縄文時代泥炭質砂層に相当するが、泥質物を堆積させることのない、また、湖沼的要素を持つ珪藻化石群集によって指標される池的環境が成立した。この時期の末期においては、その要素が一段と強く示され、ジュンサイ属の花粉化石出現で示される清水的環境が形成された。

第2期においては、層位的には褐色シルト質砂層～砂質シルト層～砂混じりシルト質粘土層の第5層に相当するが、第1期に引続き水深のある所で生育する珪藻化石群集が見られるが、その優占種に変化が認められる。これは、堆積物が泥質あるいはシルト質であることから運搬営力がやや低下し、貧栄養環境が存在した。

第3期では、層位的には第4層の黒色～黒褐色の砂質シルトや第3層の砂質シルト層あるいは第2層の砂質シルト層に相当するが、沼沢湿地を指標する珪藻化石種群が見られ、下位時期の第1期あるいは第2期と同程度の水深が維持されたものと思われるが、沼沢湿地的環境に変化した。ただし、第4層は移行期に相当する。

第4期では、層位的には砂質シルトからなる第1層に相当する現水田耕作土である。この段階では、浮遊生種が激減し、これに代わって沼沢湿地を指標する底生種群が卓越する。これは、現在の水田にみられる環境である。

## 2．周辺植生の復元および稲作の推定

周辺植生の様子は、樹木花粉化石群集のから大きく3期に区分される。

第1期は、層位的には第6層の縄文時代層あるいはそれに続く第5層で、コナラ亜属を中心として、クマシデ属―アサダ属、ブナ属、クリ属、ニレ属―ケヤキ属、エノキ属―ムクノキ属、トチノキ属などの落葉広葉樹が構成する森林が成立し、アカガシ亜属、シイノキ属などの常緑広葉樹やモミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、コウヤマキ属などの針葉樹なども混じえていた。一方、珪藻化石群集から推定される池内には、ジュンサイ属やヒルムシロ属あるいはクロモなど多種の水生植物が繁茂し、その周辺ではハンノキ属などからなる湿地林も成立したと考える。また木材遺体において検出されたモクセイ科のヒトツバタゴも、ごく普通に生育していたものと思われる。

第2期は、層位的には、平安～室町時代とされる第4層あるいは第3層に相当する。この時期周辺では、第1期に引続きコナラ亜属が中心で、クマシデ属―アサダ属、ハンノキ属、ブナ属、クリ属などからなる落葉広葉樹林が成立し、一部常緑広葉樹のアカガシ亜属がその林分を拡大していた。第1期に成立した池あるいは隣接地は沼沢地化し、水田耕作が行われていた。この水田化に伴ってヨシ属が徐々にその生息域を狭め始めた。

第3期は、層位的には近世の第2層あるいは現代の第1層に相当する。この時期になると、コナラ亜属に代わってマツ属複維管束亜属やスギ属などの針葉樹が急増・分布拡大する。これに伴って、アカガシ亜属やシイノキ属などの常緑広葉樹やハンノキ属なども殆ど見られなくなる。これは、大規模な伐採と植林による人為的なものである。また、シバ属の侵入・分布拡大が進行し、比較的乾いた環境が広がり、ソバ属やアブラナ科などの栽培が行われていたものと推定される。一方、隣接地では初期の段階では一時的に中断があるものの、広い地域において稲作が行われたものと考える。

このように、縄文時代以降、この地域は湧水による豊富な水源に恵まれ、ごく最近までこの状況は継続していたと考えられる。これは、現在においても低地において、土地改良をすることなく水田耕作が行われていること、また北側に位置する宮浦池の存在からも理解される。

**［引用文献］**


・安藤一男（1990）　淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，p73-88．
・川口市遺跡調査会（1987）　赤山―古環境編．川口市遺跡調査会報告第10集，307p．
・藤原宏志（1976）　プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）―数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法―．考古学と自然科学，9，p15-29．
・藤原宏志（1978）　プラント・オパール分析法の基礎的研究（2）―イネ（Oryza）属植物における機動細胞珪酸体の形状―．考古学と自然科学，11，p9-20．
・古環境研究所（1989）　プラント・オパール．練馬区弁天池低湿地遺跡の調査，東京都住宅局・練馬区遺跡調

査会、p133-140.
・小杉正人（1986）　陸生珪藻による古環境の解析とその意義．―わが国への導入とその展望―．植生史研究．p29-44.
・小杉正人（1988）　珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究．p1-20.
・森　勇一・永草康次（1992）　愛知県勝川遺跡の自然科学的研究．「勝川遺跡」、愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第29集、p53-100.
・宮井　綽（1960）　竹笹の生態を中心とした分布．富士竹類植物園報告．5.p103-122.
・鹿野勘次（1990）　美濃加茂周辺地域の第四系．岐阜県地学教育．26.p11-24.
・鈴木三男・能城修一（1987）　西八木層出土木材の樹種．『国立歴史民俗博物館研究報告』第３集、p125-134.
・東北新幹線中里遺跡調査会（1987）　中里遺跡２―遺跡と古環境２―．中里遺跡調査団編、377p.

# 第5章　考　　察

## 第1節　「美濃国」刻印須恵器

本遺跡の第3地点Mトレンチ第Ⅳ層から「美濃国」刻印須恵器が1点出土した。これは一辺が2㎝程の小破片であるが、坏蓋と思われる。この内面に陽刻の「美」だけ判明できるが、「美」の左下に「国」構えの右上角の一部が認められる。従って、原印の外形が明瞭で、字は太目で比較的書体が整っており、縦に「美濃」とし、その中央左隣に「国」を配するものと思われる。老洞［高木(1981)］の刻印形式によるとB-Ⅱ-4[1]と考えられる。「美濃国」刻印須恵器の焼成年代は、楢崎(1981)によれば8世紀第1四半期に位置づけられている。

全国的に特異な「美濃国」刻印須恵器が焼かれた背景を、野村(1981)は、慶雲3年(706)から14年もの長期間在任した笠朝臣麻呂の施策（国名表記「美濃」の公定、美濃不破関の整備、吉蘇路の開通、広域条里の設定、諸郡の分置、当耆郡の醴泉行幸）から述べている。

楢崎(1981)は、野村(1981)をうけて、老洞古窯を笠朝臣麻呂が造らせた官窯とし、この刻印須恵器の配布についても、単なる調貢陶器ではなく、麻呂の関係を考慮すべきで、なんらかの国家的規制が働いていたと述べている。

この刻印須恵器の分布は、高木(1981)の時点では老洞第1号窯を除き全国で27箇所37点報告されている。しかし、近年の発掘調査の増加により、筆者が知り得る範囲では、第17・18表のように、美濃須衛古窯跡群の老洞第1号窯や朝倉古窯跡、太田1号窯・蘇原飛鳥町の古窯跡のような生産地4箇所を除き、消費地では、岐阜県内は25箇所40点と最も多数出土し、次に愛知県が8箇所8点と多いが、これは生産地の美濃須衛古窯跡群と木曽川を挟んで接する地域で美濃国と密接な関係を持った地域であるからであろう。三重県は3箇所3点、奈良県は3箇所6点、大阪府は1箇所1点、長野県は3箇所4点、計43箇所62点出土している。他県の状況把握が十分ではないが、近年徐々に増加しつつある。しかし、岐阜県内の出土例の増加は注目される。

大熊(1990)は、「美濃国」刻印須恵器出土地の東限が従来考えられていた美濃加茂市から、神坂峠を越えて長野県飯田市(恒川遺跡)へ拡大し、この恒川遺跡が信濃国伊那郡の郡衙比定地であることから、東山道との関連を想定している。また、岐阜市の城之内遺跡も単に寺院跡だけでなく、東山道との関連から駅家等の公的性格を持った遺跡と考えている。

今回、第17・18表を作成するにあたって調査した結果、県内の出土地の東限は可児市の宮之脇遺跡A地点まで拡大し、東限は長野県飯田市及び松本市南栗遺跡・平田本郷遺跡まで拡大した。従来、西限は奈良県の平城宮跡であったが、藤原京跡や添上郡月ヶ瀬村尾山代遺跡からも

第17表　「美濃国」刻印須恵器出土地一覧（県内）

| No. | 出土地・遺跡名 | 器形・施印場所 | 印文 | 備考（刻印形式）※1 | 文献No. |
|---|---|---|---|---|---|
| 岐阜県 | | | | | |
| 1 | 岐阜市芥見老洞　老洞1号窯 | 15器形（細分25器形） | | 1.290点 施印具 発 | 4.6.7. |
| 2 | 〃　芥見間無田　朝倉古窯 | 無台坏身内底 | 美濃国 | 陰刻 A-II-1 | 4.6.7. |
| | | 〃 | 美濃国 | 陰刻 A-II-3 | 4.6.7. |
| | | 〃 | 美濃国 | 陰刻 A-II-5 | 4.6.7. |
| | | 〃 | 美濃国 | 陰刻 A-II類 | 4.6.7. |
| | | 〃 | 美濃 | 陰刻 A-I-1 | 4.6.7. |
| | | 坏蓋内面 | 美濃 | 陰刻 A-I-5 | 4.6.7. |
| 3 | 〃　芥見長山 | 平瓶胴側面 | 美濃国 | 陰刻 A-II-1 | 1.4.6.7. |
| 4 | 〃　岩滝古宮 | 坏蓋内面 | 美濃国 | 陰刻 A-II-1 | 6.7. |
| 5 | 〃　両部境川 | 無台坏身内底 | 美濃国 | 陰刻 A-I類？ | 6.7. |
| 6 | 〃　御望4丁目　御望遺跡B地点 | 有台坏身？外側面 | 美濃 | 陰刻 A-I-1？ | ※6 |
| 7 | 〃　秋沢 | 無台坏身内底 | 美濃 | 陰刻 A-I-5 | ※6 |
| 8 | 〃　長良真正町3丁目　城之内遺跡（市） | 無台坏身内底 | 美濃 | 陰刻 A-I-1 発 | 5.8. |
| 9 | 〃　長良西後町　城之内遺跡（県） | 無台坏身内底 | 美濃国 | 陽刻 B-II-2 発 | 5. |
| | | 〃 | 美濃 | 陰刻 A-I-1 発 | 5. |
| | | 〃 | 美濃 | 陰刻 A-I-1 発 | 5. |
| | | 〃 | 美濃国 | 陰刻 A-II-2 発 | 5. |
| 10 | 各務原市須衛町 | 器形不明 | 美濃国 | 陰刻 A-II-1 | 4.6.7. |
| 11 | 〃　須衛町字太田　太田1号窯 | 無台坏内底 | 美濃 | 陰刻 A-I類 発 | ※2 |
| 12 | 〃　蘇原ノギ山 | 有台坏身内底 | 美濃 | 陰刻 A-I-6 | 4.6. |
| | | 坏蓋内面 | 美濃国 | 陰刻 A-II-5 | 4.6. |
| 13 | 〃　蘇原飛鳥町（窯跡） | 無台坏身内底 | 美濃 | 陰刻 A-I-6 | 4.6. |
| 14 | 〃　蘇原村雨町　村雨町遺跡 | 台付長頸瓶胴部外面 | 美濃 | 篦書（A-I-6'）※4 | 1.2.4.6.7. |
| 15 | 〃　那加前洞新町　前洞遺跡A地点 | 坏身外側面 | 美濃国 | 陰刻 A-II類 発 | ※2 |
| 16 | 〃　三井町字寺浦　三井遺跡 | 坏蓋外面 | 美濃… | 陰刻 A- 発 | 3.4. |
| | | 壺肩部外面 | 美濃国 | 陰刻 A-II類 発 | 3.4. |
| | | 坏蓋外面 | 美濃 | 陰刻（篦書？※7）発 | 3.4. |
| | | 坏身内底 | …濃国 | 陰刻（篦書？※7）発 | 3.4. |
| | | 坏身内底 | 美…… | 陰刻 A- 発 | 3.4. |
| | | 坏蓋外面 | …濃… | 陰刻 A- 発 | 3.4. |
| | | 坏身内底 | …濃… | 陽刻 B- 発 | 3.4. |
| | | 坏身外底 | ……国 | 陽刻 B-II類 発 | 3.4. |
| 17 | 関市東田原 | 坏蓋内面 | 美濃国 | 陰刻 A-II-2 | 1.4.6. |
| 18 | 〃　下有知字重竹　重竹遺跡B地点 | 無台坏身 | …濃… | 陰刻 A- 発 | 10. |
| 19 | 〃　下有知字榿木洞　榿之木洞遺跡 | 無台坏身 | 美濃 | 陰刻 A-I類 発 | 5. ※5 |
| 20 | 美濃加茂市太田町西町　トドメキ古墳周辺 | 大型平瓶頸部外面 | 美濃 | 陰刻 A-I-1 | 4.6.9. |
| 21 | 〃　田島町4丁目字欅原　仲迫間遺跡 | 坏蓋内面？ | 美…… | 陽刻 B-II-4 発 | 本遺跡 |
| 22 | 〃　蜂屋町上蜂屋　尾崎遺跡 | 坏蓋ツマミ上面 | 美濃国 | 篦書 C-II類 発 | ※3 |
| | | 有台坏身内底 | 美濃… | 陰刻 A- 発 | ※3 |
| 23 | 可児市川合字宮之脇　宮之脇遺跡A地点 | 有台坏身内底 | 美濃国 | 陰刻 A-II類 発 | ※8 |
| 24 | 本巣郡真正町真桑 | 無台坏身内底 | 美濃 | 陰刻 A-I-5 | 4.6.7. |
| 25 | 大垣市林町 | 無台坏身内底 | 美濃 | 陰刻 A-I-1 | 4.6.7. |
| 26 | 〃　南一色町若林紡績内　南一色遺跡 | 無台坏身内底 | 美濃 | 陰刻 A-I-1 | 4.6.7. |
| 27 | 〃　荒尾町 | 小瓶胴部側面 | 美濃国 | 陰刻 A-II-2 | 4.6. |
| 28 | 〃　青野町　美濃国分寺跡（回廊跡）（鐘楼跡） | 坏蓋内面 | 美濃国 | 陰刻 A-II-5 発 | 1.4.6.7. |
| | | 無台坏身内底 | 美濃 | 陰刻 A-I-1 発 | 1.4.6.7. |
| | | 瓶胴外側面 | 美濃国 | 陰刻 A- | 1.6.7. |
| 29 | 不破郡関ヶ原町野上字天楽 | 坏蓋内面 | 美濃国 | 陰刻 A-II-1 | 1.4.6. |
| | | 坏蓋か？ | 美濃 | 陰刻 A-I類？ | 4.6. |

出土していることが判った。また、大阪府守口市大庭北遺跡まで拡大した。

本遺跡から出土した陽刻のもの(老洞のB類)は、老洞第1号窯で1,290点中47点[2]しか出土していない。他の遺跡では、各務原市の三井遺跡2点、岐阜市の城之内遺跡(県)1点、愛知県江南市で1点、計4点出土しているだけで、本遺跡を含めると5例目となる。この陽刻の刻印須恵器の生産量及び出土例が少ないことは、老洞の報告書や大熊(1990)が述べているように、配布・使用に際しての規制が存在したのか、今後の資料の増加を待ちながら検討しなければならない。

美濃加茂市域では、刻印須恵器は太田町西町トドメキ古墳付近[神宮東遺跡か？-吉田(1979)]で採取された須恵器の平瓶が従来から知られていたが、昨年度発掘調査された蜂屋町上蜂屋の尾崎遺跡で2点出土しており、本遺跡のものを入れると4点目である。

吉田(1980)は、加茂郡に式内社9座有り、多くの古代瓦を出土する遺跡が多いこと等から、坂祝町酒倉字雲埋の雲埋遺跡を中心とした美濃加茂市太田地区西方5km以内に加茂県主集団の本拠地を想定している。この関連で太田町西町トドメキ古墳付近出土の刻印須恵器をとらえ、

第18表　「美濃国」刻印須恵器出土地一覧（県外）

| No. | 出土地・遺跡名 | 器形・施印場所 | 印文 | 備考(刻印形式)※1 | 文献No. |
|---|---|---|---|---|---|
| 愛知県 | | | | | |
| 30 | 江南市尾崎字桐野 | 坏蓋内面 | 美濃国 | 陽刻 B-II-7 | 1.4.6.7. |
| 31 | 〃 赤童子字東山 | 有台坏身内底 | 美濃国 | 陰刻 A-II-1 | 1.4.6.7. |
| 32 | 〃 後飛保字新開 | 無台坏身内底 | 美濃 | 陰刻 A-I-3 | 4.6. |
| 33 | 〃 宮田字貝売 | 無台坏身内底 | 美濃 | 陰刻 A-I-4 | 4.6. |
| 34 | 一宮市浅井町尾関字奥屋敷 | 台付長頸瓶頸部外面 | 美濃 | 陰刻 A-I-2 | 1.4.6.7. |
| 35 | 〃 高田字前田 | 無台坏身内底 | 美濃国 | 陰刻 A-II-2 | 1.4.6.7. |
| 36 | 葉栗郡木曽川町玉ノ井先木曽川中洲 | 無台坏身内底 | 美濃国 | 陰刻 A-II-1 | 4.6.7. |
| 37 | 尾西市起字堤町先木曽川中洲 | 台付長頸瓶頸部外面 | 美濃 | 陰刻 A-I-6 | 4.6.7. |
| 長野県 | | | | | |
| 38 | 飯田市座光寺 恒川遺跡 | 坏蓋口縁部外面 | 美濃 | 陰刻 A-I類 発 | 5.11. |
| 三重県 | | | | | |
| 39 | 多気郡明和町金剛坂字竜ノ口 斎宮跡？ | 脚部外側面 | 美濃 | 陰刻 A-I-6 | 1.4.6.7. |
| 40 | 鳥羽市安楽町 贄遺跡 | 無台坏身内底 | 美濃 | 陰刻 A-I-1？ | 4.6.7. |
| 奈良県 | | | | | |
| 41 | 奈良市佐紀町 平城宮跡 | 有台坏身外底 | 美濃 | 陰刻 A-I-6 発 | 4.6.7. |
| | | 坏蓋内面 | 美濃 | 陰刻 A-I-1 発 | 4.6.7. |
| | （東院） | 有台坏身外側面 | 美濃 | 陰刻 A-I-1 発 | 4.6.7. |

※この表は、高木(1981)を基に、文献(1～11)や下記の諸氏の教示により作成したものである。(1994.3月現在)

発：発掘調査によるもの。

※1：高木(1981)による形式分類である。

※2：西村勝弘氏(各務原市埋文センター)の教示による。いずれもまだ未報告である。

※3：佐野康雄氏(当センター)に実見させていただいた。

※4：高木(1981)は陰刻に分類しているが、岩野(1972)は篦書としている。市史編纂[宇野(1983)]の際に実見したところ、篦書きであった。

※5：篠原英政氏(関市教委)の教示による。橿之木洞遺跡はまだ未報告である。

※6：現在実施されている「岐阜市遺跡詳細分布調査」によるもので、内堀信雄氏(岐阜市教委)の教示による。

※7：大江(1981・1983)によれば陰刻としているが、写真等から見ると、篦書きの可能性がある。

※8：川合遺跡群発掘調査成果報告会の資料及び、長瀬治義氏(可児市教委)の教示による。

中央勢力と加茂県主勢力との結びつき、東山道やその支路の飛騨路の開発などから、駅家・郡衙の位置についても言及している。

平成4年度に当センターが調査した尾崎遺跡では、弥生時代中期から奈良時代・中世にかけての住居跡が多数検出され、そこから2点の刻印須恵器が出土している。今年度市教委が隣接する地区を発掘調査しているが、そこからも多くの住居跡が検出されている。従って、尾崎遺跡は大集落跡と考えられる。また、本遺跡では住居跡などの遺構は全く検出できなかったが、遺物を見ると弥生土器・須恵器・土師器・山茶碗などほとんど小破片であるが大量に出土していることや刻印須恵器が1点出土していることから、周辺一特に第3地点が属する上位段丘のL2'面に集落跡が存在する可能性が指摘できる。

従って、「美濃国」刻印須恵器は、楢崎(1981)が述べている「国家的な規制が働いている」ものとの考え方や「時々における記念すべき事業に際して使用した」国衙との公的関係を持つものとの考え方によれば、本遺跡は吉田(1980)の言う加茂県主集団の本拠地からは離れているため、本遺跡の周辺には加茂郡内の何れかの郷[3]ないし東山道[4]や飛騨路[5]に関係する集落遺跡の存在が考えられる。

(宇野 治幸)

**[註]**

1) 高木(1981)の形式分類によれば、
A類は押印された器表の字面が凹むもの：陰刻、
B類は反対に凹印を用い字面が突出するもの：陽刻、
C類は筐書のもの。
また、「美濃」を1類、「美濃国」をII類とし、両者の組合せによって6類の分類をしている。

2) 老洞古窯では、B-II類は47点中43点占める。このうちB-II-1は18点、B-II-4は14点である。

3) 佐野(1980)では、『倭名抄』によれば、加茂郡には11の郷と1つの駅家があり、このうち7郷(美和・生部・井門・小山・日理・志麻・米田)を美濃加茂市域にあてているが、いずれも比定地は明瞭ではない。

4) 各務駅から可児駅までの東山道の経路については、水野(1971)では各務郡の鵜沼で木曽川を渡り、犬山・善師野を経て可児郡に入った説と、木曽川の右岸の峠を越えて美濃加茂市の太田に至り、現在の可児市土田の渡で木曽川を越えたとの説を載せている。また、佐野(1980)は他に考古学的考察からとして方県駅からほぼ東に進み、現在の関市南部から郷部山の北を通って太田に至り、木曽川を越して土田に至る説と、美濃加茂市の市域を東に進み、森山・川合付近より飛騨川を渡り、下米田・牧野を経て兼山付近で木曽川を渡るという説を紹介している。現在では定説はない。

5) 飛騨路については、『延喜式』に武義駅・加茂駅などが記載されている。水野(1971)によると、武義駅は関市下有知から美濃市にかけての有知郷、加茂駅は美濃加茂市の太田という説もあるが川辺町の下麻生(加茂郡中家郷に比定)付近か七宗町の神淵あたりを想定している。方県駅を長良とすれば、長良志段味あるいは古津で東山道の本路と別れ、東北に進んで武義駅に至り、加茂駅を通って石浦駅に至る経路の諸説を紹介しているが、いずれも定説が無く、武義駅から加茂駅・下留駅への経路も不明である。

**［引用・参考文献］**（執筆者の前の番号は、第17・18表の文献番号である。）

16 井上義光　1986「宇陀地方の遺跡調査　VI（北部）尾山代遺跡」『奈良県遺跡調査概報一第二分冊1985年度』奈良県橿原考古学研究所
1 岩野見司　1972「「美濃国」施印須恵器について」『考古学雑誌』第52巻3号
2 宇野治幸　1983「第3章 第3節 古代の集落跡」『各務原市史　考古・民俗編　考古』各務原市
3 大江　命他　1981『一般国道21号那加バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 三井遺跡・六軒遺跡』各務原市教育委員会
4 大江　命　1983「第1章 第2節 歴史時代の各務原」『各務原市史　考古・民俗編　考古』各務原市
5 大熊厚志　1990『城之内遺跡』岐阜県教育委員会
17 小平和夫　1990「第3章 第2節古代の遺物 1古代の土器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書7 一松本市内 その4 南栗遺跡』（財）長野県埋蔵文化財センター・長野県教育委員会
15 斎宮歴史博物館　1989『斎宮跡発掘資料選』
・ 佐野一彦　1980「古代・中世 第1章～第3章」『美濃加茂市史　通史編』美濃加茂市
6 高木　洋　1981「第V章 4美濃国刻印須恵器」『老洞古窯跡群発掘調査報告書』岐阜市教育委員会
14 辻本　武　1986『大庭北遺跡発掘調査概要・II』大阪府教育委員会
7 楢崎彰一　1979「第2部 第4節 歴史時代 2古窯跡」『岐阜市史　史料編　考古・文化財』岐阜市
・ 楢崎彰一　1981「第IX章 結語」『老洞古窯跡群発掘調査報告書』岐阜市教育委員会
12 奈良国立文化財研究所　1986「藤原京左京六条三坊」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報16』奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部
13 名古屋市博物館　1994『特別展　発掘された東海の古代　一律令制下の国々』
8 堀　正人　1990「第5章 第2節土器類 5須恵器」『城之内遺跡』岐阜市教育委員会
・ 野村忠夫　1981「第VIII章 文献的考察 老洞古窯跡群の歴史的背景」『老洞古窯跡群発掘調査報告書』岐阜市教育委員会
・水野柳太郎　1971「第12章 古代の交通」『岐阜県史 通史編 古代』岐阜県
9 吉田英敏　1980「原始・古代 第5章 第2節 美濃加茂市周辺の遺跡」『美濃加茂市史　通史編』美濃加茂市
10 吉田英敏　1984「B地点 II古代の遺構と遺物 5考察」『重竹遺跡一その3一』関市教育委員会
11 飯田市教育委員会　1988『恒川遺跡（田中・倉垣外地籍）』

## 第2節　中近世陶磁器類の一考察

### 1．土師皿について

本遺跡における土師皿の出土はすべて包含層中に認められ、遺構に伴う遺物はみられない。そのため、その時期を確定するには困難であるが、本稿では土師皿が比較的まとまって出土した関市重竹遺跡、岐阜市城之内遺跡、岐阜市千畳敷との比較を主に技法を中心として行い、若干の考察を試みたい。[1]

重竹遺跡で出土した土師皿は共伴した山茶碗から、主に13世紀後半から14世紀後半（北部系山茶碗III期に対応）に位置付けられる。その大まかな特徴として、

1．法量は口径が12cm前後と8cm前後の2法量、

2．内外面ともに目の細かい刷毛状具により調整される、

3．体部下半がやや張って丸みを帯びた器形、　　などが挙げられる。

城之内遺跡出土の土師皿は、京都系土師皿の編年に対応させて15世紀～16世紀の年代観を与えている。その特徴として、

1．法量は大中小の3法量、

2．内面はナデ調整、外面は指おさえ痕が残る、

3．体部は直線的、あるいは外反気味、　　などが挙げられる。

また千畳敷の土師皿のうち、古瀬戸後期から瀬戸・美濃大窯期の遺物と共伴して出土したもの（主体グループ）の特徴は、城之内遺跡出土の土師皿と大きな差異はみられないが、内面ナデ調整の後、ミガキ状の平滑な調整を施すものが多くみられるとしている。

上述した特徴から、13世紀後半以降の岐阜県における土師皿のおおまかな型式組列を推定すると、法量は2法量から3法量へ、調整は内面がナデからナデ、あるいは平滑調整へ、外面がナデから指おさえへ、体部の形状が丸みを帯びたものから直線的、あるいは外反気味のものへの変化が窺える。これらの流れを本遺跡の分類に対応させると、1類について形状分類はA類→B類、調整分類はa類→（b類）→c類・d類・e類の型式変化が、また、2類について形状分類はA類→（B類）→C類・D類・E類、調整分類はa類→（b類）→c類・d類・e類の型式変化が推定できる。そして、1類、2類とも調整分類a類は13世紀～14世紀に、cdе類は15世紀～16世紀に、b類はやや幅をもたせて14世紀～16世紀に対応すると考えられる。

これらを分類に従い、個体数を算出し比較すると、最も比率が高いものは2-D-d類であり、全体の35%を占める。さらに、2-D類だけでは全体の約60%と半数以上を占め、15世紀～16世紀に比定される土師皿が多いことがわかる。これに対して、確実に13世紀～ 14世紀に比定され

第19表　遺物集計表

| 時期 | 産　地 | 第1地点 | 第2地点 | 第3地点 | 合　計 |
|---|---|---|---|---|---|
| I | 北部系山茶碗 | 0.3 (6) | 0.94 (16) | 0.16 (2) | 1.40 (24) |
| | 南部系山茶碗 | 0.09 (2) | 0.45 (6) | 0.18 (4) | 0.72 (12) |
| | 小計 | 0.39 (8) | 1.39 (22) | 0.34 (6) | 2.12 (36) |
| II | 北部系山茶碗 | 1.03 (25) | 9.80 (130) | 0.59 (10) | 11.42 (165) |
| | 南部系山茶碗 | 0 | 1.56 (25) | 0.19 (4) | 1.75 (29) |
| | 小計 | 1.03 (25) | 11.36 (155) | 0.78 (14) | 13.17 (194) |
| III | 北部系山茶碗 | 2.46 (46) | 20.54 (298) | 1.55 (23) | 24.55 (367) |
| | 南部系山茶碗 | 0 | 0.12 (2) | 0 | 0.12 (2) |
| | 青磁 | 0 | 0.12 (2) | 0 | 0.12 (2) |
| | 小計 | 2.46 (46) | 20.78 (302) | 1.55 (23) | 24.79 (371) |
| IV | 北部系山茶碗 | 0.89 (12) | 10.69 (137) | 1.09 (12) | 12.67 (161) |
| | 青磁 | 0 | 0.11 (2) | 0 | 0.11 (2) |
| | 古瀬戸 | 0.06 (2) | 1.24 (20) | 0.04 (1) | 1.34 (23) |
| | 小計 | 0.95 (14) | 12.04 (159) | 1.13 (13) | 14.12 (186) |
| V | 瀬戸美濃 | 0.2 (2) | 1.76 (22) | 0.34 (5) | 2.30 (29) |
| VI | 瀬戸美濃 | 0.59 (7) | 2.56 (34) | 0.35 (6) | 3.50 (47) |
| VII | 瀬戸美濃 | 0.76 (7) | 1.89 (26) | 2.06 (26) | 4.71 (59) |
| VIII | 瀬戸美濃 | 0.69 (10) | 8.15 (96) | 1.92 (29) | 10.76 (135) |
| 不明 | 瀬戸美濃 | 0.11 (2) | 1.14 (10) | 0.53 (6) | 1.78 (18) |
| | 土師皿 | 0 | 9.0 (93) | 0.1 (1) | 9.1 (94) |
| 合　計 | | 7.18 (121) | 70.07 (919) | 9.1 (129) | 86.35 (1169) |

※左側の数値は口縁部計測法により算出した個体数，右側の（　）の数値は口縁部が残る破片数を表す。

※常滑陶器の胴部破片が2点確認されたが，口縁部が残存していないため，表には掲載していない。

る1-A-a・b類と2-A・B-a類の総個体数が占める全体の割合は10%以下と非常に少ない。これらは、次に述べる中近世陶器の時期別総個体数の推移とは一致するとは言い難く、本遺跡の土師皿の特異性を示しているといえる。

また、先述した色調と胎土による分類であるが、暗黄褐色を呈し、胎土が粗い土師皿は、他の土師皿とは形態が大きく違うため、他地域からの搬入品と推定される。そして、その形態は1-A-b類、2-A-a・b類に限定され、本分類では古い時期に比定される。これらのなかには第20図1・2のように口縁部外面に一枚の粘土帯を重ね、接合痕を残すものが認められる。この類似例として、愛知県朝日西遺跡出土の土師皿が挙げられ、[2]14世紀後半の年代が与えられている。本遺跡において、古瀬戸が流入し始めるのも14世紀後半であるため、それに伴い供給されたという可能性は否定できないが、今後のこのような資料の増加に期待し、改めて考察したい。

## 2．出土遺物の数量的分析

出土遺物のうち、口縁部残存率計測法により算出した総個体数は 86.35個であり、計測可能な破片数は 1,169破片であった。破片数としてはやや少ないため算出された数値がどれだけ具体的な様相を示すのか疑問もあるが、遺跡の性格の大要把握を目的とすることを理解しておきたい。なお、土師皿は実年代への対応が困難であるため、計測データをグラフ化していない。

時期設定は 100年を基本単位として、12世紀から19世紀まで8期に区分した(第20表)。[3]

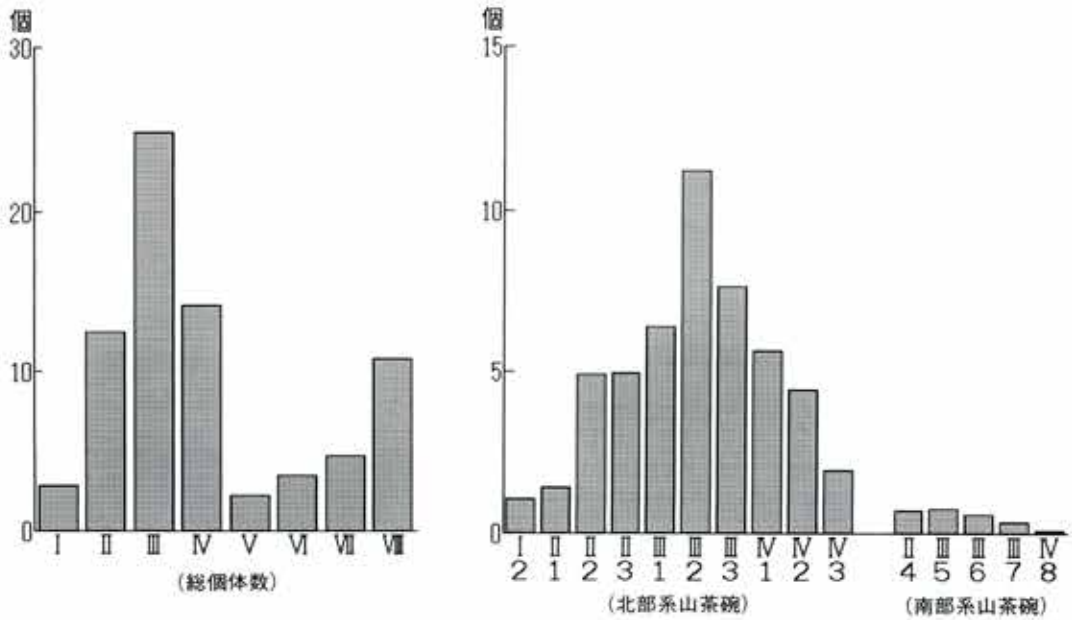
Ⅰ期　11世紀末　～12世紀中頃（北部系山茶碗Ⅰ期に対応）
Ⅱ期　12世紀中頃～13世紀後半（北部系山茶碗Ⅱ期に対応）
Ⅲ期　13世紀後半～14世紀後半（北部系山茶碗Ⅲ期に対応）
Ⅳ期　14世紀後半～15世紀末　（北部系山茶碗Ⅳ期に対応）
Ⅴ期　15世紀末　～17世紀初頭（瀬戸・美濃大窯第1段階～第4段階に対応）
Ⅵ期　17世紀初頭～17世紀末　（本業焼Ⅰ段階に対応）
Ⅶ期　18世紀初頭～18世紀後半（本業焼Ⅱ段階に対応）
Ⅷ期　18世紀後半～19世紀後半（本業焼Ⅲ段階に対応）

上述した時期区分により、各時期の遺物の増減、組成などを考察したい。

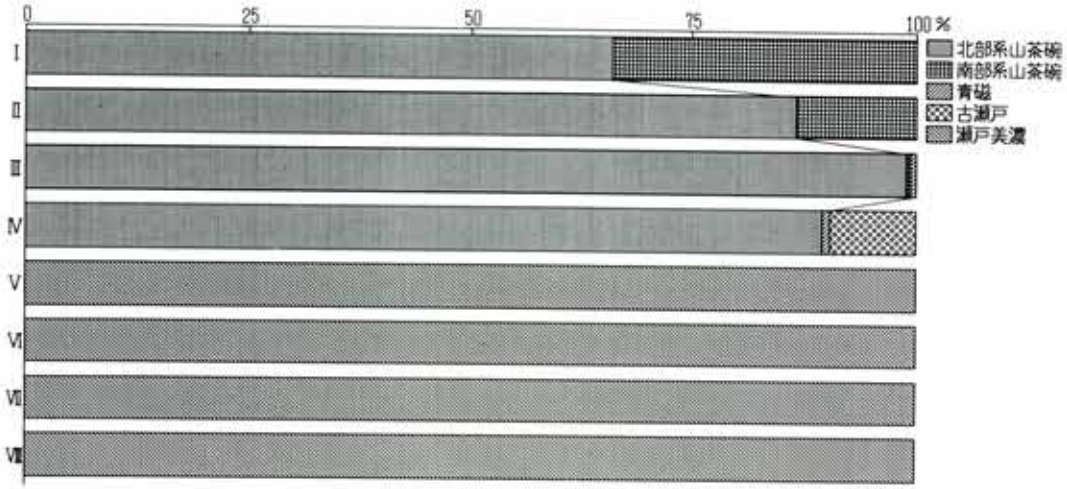
第41図は時期別による個体数を示すが、絶対量では中世の遺物が多く、近世は少ない。Ⅰ期の遺物量が少ないのは、本遺跡で須恵器の出土量が多いのに対し、灰釉陶器の出土量が極端に減少する傾向と連続した現象であろう。そして、Ⅱ期になると大幅に遺物量が増え、特に北部系山茶碗Ⅱ期2段階～3段階にかけての遺物の極端な増加が目立つ。Ⅲ期にはピークに達し、Ⅳ期は一定量安定して遺物が出土する。これらは、生産地で北部系山茶碗がⅡ期の段階で量産

第20表　年代対応表

| | 1100 | 1200 | 1300 | 1400 | 1500 | 1600 | 1700 | 1800 | 1900 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 仲迫間遺跡 | Ⅰ | Ⅱ | Ⅲ | Ⅳ | Ⅴ | Ⅵ | Ⅶ | Ⅷ | |
| 北部系山茶碗 Ⅲ分類 | A-1 | A-2 B-1 B-2 C-1 | C-2 D | E | | | | | |
| 北部系山茶碗 碗分類 | A-1 | A-2 B-1 B-2 B-3 | C-1 C-2 D | E-1 E-2 E-3 E-4 E-5 | | | | | |
| 北部系山茶碗 | Ⅰ 1 2 | Ⅱ 1 2 3 | Ⅲ 1 2 3 | Ⅳ 1 2 3 | | | | | |
| 南部系山茶碗 | Ⅱ 3 4 | Ⅲ 5 6 7 | Ⅳ 8 9 10 11 | | | | | | |
| 古瀬戸 | | 前期 1 2 3 4 | 中期 1 2 3 | 後期 1 2 3 4 | | | | | |
| 瀬戸・美濃大窯 | | | | | 1 2 3 4 5 | | | | |
| 瀬戸・美濃連房（本業焼） | | | | | | Ⅰ 1 2 3 4 | Ⅱ 5 6 7 | Ⅲ 8 9 10 11 | |



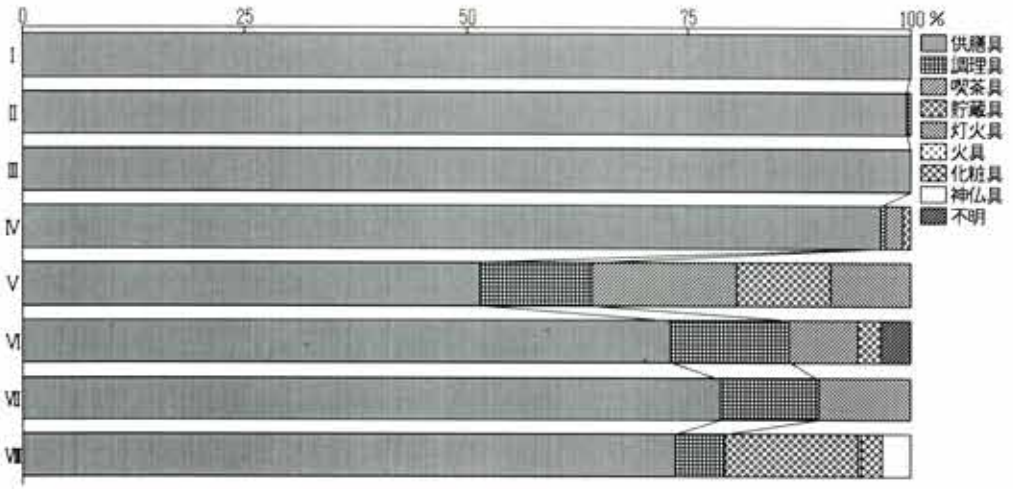

第41図　時期別個体数




| | I | II | III | IV | V | VI | VII | VIII | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 北部系山茶碗 | 1.40 | 11.42 | 24.55 | 12.67 | | | | | 50.04 |
| 南部系山茶碗 | 0.72 | 1.75 | 0.12 | | | | | | 2.59 |
| 青磁 | | | 0.12 | 0.11 | | | | | 0.23 |
| 古瀬戸 | | | | 1.34 | | | | | 1.34 |
| 瀬戸美濃 | | | | | 2.30 | 3.50 | 4.71 | 10.76 | 21.27 |
| 合計 | 2.12 | 13.17 | 24.79 | 14.12 | 2.30 | 3.50 | 4.71 | 10.76 | 75.47 |

※数値は個体数を示す

第42図　時期別産地別構成比




| | I | II | III | IV | V | VI | VII | VIII | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 供膳具 | 2.87 | 12.40 | 24.79 | 13.68 | 1.17 | 2.56 | 3.71 | 7.93 | 69.11 |
| 調理具 | | 0.04 | | 0.06 | 0.29 | 0.47 | 0.52 | 0.59 | 1.97 |
| 喫茶具 | | | | 0.27 | 0.37 | 0.27 | | | 0.91 |
| 貯蔵具 | | | | 0.11 | 0.24 | 0.09 | | 1.61 | 2.05 |
| 灯火具 | | | | | 0.20 | | 0.48 | | 0.68 |
| 火具 | | | | | | | | 0.04 | 0.04 |
| 化粧具 | | | | | | | | 0.25 | 0.25 |
| 神仏具 | | | | | | | | 0.33 | 0.33 |
| 不明 | | | | | | 0.11 | | | 0.11 |
| 合計 | 2.87 | 12.44 | 24.79 | 14.12 | 2.27 | 3.50 | 4.71 | 10.75 | 75.45 |

※数値は個体数を示す

第43図　時期別用途別構成比

体制に入ること[4]に対応する。しかし、V期には遺物量が激減する。なかでも天目茶碗を除く碗類はほとんどみられず、皿類がわずかにみられる程度である。[5]そして、VI期からVIII期にかけて遺物量は徐々に増加してゆく。このような各時期による遺物量の増減は各時期の生産量に大きく影響されるため、集落の成立と展開ということに直接結び付くとは考え難いが、現地点ではII期の後半からIII期にかけてを集落の盛行時とし、それ以降を安定期と考えたい。

次に産地組成であるが(第42図)、全体的にみて中世は北部系山茶碗、近世は瀬戸美濃製品が大分部を占める。I期では破片数が少ないものの比率的には南部系山茶碗が高い数値を示している。しかし、II期からIV期にかけて北部系山茶碗が圧倒的に多くなり、南部系山茶碗はIII期においてほとんどみられなくなる。VI期以降はすべて瀬戸美濃製品で占められ、肥前陶器や信楽陶器などは確認されなかった。

さて、中近世における階層性の高さを示す特徴として、土師皿の数値が高いことや、青磁の碗、皿以外の器種(香炉、花生等)や、天目茶碗といった付加的分野の数値が高いこと[6]が挙げられる。本遺跡出土の土師皿は、中近世陶器総出土量の11.7%を占め、特に15世紀～16世紀に位置付けられるものが多い。また、土師皿は、食膳具としての機能と灯明具としての機能があるが、本遺跡出土の土師皿で灯明具と断定できるものは確認できなかった。つまり、そのほとんどが食膳具としての皿であると考えられ、15世紀～16世紀にかけて清浄の象徴として、伝統的な儀式や宴会の膳等のハレの場での使用が盛んであったと推定できる。本遺跡では居住区を思わせる遺構が認められなかったが、ある程度階層性の優位な集落が付近に存在したことであろう。

VI期以降における組成は、生産地に近いという本遺跡の地理的環境を考えれば納得がゆくが、それでも近世において窯業生産地が増し、流通体制が整った反面、瀬戸美濃陶器のみ出土したのは一種の特異性として捉らえるべきであり、尾張を中心とした瀬戸美濃陶器の圧倒的優位性の範囲内に本遺跡も含まれるのであろう。

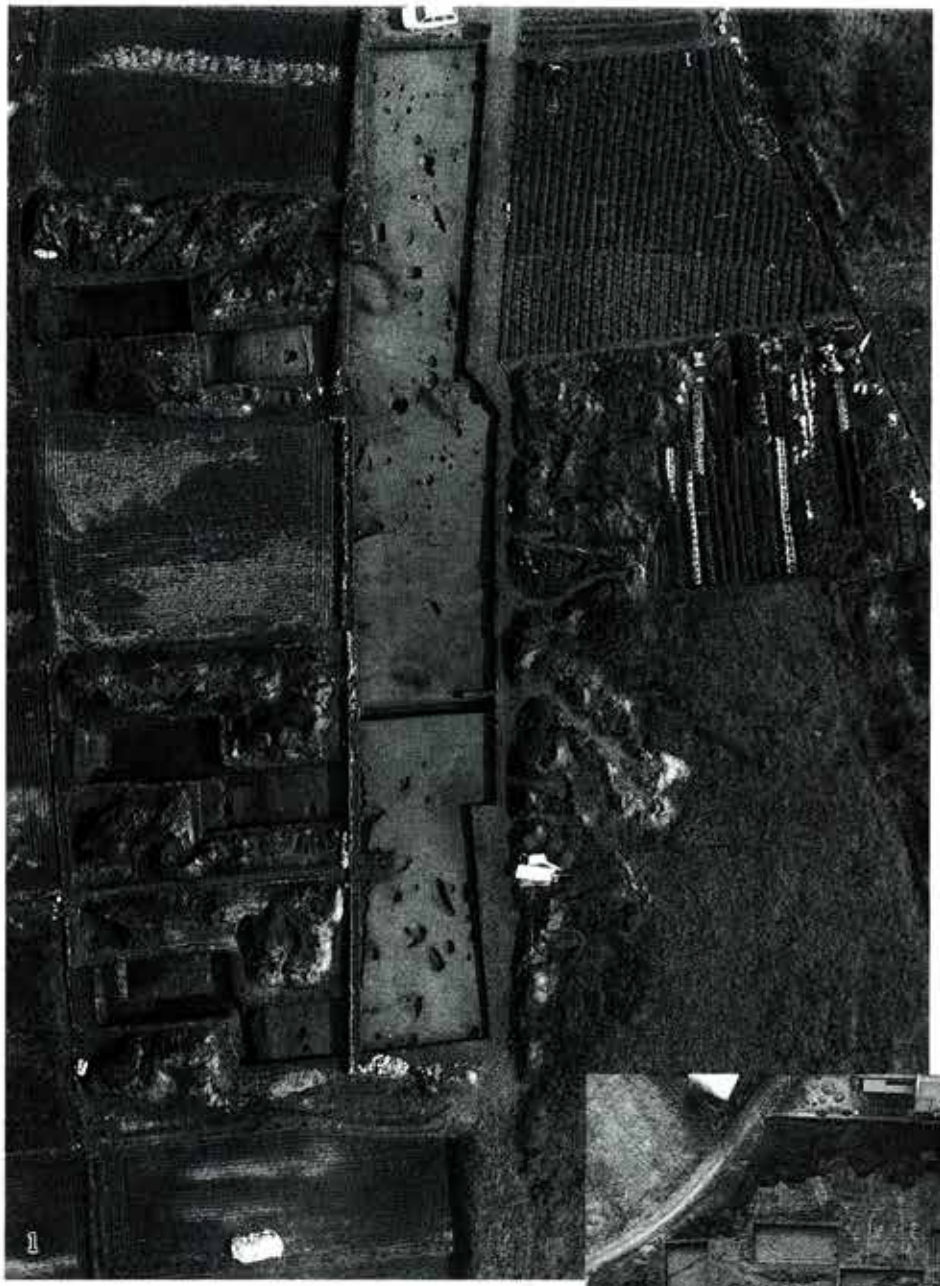
次に、用途組成であるが(第43図)、I期からIII期までは供膳具が大部分を占める[7]が、IV期になると、古瀬戸陶器の流入により、調理具、喫茶具[8]の割合が若干高くなる。さらに、V期には調理具、喫茶具、貯蔵具、灯火具などが一定量を占め、IV期以前に比べ生活様式が大きく変化したと推定できる。これは、大窯における擂鉢の統一化、量産化と天目茶碗の量産化が消費地において大きく影響しているのであろう。そして、VI期にもその傾向は引き続き認められる。しかし、VII期以降、調理具は一定の割合を占めるが、喫茶具は姿を消し、灯火具などの生活品が目立ち始める。そして、供膳具も再び高い割合を占める。これらの傾向は、生産地での御室茶碗、柳茶碗、染付などの量産化や喫茶関係の器種の激減に伴うものであろう。以上のように、近世においては生活色が豊かになった面が伺えるが、中世においても生産地では壺、甕、擂鉢(片口鉢)といった供膳具以外の器種も量産されている。本遺跡で出土量がわずかしか認められ

ないのは発掘区に該当しなかったためかもしれないが、山茶碗に卸し目が刻まれるものや山茶碗の底部内面が非常に平滑なものなどは食膳具として使用されたとは考えにくく、調理具としての機能を考慮すべきであろう。

1）以下の文献を参考にした。
・関市教育委員会「重竹遺跡―その1―岐阜県関市下有地改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」1979
「重竹遺跡―その2―岐阜県関市下有地改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」1981
「重竹遺跡―その3―東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」1984
・岐阜市教育委員会「城之内遺跡―東長良中学校建設に伴う岐阜大学跡地の緊急発掘調査―」1990
・岐阜市教育委員会「千畳敷―織田信長居館伝承地の発掘調査と史跡整備―」1990
「千畳敷II―財団法人加藤栄三・東一記念館建設に係る緊急発掘調査の記録―」1991
・岐阜県教育委員会「城之内遺跡　長良高等学校体育館建設に伴う岐阜大学跡地の緊急発掘調査報告書」1990
・岐阜県教育委員会　(財)岐阜県文化財保護センター「城之内遺跡II」1991
2）以下の文献を参考にした。
・佐藤公保「中世土師器研究ノート(2)―朝日西遺跡の様相―」
『財団法人　愛知県埋蔵文化財保護センター　年報　昭和61年度』1987
なお、ここではB1類（III2期）に分類されている。
3）山茶碗の年代観について
小名田小滝古窯跡群物原より「文永三年」銘をもつ蓋が出土し、明和1号窯期の年代観を約40年引き上げる編年試案が提示されている。
（多治見市教育委員会「小名田小滝古窯跡群　多治見市特別養護老人ホーム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」1993）
4）田口昭二「美濃窯の山茶椀研究と編年」『マージナルNo.7《特集》山茶椀窯』　愛知考古学談話会　1987
5）この傾向に関して、藤沢良祐氏は焼物以外の供膳具（漆器や木器）の使用の可能性を示唆している。
（「瀬戸大窯の変遷」『瀬戸市史　陶磁史篇　四』1993）
6）福井県一乗谷の例を参考にした。
（小野正敏「城館出土の陶磁器が表現するもの」『中世の城と考古学』新人物往来社　1991）
7）供膳具以外の器種として認められるのは、産地不明の片口鉢1破片と常滑陶器甕（壺）類の胴部破片2点のみである。
8）天目茶碗は供膳具として使用された可能性があるが、ここでは喫茶具として扱う。

（小野木　学）

# 図　　版



1．第1・2地点全景

2．第3地点全景

図版2

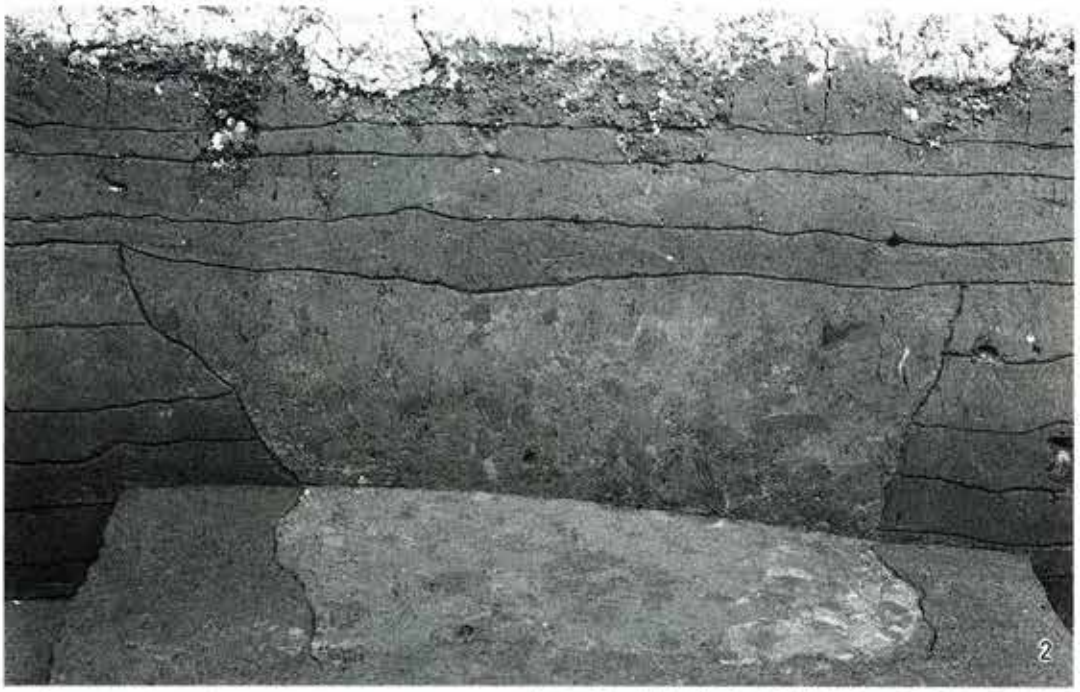
1．第1・2地点全景（西より）

2．第3地点全景（北より）

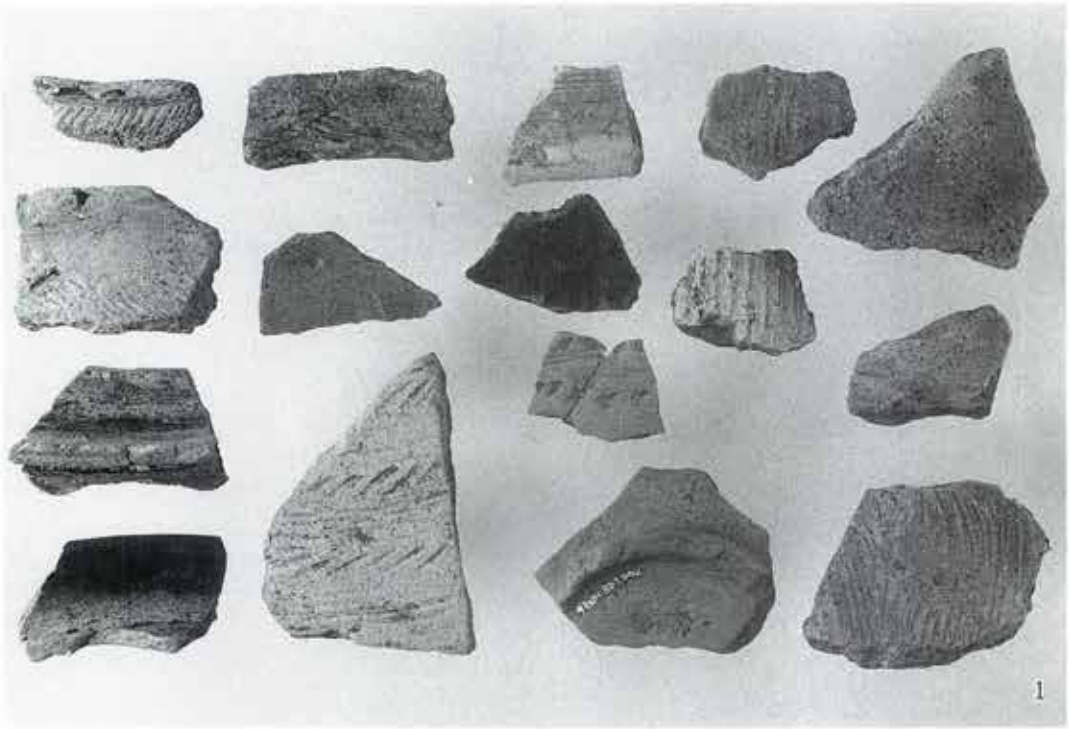
1．第1地点調査前状況
2．近現代のゴミ穴断面
3．第1地点調査風景
4．第1地点地山立割状況

図版4

1．第２地点調査前状況（Ａ・Ｂトレンチ）
2．第２地点調査前状況（Ｅ・Ｆトレンチ）
3．第２地点Ａトレンチ土層断面
4．第３地点調査前状況（南西から）
5．第３地点調査前状況（北西から）

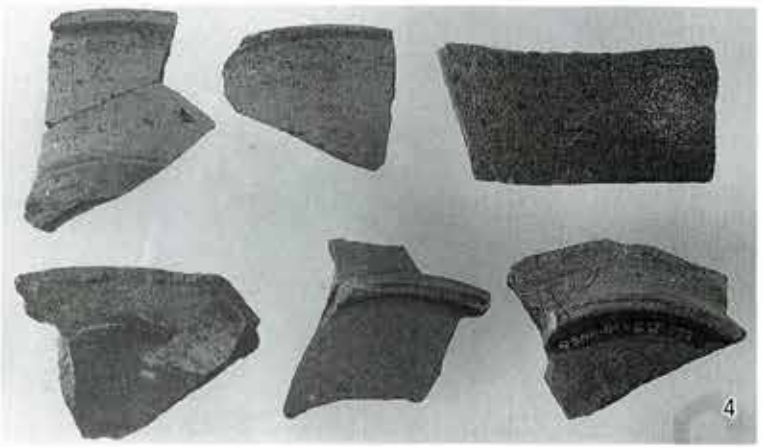


1．第２地点Ｄトレンチ土壙検出状態（ＳＫ２－２）
2．第２地点Ｂトレンチ溝状遺構検出状態
3．第２地点Ｄトレンチ冠水状況
4．第２地点Ａトレンチ冠水による北壁崩落状況



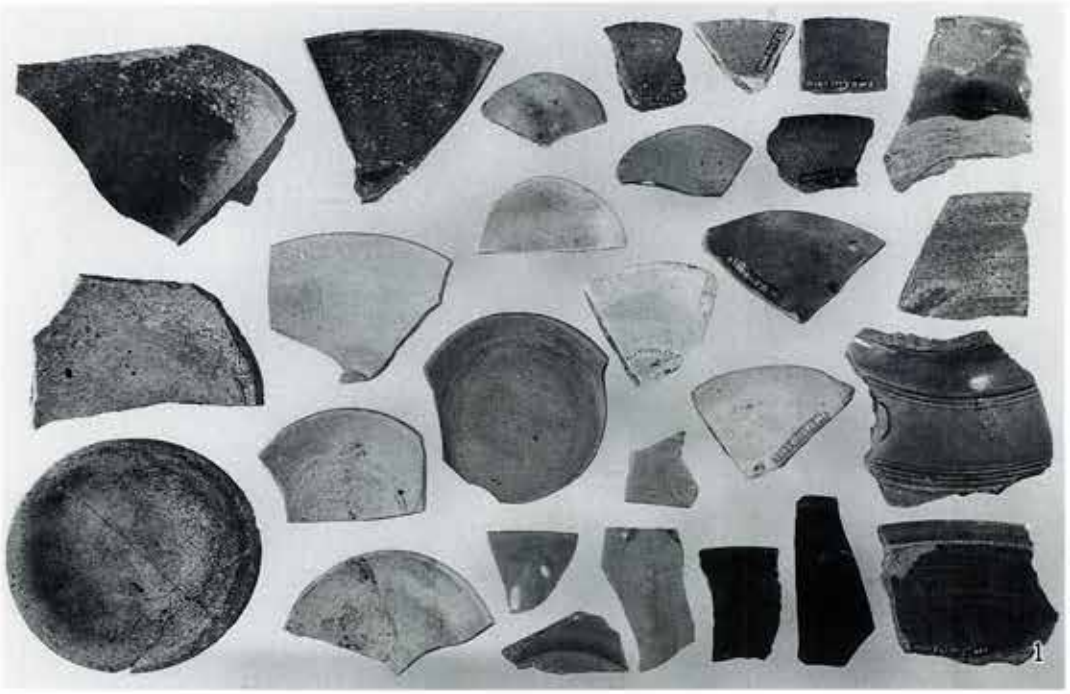
1．縄文土器・弥生土器・土師器

2．第1・2地点出土須恵器

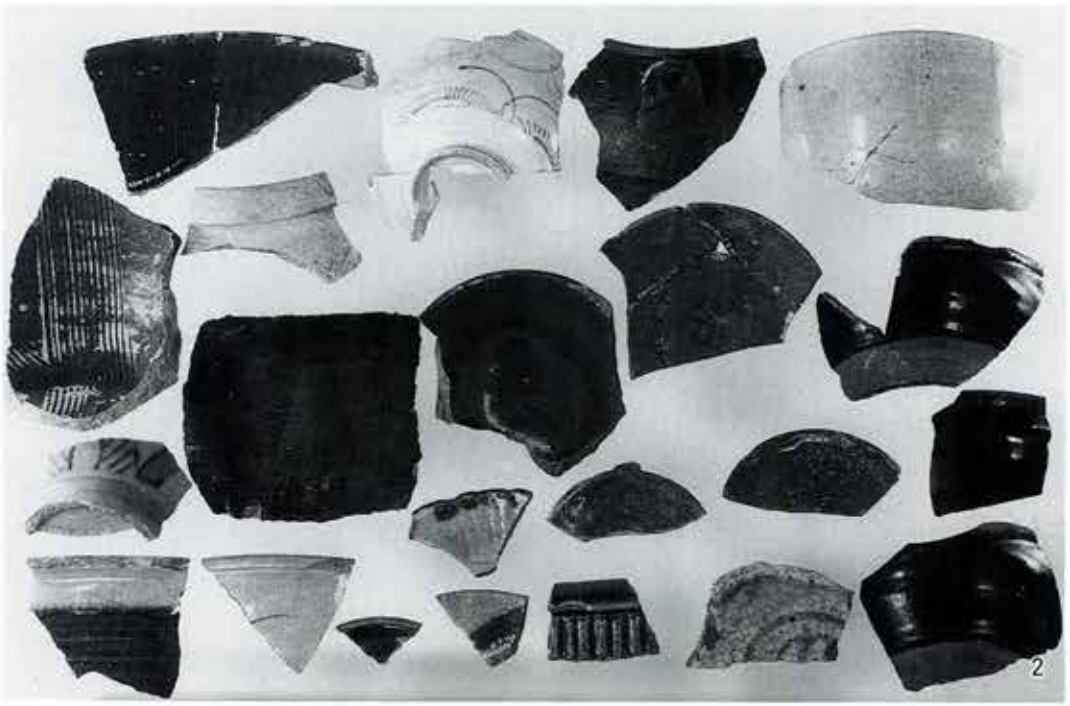



1．第3地点出土須恵器
2．須恵器甕類叩目文
3．「美濃国」刻印須恵器
4．灰釉陶器

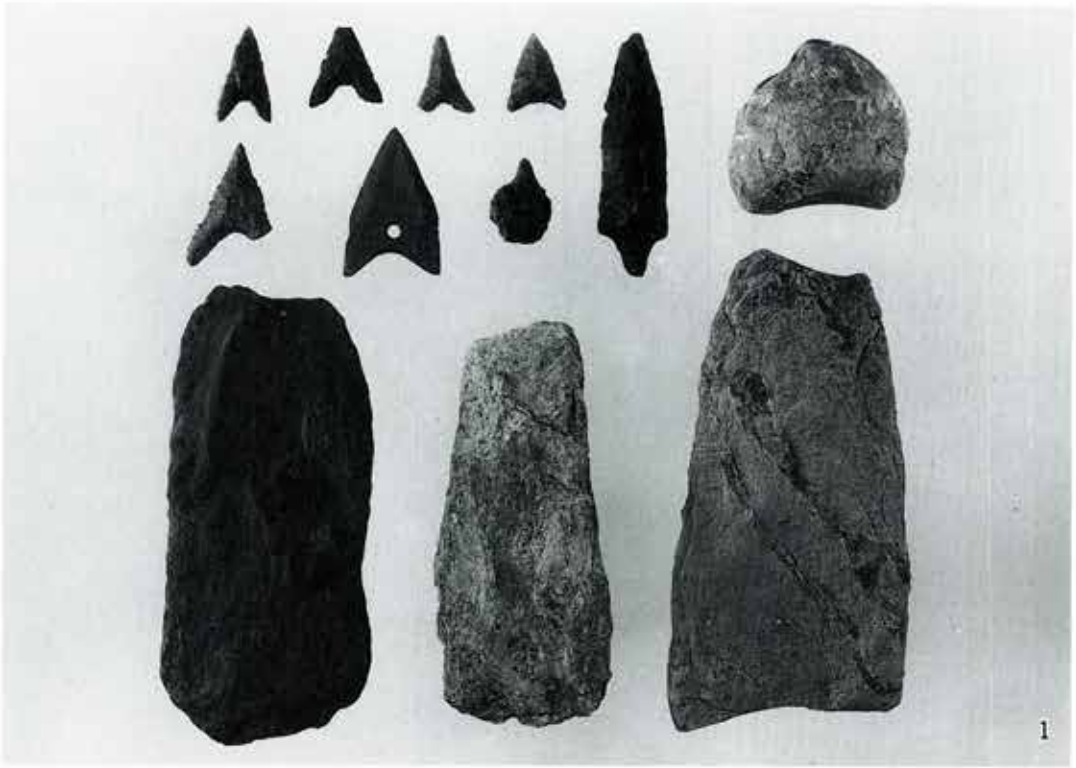
図版8



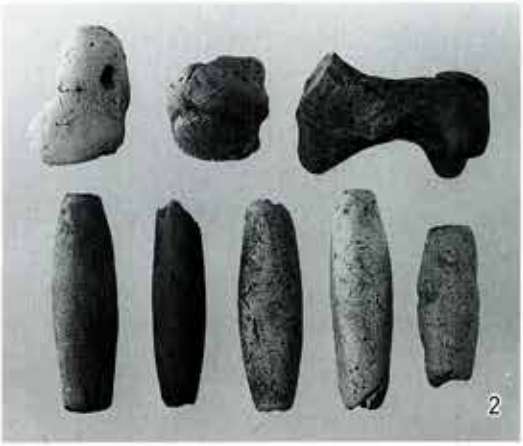
1．中世陶磁器類



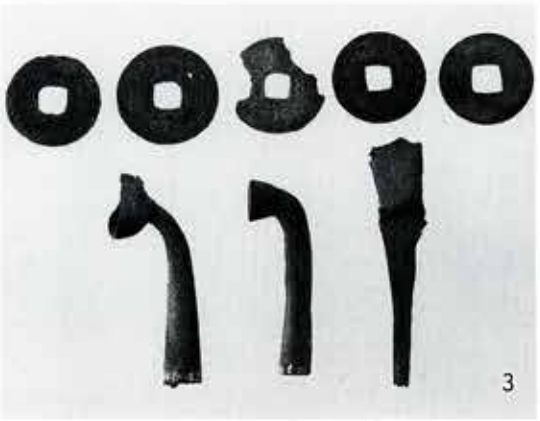
2．近世陶磁器類



1．石器類

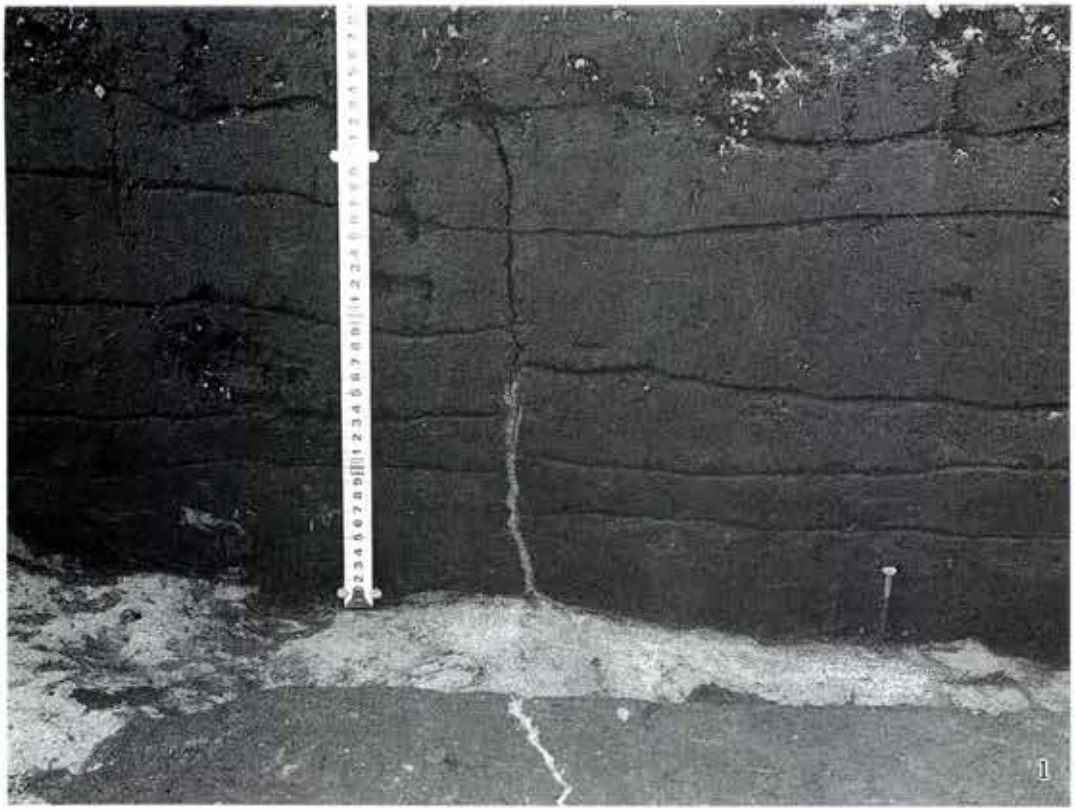


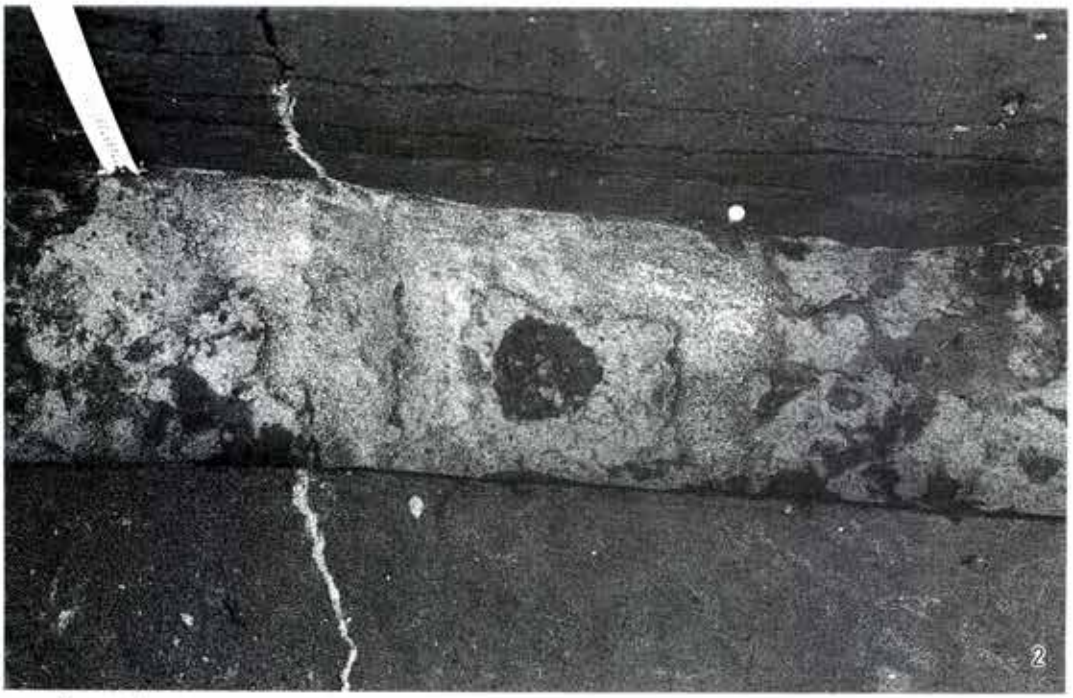
2．土製品（土錘他）



3．銅製品（銭貨他）

図版10





1．第２地点Ｂトレンチ西壁砂柱

2．第２地点Ｂトレンチ地山との境に溜った噴砂痕

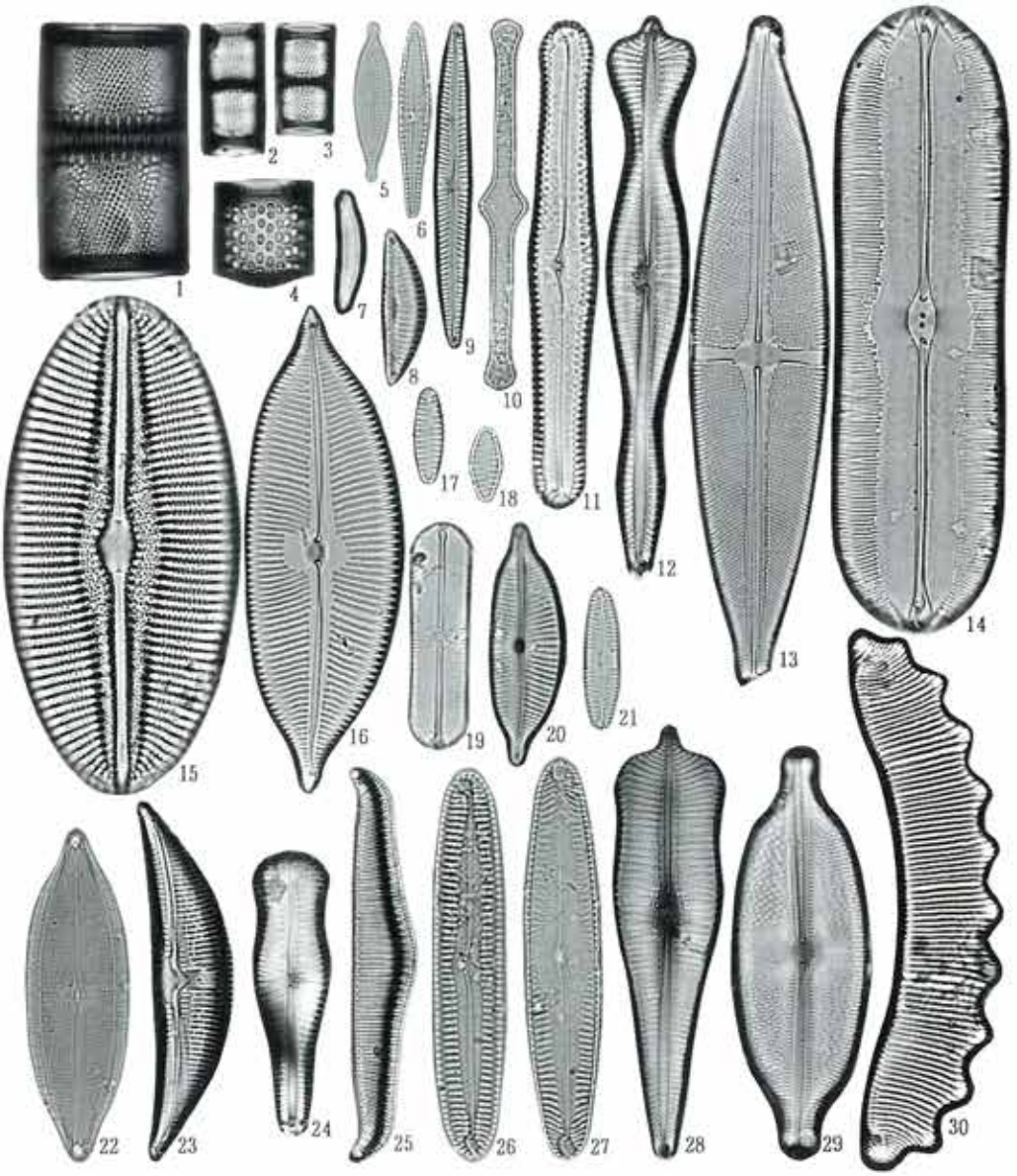
1．第２地点Ｂトレンチ西壁砂柱拡大写真
2．３．第２地点Ｂトレンチの砂脈状況

図版12

1．第2地点Bトレンチ東壁砂柱

2．第3地点Iトレンチ東壁砂柱

3．第3地点Iトレンチ東壁砂柱拡大写真

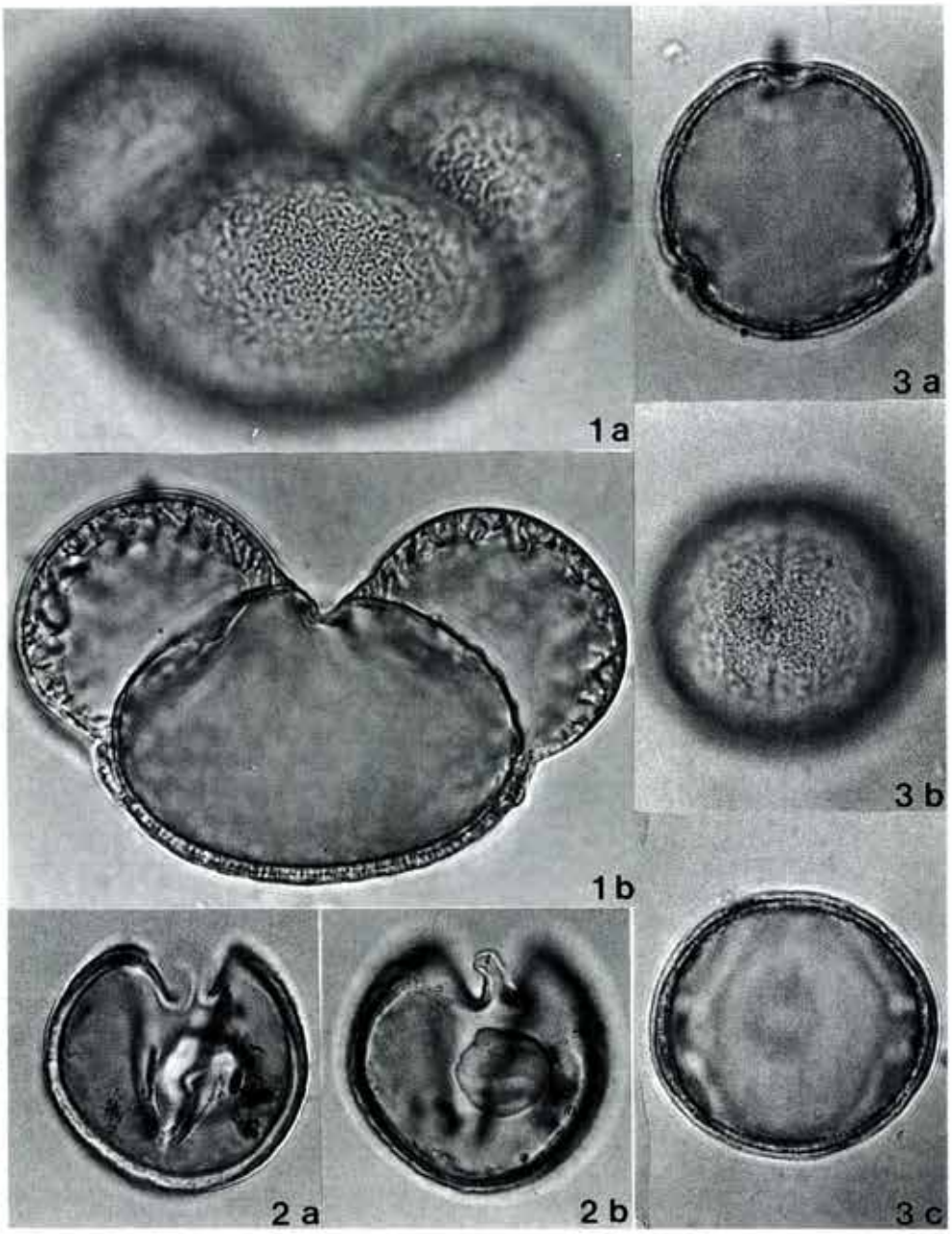


## 仲迫間遺跡の珪藻化石顕微鏡写真

10μm

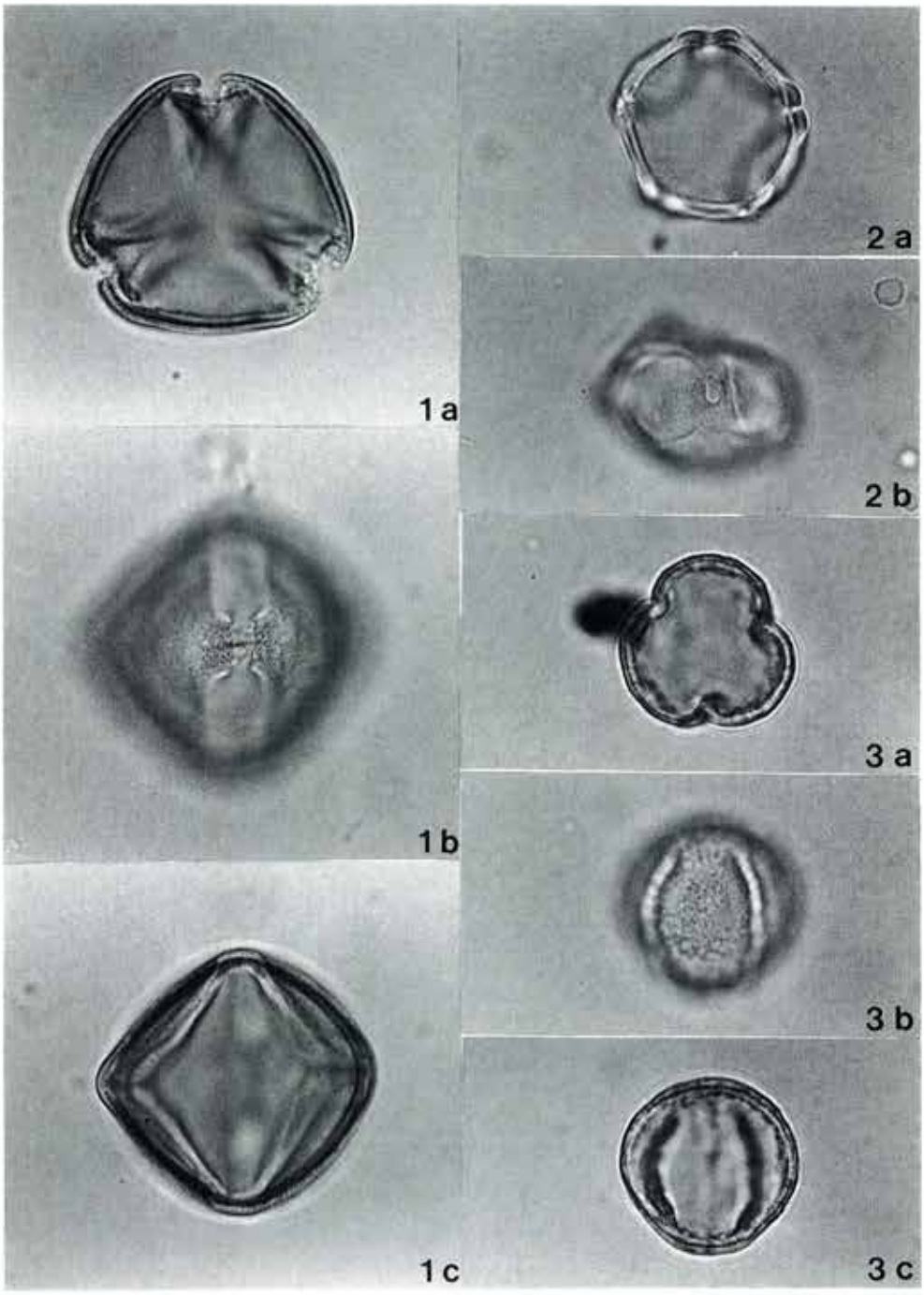
1. Melosira italica (A-12)
2. Melosira distans (A-10)
3. Melosira ambigua (A-8)
4. Melosira pensacolae (A-9)
5. Gomphonema parvulum (A-8)
6. Gomphonema gracile (A-9)
7. Eunotia pectinalis var. minor (A-1)
8. Cymbella minuta (A-1)
9. Cymbella cesatii (A-3)
10. Tabellaria fenestrata (D-2)
11. Pinnularia acrosphaeria (C-3)
12. Gomphonema acuminatum (A-8)
13. Stauroneis phoenicenteron (D-2)
14. Navicula americana (A-9)
15. Diploneis finnica (A-9)
16. Cymbella cuspidata (A-8)
17. Fragilaria virescens (A-3)
18. Fragilaria virescens (A-8)
19. Navicula bacillum (A-6)
20. Cymbella naviculiformis (D-2)
21. Pinnularia microstauron (A-1)
22. Neidium iridis (D-2)
23. Amphora ovalis var. libyca (A-8)
24. Gomphonema constrictum (C-1)
25. Rhopalodia gibba (D-2)
26. Pinnularia viridis (D-2)
27. Pinnularia gibba (A-1)
28. Gomphonema augur (C-2)
29. Anomoeoneis sphaerophora (A-1)
30. Eunotia serra (C-1)

図版14




仲迫間遺跡から産出した花粉化石(1)

1：マツ属複維管束亜属、Aトレンチ西壁、試料10
2：スギ属、Bトレンチ北壁、試料2
3：ブナ属、Aトレンチ西壁、試料13

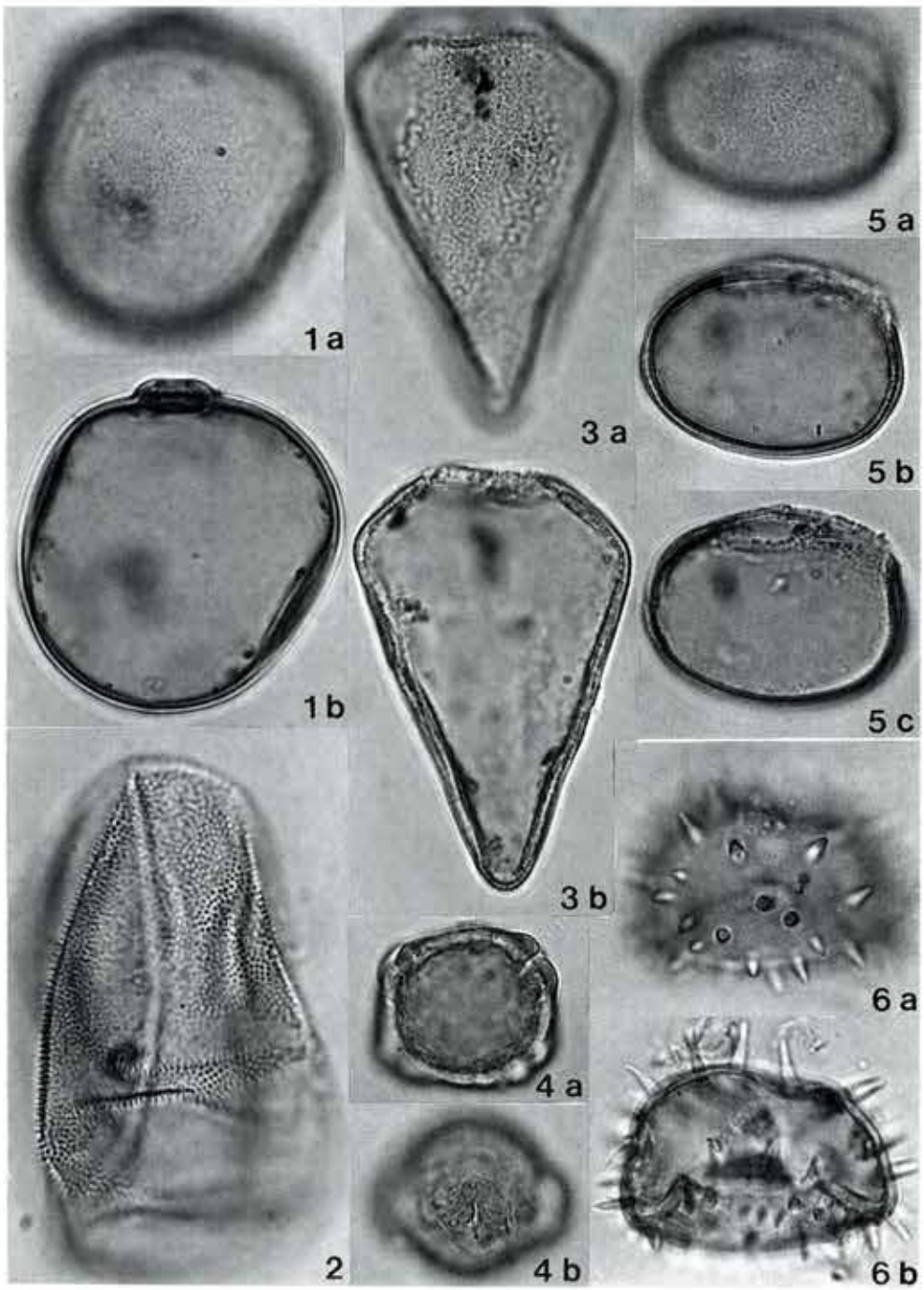



10μm

仲迫間遺跡から産出した花粉化石(2)

1：エゴノキ属、Aトレンチ西壁、試料13
2：ハンノキ属、Aトレンチ西壁、試料13
3：コナラ属コナラ亜属、Aトレンチ西壁、試料13

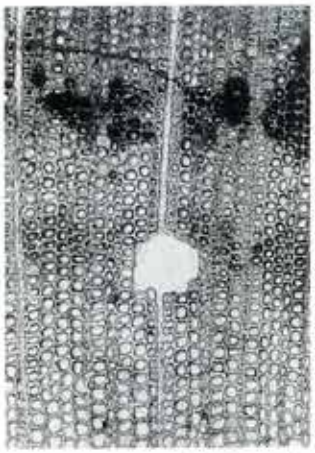
図版16




10μm

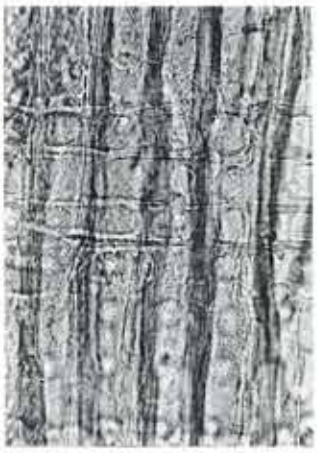
仲迫間遺跡から産出した花粉化石(3)

1：イネ科、Bトレンチ北壁、試料2
2：クロモ、Cトレンチ西壁、試料5
3：カヤツリグサ科、Aトレンチ西壁、試料10
4：アリノトウグサ属、Bトレンチ北壁、試料2
5：ジュンサイ属、Cトレンチ西壁、試料5
6：コウホネ属、Cトレンチ西壁、試料4



1a.アカマツ（横断面）No.1 bar:0.5mm

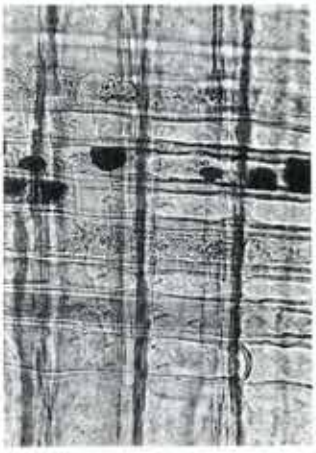
1b.同（接線断面）bar:0.2mm



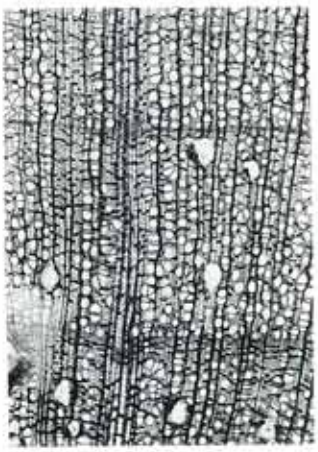
1c.同（放射断面）bar:0.05mm

2a.スギ（横断面）No160 bar:0.5mm

2b.同（接線断面）bar:0.2mm



2c.同（放射断面）bar:0.05mm



3a.ハンノキ節（横断面）No127 bar:0.5mm

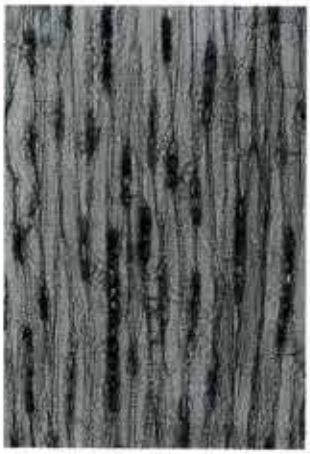
3b.同（接線断面）bar:0.5mm

3c.同（放射断面）bar:0.2mm

仲迫間遺跡出土材の樹種顕微鏡写真(1)

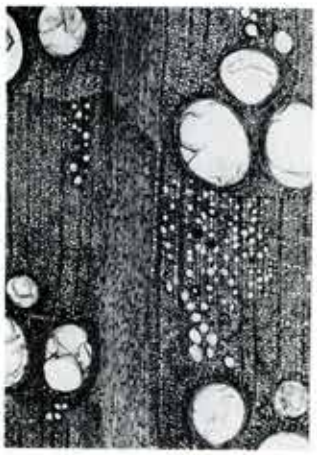
図版18

4a.ハンノキ節根材（横断面）No77 bar:0.5mm

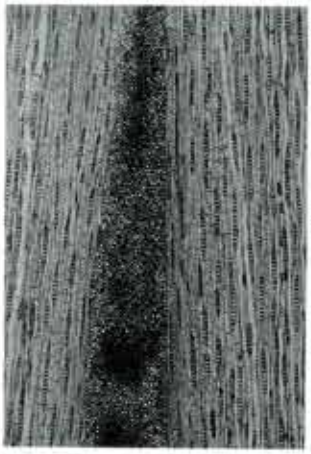


4b.同（接線断面）bar:0.2mm

4c.同（放射断面）bar:0.2mm



5a.コナラ節（横断面）No107 bar:0.5mm

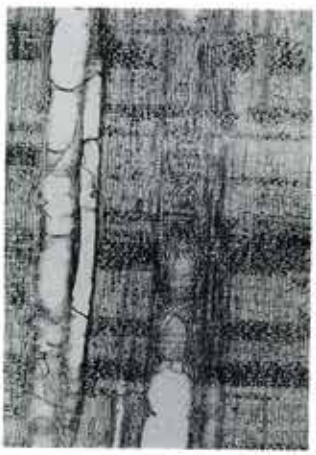


5b.同（接線断面）bar:0.5mm

5c.同（放射断面）bar:0.5mm

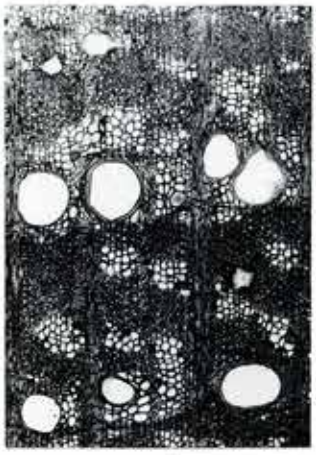
6a.クヌギ節（横断面）No81 bar:0.5mm

6b.同（接線断面）bar:0.5mm



6c.同（放射断面）bar:0.5mm

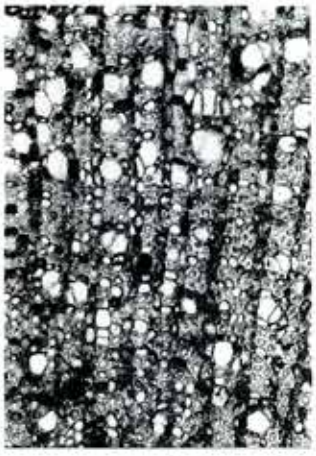
仲迫間遺跡出土材の樹種顕微鏡写真(2)



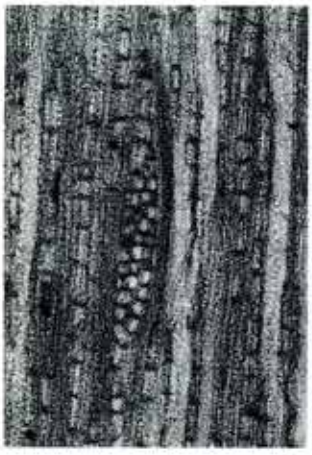
7a.ケヤキ（横断面）No.135 bar:0.5mm

7b.同（接線断面）bar:0.5mm

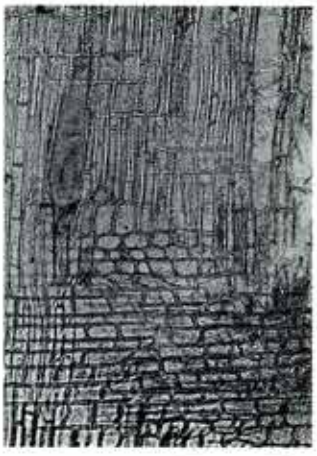
7c.同（放射断面）bar:0.2mm



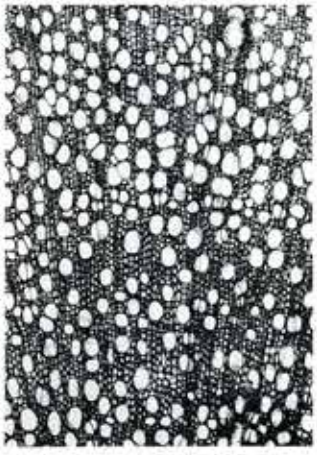
8a.ヒサカキ（横断面）bar:0.2mm



8b.同（接線断面）bar:0.2mm



8c.同（放射断面）bar:0.2mm



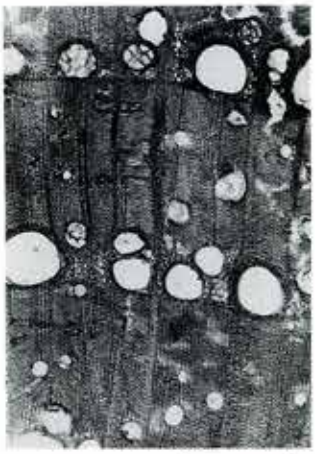
9a.ノリウツギ（横断面）No.34 bar:0.5mm

9b.同（接線断面）bar:0.2mm

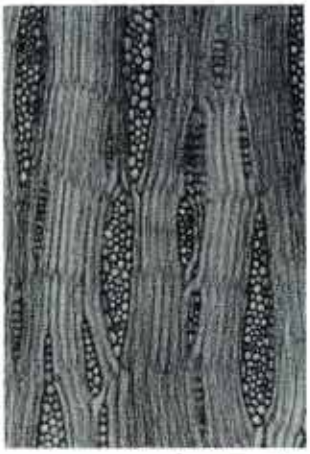
9c.同（放射断面）bar:0.2mm

仲迫間遺跡出土材の樹種顕微鏡写真(3)

図版20



10a.フジ（横断面）No.140 bar:0.5mm



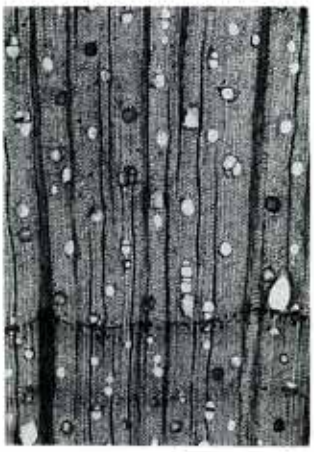
10b.同（接線断面）bar:0.2mm

10c.同（放射断面）bar:0.1mm

11a.キハダ（横断面）No.9 bar:0.5mm

11b.同（接線断面）bar:0.2mm

11c.同（放射断面）bar:0.1mm

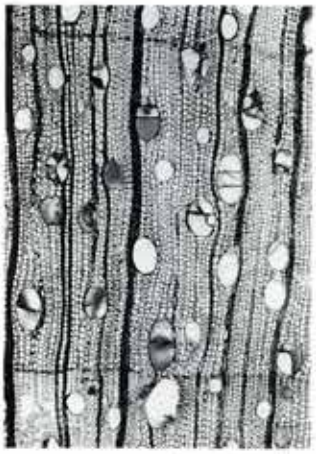


12a.カエデ属（横断面）No.124 bar:0.5mm

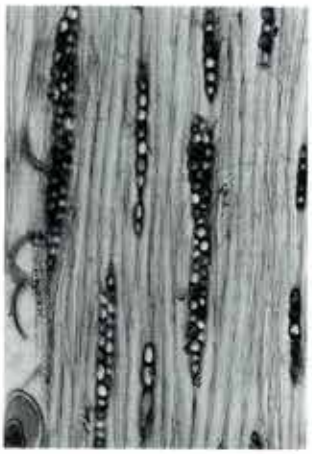
12b.同（接線断面）bar:0.2mm

12c.同（放射断面）bar:0.1mm

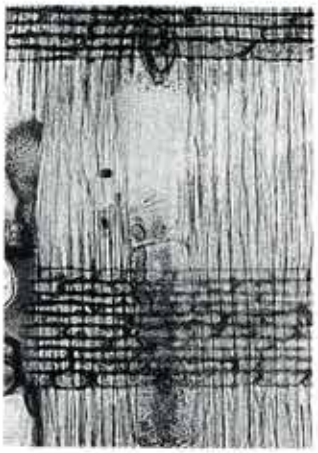
仲迫間遺跡出土材の樹種顕微鏡写真(4)



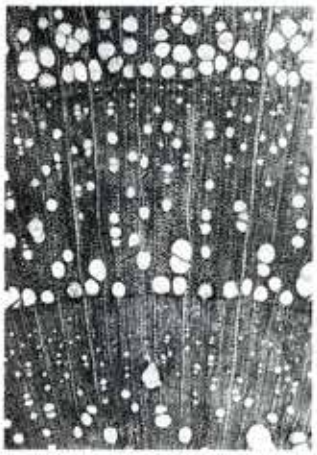
13a.カエデ属根材（横断面）No18 bar:0.5mm



13b.同（接線断面）bar:0.2mm



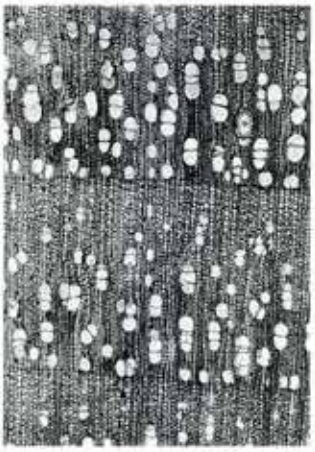
13c.同（放射断面）bar:0.2mm



14a.ケンポナシ属（横断面）No138 bar:0.5mm

14b.同（接線断面）bar:0.2mm

14c.同（放射断面）bar:0.1mm



15a.ヌルデ属（横断面）No125 bar:0.5mm

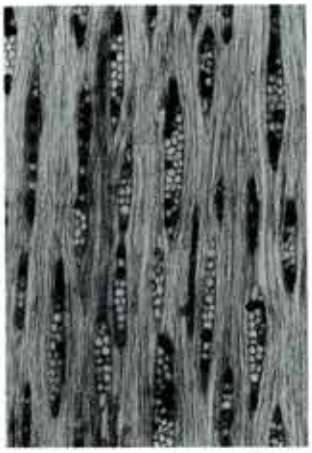
15b.同（接線断面）bar:0.2mm

15c.同（放射断面）bar:0.2mm

仲迫間遺跡出土材の樹種顕微鏡写真(5)

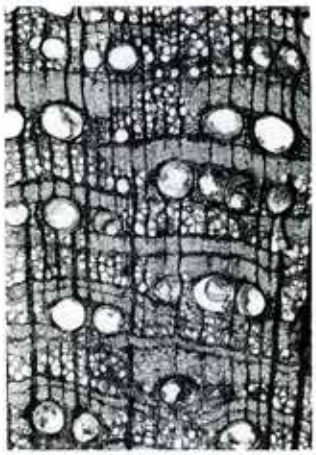
図版22

16a.ヒトツバタゴ（横断面）No.143 bar:0.5mm

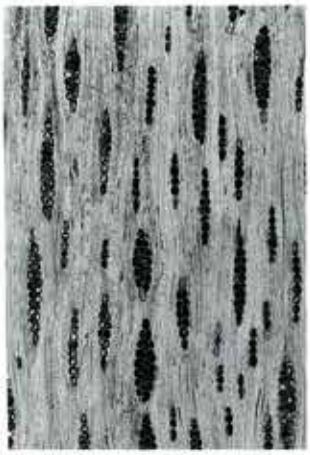


16b.同（接線断面）bar:0.2mm

16c.同（放射断面）bar:0.2mm



17a.ヒトツバタゴ（横断面）No.167 bar:0.5mm



17b.同（接線断面）bar:0.2mm

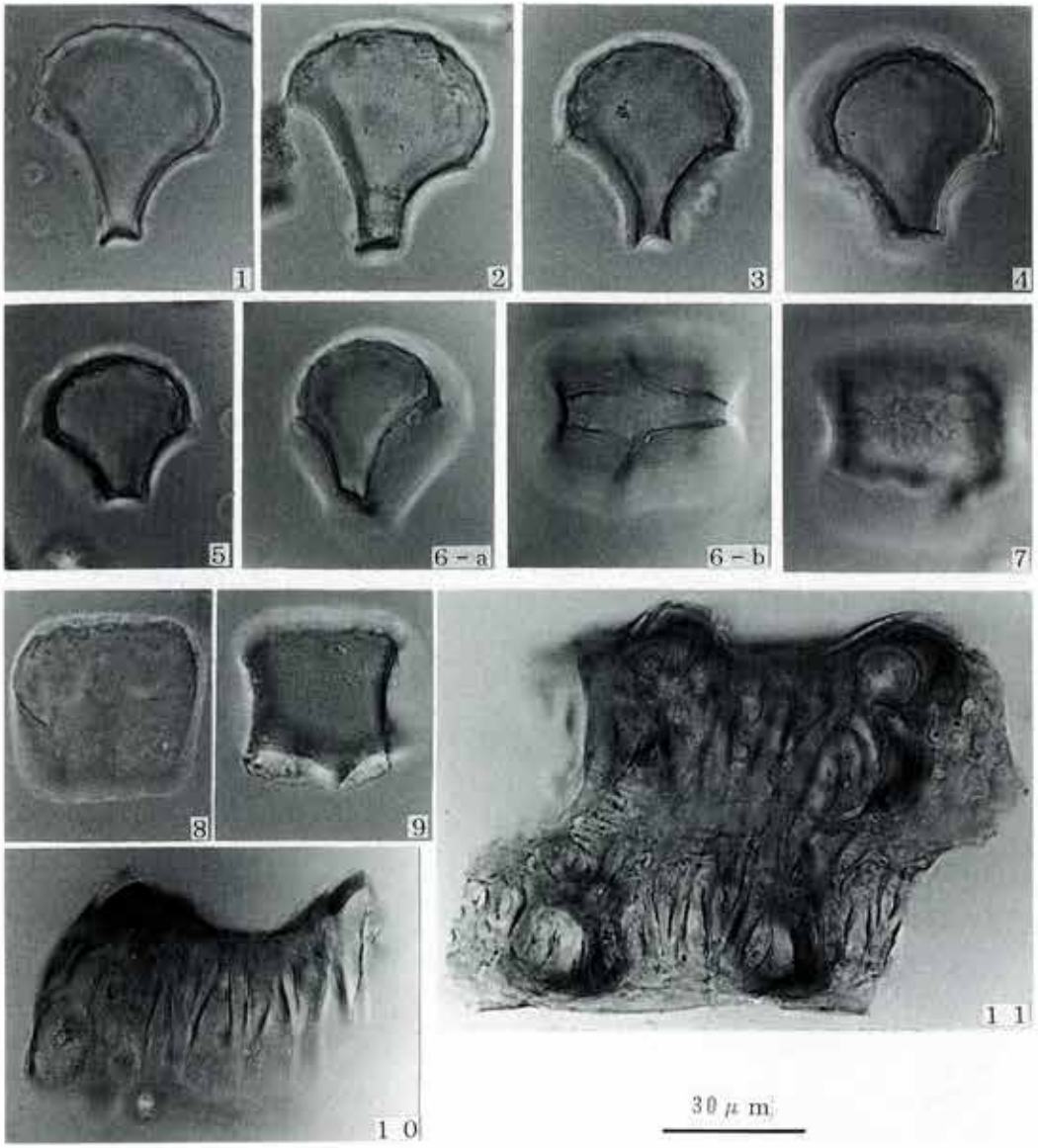
17c.同（放射断面）bar:0.2mm

18a.ヒノキ属（横断面）bar:0.2mm

18b.同（接線断面）bar:0.2mm

18c.同（放射断面）bar:0.05mm

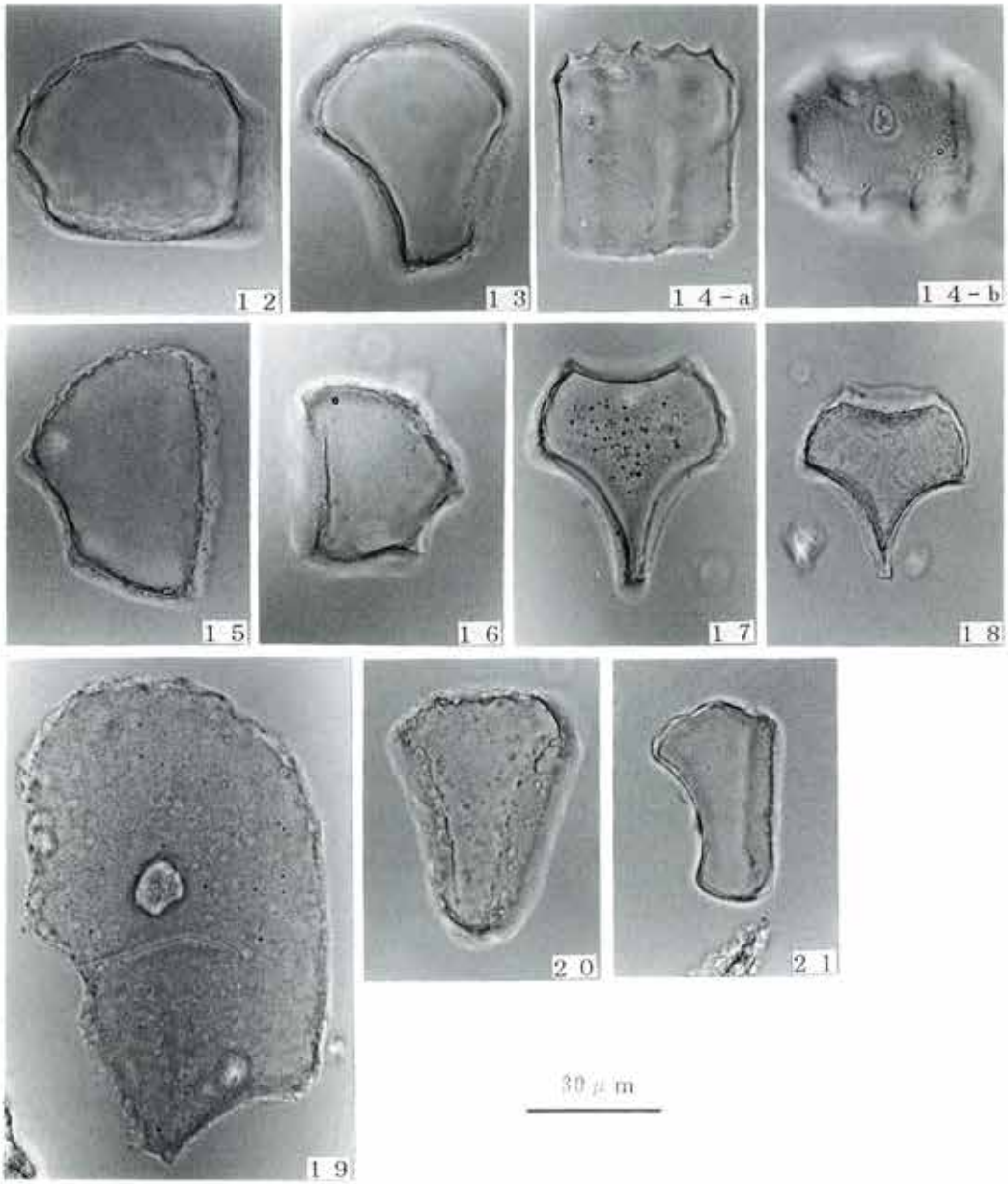
仲迫間遺跡出土材の樹種顕微鏡写真(6)




**仲迫間遺跡のプラント・オパール(1)（イネおよびイネ穎部？）**

1～6-a：断面（1：D-2、2：D-3、3：D-4、4：D-7
5：D-8、6-a：D-6）
6-b：表面（D-6）、7：裏面（D-5）
8：裏面～側面（D-1）、9：側面（A-9）
10、11：イネ穎部？（10：D-4、11：A-3）

図版24




仲迫間遺跡のプラント・オパール(2)

12：ジュズダマ属（断面）　A-7

13、14：ネザサ節型（13：D-5、14：D-13）
13：断面　14-a：側面　14-b：裏面

15、16：クマザサ属型（断面）　15：D-7、16：A-3

17、18：シバ属（断面）　17：D-4、18：A-3

19：ヨシ属（断面）　D-7

20、21：ウシクサ族（断面）　20：D-4、21：A-8

## 文献データシート

| | | | |
|---|---|---|---|
| 書　名 | 岐阜県文化財保護センター調査報告書　第14集<br>「仲迫間遺跡」 | | |
| 執筆者 | 宇野　治幸，小野木　学，藤田　英博，佐野　康雄，<br>パレオ・ラボ(藤根　久他)． | | |
| 発行所 | 財団法人岐阜県文化財保護センター | 発行年月 | 1994年3月 |
| 調査原因 | 一般国道248号公共道路改良工事に伴う | | |
| 遺跡名 | 仲迫間遺跡 | | |
| 読　み | なかはざまいせき | | |
| 所在地 | 岐阜県美濃加茂市田島町4丁目字仲迫間1721～1725番地他 | | |
| 種　別 | 散布地 | | |
| 時　代 | 縄文中～晩期，弥生，古墳，奈良，平安，中・近世，近・現代， | | |

岐阜県文化財保護センター調査報告書　第14集

# 仲　迫　間　遺　跡

１９９４年３月25日　印刷
１９９４年３月31日　刊行

編集・発行　岐阜県本巣郡穂積町牛牧宮下 395
財団法人 岐阜県文化財保護センター
印　　刷　西　濃　印　刷　株　式　会　社